―『大帝国』―日本海軍長官の奮闘記

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
―『大帝国』―日本海軍長官の奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ９７９８Ｕ

【作者名】
零戦

【あらすじ】
無限に広がる大宇宙……。
というのは置いといて、自分――山口三笠は気がつけば、見知らぬ世界の将官兵学校生やった。
しかも、艦船は宇宙艦。
ＳＦキターーーッと思いきや、被弾したら即終わりに若干ｏｒｚし

つつ物語は始まる。

『注意!!これは大帝国の二次小説ですが、武器や人物の名前、国名がかなり変わっています。それでも構わないという方はどうぞです。ルートは日本化しつつ連合艦隊を目指していますが、無茶苦茶です。この小説の初期には、ゲームではまだ出てこない戦時からの人物まで出て来ます』タイトル変えました。

TURN1（前書き）

あらすじでも述べましたが、大帝国の武器や人物の名前、国名はかなり変わっています。

この小説の初期にはゲームではまだ出てこない戦時からの人物まで出て来ます。

それでも構わない方はどうぞ。

TURN1

無限に広がる大宇宙。

生まれてくる星もあれば、死ぬ星もある。

――宇宙歴０年以前――

ワープゲートと呼ばれる不思議な空間が発見される前、通常航行による他星域への移動は数百年から数千年の長い時間が必要であり、新天地を目指す人類は世代交代型宇宙船に乗り込むしかなかった。

――宇宙歴０年――

この頃、エイリス帝国でワープゲートの研究が進み、ゲートに消えた物は別の空間へ転移しているはずだという理論が確立する。

それを確かめようと、勇敢な冒険者、研究者達が有人調査艇に乗り込み、ワープゲートに入るが、ほとんどが消息を絶った。

しかし、ローマ帝国の冒険者コロンブスがワープゲートから帰還した。

コロンブスによれば、ワープゲートの先が同一宇宙内の他星域であり、飛び先の星域のワープゲートにコードを逆入力することで往復が可能だと判明した。

これにより、ワープゲートを利用した星域ネットワークが作られ、人類の生活と宇宙開発、国家の在り方は新しい段階へと進むことになる。

後に、コロンブス帰還の年を0年として宇宙歴が定められた。

――宇宙歴９１４年――

国々が幾つも滅んだり建国していた。

しかし、ヨーロッパ星海域でヨーロッパ全体を巻き込む第一次宇宙大戦が勃発した。

大戦は四年にも続いて、最後はアメリア合衆国の参戦でプロイセンとオーストリーが敗れた。

日本皇国はブリテン等の連合国側で、プロイセン領域のトラック星域を占領して、常時二個宇宙艦隊が駐留する事になった。

――宇宙歴９３５年――

日本皇国の近辺にいる中南華帝国が日本皇国の保護国の満秋国へ侵攻。

日本皇国も中南華帝国に宣戦布告をして日中戦争に発展した。

――宇宙歴９３９年日本皇国、呉海軍将官兵学校パソコン室――

「……凄いとしか言いようがないな」

俺は呟く。

ん？俺が誰か？

あぁ自己紹介が遅れたな。

俺は山口三笠や。

性別は男で、歳は二五歳でもう一ヶ月でこの呉宇宙将官兵学校を卒業する予定や。

それと、俺はこの世界の人間とちゃう。

いやマジな。

本当は平成の人間やし。

でも基地へ帰る最中に車にひき逃げされてんな。

そして気がついたらこの世界の将官兵学校の生徒としていたわけ。

ちなみに前の職業は海自の新米三等海曹やな。

「何してんだい三笠？」

振り返ると、濃い赤色で背中まである髪を持ち、女性と強調する巨乳の女性がいた。

「何や桜花か」

彼女は南雲桜花。

同じ将官兵学校の同期や。

あぁ俺の彼女ちゃうで。

首席のイケメンの奴と付き合ってるらしい。

「まぁちょっと、調べ物やな……」

「ふぅん」

プルンと桜花の胸（Fカップと噂がある）が揺れる。

……焦らしてるんか？

「まぁいいわ。私は今から彼とデートよ」

フフと桜花が笑ってパソコン室を出た。

「……まぁええんやけどな……」

俺はパソコンを閉じてパソコン室を出た。

「おやぁ？山口君じゃないか」

目の前に桜花の恋人である黒島良太がいた。

成績は全て優秀で日本軍期待の星とか言われてる。

ただ、多数の女性と付き合ってるらしく、黒い噂がポロポロとある。

ちなみにこいつには艦隊運用戦術でボロボロに負かした事がある。

それを今だに根に持ってるらしい。

「桜花ならアンタを探してるよ」

「それはどうもありがとう。今から桜花とベッドインするからね。今夜はハッスルハッスルだよ（笑）」

でも情報によるとベッドインは出来てないらしい。

「ではでは（ニヤニヤ）」

黒島はニヤニヤと笑みを浮かべながらどっか行った。

……気持ち悪。（´Д`）

そして卒業式当日。

『○○○君』

「はい」

卒業生が卒業証書を土方校長から貰う。

『君は巡洋艦浅間の航海長を命じる』

「はい」

卒業証書を貰うと同時に配属先を告げられる。

『山口三笠君』

「はい」

俺が呼ばれると、卒業生や在校生が睨んでくる。

原因は期待の星である黒島を艦隊運用戦術でボロボロに負かした事が原因らしい。

知らんがな……。（´Д｀）

俺は校長から卒業証書を受け取る。

『君は第十一艦隊司令長官を命じる』

……は？

ザワザワッ！！

土方校長の発言に卒業生や在校生がざわつく。

「……何故ですか？」

『君の艦隊運用戦術を見させてもらった……艦隊司令長官として充分な成績だ』

おかしいな？

成績は最後から十五番目で１０５位やねんけど……（卒業生１２０名中）

「ま、待って下さいッ！！納得出来ませんッ！！」

黒島が喚く。

『……黒島君、君の艦隊運用戦術は日本軍伝統の艦隊決戦だ。だが、

敗れた時の被害が多すぎる。逆に山口君のは空母を中心とした航空攻撃の航空艦隊が特徴だ。資源が少ない我が日本の現状を考えれば、山口君のが一番有利だ。君には臨機応変がない。だから駆逐艦の艦長に任命したのだよ』

「……」

黒島が黙っている。

ざまぁｗｗ

『それと、警務隊が君に聞きたい事が沢山あるらしい』

レーザー小銃を持った数人の警務隊が入ってきた。

『中南華帝国への情報提供だ。聞き覚えがあるだろう？』

「ッ！？」

黒島が驚く。

警務隊が黒島を引っ張ってあっという間に出て行った。

『……では卒業式を再開する。次、〇〇〇君』

「は、はい」

そしてそのまま卒業式は終わった。

TURN1（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN2（前書き）

この小説の大帝国は独自設定があります。

ゲームでは序盤は中帝国との戦いやけど、この小説の序盤は史実と同じようにしてます。

TURN2

数日後、艦隊司令部に出頭して第十一艦隊司令官を拝命した。

――旗艦長門――

「……まんま長門やし……」

俺は艦橋で呟く。

「どうしました司令官？」

参謀長の宇垣が尋ねる。

「いや何もないわ」

ちなみに宇垣は女や。

黒のポニーテールで眼鏡。

それでいいのか作者。

『ええんちゃう？ｂｙ作者』

「それでは各戦隊司令官を紹介します」

宇垣が眼鏡をくいと上げる。

「おめぇが艦隊司令官か？」

現れたのは必勝の鉢巻きをした青年やった。

「あぁそうや」

「俺は田中雷蔵だ。駆逐艦部隊の司令官をしている。いつか必ず海軍長官まで昇ってやる男だ」

「堂々と言うな。ま、よろしくな」

二人目は電子ゴーグルを頭に付けた女性や。

髪はショートヘア。

「空母部隊司令官の小沢祀梨です。司令官は受けと攻めどっちですか？」

「……腐女子的やなおい。それはお前と交わる時か？」

「……それは考えて下さい」

「はいはい」

……そして最後が……。

「……巡洋艦部隊司令官の南雲桜花だよ」

「……あぁ、よろしく」

卒業式以来やから何か気まずいなぁ。

「まぁ、今日からよろしくな」

『了解ッ！！』

――――第十一艦隊――――

戦艦長門、五十年式主力戦艦榛名。

五十年式巡洋艦八雲、出雲、春日、日進。

軽空母祥鳳、瑞鳳、龍鳳、龍驤。

駆逐艦十六隻。

以上の艦隊や。

――三ヶ月後皇居――

「パンカパ～ン。帝ちゃんの登場でぇす」

うん……ナデシコのミ○マル・ユリカみたいな元気な子や。

各艦隊司令官は皇居に呼ばれた。

「え～と、今日はですね。仲良くしてもらってる満秋国からの援軍要請です。満秋国とモンゴル人民共和国の国境線のノモンハンで軍事衝突が起きたのです」

帝が各艦隊司令官に説明する。

「分かりました、連合艦隊は即刻出撃します」

永野連合艦隊司令長官がそう言う。

「お願いしますね永野さん。それと、各艦隊の司令官は今日から提督と名を代えます。だってそっちの方がカッコイイですし」

「分かりました」

……そんなんでええんやろか……。

――――連合艦隊旗艦香取――――

「ではこれより作戦を説明する」

永野長官の作戦は正面からの攻撃やった。

「あのぅ、長官。自分の案があるんですが……」

「何かね？」

「少数の艦隊が敵艦隊の補給路を攻撃して補給を絶ってはどうですか？永野長官以下の艦隊は長官の作戦通りに正面から布陣をしといて、敵が何らかの動向があれば直ぐに叩けるはずです」

「ふむ……」

永野長官が腕組みをする。

他の提督は「新米が偉そうに……」とぶつぶつ言っている。

「……良かろう、その作戦でやってみよう。敵補給路の攻撃は山口提督の第十一艦隊、福原提督の第十四艦隊でやるんだ」

「分かりました」

「山口提督、宜しくお願いします」

第十四艦隊提督の福原いずみ大佐（俺も大佐）

「おぅ。まぁ、将官学校の同期やから永野長官も俺達を選んだんやろな」

福原とは桜花達といた将官学校の同期生や。

ん？

将官学校て何て？

将官学校は文字通り、少将以上の将官を生み出す学校や。

旧軍の海軍兵学校の更に上と思ってくれたらええよ。

将官学校を卒業したら無条件で大佐になれる。

ただし、宇宙兵学校を卒業していればの話しやけど。

「それでは作戦を決めませんと……」

「あぁ、そうやな」

俺達は長門に戻って作戦を考えた。

――――十日後、ノモンハン星域――――

「提督、旗艦香取より発光信号。『作戦ヲ開始セヨ』です」

「よし、補給路攻撃艦隊は連合艦隊から離脱や」

俺の艦隊と福原の艦隊が連合艦隊から離脱する。

ちなみに福原艦隊の数は五十年式主力戦艦石見と巡洋艦六隻、駆逐艦十二隻や。

合同艦隊がノモンハン星域から離れる。

――2時間後――

「提督、敵の補給艦隊です」

宇垣が報告する。

「小沢に連絡や。攻撃隊を発艦、目標は敵輸送艦やッ！！田中ッ！！桜花ッ！！出番やで。全艦、砲雷撃戦用意やッ！！」

小沢の空母部隊から次々と攻撃隊が発艦する。

「ッ！？て、提督ッ！！敵補給艦隊の後方にソ連艦隊ですッ！！」

「何やてェッ！？」

俺は思わず叫んだ。

今回はソ連は参戦してないはずや。

ちなみにソ連とは『人類統合ソビエト連合』の事や。

「提督、日本より緊急電です」

宇垣が電文を渡してくる。

中身はソ連が参戦した事を告げる内容やった。

「全艦に告ぐ、ソ連が参戦した。これより第一目標をソ連艦隊に変更や。攻撃隊と水雷戦隊はソ連艦隊の旗艦を攻撃や。長門、榛名、石見は補給艦隊攻撃を続行やッ！！」

長門の四十六センチ三連装プラズマショックカノン三基が補給艦隊に火を噴いた。

TURN2（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN3

「目標、敵大型艦撃ェッ！！」

長門のプラズマショックカノンが青白いビーム弾を出してソ連軍の大型艦を貫いた。

「全弾命中ッ！！」

「よし、撃って撃って撃ちまくれェッ！！」

モンゴルの補給艦隊は長門、石見、榛名の砲撃にあっという間に全滅した。

そして、空母機と駆逐艦、巡洋艦隊を支援するためにソ連艦隊に砲撃をしている。

「提督、残存のソ連艦艇が白旗を掲げています」

宇垣が言う。

確かに白旗を掲げて、戦闘を停止しているな。

「全艦攻撃中止や。敵艦に近づくで」

そして、生き残っていたソ連艦隊の巡洋艦カリーニンに乗っていたソ連艦隊の提督を捕虜にした。

「……あんたが提督やな？」

「そうだよ。私がソ連艦隊提督のリディア・ロコソフスキー大佐よ」

薄いピンク色の髪でショートヘアのリディアが頷く。

「ソ連が俺らに宣戦布告したのは間違いないな」

「うん、それに貴方達の本隊にはジューコフ元帥の九個艦隊がいるしね」

「……連合艦隊が全滅しそうですね」

宇垣が冷や汗をかく。

「しそうやなくて絶対にするな。全艦、直ちにノモンハン星域に急行やッ！！」

散らばっていた第十一艦隊と第十四艦隊が集結して急いでノモンハン星域に向かった。

――――ノモンハン星域――――

「……あかん。壊滅しとるわ」

連合艦隊はソ連艦隊にいいようにやられていた。

「小沢、攻撃隊発艦や。目標は敵艦隊の各旗艦だけを狙えッ！！」

『了解でぇす』

小沢の空母部隊から攻撃隊が発艦する。

「全艦砲雷撃戦用意やッ！！」

各艦が主砲や魚雷発射管をソ連艦隊に照準する。

「攻撃隊が各艦隊の旗艦に攻撃を開始します」

宇垣が報告する。

「目標、敵大型艦ッ！！全砲門開けェッ！！」

各艦艇のプラズマショックカノンが火を噴いた。

「提督、ノモンハンにいた陸軍部隊を収容しました」

部下が報告してくる。

「ん、全艦回頭や。之より日本に帰還するで」

ノモンハンにいた生き残りの陸軍部隊を収容して艦隊が回頭する。

あれから何とかジューコフのソ連艦隊を退けたけど、永野長官は戦死。

連合艦隊も八割半も喪失していた。

「失礼する、私は陸軍長官の山下利古里だ。艦隊司令官はいるか？」

……何やろ……。

「自分が第十一艦隊提督の山口三笠や」

「貴様か……。今回はふがいない戦いだったな」

こらこら、人を見下すな。

「まぁな。結果が全てや」

「次はしっかり頼むぞ」

「へぇへぇ」

山下は俺を睨みながら艦橋を出た。

「……あんなのが陸軍長官でいいんですかね？」

宇垣が言う。

「実力があるから陸軍長官になったんやろ。ま、海軍はしばらく荒れるな」

「そうですね、艦隊の八割半を喪失しましたし」

一週間後、残存の連合艦隊が日本に帰還した。

ちなみに、ノモンハン星域は後の和平停戦でソ連の後押しもあってモンゴル領となった。

――皇居――

「山口提督、福原提督。残存艦艇の手助け誠にありがとうございました」

帝が俺達に頭を下げる。

「しかし、帝。連合艦隊は八割半を喪失しました。如何なさいますか？」

外務長官のハゲ頭の宇垣一成が言う。

「そうですねぇ。資源や技術は明石大佐に頼むしかないですね。…

……そして山口提督」

俺？

「はい」

「貴方は今日から海軍長官に就任して、海軍、そして連合艦隊を指揮して下さい」

……は？

「み、帝ッ！？いくら何でもそれは無理がありますぞッ！！たかが、将官学校を卒業して一年も経っていない山口提督に海軍長官なんて……」

宇垣さん、正論ですね。

「ですが、他に適任者はいますか？ノモンハン会戦で全滅寸前の連合艦隊を救ったのは誰ですか？」

「う……それは……」

宇垣長官が何も言えなくなる。

「これは決定事項です。山口、お願いします」

帝が頭を下げる。

……マジかぁ。

「……分かりました、新米ですがやらせていただきます」

こうして、俺は将官学校を卒業して数ヶ月で提督から海軍長官になってしまった。

……ええんやろか？

TURN3（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ４（前書き）

明石大佐がかなり崩壊かも……。次回からオリジナル展開です。

TURN4

――旗艦長門――

「て、いうことで海軍長官になってしまった山口三笠や」

「……本当になってしまいましたね」

宇垣が冷や汗をかく。

「あんたも大変だねぇ」

桜花、大変やわ。

「それで編成はどうするんだ長官？」

「あぁ、とりあえずは皆を提督にして再編するわな。……んで問題はロコソフスキーや」

「私？」

衛兵に囲まれたロコフソスキーが尋ねる。

「ロコフソスキーをソ連に返しても、絶対に消されるで？『弱虫はいらない』とか言われてな」

「ぁ～、有り得るね～」

ロコフソスキーが納得する。

「此処で日本軍の提督になるのもアリやで？」

「そうだね。提督になるよ」

「……案外、すっきりしてるな」

「いつも持ってた赤本を取り上げられてから生活したけど、何かソ連にいるより此処は自由だからね」

赤本とは共産主義がどれ程いいのかを永遠のような感覚で書かれていた本の事や。

ロコフソスキーから初めて見せてもらった時は知恵熱が出そうやったし。

「艦隊の編成はちょっと待ってな。必要な資源を明石大佐が調達してるから」

「明石大佐て誰だい？」

桜花が聞く。

「帝直属の宇宙忍者や。どんな依頼もこなしてくれらしい」

「ふぅん」

『長官、アメリアの輸送船団が入港してきたんですが……』

『……は？』

ドック長の言葉に俺達は唖然とした。

「……つまり、これは明石大佐が調達してきた資源やねんな？」

「……如何にも……」

明石大佐はそう呟く。

「宇垣、鉱物はなんぼあった？」

「……約六十万トン分はあります。五個艦隊程作れますよ……」

「……何と言うチートや……」

俺は思わず呟く。

「報酬は何を出したらええのん？」

俺は明石大佐に尋ねる。

「……プリンだ……」

「……はい？」

「……プリンをくれたら何でも引き受ける……」

「……宇垣、一食分のプリンを三個にしてそれを五日分を明石大佐にあげてな」

「は、はい……」

「山口長官、感謝致す」

明石大佐はそう言って消えた。

「……アメリア輸送船団の乗組員は？」

「は、何か操られた感じでした。既に輸送船団と共に帰還しています」

「……明石大佐の忍法やな……」

「三笠、明石大佐はどうやって呼び出すんだい？」

桜花が聞く。

「帝から貰ったこの法螺貝を吹いたら来るらしい。帝が吹いた時、目の前に来たからな」

「……法螺貝かよ……」

田中が冷や汗をかく。

それは俺もや田中よ。

「ま、とりあえずは艦隊を編成やな」

そして会議が始まった。

――南雲艦隊――

戦艦三、巡洋艦六、駆逐艦十二。

――田中艦隊――

戦艦一、巡洋艦三、重雷装（四連装光子魚雷発射管十基搭載）巡洋艦三、吹雪型重雷装（四連装光子魚雷発射管三基搭載）駆逐艦八、駆逐艦六。

――小沢艦隊――

戦艦一、準鷹型（搭載機五四機）中型空母六、巡洋艦六、駆逐艦十六。

――福原艦隊――

戦艦二、巡洋艦六、駆逐艦十二。

――ロコフソスキー艦隊――

戦艦一、巡洋艦六、吹雪型重雷装駆逐艦六、駆逐艦八。

――山口艦隊――

戦艦二、（旗艦長門は主砲を五十口径五十一センチ連装プラズマショックカノン四基に改装中）小型空母四、巡洋艦六、駆逐艦十六。

追記、各艦隊にはビーム防御用のバリア艦が二隻ずつ配備してある。

「……こんなもんやな……」

5時間かけてやっと出来た。

「……大型空母でないのが残念無念なのです……」

「しゃあないわ小沢。均等にしようとしたらこうなってんやからな」

「祀梨でいいです。ま、贅沢は敵ですね」

「あ、私もリディアで呼んでいいよ。私も三笠て呼ぶから」

……何かフラグ立ったか？

『～♪～♪～♪』

その時、携帯が鳴った。

ちなみに着メロは軍艦行進曲や。

ポケットからアイフォンのような機械を出して、ボタンを押す。

すると、画面に帝が出た。

『やっほ～。帝ちゃんでぇ～す♪』

……何で知ってるの？

『明石大佐に調べてもらいましたよ』

心の中を読まないで（汗）

そしてそんな事で明石大佐使わないで（汗）

『それはさておき、山口長官。海軍長官として初めての任務を言い渡します』

「何ですか？」

『行方不明の邦人がアステカ帝国で発見されました。しかし、アステカ帝国は邦人の返還を拒否しました。なので、日本帝国は邦人を救出するためにアステカ帝国に宣戦布告をします。山口長官、出撃準備をお願いします』

……早速の初任務やなぁ。

TURN４（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN5（前書き）

オリジナル展開です。

いくらなんでも通信機くらいはあるやろと思います。

TURN5

「派遣艦隊は俺と、福原の艦隊で行くで」

作戦会議で俺は言う。

「私の艦隊が行けば、直ぐに片はつきますよ？」

祀梨が言う。

「祀梨の艦隊は中南華に備えなあかんからな。あの国は最近、尖閣星域に現れとるしな」

ちなみに尖閣は木星の衛星のエウロパくらいの大きさや。

かなりの鉱物資源が眠ってるみたいやし。

「他は悪いけど、待機やな」

「ま、それなら仕方ないさ」

桜花が頷く。

「よし、これで会議は終了や。解散」

ぞろぞろと皆が出ていく。

「福原、連続でスマンな」

「いえ、長官のお役に立てるなら……」

福原がニコリと笑う。

将官学校で福原は「大和撫子」と呼ばれてたからなぁ。

「んじゃ頼むわ」

「はい」

そして翌日、俺の艦隊と福原の艦隊は出撃した。

――――1ヶ月後、アステカ星域――――

「長官、前方にアメリアの艦隊です」

「……何でおんの？」

「さぁ？通信を繋ぎますか？」

「おぅ、繋いで」

そして通信に出たのは……むっちゃ化粧してる女性やった。

『アメリカ第六艦隊提督のキャシー・ブラッドレイだ。てめぇが司令官か？』

「あぁ。海軍長官の山口三笠や」

『ふぅん、童貞みたいな野郎だな』

あ、グサッと来る。

「……それで貴艦隊が何故此処に？」

宇垣が逸らしてくれた。

ありがとう。

『上が日本に協力しろだとさ。あたしはしたくないのによ……』

いや聞こえてるからな。

「貴艦隊の協力、感謝する」

俺はそう言って通信を切った。

……そら二十五で童貞なんはあれやけどさ……（涙）

「……長官、いい事ありますよ」

女の宇垣に慰められた。

「長官、前方に敵アステカ艦隊です」

……来たな。

「空母隊の攻撃隊発艦準備は？」

「全機発艦準備完了です」

「よし、攻撃隊発艦や。敵艦隊を叩けッ！！」

さぁて仕事や仕事。

「……あっという間に壊滅やな」

アステカ艦隊は航空隊の攻撃で壊滅した。

主砲も一回も撃ってないし。

「何か拍子抜けやな……」

「そうですね……」

そこへ山下から通信が来た。

『こちら、山下だ。これよりアステカに着陸して、邦人を救出する』

「了解した。頼むわ」

『言われるまでもない童貞』

山下がフッと笑って通信を切った。

「……」

……。

「……長官、何故無言で刀を抜いて腹に向けるんですか？」

「……宇垣、後は頼んだ……」

「マジで止めて下さいッ！！」

それから十分くらい俺は宇垣に切腹を止められた。

ちなみに山下が知ってたのはたまたま聞いたらしい。

……覚えとけよあのボケ。

「んで、君が行方不明やった高橋のぞみやな？」

「は、はい」

救出された高橋のぞみは何故かリオのカーニバルみたいな衣装を着ていた。

「……ところで、何でそんな服を？」

「あ、あの、ハニーが無理矢理着せられて女神みたいな恰好をやらされて……」

「ハニーてあの陶器みたい奴？」

「は、はい」

メガネっ娘の高橋が頷く。

「ま、とりあえずは保護したし、大丈夫やろ。山下もありがとうな」

「言われるまでもないぞ童て「ビシュンッ！！」……（汗）」

山下の左頬からツゥと血が流れる。

え？

何で血が流れてるか？

俺が威嚇射撃をしたから。

山下の後ろはレーザー銃の後が残っている。

「山下ぁ？次はないで？次言ったらお前の頭は風穴が空くからな」

俺はレーザー銃を山下のデコに付ける。

「わ、分かった。以後気をつける……（涙）」

山下が涙目やったのは内緒やな。

「長官、帝から通信です」

『パンカパァーン、帝でぇ～す』

帝が通信に出る。

『あ、貴女が高橋のぞみさんですね？』

「は、はい」

『ごめんなさい、もう少し早く発見していれば女神なんか訳の分からない事させられずに済んだのに……』

「い、いいえ。たまたま通信機が手に入る事が出来たので通信したまでですので」

帝の言葉に高橋が恐縮する。

「帝、何か緊急な用でも？」

『あ、はい。そうなんですよ。中南華帝国が尖閣星域に侵攻してきたのです。派遣艦隊は大至急、帰還して下さい』

新たな戦いが始まろうとしていた。

TURN5（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN6（前書き）

今回はのぞみのイベントです。

TURN6

――1ヶ月後、皇居――

「山口、行方不明の邦人救出任務ご苦労様でした」

帝が頭を下げる。

「いえ、当然の事をしたまでです」

「のぞみさんも大変でしたね」

「い、いえ。帝にお言葉を貰うだけでも嬉しいです」

高橋がぎくしゃくしながら答える。

「帝、中南華帝国が攻めてきたのは……」

「はい、侵略です。幸いにも、尖閣星域は死守出来ましたが、宣戦布告の文章が送られてきました」

帝が俺に紙を渡す。

内容は勿論、宣戦布告の事や。

そして何故か最後に『帝、お前は俺の嫁にしてやる』と書かれていた。

……阿呆やなこいつ。

「宇垣が何とか頑張っていますが、無理でしょう」

ちなみに参謀長の宇垣と外務長官の宇垣さんは親戚な。

「では？」

「日本帝国は中南華帝国に宣戦布告をします。宇垣には申し訳ないですが……」

帝が顔を暗くする。

「宇垣長官も分かってくれますよ」

「そうですね」

そして、長門に戻った。

――――旗艦長門――――

「艦隊はかなりの数で行くけど、福原は日本に留まってな。こないだアステカ行ったし」

「はい、お任せ下さい」

福原が頷く。

「第一攻略目標は中南華帝国の北京星域や。全員準備を怠るなよ？」

『おぅッ！！』

「んじゃ解散や」

ぞろぞろと皆が出ていく。

「三笠」

「何や桜花？」

桜花に呼び止められた。

「アステカでの戦いでずっと航空戦をしてたらしいけど、何でだい？」

「あぁ、アステカではアメリアの艦隊もいたからな。最新砲のプラズマショックカノンを見せたくなかったからな」

ブラッドレイの後ろにいた兵士達は明らかに技術者やろな。

ちなみにこの世界の軍艦が使用しているのは荷電粒子砲、所謂ビーム砲やな。

「それならいいんだよ。航空戦ばっかりしてたから不審に思ってね」

「はは、スマンスマン」

そして部屋に戻った。

コンコン。

ん？誰や？

「誰や？」

「……ぁ、あのぅ」

外にいたのは救出した高橋のぞみやった。

「どないした？」

「す、少しお話しが……」

「まぁええよ。入り」

高橋を部屋に入らす。

「し、失礼します……」

「んで、何や？」

「ぁ、ぁのぅ……です」

声小さいって。

「何て？」

「……セ、セックスしてほしいんですッ！！！」

……は？

「……今日は四月一日ちゃうよ？」

「ち、違うんですッ！！じ、実は……」

簡単に言うと、高橋がアステカで女神の位になってたのは眼鏡と処女でなっていたらしい。

そして多分、アステカのハニー達は処女の高橋を取り返そうと艦隊を送り込むかもしれない。

ならば、処女とちゃうかったら奴らも諦めると高橋はそう思ったらしい。

「……なぁ、俺なんかでええの？」

「は、はい。山口さんなら優しくしてくれると思って。田中さん辺

りだと暴走して襲ってきそうで……」

田中……乙。

「……俺初めてやで？それでもええか？」

前世は二五歳で死んで、童貞のまま。

そして今は二五歳で童貞。

合わせて五十年も童貞やった……ｏｒｚ。

「は、はい。構いません」

そして……。

「こ、ここやな」

「は、はい……」

――翌日――

「……ん……」

朝起きると、右横で俺に腕枕をしてもらってスヤスヤと寝ている裸ののぞみがいた。

「……やっと卒業や……」

やったよ俺……（涙）

とりあえず、のぞみを起こさないようにいそいそと服を着て、置き手紙『仕事やから行くわ。これで君は大丈夫や』と書いて食堂でメシを食べた。

――――艦橋――――

「もうよろしいので？」

艦橋に来たら宇垣に言われた。

「知ってたんか？」

「先程起こしに行ったら二人で抱き合って寝てましたので」

……鍵しとけばよかったな。

「よければ、彼女を軍人にしますよ？」

「……それは彼女が決める事や。それに俺は彼女の幸せのために少し手伝っただけや」

「……分かりました。一応話してはおきます」

「ん」

俺は頷く。

「今の艦隊の場所は？」

「後、一時間もすれば中南華帝国の北京に着きます」

……早いな。

「……全艦に発光信号。『全艦戦闘配置ニツケ』や」

部下達が慌ただしく動く。

さぁて、開戦やな。

TURN6（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN7（前書き）

何かご都合がチラホラあるような……。

TURN7

――北京星域――

「な、何だとォッ！！」

北京の皇宮で、中南華帝国の皇帝であるシュウが叫ぶ。

「小日本の艦隊が来ているだとッ！！」

「は、はい」

報告に来た兵士が震えている。

「直ちに防衛だッ！！リンファ、ランファッ！！」

シュウ皇帝は二人の提督を呼ぶ。

リンファは右目が長い髪で隠れて、赤いチャイナドレスを着ている。

ランファはツインテールの髪で青いチャイナドレスを着ている。

「今すぐ小日本を潰せッ！！」

『分かりました』

二人はシュウに頭を下げ、皇宮を出る。

「……ねぇリンファ。勝てると思う？」

「……多分無理……」

二人は深い溜め息を吐いた。

――――旗艦長門――――

「長官、前方に敵中南華帝国の艦隊です」

「艦隊の数は？」

「旧式戦艦五、旧式ミサイル巡洋艦十、旧式巡洋艦十、旧式駆逐艦三十隻でほとんどがソビエトとアメリアの旧式艦で編成されてます」

宇垣がそう報告する。

「……航空隊で掃射してから砲雷撃を展開するか。祀梨、航空隊発艦や」

『了解～』

祀梨の艦隊から攻撃隊が発艦して、中南華帝国艦隊に襲い掛かる。

旧式艦隊のため、満足な対空火器を持っていなかった中南華帝国艦艇群は次々と沈められていく。

「敵旗艦らしき戦艦が突入してきますッ！！」

炎上している戦艦が突撃してくる。

「回避やッ！！」

「駄目ですッ！！ぶつかりますッ！！」

「ちぃッ！！全員衝撃に備えろッ！！」

その直後、衝撃音が響いた。

ドガガガガガガッ！！！

「被害報告やッ！！」

『左舷損傷ッ！！衝突の衝撃で後部四番砲搭旋回不能ッ！！』

報告が次々来るけど、沈没するような事はなかった。

「宇垣ッ！！敵旗艦に白兵戦をするでッ！！」

「……無謀ですね」

「嫌か？」

「いいえ」

「長官、白兵戦の準備完了しましたッ！！」

部下が報告する。

「よし、全員敵旗艦に乗り込めッ！！」

……まさか白兵戦になるとはなぁ。

指示を出しながらそう思った。

まぁ敵旗艦は降伏した。

提督のリンファとやらも拘束した。

そして、俺達は北京に降りた。

「皇帝のシュウは逃げてんな？」

「はい、恐らくは南京です」

中南華帝国の皇帝は取り逃がしたか……。

「治安の方は？」

「皇帝がいなくなったのが幸いで、かなり鎮静化しています」

かなりの暴君やったらしいからな。

「それと、拘束した提督なんですが……やたらに兵士達に共産主義を教えて兵士達が困っているんです……」

宇垣がリディアを見ながらそう言う。

「あ、あははは……」

リディアが目を逸らす。

「……はぁ。俺とリディアで説得してみるか」

「そうだね」

「田中艦隊は残党に備えて出撃準備や。残りは治安維持をやってくれ」

『了解』

――――禁固室――――

「だから共産主義は……」

「は、はぁ……」

赤いチャイナドレスを着た女性が兵士達に共産主義を教えていた。

兵士達は明らかにうざそうにしてるし。

「こら、勝手に妄想を教えるな」

軽くリンファの頭にチョップをする。

「あぅ……」

リンファは目に涙を浮かべる。

……ちょっと可愛いな。

「勝手に部下に共産主義を教えるなよ」

「で、でも共産主義は人類の夢ですよ?」

「あれは夢じゃないよ……」

リディアが溜め息を吐きながらリンファが持ってた赤本を取り上げた。

「あ……」

「しばらくは赤本無しで生活してみなさい。よく分かるわ、共産主義が如何に愚かと言う事がね」

「……」

リンファは何も言えなかった。

「それであんたはこれからどうする？」

俺はリンファに尋ねる。

「……分かりません……」

「なら、ウチで提督しぃひんか？」

「え？」

「中南華帝国よりは待遇や給料は保障するで」

「……そうですね。宜しいですか？」

「いいの長官？」

「提督は一人でも欲しいからな。よろしくなリンファ提督」

俺はリンファと握手をする。

「リンファで構いません。よろしくお願いします山口長官」

リンファを提督に登用した。

TURN7（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN8（前書き）

まず最初にすいませんでしたーーーッ！！！ｍ（＿）ｍ

今回は百パーご都合です。

だってこうしないと、ワープフラグが出来んッ！！（多分）

それでもよければどうぞ。

TURN8

「ようやく復興の兆しが見えてきたな」

北京の町並みを俺は歩いている。

書類業務が疲れたから逃げたのは違うからな。

「おっちゃん、肉まん五つくれ」

「あいよ。あんた日本軍かい？ありがとうよあの皇帝を追っ払ってくれよ」

おっちゃんが肉まんを渡しながら言う。

「いやいや、日本もあんな要求されたら流石に怒るでほんまに」

「あんたらの帝だっけ？嫁に寄越せと言ったんだろ？流石に阿呆と思うな」

「違いないわ」

おっちゃんに代金を渡して肉まんを貰って街を歩く。

「んぐ……んぐ……活気づいてるな」

俺は街を見てそう思う。

聞けば税率は九割らしい。

いや死ぬから普通。

「うん？三笠じゃないか」

ゲッ、桜花。

「はは～ん、書類業務から逃げてきたね？」

ギクギクッ！！Σ（゜Д゜）

「う、宇垣にはな、内緒に……」

「肉まん一個だよ」

「あいよ」

俺は肉まんをあげる。

「うん、美味いね」

「……相変わらず、お前の胸も美味しそうと思うけどな」

将官服がきついのか胸の辺りがムチムチやし。

「ハハハ、嬉しい言葉だね」

そう言って桜花と歩く。

「久しぶりに三笠といるねぇ」

「あぁ、俺も桜花も海軍長官や提督として忙しかったからな……」

「ねぇ、黒島は……」

「アイツは銃殺刑や」

「……」

「俺も永野前長官に何度か刑の減刑を求めたけど、アイツが提供した情報がかなり多くてな。流石に無理やった……」

「……そうかい……。ま、アイツの自業自得だね」

「……吹っ切れたんか？」

「……何とかね。最初は信じられなかったさ。でも、罪は罪だからね。あたしも疑われたしね」

「そうやろなぁ。まぁ今は提督としているんやから大丈夫やん」

「ハハハ、そうだね」

桜花はスッと目を擦る。

ドンッ！！

その時、何かにぶつかった。

「ん？」

見ると、少女やった。

「悪い、大丈夫か？」

けど、少女は何も言わずに倒れた。

「お、おいッ！？しっかりしぃやッ！！桜花、戻るでッ！！」

「あぁッ！！」

俺達は急いで、長門に戻った。

――――旗艦長門――――

「……栄養失調ですね。此処三日はろくに食べていないんだと思いますよ。二、三日の入院で充分ですね」

軍医が言う。

「……全く……高橋少尉を身代わりにして逃げた挙げ句、厄介事を持ち込まないで下さいよ」

宇垣が頭を押さえながら言う。

「ハハハ、まぁ気にするな」

「気にしますよッ！！」

書類業務から逃げる時、高橋を身代わりにした。

結構、書類業務は得意らしいし。

「アハハハ……」

高橋が渇いた笑い声をあげる。

「……ん……」

少女が目を覚ます。

「気がついたか？」

クゥ～。

少女の腹が鳴る。

「……／／／／／／」

少女は顔を赤くする。

「ハハハ、お腹すいたか。メシでも食べるか。軍医、メシくらいなら大丈夫やろ？」

「はい、軽めにして下さい」

「ほな行こか」

俺は少女の手を握って食堂に向かった。

「モグモグ……」

少女はもの凄い勢いでメシを食べてる。

「慌てて食べたら詰まるで」

「……プハァ……」

少女はお茶を飲み干す。

「んで、何でお前はあんなところにいたんや？」

「……三日前からママとおとーさんが寝ちゃっていくらあたしが揺すっても起きないの。だから……」

「……宇垣、直ぐにこの子の身元を『既に判明しました。その子は日本の貿易会社が中南華に派遣した派遣社員の子どものようです。住所も判明して我々が行きましたが、強盗に襲われたのか大量の刺し傷があり、二人は既に死亡してました』……そうか」

俺らが来た時、治安は最悪やったからな。

「嬢ちゃん、名前は？」

「……真希だよ」

「……真希ちゃん、君のママとおとーさんはね、ちょっと長く眠ってるんや」

「……長いお眠さんなの？」

「あぁ、真希ちゃんが大人になっておばあちゃんになっても目が覚めないんや」

「……」

やべ、泣きそうやし。

「やからな真希ちゃん。俺らと来ないか？」

「……おじちゃんと？」

「……お兄ちゃんな真希ちゃん？」

「……お兄ちゃんと？」

「そうや、真希ちゃんが一人だけやと、真希ちゃんのママとおとーさんが悲しむからな」

「……うん。真希、お兄ちゃん達といる」

「そうか、よろしくな真希ちゃん」

俺は真希ちゃんの黄緑色の髪を撫でる。

「……光源氏計画ですか？」

「……殴るで祀梨……」

雰囲気ぶち壊しの祀梨やった。

TURN8（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN9（前書き）

明石大佐はほんまにチートやね。

TURN9

真希ちゃんは瞬く間に長門の中でマスコットキャラとなった。

「はぁ……」

「溜め息をつく暇があれば仕事をして下さい」

宇垣が言う。

机の周りは書類が大量にある。

……もう死ぬよ。

4時間も机にかじりついてるからな。

「……宇垣ィ、トイレ行っていい？」

「駄目です。さっき行かしたら逃げようとしたじゃないですか」

……畜生、大人しくしとくか。

「ハッハッハ。相変わらずのやんちゃ坊主だな」

「ん？山本大将やないですか」

部屋に入ってきたのは第二艦隊提督の山本無限大将やった。

確かこの間のノモンハンで負傷して入院してたのに……。

「もう退院したんですか？」

「あたぼうよ。今こそ国のために命をなげうたないといつするんじゃい」

山本大将が威張る。

「山本さん、お体が悪くなりますよ」

ナース服の女性が山本に言う。

「貴女は？」

「儂の専属看護婦じゃ」

「古賀ひとみと言います」

「あ、これは御丁寧に」

俺は古賀に頭を下げる。

「彼女は元々は儂の下で働いておったんじゃが、ひとみ君の親が倒れたのをきっかけに軍を辞めて看護婦として働いているんだ」

成る程ねぇ。

「しっかり山本さんを見張っといてな。放っておいたら何しでかすか分からんし」

「はい、任せて下さい」

「そう言うなよ」

山本さんが古賀の尻を触る。

「ひゃあッ！！」

「ハッハッハッ！！」

「……まだしばらくは生きてそうやな……」

俺はそう呟いた。

「山口長官、この書類は此処に置いときますね」

高橋が追加の書類を置く。

「おぅ」

高橋は結局は軍に入った。

まぁいいんやけどな。

『長官、中南華帝国が侵攻してきましたッ！！』

いきなりかい。

「全艦出撃やッ！！長門、緊急発進やッ！！」

全艦は急いで宇宙に向かった。

「敵艦隊を発見。旧式巡洋艦五、旧式駆逐艦十隻の艦隊です」

オペレーターが報告する。

「偵察艦隊か？」

「恐らくはと思いますが……」

俺の呟きに宇垣が答える。

「桜花、片付けろ」

『あいよ。南雲艦隊の全艦は射程に入ったら撃ちまくれッ！！』

そして敵艦隊は壊滅した。

早過ぎる？

だって一斉射で撃破したで。

今は生存者の救助をしている。

「長官、生存者１２８名を収容しました」

「ん。なら北京に帰還しよか」

そして艦隊は北京に帰った。

――皇居――

「山口、北京攻略ご苦労様です」

俺は日本に戻って戦況を報告しに皇居まで来た。

「いえ、臣下の成すべき事ですので。それで中南華帝国は和平交渉に応じましたか？」

北京を攻略したと同時に帝はシュウ皇帝に和平交渉を出した。

「……残念ながら拒否をされ、あまつさえ私が皇后になれば交渉に応じると言われました」

……そら無理やな。

「帝、敵国を滅ぼす覚悟をして下さい」

山下が言う。

「……分かりました……」

帝は残念そうに言った。

――――海軍司令部――――

「さて……」

俺は法螺貝を吹いた。

『ブオォォォォッ！！』

バシャアアアアンッ！！

「ぬおぅッ！？」

机にあったコーヒーから出てきたし（＾―＾；

「……任務は？」

「あ、あぁ。中南華帝国を内から崩壊させたいんや。何人かの敵提督を拉致るか、説得して日本の提督にさせたいんやけど、いけるか？」

「……任せよ……」

明石大佐はそう言って消えた。

「……本当に上手く行くんでしょうか？」

宇垣が俺に問う。

「リンファや北京の住民から聞いたけど、シュウ皇帝はかなりの暴君やから大量に離反者でるやろな。なんでも、皇帝を批判するような事を言ったらその場で皇帝自ら青龍偃月刀で殺すらしいで」

「……暴君ですね」

「せやろ？」

数日後、中南華軍の人型兵器部隊隊長の項天天が仲間になる事に成功した。

項は南京の司令官をしているらしい。

「田中と福原を入れ替えるか。福原も経験を積ませないとな」

「分かりました、早速打電します」

そして福原艦隊が田中艦隊と入れ代わりで来た。

「よし、これで南京落とすで」

俺は皆といる会議室で笑った。

TURN9（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN10

――南京モン星域――

「シュウ皇帝、日本軍の艦隊が攻めてきました」

「来たか……コロニー砲を用意だッ！！」

女兵士達が動き回る。

――旗艦長門――

「長官、南京モン守備隊司令官の項天天大佐を連れて来ました」

「ん。項大佐、よく決心してくれました」

「いえ、家族を養うためなら何でもするネ」

俺は項と握手する。

「よし、このまま南京モンの艦隊を撃滅するで。全艦砲雷撃戦用意

やッ！！」

全艦が砲雷撃の準備に入る。

「長官、偵察機より連絡です。敵はコロニーを改造した大型レーザー砲がいるとの事です」

宇垣が報告する。

「大型レーザー砲？」

「旧式になった住居用のコロニーを使っているネ。まだ試作品も完成していないはずネ」

項が説明する。

「……四十式バリア艦で耐え切れるか問題やなぁ……」

四十式バリア艦は無線誘導が出来るバリア艦で艦内は無人や。

これまで、日本軍はこのバリア艦を重宝してきたけど、こないだのノモンハン会戦では旧式化していたために大半の艦艇が戦没した。

『ゲームで表すなら四十式バリア艦のバリア保持は１５０までｂｙ作者』

「……リディア、祀梨の艦隊は左翼を担当。、山本さん、桜花、福原の艦隊は右翼を担当や。中央のコロニー砲隊は長門が引き受けるッ！！」

『了解ッ！！』

五個艦隊が左右に分かれる。

「コロニー砲のエネルギー率が急激に上昇していますッ！！」

オペレーターが悲鳴のような叫び声を出す。

「バリア艦を前方に展開して艦隊をバリアするんやッ！！」

「了解ッ！！」

二隻のバリア艦が艦隊を守るためにバリアを展開する。

「砲撃が来ますッ！！」

「総員衝撃に備えろッ！！」

ズシュウゥゥーンッ！！

俺が言った直後にレーザー砲が直撃した。

「ウワッ！！」

俺は倒れる。

ムニュッ

ん？

右手が何か柔らかい物に触れた。

「……何触ってるんですかッ！？／／／／／／」

正解は宇垣の胸やった。

ふむ……DかEやな。

まぁそれより……。

「損害はッ！？」

「駆逐艦春風大破ッ！！戦闘不能ッ！！」

「巡洋艦衣笠、艦橋にレーザーが命中ッ！！衣笠との通信途絶ッ！！」

「バリア艦、二隻とも沈没ッ！！」

損害の報告が次々と入る。

「……シュウめ、やってくれたな。コロニー砲の動きは？」

「今は沈黙しています」

「……エネルギーの充填に時間が掛かるらしいな。全艦、照準をコロニー砲に合わせろッ！！」

「照準完了ッ！！」

「撃ェェェーーーッ！！！」

ドシュウウゥゥーーンッ！！

長門以下の艦艇が一斉にプラズマショックカノンを発射する。

コロニー砲も流石に何十門から発射されたビーム弾には耐えられなかった。

幾つものビーム弾に貫通されて遂には爆沈した。

「……コロニー砲撃破しましたッ！！」

「ん、他の艦隊はどうなってんのや？」

「全艦隊は敵からの砲撃を受けるも、バリア艦のおかげで無事なようです」

宇垣が報告する。

「そうか」

「敵艦隊壊滅しましたッ！！」

オペレーターが報告する。

「よし、このまま南京モンを制圧や」

「了解です」

そして、山下以下の陸軍部隊が南京モン星に突入。
約六日で制圧した。

――日本――

「此処やな……」

俺は一旦、艦隊から離れて日本に戻った。

「誰かいるかぁ？」

そして訪れたのは海軍本部の軍事技術研究所や。

「……何だ、誰かと思えば山口長官ではないか」

現れたのは頭の上に猫を乗せた平賀都奈海（津波だとあれなんで名前を変えました。そのままでもいいなら津波に変えます）所長や。

「急にスマンな都奈海」

「いや、こないだの会戦の経過を見ていた。……お前が来たのはバリア艦だろ？」

都奈海は地声で話すのが苦手らしく、都奈海の頭上にいる猫の久重に発言を代行させてる。

「あぁ、中南華が使ってきたコロニー砲では今のバリア艦やと力不足や」

「まぁそれは当然だな。なにせ、二十年前から使っているバリア艦だからな」

「……正直何とかならんか？」

「フッフッフ。こんな事もあろうかと、バリア艦を改造している。ただし、若干の出力を上げただけで多分無理だ。開発はしているが、これが中々苦戦している」

「そうか……分かった。ありがとうな都奈海」

俺は都奈海の頭を撫でる。

「……撫でるな……」

「ハハハ、それと久重に土産だ」

俺は久重に鰹節の塊をあげた。

「ニャニャ～♪」

久重が鰹節の塊を食べる。

「じゃ、頼むわ」

「……（コクリ）」

都奈海が頷く。

俺は部屋を出た。

TURN10（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN11（前書き）

今回はハニトライベントです。

ハニトラの対抗策はこれしか浮かばなかった……。

TURN11

――北京星域――

今日は視察で再び北京を訪れていた。

住民曰く「前よりかなり活気に溢れている」とのこと。

これは帝の影響でもある。

通常の日本は、敵星を占領時の税の徴収は四公六民やったが、北京占領時に中南華の徴収は九公一民やった。

これには帝も怒った。

「民無くては国は成り立たないんですよ、プンプン」

と言って、中南華の星域だけは特別に三公七民にした。

これには北京や南京モンの住民は大喜びをした。

おかげで北京と南京モンは俺達の予想以上に発展した。

「ねぇそこのお兄さん」

ん？

「何や？」

振り返ると赤い髪で短めのツインテールをした少女がいた。

「アタシと遊ばない？」

「ロリには興味無いんで（キリ」

「誰がロリよッ！！」

「鏡見たら？」

「毎日見てるわよッ！！」

「まぁ落ち着きや」

「誰のせいよッ！！」

少女は息を整える。

「だからお茶しない？」

「お茶だけなら構わんよ」

「わ～い♪（チョロイ（笑））」

少女は心の中で笑った。

翌日。

ピピピッ

ん？メールか。

何々……成る程な。

あいつはスパイか。

まぁ大体は分かってたけどな。

「別にばらまいてええよっと」

俺はメールを送信して皆を集めた。

「いきなり何なんだ？」

田中が代表して言う。

「実はな、昨日俺なスパイとデートしたみたいでな」

「何ィッ！？」

「オイオイ、しっかりしろよ」

皆からブーイングが来る。

「んでな、コイツをばらけてほしなかったら中南華に降れと言われてな」

皆に画像を見せる。

「ブゥッ！？」

（ハニトラのＨＣＧ）

「で、どうすんの？」

桜花が聞く。

「ん？反撃するに決まってるやん。何のためにパソコンを持って来さしたと思うねん」

「……分かった」

祀梨が俺の考えが分かったらしい。

「ちなみに、俺はロリとちゃうから（キッパリ）。俺が好きなんは巨乳にショートカットやッ！！」

「……巨乳には賛同出来るぜ」

田中が頷く。

「まぁ、とりあえずは作戦開始や」

『ちょ、この少女キターーーッ!!!』

『マジドツボｗｗ』

『ちょっち抜いてくるｗｗ』

『街中に貼れｗｗ』

『ところでこの野郎誰だ?』

『どうでもよくね?』

『野郎よりこの少女ｗｗ』

『この少女は俺の嫁ｗｗ』

「ま、あの男も終わりでしょ」

少女――――ハニトラが日本の街を歩いていた。

シュウから下された命令が「日本の海軍長官を落とせ」との事だった。

「別にいいよってきた時はビックリしたけどアイツは終わりね」

「あーーーッ!!謎の中南華少女だッ!!」

「ふぇ?」

突然の事にハニトラはビックリする。

「おぉ、本当にいたんだ。なぁ、セックスするの本当か?」

「馬鹿野郎ッ!!最初に見つけた俺がするんだッ!!」

「黙れッ!!短小は黙ってろッ!!」

「何ィーーーッ!!」

次々と集まる男達にハニトラは逃げ出した。

「一体何なのよォォーーーッ!!!」

ハニトラの雄叫びは街中に響いた。

「同じ巨乳仲間の田中にはこれをやろう」

「こ、これはッ！？」

「フッフッフ、ＡからＧまでのオッパイを収録したアダルトＤＶＤや」

「長官ッ！！一生ついて行くぜッ！！」

「ほぅ、お主も中々やるもんだな」

山本さんが表紙を見る。

「なにせプレミアがついたらしいですからね。たまたま購入しといてよかったわ」

「お、おぱ～い」

『田中雷蔵の指揮が３０上がった』

TURN11（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN12（前書き）

今回はのぞみのイベントです。

TURN12

――皇居――

「皆さん、今日お集まりいただいたのはアメリアからの条約を結ぶべき決めるためです」

帝が言う。

ちなみにいるのは俺、山下、宇垣さん。

猫平長官はおたふく風邪が悪化したらしい。

それと、条約の内容も日本が不利なるような事ばかり書いてた。

「帝、このような条約は結ぶべきではありませんッ！！」

「だがな山下。結ばないとアメリアとの関係も悪化してしまう。帝、ここは締結すべきでしょう」

山下と宇垣さんが言う。

「……山口はどうですか？」

帝が問い掛ける。

「……ここは締結すべきでしょう。ですが、アメリアと戦うためにも準備をする必要がありますね」

「アメリアと日本が戦争になる可能性がありますか？」

「半々でしょうね。アメリアは十年前の世界恐慌の不景気からあまり立ち上がっていません。これを打開するにはただ一つ。戦争でしょうね」

「ならば、警戒はする必要があるな」

山下が頷く。

「まぁあくまでも準備だけです。アメリアがしないのならそれで良しです」

「……分かりました。皆さん、万が一に備えて準備だけはして下さい」

そこで御前会議は終わった。

そして、条約の締結で造船コストが十%上がった。

――――旗艦長門――――

「……なぁ高橋」

「……はい……」

「あれ……どうする？」

目の前には陶器の埴輪――――もとい、アステカ帝国の民のハニーの大艦隊がいた。

何故そうなったのかと言うと、演習する事になったので全艦隊を宇宙に上げたら、アステカ艦隊が接近してきたんや。

そしてアステカ艦隊から通信が来てずっと『女神ーーーッ！！帰ってきなさいーーーッ！！貴女は洗脳されてるんですよーーーッ！！』と言ってる。

高橋は処女は無くなったと言っているが聞いてないし。

「ど、どうしましょうか？（涙）」

どうしよう……待てよ。

「フッフッフ……こんな事もあろうかとッ！！」

俺はあるデータをアステカ艦隊に送る。

「あの……何を送ったんですか？」

高橋が聞く。

「こないだのエッチの映像やけど」

「な、何でそんな物をッ！？／／／／／／」

「いやぁ、こんな事もあろうかと録ってた。ちなみに田中に見したら鼻血ブーやったで」

『ば、馬鹿野郎ッ！！言うなよッ！！』

田中が何か言ってるが知らん知らん。

「……もうお嫁に行けない……／／／／／／」

「……なんかスマン……」

『あいやーーーッ！！！』

『あいやーーーッ！！！』

パリィーンッ！！

パリィーンッ！！

画面越しでハニー達が次々と割れていく。

「……刺激が強すぎたかな？」

「おそらくはそうですね」

宇垣が頷く。

「あ、アステカ艦隊に動きがあります」

オペレーターが言う。

画面では確かにアステカ艦隊は意気消沈したように次々と反転していく。

「……これは映像が効いたようやな」

俺が言う。

「……これで諦めたんでしょうか？」

宇垣が聞く。

「多分諦めたやろ。かなり割れてたしな」

いやぁ割れる音は気持ちええぐらい心地好いけどな。

そして艦隊は帰還した。

五日後、奴らは再びやってきた。

「……今度は何やねん」

俺は溜め息をつく。

画面にはまた来たアステカ艦隊がいた。

今度はかなり減ってるけどな。

そして高橋がハニー達に此処に来た訳を聞いていた。

「あの長官」

「ハニー達は何て？」

「はい、『僕達は処女を無くした女神様でも大好きだから一緒にいたい』と……」

ふむ……。

「……占領星域での略奪行為と艦隊に監視役の人間を置く事を承認したら日本軍に加わってもええよ」

「あ、ありがとうございますッ！！」

高橋が頭を下げる。

ちなみに艦艇はハニー達によれば戦艦六、巡洋艦七、駆逐艦十五みたいや。

「あ、ハニー達の司令官は高橋がやってな」

「私が……ですか？」

「ハニー達をよく知ってるのは高橋やからな。ハニー達も高橋が司令官やと安心するやろ」

「……分かりました。司令官の役目、やってみます」

「おぅ」

高橋は俺に敬礼をする。

俺も高橋に返礼をした。

TURN12（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ１３（前書き）

今回は真希ちゃんのビーム兵器用チートフラグです。

TURN13

――旗艦長門――

「さて、皆に集まってもらったんはというと、いよいよ中南華帝国の最後の星域のア・バオワ重慶を攻略や」

俺の言葉に皆の目つきが変わる。

「ほぅ、いよいよじゃのぅ」

山本さんがニヤリと笑う。

「腕がなるぜッ！！」

「……アキバに同人誌を買いに行きたいです……」

田中が意気込み、祀梨は最近行ってないアキバにはぁと溜め息をはく。

「ま、全力を尽くすのみだね」

「精一杯頑張ります」

桜花と福原が頷く。

「それと、万が一のために大原提督と金杉提督、項提督は日本で待機です」

「うむ」

「任されよ」

「分かったネ」

三人が頷く。

「偵察機の情報によれば、金海海を司令官にした艦隊がいるらしい。まぁ中南華帝国の残存艦隊やろな。ちなみに金海海はこっちに内通してるからな」

これも明石大佐のおかげや。

こらそこ、チートとか言うなよ。

そして艦隊は一路ア・バオワ重慶に向かった。

――――ア・バオワ重慶――――

「第八防衛戦突破されましたッ！！」

「更に張少佐の戦隊が降伏ッ！！」

次々と入る敗報にシュウは報告に来た女兵士の頭を持っていた拳銃で撃ち抜いた。

タァーンッ！！

辺りに血や脳髄などがばらまかれる。

「ヒイィッ！？」

何人かの女兵士が後ずさりをする。

「奴らはコロニー砲で片付けろッ！！急げェッ！！」

シュウの言葉に女兵士達は慌ただしく動き回る。

「そうだ……奴らは小日本なんだ……我々が敗れる事はありえん……」

シュウはブツブツと呟いた。

――――旗艦長門――――

「んで、残りの敵艦隊は？」

「残りはコロニー砲艦隊が二個艦隊、旧式艦を中心にした艦隊が約三個艦隊。それと、宇宙動物のスペースパンダです」

「……なぁ、何それ？そのスペースパンダて」

「宇宙動物です」

「宇宙は空気は無いで」

「それ以上言われると、作者から消されますよ？」

「……分かったわ」

宇垣の言葉に頷く。

「ん～……。コロニー砲艦隊は俺と高橋でやるわ。スペースパンダは福原と桜花、頼むわ」

『あいよ』

『分かりました』

二人が頷く。

「残りの旧式艦隊は山本さん、祀梨、田中、リディアが相手してやれ」

『雑魚かよ……』

「文句を言うな田中。相手が降伏したら捕らえろよ」

『分かってるよ』

お前の場合、そのまま魚雷をぶっ放しそうで怖いからな。

『かっかっか。田中の綱は儂が握っとくわい』

「すんません山本さん」

まぁ山本さんなら安心やな。

『あのぅ、長官。本当にコロニー砲艦隊は私と長官だけで？』

高橋が不安そうに言う。

「あぁ。なぁに大丈夫や。高橋の艦隊のバリアは完璧やからな。ちょっと粘ってくれたら後はこっちが片付けるから」

よーするに盾ですはい。

『大丈夫ですよ女神様。我々のバリアは完璧です』

ハニー達が高橋を励ます。

『……ならいいけど……』

「長官、敵艦隊が突撃しますッ！！」

オペレーターが叫ぶ。

「よし、全艦突撃やッ！！さっさと引導を渡して帰るでッ！！」

『おぅッ！！』

全艦艇が己の獲物に向かう。

「コロニー砲艦隊との距離四万ッ！！」

「長門、砲撃用意」

「砲撃用意ィッ！！」

長門の五一センチプラズマショックカノンが照準する。

「長官」

「何や？」

振り返ると、宇垣が申し訳なさそうな顔をしている。

「実は侵入者の報告が……」

「侵入者？」

「ごめんなさい、真希なの……」

宇垣の後ろからヒョコッと真希ちゃんが現れた。

「あらら。どないしたんや真希ちゃん？」

「……皆と一緒にいたかったの……」

……はぁ。

「……次からは俺か、宇垣に言いや」

「……うんッ！？」

真希ちゃんは嬉しそうに頷く。

「……よかったのですか？」

「乗り込んだもんはしゃあないやろ」

俺は溜め息をはく。

「ち、長官大変ですッ！！コロニー砲の照準がこっちに向いてますッ！！」

「ぁ～、やっぱそうなるか……」

わけの分からん元アステカ艦隊よりこっちに照準するわな。

「砲撃来ますッ！！目標は長門ですッ！！」

「総員何かに掴まれッ！！」

ズガアァァァーーンッ！！

……？

「揺れがこないな……」

「軌道が変わったとか……」

「それはないやろ。真希ちゃん大丈……夫か？」

真希ちゃんを見ると、真希ちゃんの周りに薄い緑色の粒子が漂っている。

「……みーくん（三笠だから）。これは何なの？」

「……俺も分からんよ。真希ちゃん、何か身体に変化はない？」

「別に何ともないよ」

……何やろか。

「宇垣、被害報告は？」

「はい、それがありません」

「無いやて？」

……まさか…。

「……真希ちゃんが無意識にバリアみたいなのを纏ったからか？」

「ふぇ？」

真希ちゃんは首を傾げる。

「……何とも信じ難いですが恐らくは……」

宇垣が分析をする。

「まぁ今は前に集中しようや。やっこさんら、バリアされてアタフタしとるわ」

あ、衝突した。

「長官、長門の全砲門発射準備完了です」

オペレーターが報告する。

「取舵一杯、右砲戦やッ！！」

「了解、とぉりかぁじッ！！」

艦体が右に傾く。

『照準完了ッ！！』

「撃ェェェーーーッ！！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

長門の主砲が火を噴いた。

TURN13（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN14（前書き）

うん。まぁシュウはこうなりました。

TURN14

「くそッ！！何故だ何故だ何故だッ！！何故我が国は小日本に勝てないッ！！」

モニターを見ているシュウが叫ぶ。

その周りでは宮中に広がった火災を消すべく女兵士達が奮戦していた。

「えぇい煩いッ！！」

タァーンッ！！

近くで消火活動をしていた女兵士を撃つ。

「ギャァッ！！」

「さっさと消火をして小日本を迎撃するのだッ！！」

女兵士達は消火を止めて銃をシュウに構える。

「な、何をッ！？」

「いい加減にするネこの糞野郎が」

「なッ！？」

女兵士の言葉にシュウは驚く。

タァーンッ！！

「ガフゥッ！！」

女兵士がシュウに撃つ。

「ぐ……き……貴様ら……」

シュウは撃たれた腹を抑えつつ、女兵士達を睨む。

「いつもいつも気に入らなければ殺して、綺麗な子がいれば直ぐに宮中に遣わす……いい加減にするネッ！！私達は人間ヨッ！！貴様の物じゃないネッ！！」

タァーンッ！！

銃弾はシュウの額を貫いた。

「ガ……ハ……」

シュウはそのまま深い闇に飲み込まれた。

「地獄で死んでいった者達に謝るといいヨ。皆も、コイツの身体を好きにしていいヨ。銃を撃つなりしてもいいネ」

女兵士の言葉に他の女兵士はシュウの遺体に銃を構えて次々と撃った。

タタタタタタッ！！

タタタタタタタッ！！

シュウの遺体は穴だらけになった。

「……さ、日本軍に降伏するヨ」

女兵士達は宮中を出た。

――――旗艦長門――――

「……で、シュウ皇帝はこうなったわけね……」

俺の目の前にはシュウ皇帝が被っていた被り物と皇帝の証である服がある。

どれも穴だらけで血が付着してるし。

「遺体は？」

「ＤＮＡ確認をしたら遺体は本人と判明しました」

宇垣が報告する。

「……自業自得やな……」

俺は溜め息を吐いた。

「ま、之で戦争は終わったわけやな。皆、ご苦労さん」

「あぁ、何か暴れ足りねぇけどな」

田中が言う。

「文句を言うなよ田中。まぁ中南華の軍艦も多数手に入ったしな」

全部で二十隻程捕獲してる。

「まぁしばらくは治安維持に徹してもらうわ」

『了解』

――――数日後――――

「わ、わ、私はスーパー掃除屋～♪」

一人の女性中南華人が宮中を掃除をしていた。

「壁は金ぴか金ぴか～♪……ん？」

女性は壁に不自然なボタンを見つけた。

「電気を付けるのは向こうにあるし～、ポチっとな♪」

ゴゴゴゴッ！！

ボタンを押すと、壁から扉が開いて下へと続く階段が現れた。

「何なんでしょう～♪」

女性は下へ進む。

やがて、女性はある物を見つけてしまった。

「はわわわーーーッ！！！」

――――旗艦長門――――

「え？シュウ皇帝の隠し財産を見つけたやて？」

「はい、金ぴかの船が二隻が宮中の下に隠してありました」

「……まぁ貰っとくか。武装は？」

「ありません。恐らくは客船のようです」

「ん～。ほんじゃぁ二隻とも解体して新型艦の材料に当てようか」

「分かりました。そのように手配します」

宇垣が部屋を出る。

「……全体が金ぴかてようやるな……」

俺は呟いた。

『山口長官。帝から緊急電です。至急、全艦隊は日本に帰還せよと……』

オペレーターが言う。

「何やろ？とりあえず、治安維持は金提督にしてもらうか」

数日後、俺達は金提督の艦隊を除いた全艦隊は日本に帰還した。

――――皇居――――

「山口、急な帰還命令は申し訳ありません」

帝が謝る。

「いえ、気にしてはおりませんよ。それで、何か重要な事でも起きたのですか？」

帝に聞くと、帝は顔を俯く。

そこへ、日本の神様である柴神様が口を開いた。

「実は先日、アメリアから使者が来たのだ」

「使者ですか？」

「うむ。内容は……まぁ簡単に言えば中南華の領土はシュウ皇帝の取り決めによる我等の領土となる物であり、日本皇国は直ちに撤退せよと言ってきたのだ」

……オイオイ。アメリアは阿呆やろか。

「帝、これは断るべきでしょう」

「理由は何でしょうか？」

「まず、中南華の領土はアメリアの物と言いますが、もしこれが本当なら我々が北京を占領した時点で通告するはずです」

「むむ、確かに少し怪しいですぞ帝」

宇垣が言う。

「つまりこれは領土拡張を狙うアメリアが仕組んだ事やろね。ですので帝、これははっきりと断るべきでしょう」

「……分かりました。アメリアからの通告は拒否致します」

帝は覚悟を決めたように言った。

御前会議後、俺は都奈海の研究室を訪れた。

「よ」

「あ、みーちゃん」

久重と遊んでいた真希ちゃんが駆け寄って来る。

久重はやっと解放された事に安堵しつつ、都奈海の頭に乗る。

「悪かったな都奈海」

「何、気にする事はない。久重が遊んでたからな」

「スマンな久重。今度鰹節あげるわ。ところで都奈海、真希ちゃんのアレやけど……」

「あぁ、映像で見ていたが私でも分からん。ただ分かる事は自分の命の危機の時に発動するはずだ」

「ほんまか？」

「恐らくな。実験でエアガンを撃ったら発動した。おかげでＢＢ弾が跳ね返って青短が出来たぞ」

都奈海がデコを見せる。

確かに青くなっとる。

「それは自業自得とちゃうん？」

「……否定はしない」

あ、認めた。

「まぁ、そういう事だ」

「あぁ、分かった。ところでランファはどうなってるん？」

「最初は「日本鬼子怖いッ！！」と言ってたが多少慣れてきてはいる」

「提督にしたらあかんかな？」

「……ま、大丈夫だろう。責任はお前が取ればいいんだからな」

「痛いところ言うなぁ」

「気のせいだ」

都奈海にキッパリと言われる。

「あぁそれと、新型の６０式艦艇が完成しているからな」

「おぅ分かったわ」

「久重バイバイ～♪」

「バイバイニャア～」

真希ちゃんと久重がお互いに手を振る。

そして家に帰った。

TURN14（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN15（前書き）

今回は三国同盟と福原のイベントですが、福原のイベントはオリジナルです。

TURN15

数日後、再び皇居に呼ばれた。

――皇居――

「ファッハッハッハッ!!帝、今日は嬉しいニュースを持ってきましたぞッ!!」

ハゲ頭の宇垣さんが言う。

「何のニュースですか?」

帝が聞く。

「はい、ヨーロッパ星海域のドクツ第三帝国とイタリン共和帝国が我が日本と同盟を結びたいと言っています。特にドクツ第三帝国の科学力は三世代先ですので同盟は結ぶべきだと思います」

宇垣さんが言う。

「だが、同盟を結ぶにしても事が起こった際に救援に駆け付けるの

と向かうのは遠いはず。ここは無理に同盟を結ぶのは早過ぎると判断します」

山下が反対する。

「う～ん、山口はどうですか？」

俺？

「そうですね、自分は同盟を結ぶのは賛成です。味方は一人でも多いのがいいですからね」

「……分かりました。しばらく待って下さい」

１０分が経過する。

「……中々判断を下さないな……」

「相当迷ってるのだろう」

山下と宇垣が言う。

俺はそれを半分無視しつつ、女官にコーヒーを頼んだ。

「貴様はよく平気でいられるな？」

山下が聞く。

「俺らがぎゃあぎゃあ騒ぐ事やない。帝が決める事や。俺達はただ帝の言葉を従うのみや」

女官からコーヒーを渡される。

うん、美味い。

「……皆さんお待たせしました」

帝が来た。

「この同盟は……結びます」

帝がはっきりと言う。

『ハハッ！！』

俺達は帝に敬礼をした。

――――２１：００廊下――――

真希ちゃんを寝かしつけて、俺は廊下をポーッと歩いてる。

夕飯で飲んだビールがまだ抜けてないんやな。

「ファッハッハッハッ！！！いや愉快愉快ッ！！」

あ、前から宇垣さんが来た。

「おぅ山口長官。どうしました？」

「どもです宇垣さん。いや、酒が抜けてないので夜風に当たろうと思って」

「ははは、成る程。余程三国同盟が結ばれて喜んでたようですな」

それはあんたや。

顔が茹蛸みたいになっとるし。

「それに聞けば、海軍は提督の数が少なくて苦労しとるようですな？」

「まぁそうですね」

「ならば、私も提督として参加しましょう」

……は？

「……いやあの、そんな無理にしなくても……」

「いやいやこれでも若い頃は巡洋艦の艦長をしていましたからな」

へぇ。

「まぁそこまで言うなら宇垣さんに一個艦隊を預けましょう」

「おぉッ！！流石は山口長官、太っ腹ですなぁ。ファッハッハッハッ！！」

宇垣さんはそう言ってまた何処かへ行った。

……帰るか……。

「あ、山口閣下」

「あれ？福原やん。どないしたん？」

家の前に福原がいた。

「はい、実は少々閣下の小耳に入れたい事が……」

「まぁ、立ち話もなんやから入り」

「失礼します」

「はいよ」

福原にお茶を渡す。

「ありがとうございます閣下」

「んで、どうしたん？」

「はい。閣下は『愛国獅子団』に興味はありませんか？」

「確か……純血日本人のみの国家を良しとする極右派の団体やな。平良少将が代表やったな」

何時の時代も左派や右派はいるもんやな。

「はい。我々はもうすぐ日本は戦火に巻き込まれると判断しています。我々愛国獅子団はそのために、日本人以外の人間を抹殺して日本人だけの国家を形成したいと考えています」

……スゲー右派やな。

「……福原。確かに日本はそろそろ戦火に巻き込まれそうなんは俺も分かる。やけどな、日本人以外の人間の抹殺はクズ以下がするような行いや」

「ですが、我々日本人はいつも他の外国人からけなされ、挙げ句の果てには中南華の女性と猿の混血種だと言われています」

「そらぁ確かに言われてわな。けどな、ほっとけやそんな奴らは後悔すんのはそいつらやからな」

「……分かりました。今日のところは此処で失礼します。ですが、忘れないで下さい。日本人は素晴らしい民族なんです」

「……あぁ。分かってるよ」

福原は俺の言葉にニコリと笑って出た。

「……めんどくさくなってきたな……」

俺は誰も居ないリビングでポツリと呟いた。

TURN15（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN16（前書き）

イベント二つと開戦準備ですね。

TURN16

数日後、ドクツ第三帝国より派遣艦隊が来た。

――――ドッグ――――

「ドクツ第三帝国所属、日本派遣艦隊提督のエルミー・デーニッツ少将です」

黒髪で、眼鏡をかけた女性が俺に敬礼をする。

「日本皇国海軍長官の山口三笠や。階級は大将や」

俺もデーニッツに返礼をする。

「はるばるの遠路。真にスマンな」

「いえ、日本とドクツ第三帝国のためなら……」

「本来なら我が日本皇国も艦隊を派遣すべきなんやけど、ソビエトとの戦いでベテランが大勢死んだからな。代わりに鉱石資源を少量ながら輸送するわ」

「感謝します長官」

俺との簡単な挨拶は終わって、デーニッツは桜花達と挨拶をしている。

デーニッツが連れて来た艦隊は全部Uボートの潜水艦隊や。

「これやと奇襲が成功するな」

「何か言ったかい三笠？」

「いや何も……」

桜花が聞いてくるけど、知らん事にしといた。

――――数日後、食堂――――

「お、デーニッツやん」

真希ちゃんと食堂にデーニッツがポツンと座って一人で食べていた。

「隣ええか？」

「あ、長官」

俺に気づいたデーニッツが慌てて敬礼をする。

「今はメシの最中やからせんでええよ」

「は、はぁ……」

デーニッツはそう言って真希ちゃんをチラリと見る。

「娘……さんですか？」

「ん～、養女やな。一応籍は俺の娘になっているんや」

「真希です。よろしくねお姉ちゃん」

真希ちゃんが頭を下げる。

「あ、はい。よろしくね」

そして三人でメシを食べる。

「どうや？もう日本に慣れたか？」

「えぇまぁ一応は……」

デーニッツはそれなりに言葉を返す。

「皆とは仲良くなれたか？」

「いえ、必要以上に接していません」

……はい？

「え？何でなん？」

「任務ですので仲良くなる必要はないはずです」

「いやな、任務でなくても仲良くならんの？」

「任務ですので」

デーニッツがバッサリと切り捨てる。

「……まぁ任務でなくても、他の奴らとは仲良くした方がええよ。場合によっては勘違いされるからな」

「はぁ、分かりました」

デーニッツはそう言って、食器を片付けて食堂を出た。

「みーちゃん。ラーメン伸びるよ？」

「やべ、伸びかけやんッ！！」

俺は伸びかけのラーメンを食べはじめた。

ちなみに真希ちゃんは親子丼や。

「ん？」

食堂の帰りに海軍省の廊下を歩いていると、前の方に桜花と桜花の部下らしき人物がいた。

「南雲先輩。シュークリームが出来たんで味見をして下さい」

「あぁいいよ」

「ドキドキ……」

「うん、美味いよ夏ちゃん」

「わぁ、ありがとうございます」

「よぉ桜花」

「あ、三笠と真希ちゃんかい」

「何してんの？」

「部下の料理指導さ」

「あぁ、将官学校でもようやってたな」

確か将官学校でも週一程度で料理教室みたいなもんを開いてたな。

「あ、南雲艦隊の巡洋艦隊の司令官をしている山口夏です。階級は大佐です」

「南雲艦隊に突撃女がいると聞いてたけど君かぁ」

「そ、そんな……／／／」

山口……ややこしいから夏で。

夏ちゃんは顔を赤くする。

「あ、シュークリーム貰うで」

「はい、どうぞ」

俺は二つ貰う。

一つは真希ちゃんの分な。

「うん、美味いな」

「夏お姉ちゃんのシュークリーム美味しいよぅ」

真希ちゃんも絶賛する。

「エへへ……／／／」

夏ちゃんが照れる。

「ま、点数は八十くらいかね。もう少し焼き加減をしないとね」

桜花が指摘する。

「は、はい。次も頑張ります」

夏ちゃんはそう言って、別れた。

「十分美味いと思うけどな」

「私のがまだまだ美味いさ」

「なら今度、作ってきてや」

「あたしも食べる～♪」

真希ちゃんも言う。

「分かったよ。今度作ってあげるよ」

桜花が仕方ないという風な顔で言う。

『～♪～♪～』

お、電話や。

「もしもし？」

『帝ちゃんでぇす。山口、急ですいませんけど、皇居に来て下さい』

「はい、分かりました」

何やろ？

とりあえず、真希ちゃんを家まで送って皇居に向かった。

――――皇居――――

「山口、急な呼び出しですいません。実はアメリアから新たな条約を結ぶよう通達が来ました」

帝から紙を渡される。

……えぇ～（´Д`）

アメリアは阿呆なんやろか（´Д`）

ま、簡単に言えば軍を解体してアメリアに加われと。

よーするに属国やね。

「宇垣長官も山下長官も当然反対しています」

それが普通です。はい。

「帝、自分も反対ですね」

ビリビリと俺は紙を破る。

「はい、私も反対です。よって、この条約は拒否らせていただきま

す」

帝が頷く。

「帝、もはや『開戦』しかありませんッ！！」

山下が開戦を強調する。

「しかし、相手はアメリア。早々開戦は早いかと……」

宇垣さんが言う。

「山口はどう思いますか？」

「……やるならば、一刻も早くですね」

「では開戦と？」

「えぇ。奴らのケツに爆弾をぶち込みましょうや」

「お、おいッ！！帝の前でそんな言葉を……」

山下が言う。

「構いませんよ山下。では山口、アメリアのケツに爆弾をぶち込んで下さいね」

「帝ッ！！」

女官長が叫ぶ。

「まぁまぁ、たまには良いではないか」

柴神様が仲裁に入る。

「し、しかし……」

「では皆さん頼みます」

『ハハッ！！』

俺達は帝に敬礼をした。

――――旗艦長門――――

「と、いうことで開戦や」

「フン、暴れさせてもらうぜッ！！」

田中が木刀を振り回して意気込む。

「いよいよか。こりゃかなりの博打が打てるわい」

山本さんがニヤリと笑う。

「ウチの艦隊は何時でも行けるよ」

桜花が言う。

「最初の攻略星域はマイクロネシアとマニラ２０００や。皆、しっかりと頼むでッ！！」

『了解ッ！！』

皆は俺に敬礼をした。

TURN16（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN17（前書き）

遂に開戦です。

TURN17

――――マイクロネシア星域――――

マイクロネシア攻略には俺、福原、高橋、宇垣さん、新たに採用した有馬兎子、角田忍太郎、元からいた金杉、大原の八個艦隊で行う。

「マイクロネシア星域に入りました」

オペレーターが言う。

ちなみに宣戦布告はとうの昔にしてる。

「攻撃隊発艦準備完了しました」

「よし、敵艦隊の出鼻をくじけ」

小型空母は輸送艦隊の護衛に回されて、俺の艦隊には新たに中型空母五隻が配備されていた。

そして五隻の中型空母から次々と攻撃隊が発艦していく。

「敵艦隊の数は？」

「偵察機の報告では三個艦隊が駐留しているようです」

ま、楽勝に近いな。

「それで……その……敵三個艦隊のうち、一個艦隊の提督はブラッドレイです」

宇垣が言いにくそうに言う。

……そうかそうか。

「……攻撃隊の一部はブラッドレイの旗艦のエンジンを叩け」

「は、はい……」

あの女にギャフンて言わしたるわッ！！

一方、マニラ２０００攻略には桜花、祀梨、田中、山本、リンファ、リディア、デーニッツ、金、項の九個艦隊がいた。

――――山本艦隊旗艦日進――――

「かっかっかッ！！大艦隊じゃのう。ノモンハンの惨敗から僅か数ヶ月で此処まで膨れ上がるとはな」

山本は周囲の艦隊を見て嬉しそうに言う。

「しかも、儂が第二艦隊司令長官とはな。腕が成るわい」

「山本さん、興奮したら血圧が上がりますよ」

側にいた古賀が言う。

「心配すんなひとみ君。儂はまだまだ死なんよ」

ムニュッ

山本はそう言って、古賀の尻を撫でた。

「キャアッ!!いい加減にして下さいッ!!」

バキィッ!!

「ひとみ君……本の角は痛いからのぅ。後、儂は一応病人じゃないのか？」

「ならお尻を触らないで下さい」

古賀は近くにあった『君も明日から提督にッ!!大戦略初心者用』の本の角で山本の頭を叩いていた。

『……何やってんだよ……』

田中が溜め息を吐いた。

『山本さん。敵艦隊を見つけましたよ』

祀梨が言う。

「さて……やるとするかのぅ」

山本は立ち上がる。

「小沢ちゃんは攻撃隊を出しながら後方で待機じゃ。残りの全艦隊は儂に続けェッ！！」

『了解ッ！！』

旗艦日進前部の四十一センチ連装砲のプラズマショックカノンが火を噴いた。

――――マイクロネシア星域、ブラッドレイ艦隊旗艦アストリア――――

『機関室大破ッ！！修理不能ッ！！』

『後部三番砲搭被弾ッ！！只今消火……ギャアァァァッ！！』

『左舷中央部被弾ッ！！隔壁閉鎖しま……う、ウワァァァァッ！！』

「ブラッドレイ提督ッ！！アストリア大破ッ！！航行不能ですッ！！提督、総員退艦をッ！！」

「馬鹿野郎ッ！！まだ一番砲搭は生きているッ！！カイワレペ〇スのジャップを叩けッ！！」

ブラッドレイは鼓舞するが、悲痛な連絡が来た。

『こちら右舷中央部ッ！！ジ、ジャップが乗り込んで来ますッ！！』

「何ィッ！？」

そして数分後、艦橋に陸戦隊が乗り込んできた。

「日本軍だッ！！大人しく投降「するかよッ！！」なッ！？」

ダダダダダダッ！！

ブラッドレイは持っていた小銃を乱射する。

弾丸は説得に来た士官の右目を貫通した。

さらに、士官の喉にも弾丸が貫通。

士官はそのまま事切れた。

「ちゅ、中隊長ッ！！この野郎ッ！！」

ダダダダダダッ！！

陸戦隊も応戦して激しい銃撃戦が展開した。

３０分後、何とかブラッドレイを捕獲したが、陸戦隊も十一名の死傷者を出した。

――マニラ２０００星域、アメリア艦隊旗艦コロラド――

「残存艦艇はこれだけか……」

被弾損傷して煙を吹く艦艇を見て、アメリア軍太平洋艦隊司令長官のイーグル・ダグラス大将が悔しそうに呟く。

「残存艦艇は僅か十隻です長官」

副官がダグラスに報告する。

「分かった。ラバウルを経由して、ハワイに帰還する」

「イエッサー」

副官は敬礼して、部下に指示を出す。

「……ヤマグチ……」

ダグラスは無限に広がるを宇宙を見つめる。

「……次は勝つッ！！！」

ダグラスはそう呟いた。

――――ワシントン星域、ホワイトハウス――――

「日本がようやく動いてくれたわね」

ホワイトハウスの秘密部屋で四人の女性が話し合っていた。

「ま、これでキリング財閥も儲かるしね」

金髪でツインテールの女性がピザを食べる。

「所詮は太平洋の小さい国だわ。私達はドクツを倒す事に専念よ」

勝ち気な女性はフフと笑った。

TURN17（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN18（前書き）

今回はララーイベントです。

そして少しネタがあります。

TURN18

――数日後、マニラ２０００のとあるホテル――

「……」

俺はあまりの事に一瞬思考を停止するが、隣でモゾモゾと動く物に気づく。

毛布を退くと、一人の女性が裸でいた。

勿論、俺も裸やね。

女性は濃い青色の長髪をし、紫色のリボンで前のポニーにしている。
（間違ってらすいません）

「……ん……」

あ、起きた。

「ふぁ～。あ、お早うヤマグチ」

「あ、あぁ。お早うララー」

俺達は挨拶をした。

ララーは服を着ようと立ち上がろうとしたけど、上手く立てない。

「大丈夫か？」

「う、うん。昨日はかなり激しかったから……／／／／」

ララーはそう言って顔を赤くする。

それは俺もなんやけどなぁ……／／／

さて、何故俺がこうなったのは昨日の事や。

マイクロネシアの守備は有馬、角田、金杉、ランファ、宇垣さんに任して俺と福原、高橋はマニラに来た。

ちなみにランファと宇垣さんは俺達と入れ替わりね。

ランファはかなりの反日教育を受けたせいか、かなり「日本鬼子」と日本人を恐れてたが最近はマシになってきた。

あぁついでに中南華経由でいくけど、リンファが赤本の禁断症状を出していた。

簡単に言えば赤本を読みたいとの事。

勿論、許可は出さんよ。

何か「赤本♪赤本♪赤本♪」と俺に手拍子をつけて渡すようにジェスチャーをしとるが、俺は「性的欲求かッ！！」とツッコミを入れ

てかわしてる。

そして息抜きでマニラ２０００の繁華街に出ていたら、路地裏で女性が五、六人の男にレイプされかけやったから銃で威嚇射撃をして助けた。

助けたのがララー・マニィやった。

ララーは助けてくれた御礼だと言って繁華街を案内してくれたりしてくれた。

そして、ちょっと酒を飲んでたらいつの間にかラブホにいた。

流石に断れば男が廃るやろぅと思い、そのままルパンダイブを決行。

中々の一日でしたマル。

あ、あれを思い出したら立ってきた。

「アハ♪ヤマグチの下は朝から元気だけど……もう一回する？」

ララーが笑う。

俺は多分顔が赤いやろなぁ。

俺達はそのままキスをした。

「ちゅ……ん……むふぅ……ちゅむ……ん……」

甘い吐息を漏らしながら、ララーは俺の唇を吸いつづける。

それでは足りんくなったのかララーの方から舌を入れてきたので、絡め取ってちゅーっと強く吸い上げる。

それをしばらく続けた後、どちらからともなく唇を離した。

『……』

俺達は多少見つめ合いながらベッドに倒れた。

とりあえず、終わったので服を着る。

「あれ？ララー、お前アメリア軍か？」

ララーがアメリア軍の軍服を着ていた。

「そうだよ。此処の提督」

全く気づいてなかった……。

「ヤマグチは日本軍の海軍長官だしね」

「まぁ…な……」

「ねぇヤマグチ。あたしを日本軍の提督にしてくれない？アメリアの給料は安いし、配備艦は古いしもう嫌なの。それに日本の文化に

も興味あるし」

ぶうとララーがアメリア軍の文句を言う。

まぁええやろ。

そんな悪い奴には見えんし。

「ええよ。そんかわりしっかりと働いてな？」

「はいは～い♪任せといて♪」

ララーが笑う。

「と、言うわけで新規提督のララー・マニィや」

「は～い♪皆さんよろしくね」

ララーが皆にウインクをする。

「グハッ！？Σ（゜Д゜）し、下が水着だと……ッ！？ララー、私を導いてくれたのか……」

田中が何か鼻血出しながら言ってる。

しかも、シャアネタを何故知ってるんや。

「み、皆さん大変ですッ！！」

部屋に入ってきたのはつい最近知り合った五藤ミサキ中尉や。

おっぱいがちょっと大きいので覚えてた。

ん？

おっぱいは夢と希望が詰まってるんです。はい。

「どした五藤？」

「は、はい。このマニラ２０００で反乱が起きそうなんですッ！！」

反乱……か。

「五藤。知らせてくれてありがとうな。反乱軍の討伐には田中、リンファ、デーニッツでやってもらうわ」

「任しとけッ！！」

「赤本読みたいです……」

「はい」

三人は急いで艦隊に向かって反乱軍を鎮圧しに行った。

TURN18（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN19（前書き）

ブラッドレイと平良のイベントです。

TURN19

数日後、俺は帝から呼び出しがきたために皇居に向かった。

――――皇居――――

「今日、皆さんに集まってもらったのは先日の反乱の事です」

俺達三人が集まった開口一番に帝が言う。

「私は考えました。このような事が二度と起きないように世界を統一しちゃいましょうッ！！」

『……は？』

「占領した星域の人間は全て日本人にして差別の差を無くし、世界を日本の国だけにするのですよ。言わば『世界日本化計画』ですッ！！」

えっへんと帝が小さい胸を反らす。

「山口は一言多いですよ」

げΣ（ °Д °）

バレてたか。

「山口は顔に出やすいですよ」

気をつけよ……。

「し、しかし帝。そのような計画は無謀ですッ！！一歩間違えば同化政策と見なされて日本は永久的にけなされますッ！！」

山下が具申する。

「そうですぞ帝ッ！！今一度お考え直しを……」

宇垣さんも反対する。

「山口はどう思いますか？」

……う～ん。

「まぁ、ええんとちゃいますか？他民族の争いは長年続いてきましたし、ここら辺で決着をつけるのもアリやと思います」

「分かりました。しばらくお待ち下さい」

帝は別室へ下がり、考え中。

５分、１０分と時間が流れる。

「……遅い……」

「やはり、重大だから遅いのだろう」

だからちゃんと待っとけよ。

そして15分が過ぎた時に帝が現れた。

「之より、『世界日本化計画』が発動します。皆さん、より一層頑張って下さい」

『ハハッ!!』

帝の顔はもう迷ってなかった。

「イチチ……」

「どうしたんその傷?」

下士官が切り傷だらけやった。

「はぁ。こないだ捕虜にしたアメリアの軍人が暴れてるんです」

……ブラッドレイか。

「そうか」

迎賓館行ってみるか。

――――迎賓館――――

「ブラッドレイ入るでぇ～」

部屋に入ると、かなり部屋がめちゃくちゃやった。

「派手に暴れてんなぁ」

「あ？あ、ヤマグチッ！？」

そんな「げぇッ！？関羽ッ！？」みたいな顔すんなよ。

「……何しに来やがった……」

「ん？お前が暴れてるから少し注意しにな」

「ならアタイを釈放しな。そうすりゃあ静かになるさ」

フンとブラッドレイが言う。

「阿呆かお前は……（汗）捕虜が生意気言うな」

ビシィッとブラッドレイのデコにチョップをいれた。

「痛ッ！？……ならさぁ」

「ん？ヌォッ！？」

ブラッドレイに床に叩きつけられる。

「な、何やねんッ！？」

「ちょっとアタイの性欲を鎮めてくれよ。ここ一ヶ月してなかったからなぁ」

ブラッドレイがペロッと舌を出す。

「エロいなぁ……」

「フン、エロくて何が悪……んむぅッ！？」

俺に馬乗りになっていたブラッドレイの頭を掴んでそのままキスに直行。

「……ん……あむ……ちゅる……」

数分間、舌を絡めてキスをして離すとブラッドレイはポーッとしていた。

「お前、あん時童貞やと言ってたな。今此処で仕返したるわ」

「え？あ……」

俺は起き上がって、ブラッドレイと共にベッドに倒れた。

「眠……」

翌日、欠伸をしつつ書類処理をしていた。

あの後、ブラッドレイとは三戦もした。

すげえ疲れましたはい。

「あのぅ長官。長官に面会したい方が……」

高橋が言う。

誰やろか？

「通してええよ」

「は、はい」

「失礼する」

……長官室に入ってきたのは『愛国獅子団』の代表をしている平良英知少将やった。

「平良少将。ノモンハンの傷は癒えたんか？」

「えぇ。温泉に浸かって癒しておりました。が、今再び戦争が始まったのに参加しない軍人が何処にいるのか……。そんなわけで来ました」

そりゃあご苦労さんやな。

「まぁ今は一人でも提督は欲しいからな。平良少将の登録はしといたるわ」

「ありがたきお言葉。日本人のために頑張りましょう」

平良はニヤリと笑って部屋を出た。

……厄介やなぁ。

「長官。実はもう一人面会したい方が……」

「そうなんか？ええよ通して」

「し、失礼するぜ」

入ってきたのブラッドレイやった。

あ、化粧落としてるやん。

「どないしたブラッドレイ？」

「あ、あのよ……その……アタイも日本軍に協力していいかな？」

「……風邪でも引いたか？」

「ち、違うわッ！！で、いいのか？」

「そりゃあええけど。なら艦隊預けるから頼むで」

「あぁ、任せとけ」

ブラッドレイが頷く。

「そういやブラッドレイ。化粧落としてんな」

「あ、あぁ。変か？」

「いんや。むしろ前よりかわええよ」

「か、可愛いッ！？／／／」

あ、顔真っ赤にした。

……フラグか？

「そ、それとキャシーで呼んでいいぞ／／／」

「あ、あぁ」

やっぱフラグか？

そう思いつつ、マレーの虎攻略作戦を準備した。

TURN19（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN20（前書き）

ラスシャライベントです。

ラスシャラは好きやなぁ。

TURN20

――マレーの虎星域――

「ハッハッハッ！！祖国解放同盟『ボルネオ』も終わりのようだな。なぁラスシャラ？」

マレーの虎総督のパーシバル中将は腕を縄で縛られ、ラスシャラの赤い髪や、褐色の肌は周りの男達から撒き散らした白い液体で汚れていた。

「……き……貴様ァ……」

ラスシャラはキッとパーシバルを睨む。

「おぉ怖い怖い。おい、まだ反抗する気があるようだから徹底的に痛め付けろ」

パーシバルの死の宣告にも言える言葉にラスシャラは顔を真っ青にした。

男達がラスシャラに襲い掛かろうとした時、警報が鳴った。

『ビィーーーッ！！ビィーーーッ！！』

「何事だッ！！」

『た、大変ですッ！！ジャップが攻めてきましたッ！！』

「何ィーーーッ！？」

パーシバルは部下からの報告に思わず絶叫した。

――――旗艦長門――――

「前方に敵艦隊ッ！！」

レーダー員が報告する。

「慌ててるな」

「恐らくは我々の侵攻スピードを襲いと判断していたのかと思います」

隣で宇垣が冷静に言う。

「全空母に連絡。攻撃隊発艦や。一に敵艦、二に敵艦。三、四が無くて五が敵艦やッ！！」

「みーくん。全部敵艦だよ？」

「あえて言ってみたかったんや真希ちゃん」

真希ちゃんにツッコミをされるとはな……。

「長官。攻撃隊のおかげで敵艦隊は足並みが乱れています」

宇垣が報告する。

「ん。全艦隊砲雷撃戦用意やッ！！」

「全艦砲雷撃戦用意ッ！！」

『主砲良しッ！！』

『魚雷良しッ！！』

報告に俺は頷く。

「全艦撃ち方初めッ！！徹底的に叩けェッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

全艦艇が一斉にプラズマショックカノンを発射する。

ビーム弾は次々とエイリス艦艇の装甲を貫き爆沈していく。

「壊滅か？」

「……いえ、まだ二隻残っています」

前方を見ると……。

「……マーライオン？」

「マレーの虎特別防衛艦隊ですね」

マーライオンに似てるな。

「全艦、照準を二隻に合わせぇい」

「照準完了ッ！！」

「撃ェッ！！」

ドシュウゥゥゥーンッ！！

ビーム弾がマーライオンらしき建造物に命中するが、穴が開いた程度やった。

「装甲が硬いんか……田中とリディアの艦隊以外は射撃を続けろ。田中とリディアは近距離から魚雷をぶち込めッ！！」

『了解ッ！！』

田中とリディアの艦隊が突撃を開始する。

それ以外の艦隊は援護射撃をする。

それでも穴が開く程度しか出来ない。

敵の防衛艦隊も反撃しようとするが、小回りが効く二艦隊に翻弄されている。

そして、二艦隊は絶好の発射地点にたどり着いた。

『魚雷撃ェーーーッ！！』

二艦隊から合わせて八十本の光子魚雷が一斉に発射された。

八十本の魚雷は全弾が命中した。

ズガァァァーーンッ！！

ズガァァァーーンッ！！

「二隻とも撃破を確認しました」

「よし、陸軍部隊突入や」

そしてあっという間にマレーの虎を占領した。

――――マレーの虎星域の首都シンガポール――――

「此処がエイリスの司令部のようやな……」

至る所に絵やら何か銅像があった。

「山口長官ッ！！現地人と思われる女性を発見しましたッ！！ですが……その……女性の身体の至る所に精液があり、恐らく凌辱されていたのかと……」

陸軍の兵士が報告してくる。

「……桜花、リディア。その女性の所に行って長門へ収容や。そのまま風呂に入らして身体を綺麗にしてあげてや」

「任しときなッ！！」

「さて行きましょう。場所の案内お願いしますね」

二人は兵士に連れられていく。

「全く……エイリスの貴族の権威は落ちたもんやな」

「同感です」

被害者と同性の宇垣が力強く頷く。

「現地軍提督と祖国解放同盟代表のラスシャラだ」

風呂に入ってさっぱりしたラスシャラと握手をする。

「日本海軍長官の山口三笠や。救出に遅れてスマンかったな……」

「いや、命があるだけでも御の字だ。マレーの虎をエイリスから解放してくれてありがとう」

「まぁな」

「ただし、貴様らがエイリスと同じ事をすれば、私達は即立ち上がるからな」

ラスシャラが出て行こうとする。

「ちょいまち。ならお前は俺達を見張っとけばええやん」

「……日本軍の提督になれ……と？」

「別に。ただ提案しただけやしな」

「……フ。面白いな貴様。分かった、日本軍に入ろう。そして貴様を見定めてやる」

「お手柔らかにな」

こうして、祖国解放同盟の代表であるラスシャラが日本軍に加わった。

TURN20（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN21（前書き）

色々とイベントを混ぜすぎた……。福原のイベントも何か無理矢理感がする……。

TURN21

――旗艦長門――

『ヤマグチ。ラバウル星域の攻略完了したよ』

マレーの虎攻略とは別にラバウルの攻略をキャシー、ララー、須田、金提督達に任していた。

「おぅ、ありがとうなララー」

『これくらいお安い御用だよ』

ララーがウインクをする。

「ララー達には悪いけど、しばらくは治安維持とハワイからの敵艦隊襲来に備えてラバウルにいてくれ」

『はいは～い♪』

ララーとの通信を切る。

「……で、残りはアイツらだけやな……」

長門の前方には四国の防衛艦隊がいた。

よーするに四国攻略の最中やねはい。

数は四個艦隊なんやけど、戦艦四、駆逐艦三十二隻やから意外と少ない。

問題は……。

「……あれどうしようか……」

エイリス艦隊の後方には四国の大怪獣ガワタスガル・ビゥがいる。

「……あれと戦うと全滅フラグやな」

「同意します」

「……エイリス艦隊に平文を打て。内容は『後方ノ大怪獣ニハ手ヲ出サナイ』とな」

「了解です」

オペレーターが無電を打つ。

「砲撃用意ッ！！」

『照準完了ッ！！』

「撃ェェェーーーッ！！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

全艦艇から一斉にプラズマショックカノンが発射された。

――――ガワタスガル・ビゥ上――――

エイリス艦隊を壊滅した俺達はガワタスガル・ビゥ上に着陸をした。

「空気があんねんな」

「そのようですね」

俺と宇垣が驚いてると、長老と思われるアボリ人がやってきた。

「貴方達が新しい支配者かな？」

「いや別に支配者とはちゃうんですけどね。たまたまエイリス艦隊が此処にいますし、後方から攻撃されたら困るから攻略をしたまでなんで」

「それでは今まで通りに暮らせると？」

「はい。何か足りない物があれば駐留する日本艦隊に申し上げてくれば援助しますので」

「これはこれは。まぁ今のところは大丈夫ですのじゃ」

「それならいいんですけどね」

「おじいちゃん。誰その人達？」

現れたのは怪獣姫と呼ばれてる少女やった。

「おぉトルカ。この方達は日本軍の人じゃよ」

「こんにちは、トルカです」

「こんにちは。俺は山口や」

「ヤマグチ……」

俺はトルカの頭を撫でる。

「あ……」

「よろしくな」

「……うん……」

「ホッホッホ」

長老がなんか笑ってた。

――――海軍省食堂――――

何か食堂が騒がしいな。

しかも人だかりがあるし。

「どしたん？」

俺は野次馬らしき士官に声をかける。

「あ、長官。実はデーニッツ提督と山口司令官が……」

あん？

俺は人だかりの中に入り、抜けるとデーニッツと夏ちゃんが争ってるように見えた。

「何してんの？」

「あ、長官。聞いて下さい。私、デーニッツ提督が何時も一人なんで一緒に食べようと声をかけたら「いい」と言って拒否したんです。何時も一人だから心配なんで……」

「別に構わないです。慣れてますので」

デーニッツがキッパリと言う。

「で、でも……」

……はぁ。

「ようし分かったッ！！俺もデーニッツと食べようやんか。おばち

ゃん、俺はチャーシュー麺と焼き飯な」

「ちょ、長官（汗）」

デーニッツが焦る。

「デーニッツ。指揮官が何時も一人でメシを食べてたら乗組員の士気は落ちるで」

「……はい」

デーニッツはクスリと笑う。

「さぁて食べようか」

その後、夏ちゃんとデーニッツの仲は良好らしい。

「閣下。今お帰りですか？」

魔の書類業務を終わらして帰ろうとすると、福原が声をかけてきた。

「帰りやけど、どした？」

「私とお食事に行きませんか？」

「……平良少将の命令か？」

「そのような事はありません」

……。

「……真希ちゃんおるから無理やで」

「真希ちゃんなら南雲さんにお願いしてます」

……逃げる手段も封じたか。

「まぁええやろ。んで、何処に食いに行くんや？」

「ありがとうございます閣下」

俺と福原は繁華街に向かった。

んで何故か……。

「何でラブホ？」

「少し酔ったので」

なら公園とか選択肢あるやろ。

……別に野外プレイちゃうよ。

「酔ったと言っときながら何で服を脱ぐ？」

「暑いので」

……ぶん殴ろうかなもう。

「……ええ加減にせぇよ福原。俺は愛国獅子団なんかに入ってるお前と寝る気はない」

「閣下。私は「閣下を慕っておりますってか？大方、平良の指示やろ」……」

俺は出るために扉に向かう。

「お前ら愛国獅子団は日本に害をなすかもしれんで」

俺は扉を開けようとする。

「閣下ッ！！」

福原が俺の腕を掴む。

「違います。これは私の意思で此処に来たんです。お願いします閣下」

……はぁ。

「……一回だけやからな」

俺は溜め息を吐いて、福原と一緒にベッドに向かった。

翌日、俺が目を覚ますと福原は俺に膝枕をしていた。

「……将官学校の大和撫子に膝枕をしてもらうとは夢にも思わんかったわ」

「お世辞はいいですよ」

福原はフフと笑う。

「……本当は分かってたんです。愛国獅子団は日本にとって重みになる事を……」

「なら何で入ってるんや？」

「……英兄様……平良に私は兄のように慕っておりました。何時しか、平良のやる事は全て正しいと判断していました。でも……」

福原が俺を見つめる。

「閣下の部下になって、閣下と触れ合うようになって気づきました。私はなんて無駄な事をしているんだろうと……」

「福原……」

「いずみで構いません閣下。閣下、私は決断しました。愛国獅子団にはもう行きません」

「……ええのか？」

「これが私の覚悟です」

福原――いずみの目は覚悟を決めていた。

「……分かった。これからもよろしくないずみ」

「……はい」

俺達はそのまま朝メシを食べて海軍省に向かった。

TURN21（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ２２（前書き）

今回はオリジナルです。大勝利続きは因縁ともいうべきところで途切れます。

夏ちゃんの無双化してみるか……。

TURN22

いずみの事から数週間後、俺達はとある星域から帰ってきた。

しかし、それは勝利ではなく敗北やった。

――――海軍省会議室――――

会議室は重苦しい雰囲気が漂っていた。

高橋や五藤もオロオロしてるし。

「……長官…」

重苦しい雰囲気の中、平良が口を開く。

「……今回は誰かを処分するのですか？」

「……」

俺は何も言わん。

「……まさか処分は無しですか？あれだけの大敗をしたにも関わらずッ！！」

ダァンと平良が机を叩く。

「……平良。処分するのは俺が決める事や」

「しかしッ！？」

「安心しろ。既に帝には処分する奴を言ってきた」

「……誰じゃい？」

山本さんが口を開く。

「……今回の作戦を承認し、艦隊の配置を決めたのは俺や。よって、俺は海軍長官の職を辞する事を帝に報告した」

『ッ！？』

俺の言葉に皆が驚く。

「待ちなよ三笠ッ！！今回の大敗は私にあるんだッ！！私が辞めればいいだけの事じゃないかッ！？」

納得いかない桜花が声を荒げる。

それではそろそろ、何でこんな原因になったか語るか。

俺達日本軍が次に攻略を決めたのはハワイ星域に近いミッドウェー星域や。

此処を取ればハワイの喉元に刀を突きつけたのも同然やった。

アメリア軍もここ数週間は鳴りを潜めてたから攻略すんのも楽やと俺も思ったんや。

んで、攻略艦隊を決めた。

艦隊は俺、桜花、祀梨、リディア、福原、大原の六個艦隊。

大原の艦隊は陸軍の輸送船団の護衛を担当するから事実上五個艦隊やな。

前衛は桜花とリディア。

真ん中に祀梨。

後衛には俺と福原の艦隊で航行していた。

この時、桜花と祀梨の艦隊には最新の７４式正規空母が多数配備されていた。

んで、日本時間６月５日。

運命の戦闘が始まった。

ミッドウェー星域の守備艦隊は前衛の桜花とリディアの艦隊と交戦するが、ミッドウェー守備艦隊は壊滅した。

この時、桜花とリディアの艦隊の大半はレーダー機器を破壊されて修理に手間取っていた。

これがアメリアの作戦やった。

アメリアは別隊としてフリス・ハルゼー少将の空母艦隊（空母六隻）を潜ませておき、攻撃隊を発艦させていた。

桜花、リディア両艦隊のレーダー機器が直ったのは丁度ハルゼー艦隊から放った攻撃隊が飛来した時やった。

両艦隊は慌てて対空砲火を開くが、桜花の空母に目掛けて一斉に攻撃を開始する。

結果、空母赤城、加賀、蒼龍が大破後に雷撃処分をした。

一隻だけ残ったのは山口夏が座乗する空母飛龍のみ。

夏ちゃんは全艦隊に『我、航空戦ノ指揮ヲ取ル』と電文を放った後、攻撃隊を発艦させた。

攻撃隊は多数の航空機を失いながらも、空母ホーネット、ヨークタウンを撃沈。

さらに、急遽駆け付けた祀梨の艦隊からの攻撃隊も飛来して、空母ワスプ、レキシントンも沈めた。

しかし、空母飛龍が少数の敵攻撃隊の攻撃を受けて中破。
夏ちゃんも軽傷ではあるが傷を負ってしまった。
その後は、俺と福原も駆け付けて何とかミッドウェー星域を占領出来たが、空母三隻に二千人近い乗組員を失った。
やから、平良が大敗と言ってるのはそこや。
上空警戒機を出しとけば三空母は助かったと平良が言い、空母の指揮をした事がない桜花を前衛に出すべきではないと言った。
確かに桜花はまだ航空戦を指揮した事はなかったけど、いずれある事やから今のうちに経験を積ませとこうと思ってたのがどうやら裏目に出たんかな?
とりあえずは会議を終わらせて、改めて帝に辞表を提出するために皇居に向かうか。
「三笠ッ!!」
廊下を歩いていると、桜花が走ってきた。
おぉ胸が揺れてるわ。
「何や桜花?」
「あんた……本当に辞めるのかい?」
「まぁな。今回の作戦を承認したのは俺やし、桜花を前衛に置いた

のも俺や。なら、その責任は俺が取るしかないやん」

「馬鹿ァッ！！！」

「……へ？」

「今回の責任は全部私にあるんだよッ！！私が辞めればいいんだよッ！！」

「阿呆ぬかせッ！！お前は優秀な提督や。今回は俺がお前に航空戦に慣れさせようと空母を配置させたんや。責任は俺になる。心配すんなや、長官は辞めても提督でおるんや。後任は山本さんに頼んだやんしな」

「でもッ！！」

桜花はいつの間にか泣いていた。

「桜花……」

「……ハルさん。これは修羅場てやつですか？」

「はい、その通りですよ」

「……って帝ッ！？」

俺の後ろにいつの間にか帝と女官長のハルさんがいた。

「はい、帝です。イェイ♪」

「帝ッ！！はしたないですよッ！！」

「うぅ……ハルさんはロッテンマイヤーさんみたいです」

帝がなんかいじけてるし。

「帝、一体どうしたんですか？」

「あ、はい。山口、これは帝として命令です」

帝は真顔になる。

「今回の処分は桜花さんの艦隊が回復するまで桜花さんは山口の副官をやってもらいます。それが今回の処分です」

えっへんと帝がない胸をはる。

「……山口、そろそろ泣きますよ？」

……さーせん（汗）

「今は提督は少ないんですから辞めないで下さいよ山口。海軍長官は貴方しか出来ないんです。頼みますよ？」

……はぁ。

「……分かりました帝。引き続き、海軍長官の職をやらせて頂きます」

俺は辞表を破ってごみ箱に捨てる。

「では私は皇居に帰りますね。山口、日本を守って下さいね」

「はい。必ず」

俺と桜花は帝に敬礼をして、帝とハルさんを見送った。

「……結局、辞める事はなかったな……」

「……」

ん？何か黙っとるな。

「……よかったよ三笠ァッ！！」

桜花は泣きながら俺に抱き着いた。

あ……胸が、胸がぁ～。

そんなにぷにぷにしたら……。

「……やはり胸がいいんですか……」

祀梨が恨めしそうに見ていた。

スマン祀梨。

ともあれ、何とか海軍長官をやっていく事になった。

また平良がグチグチ言いそうやなぁ。

まぁほっとくか。

TURN22（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN23（前書き）

そろそろストックが無くなってきた……。

今は元のところを執筆してるけど、ランスの口調がよく分からん。

ゲームしてないし。

TURN23

――海軍省長官室――

「……外国人の提督を採用するか」

「外国人の提督？」

俺の言葉に期限付きの副官をしている桜花が問い掛ける。

「あぁ。マレーの虎を占領した時に、ジャカルタという現地人の提督を捕虜にしてるんや」

「成る程ね。今は、提督の人数が不足しているんだからやむを得ないんじゃないのか？」

そうやなぁ。

「……採用するか。桜花、ジャカルタを呼びに行ってくれへん？」

「あいよ」

桜花がジャカルタを呼びに行く。

さぁて、艦隊はどうしっかなぁ～と。

「山口長官。お呼びですか？」

ジャカルタが入ってくる。

「あぁいきなりやけどさ、提督にならへんか？」

「……どういう意味ですか？」

ジャカルタはあまり飲み込めてないな。

「言葉通りや。日本軍の提督にならへんかと言ってるんや。給料や待遇はエイリスより倍以上出すで」

ちなみにジャカルタの一ヶ月の給料は日本円やと十五万らしい。

どんだけ安いねん……。

「ほ、本当ですか？」

「あぁ。配備は今のところマレーの虎で、ベトナムから侵攻してくるエイリス艦隊を叩いてほしいねん。どうや？」

「……」

ジャカルタは少し考えてたけど、決断したようで俺に敬礼をした。

「山口長官。提督の任務、喜んでやらせて頂きますッ！！」

「おぅ。艦隊は六四式中型空母の翔鷹、瑞鷹、天鷹の三隻。巡洋艦は一個戦隊の四隻。駆逐艦は三個駆逐隊の十二隻や。おおいに活躍してな」

「お任せ下さいッ！！」

ジャカルタは再び敬礼をして部屋を出た。

「さて、俺はメシでも食うから桜花。後は頼むで」

「任しときなさいよ」

そして、廊下を歩いてると祀梨がゲームをしていた。

「何してんのや祀梨？」

「おぉ長官。いえただゲームをしてました」

「ＢＬのか？」

「……否定はしません」

否定はしないんやな。

「まぁ別にするなとは言わんけど程々にな」

「はいです。ところで一緒に御飯でも食べます？」

「なんや、ＢＬ関連買い過ぎて金が無いんか？」

「……否定できません」

いやそこは否定くらいしろや。

「……まぁ今回くらいなら奢ったるわ」

「わぁい。デレた」

「デレてないからな」

食堂へ行くのに祀梨も加わる。

「あ、長官～」

「ん？リディアやん。どうした？」

リディアが後ろから来た。

「実は、ボルシチを作ったのはいいんだけど量が多いから長官と食べようと思って」

……フラグか？

「別にええよ」

「お昼代が浮いたです」

「桜花さんも呼んであるから四人で食べようね」
その後、仲良く四人でボルシチを食べましたマル。

――――数週間後、マレーの虎星域――――

「おのれヤマグチめ……」
炎上する旗艦ヴィクトリーの艦橋で、新東洋艦隊提督に就任したヴィクトリー・ネルソンは悔しそうに呟く。
艦隊はマレーの虎を取り返すべく、ベトナムから出撃してきた。
ネルソンの艦隊はバリアも搭載しており砲撃戦は有利になるとネルソンは踏んでいた。
しかし、マレーの虎にはジャカルタの機動部隊がいた。
砲撃距離に近づくまでに三回も航空攻撃を受けて、艦隊は壊滅状態だった。
ネルソンの旗艦ヴィクトリーも対宙艦ミサイルを三発受けていたが、航行は可能だった。
「……この借りは必ず返すぞヤマグチッ！！」

それは山口を呪うかのような言い草だった。

――海軍省――

「山口。例の艦は出来たぞ」

都奈海が長官室に入ってきた。

「ほんまか都奈海？」

「あぁ。既に熟練航海に出ている。一週間もあれば二十隻は竣工するだろう」

「分かった。桜花、皆を呼んでくれ。今から作戦会議に入るでッ！！」

「分かったよッ！！」

桜花が走っていく。

「……青春だな……」

「……おばちゃんみたいな発言やで……」

バキィッ！！

「殴るぞ貴様……」

「……す……既に殴ってますんやけど……」

あ、頭をスパナで叩かれた……。

俺の机には一冊の作戦書があった。

それは『ハワイ攻略作戦』と書かれていた。

TURN23（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN24（前書き）

昨日は半年ぶりに日本橋へ。

そして大帝国の四コマとアンソロゲット。

帰りに天王寺のアニメイト行ったら大帝国のストラップあったし。

ストラップは帝、レーティア、セーラ、カテーリンの四人。

悩んだ末に買ったのはレーティア

何故かって？

あの四人の中で胸が大きそうやったのがレーティアやったから（キリ

と、しょうもない話しでした。

今日で二十歳。

酒が飲めるじぇいッ！！

TURN24

あれから十日後、俺達連合艦隊はハワイ星域にいた。

はい、ハワイ攻略やね。

ハワイはずっと明石大佐に調べてもらった。

ハワイには四個の空母艦隊がいて、どれも強力やったから苦労すると思ってたから都奈海に防空艦の開発をさせてた。

そしてやっと完成したのが防空駆逐艦秋月型や。

対空戦闘に特化してるから対艦戦闘はあまり不利やな。

「俺と祀梨の艦隊は敵空母艦隊と当たる。残りは他艦隊に当たれ」

『了解ッ！！』

艦隊が分かれていく。

ちなみに攻略艦隊は俺、祀梨、宇垣さん、田中、桜花、いずみ、大原、キャシー、ララーの九個艦隊や。

「敵機がまるでゴミのようだッ！！」

「戦闘中にムスカ化しないで下さい」

待て宇垣。

何でムスカを知っとるねん。

外では敵機が防空駆逐艦秋月型の対空砲火によって落とされていってる。

「攻撃隊はどうなってるんや？」

「今の時点で空母十二隻中五隻撃沈しています」

「……敵の護衛艦は？」

「はい。合わせて四十隻程です」

……。

「攻撃隊は全機攻撃目標を空母から護衛艦に変更や」

「……成る程。空母を捕獲ですか？」

ピンポーン。

「正解や。建造すんのもめんどいし、捕獲して使わせてもらおうや」

「分かりました」

攻撃隊は攻撃目標を空母から護衛艦に代えて護衛艦を攻撃していく。

「やっと護衛艦は壊滅したな……」

残っているのは空母七隻だけや。

「さぁて、捕獲するか」

護衛艦が壊滅したのでは空母も戦えないため、七隻の空母は白旗を掲げた。

「宇垣さん達はどうなってるんや？」

「大分手こずってるようです」

「祀梨は後方から攻撃隊を発進させて上空を警戒や」

『了解です』

「俺の艦隊は突っ込むで。全艦最大戦速やッ！！」

俺の艦隊は突入した。

――――アメリア軍第二艦隊旗艦モンタナ――――

「新たな敵艦隊が突入してきますッ！！」

「艦隊は分かるかしら？」

「日本軍のヤマグチ海軍長官の艦隊ですッ！！」

「く……」

部下の言葉に、アメリア軍太平洋艦隊所属第二艦隊提督のスカーレット・キリング中将は舌打ちをする。

「敵の主力まで来たわね……」

「御嬢様、まだ負けてはいません。これからです」

「……そうね、ありがとうコロネア」

スカーレットは傍らに控えている肌が黒いメイドのコロネアに礼を言う。

「全艦、照準をナガトに合わせなさいッ！！」

「準備完了ッ！！」

「ファイヤァーーーッ！！」

アメリア艦隊から一斉にビーム砲が発射された。

「ビーム弾、長門に直撃しますッ！！」

オペレーターが叫ぶ。

「うん、やばいな」

「何で冷静なんですか……」

宇垣が溜め息をはく。

「バーリアッ！！」

真希ちゃんが叫ぶと、長門の周りに緑色のシールドが出来た。

ビーム弾は次々とシールドに直撃するが、破られる事はなかった。

「何ですってッ！？」

スカーレットは信じられなかった。

「……日本軍は新型のバリア艦を配備してたのね……」

スカーレットは悔しそうに呟く。

「真希ちゃん偉いで。後でアイスあげようか」

「わぁ～い♪」

何というチートやろか……。

「攻撃隊は敵旗艦のエンジンを叩けッ！！全艦主砲発射用意ッ！！目標、敵旗艦を取り巻く護衛艦やッ！！」

「照準完了ッ！！」

「全艦撃ち方始めェッ！！」

ドシュウゥゥーーンッ！！！

全艦からお返しとばかりに、一斉に主砲を発射した。

プラズマショックカノンから発射されたビーム弾は次々と装甲を貫いて、暗い宇宙に多数の花火が上がった。

「護衛艦の大半を撃沈ッ！！」

「ん」

後は攻撃隊が敵旗艦のエンジンを叩くだけやな。

ズガァァンッ！！

「攻撃隊が敵旗艦のエンジンを破壊しましたッ！！」

「田中、リディアッ！！突撃やッ！！」

『了解ッ！！』

両艦隊は最大戦速で敵旗艦の周りに到着して、陸戦隊を乗せた駆逐艦を敵旗艦に接舷させる。

『お姉ちゃんッ！！早く脱出してッ！！』

「キャロル、貴女は早くこの星域から脱出しなさい。若草会の情報を日本軍に渡しては駄目よ」

炎上するモンタナの艦橋でスカーレットはこっそりと戦場についてきた妹のキャロル・キリングに言う。

『でも……』

「私は大丈夫よキャロル。早く行きなさい」

『……分かった……お姉ちゃん、生きて帰ってきてね』

「えぇ……」

スカーレットは通信を切る。

「……出て来なさい……」

スカーレットの言葉に陸戦隊員が出て来る。

「……よろしいですか？」

「えぇ。コロネアも武器を収めなさい」

「は……」

暗器を使おうとしていたコロネアに言う。

「捕虜の待遇はジュネーブ条約で決まっていますのでご安心を」

ハワイ星域は日本軍に占領された。

ハワイ星域を脱出した艦艇はキャロル・キリングの旗艦サウスダコタを含めて僅か十数隻程だった。

TURN24（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN25（前書き）

今回はスカーレットの提督入りですが、オリジナルです。

TURN25

――1週間後、迎賓館――

「……日本軍は何も言ってきませんね」

「えぇ。ソ連のように凌辱の一つや二つはあると思っていたのに……」

スカーレットとコロネアは迎賓館で毎日を過ごしていた。

カチャッ

ドアが開くと、真希ちゃんが現れた。

「此処まで来たらみーくんにも見つからないね」

「貴女は誰かしら?」

「ふぇ?」

真希ちゃんが振り返ると、スカーレットとコロネアがいた。

「あ、捕虜になった人ですか?」

「えぇそうよ」

「初めまして。私は山口真希です」

「御挨拶ありがとうね真希ちゃん。私はスカーレット・キリングよ」

「スカーレットお姉ちゃん？」

「……キャロルみたいな子ね」

「ふぇ？」

「何でもないわ真希ちゃん。真希ちゃんは何をしてたの？」

「あのね、今ねみーくんとかくれんぼしてたんだよ」

「みーくん？猫かな？」

「（御嬢様、それはヤマトネタです）」

コロネアが心の中でツッコミを入れる。

「みーくんは山口三笠だよ」

「ッ！？……日本の海軍長官が遊んでいるのかしら？」

「みーくんは、私のママとお父さんが寝ちゃったから私と暮らしてるの」

「……寝ちゃった？」

「うん。何かずぅっと寝ちゃってるの」

真希ちゃんの言葉にスカーレットとコロネアは何も言えなかった。

つまり、真希ちゃんの親は死んでいるのだ。

「でもね、淋しくはないよ。お父さんとママには会えないけど、みーくんや桜花お姉ちゃん達がいるもん」

「……そう」

スカーレットは真希ちゃんに微笑んだ。

カチャ

「お、真希ちゃんは此処にいたんか」

……何で真希ちゃんは此処におんの？

まぁ俺達から逃げるのにたまたま入ってきたんやろな。

「あぅ～。見つかっちゃったよ」

「二人に遊んでもらったんか？」

「お話ししてたの」

「そうか。すまんかったなキリング提督」

「いえ、楽しい時間を過ごせましたよ」

「ほんじゃぁな」

「あの……」

「何や？」

部屋を出ようとすると、キリングに呼び止められた。

「私達を提督に誘わないのですか？」

「ん？嫌やろ？」

「それはそうです」

即答するなよ……。

「強制にはせぇへんよ。したいんやったら言ったらええし、それとも若草会の事を話してくれるんか？」

「「ッ！？」」

あ、驚いた顔してる。

「……何故それを……」

「ウチには宇宙最強でチートの諜報員がいるからな」

「……若草会をどうする気ですか？」

「解体やな」

「……」

俺の言葉にキリングは何も言わない。

「アメリアを陰から操る四財閥の集まりが若草会。金儲けのために、日本に喧嘩売ったのは失敗やったやろな」

「……そうね。私も一時、若草会にいたわ」

自白か？

「でも、どうも馴染めなかったわ。私はアメリアを守ろうとしていたけど、彼女達は金儲けのため。それが嫌になって、妹のキャロルに後を頼んだわ」

……。

「ヤマグチ。私を提督にしてもらえないかしら？」

「御嬢様ッ！？」

傍らのメイドさんが驚いてる。

「今のアメリアは一度滅ぶべきよ。コロネア、私にもう一度ついて来てくれるかしら？」

「は、はいッ！！」

……何かトントンと話しが纏まってるな。

「如何かしらヤマグチ？」

「……まぁええよ。戦力が増えるのはええ事やし、一個艦隊を預けるわ」

二人は俺に敬礼をした。

スカーレット・キリングが日本軍の提督になりましたマル。

「や、山口長官～。大変です～」

五藤が胸を揺らしながら走ってきた。

……ごっちゃんです（＾人＾）

「どうしたんや五藤？」

「は、はい。モンゴル星域でクーデターが発生しました。クーデター側はたちまちモンゴル星域を掌握して、あっという間に北京、南

京モン、ア・バオワ重慶を占領しました」

……マジ？

TURN25（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN26（前書き）

今回は項天天無双です。

天天の機動兵器はゲームのあれではなく、あの人にしました。

ララァ、私を導いてくれ

↑ネタばれ（核爆）

TURN26

「……何者だこの男は……」

平良の呟きが会議室に響く。

会議室の映像にはモンゴル――から改めた元の王（ハーン）が何やら演説をしている。

『この世の女は全て俺様の物だッ！！』

……まぁこういう演説やね。

「……山口長官。私に討伐隊の先鋒をやらせてほしいネ」

何か燃えてる項が言う。

「項、何かコイツの事を知ってるんか？」

「知らないネ。……でもコイツは南京モンで私の妹の処女を無理矢理散らした奴ヨ」

ちなみに、項は必勝のハチマキをしている。

「妹はずぅっと寝込んでるネ。コイツは許すまじネッ！！」

「……閣下。如何なさいますか？」

いずみが俺に聞く。

「……北京再攻略には俺、祀梨、桜花、田中、いずみ、ラスシャラ、リディア、項の艦隊で行う。北京再攻略後は、そのまま元の星域に乗り込むわ」

「電光石火のように占領すると？」

「まぁそうやな。戦艦が多い平良や山本さんには我慢してもらうしかないわ」

「確かにのぅ。早くあの男を始末しないと女性が危ないからのぅ」

山本さんが言う。

「では会議は之で解散や。出撃は一時間後の１１００や。皆、頼むで」

『おうッ！！』

――――北京星域――――

「敵艦隊をレーダーに捕捉ッ！！」

オペレーターが言う。

「敵艦隊の数は？」

「は、凡そ五十隻。ですが、大半は小型艦のようです」

「……重雷装に特化した艦隊か……」

「恐らくはそうでしょう」

「今回は攻撃隊の発進は無しや。たまには休ませへんとあかんしな。全艦砲雷撃戦用意やッ！！それと、項を呼べ」

『何ネ？』

通信に項が出る。

「全艦隊の一斉射撃後に、ＭＳ隊は全機発進や。徹底的に叩けよ」

『了解ネ。私を怒らせた事を後悔するといいネ』

……むっちゃ燃えてんなぁ。

項は、軍の給料を家族に送金してるらしいしな。

まぁそのせいで、給料日前は金欠になってよく家にご飯を食べに来るけどな。

――項艦隊旗艦伊吹――

「全機発進ネッ！！」

項の声とともに、埋め込み式に電磁カタパルトから項が乗る人型機動兵器が発進する。

項の艦隊は人型機動兵器の艦隊のため、伊吹型強襲揚陸艦八隻、巡洋艦八隻、駆逐艦十五隻の艦隊となっている。

ちなみに人型機動兵器は司令官の項は赤ザ〇（シ〇ア）で他は〇クである。

これを推し進めたのは勿論、三笠と都奈海であった。

『人型機動兵器は男のロマンやッ！！』

人型機動兵器を開発中の二人の合言葉である。

「全機攻撃開始ネッ！！」

項の言葉に部下達は１２７ミリビームライフル銃を持って、元艦隊の対空砲火にびくともせずに次々と、主砲や艦橋にビーム弾を叩き込む。

「ハアァァッ！！」

項は敵旗艦らしき巡洋艦の艦橋と主砲にビーム弾を叩き込む。
敵旗艦は瞬く間に沈黙をした。
「まだまだァァァッ！！」
項はライフル銃を後ろに装着して、接近戦用のビームソードを出す。
（ビームソードはビームサーベルと一緒だが、形状は日本刀）
「これで終わりネッ！！」
項はビームソードで巡洋艦を真っ二つにした。
「まだネッ！！」
項はそのまま近くにいた駆逐艦をも叩く。
駆逐艦は艦橋からやられて漂流を始めた。
「貴様らの地獄はこれからネッ！！」
戦場に項の叫び声が響いた。
「……今日の戦場は項無双やな……」

「……ですね」

俺の言葉に宇垣は苦笑するしかなかった。

「長官。敵艦隊が降伏するとの電文が……」

「項に通信を入れて」

「了解です」

程なくして項が出た。

『長官何ネ？』

「敵艦隊は降伏するようや。項の艦隊は直ちに戦闘を中止や」

『そんなの嫌ネッ！！私はコイツらを皆殺しにするまで止めないネッ！！』

……完全にキレてるな。

「落ち着けや項ッ！！」

『ッ！？』

俺の怒号に項は萎縮する。

「お前は俺の部下や。勝手の行動は許さんで」

『……済まないネ……』

「気持ちは分かるが、早まるなよ項？一本間違えばお前もランス・ハーンとやらに処女をあげなあかんかもしれんで」

『……分かったネ……』

「ん、分かればええんや。さて、北京を再攻略しようか。山下、突撃や」

『フ、言われるまでもない』

山下がうっすらと笑って北京星域に突撃する。

日本皇国は元に宣戦布告をして、占領されていた北京を再占領した。

TURN26（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ２７（前書き）

ランス編、新提督加入と、最後はアドルフ救助です。

ランスの旗艦は適当です。

TURN27

北京再攻略から三日後、俺達は元星域に到達した。

艦隊は北京再攻略時と一緒やけど、新たに最新の一個艦隊が応援に来てくれた。

『山口長官。偵察機からの報告です。敵艦隊は我が艦隊より前方百二十宇宙キロです』

空母を主力とした第二機動艦隊提督の山口夏少将が報告してくる。

はい、桜花の部下やった夏ちゃんやね。

ミッドウェー会戦での空母指揮を見て、第二機動艦隊提督に昇格させた。

ちなみに第一機動艦隊は祀梨の艦隊やな。

『長官、私と祀梨さんの機動艦隊で敵小型艦の動きを封じ込めようと思うんですが……』

この通り、頭もよく切れる。

「ん、それで行くか。祀梨、夏ちゃんは攻撃隊を編成して攻撃隊は

発艦させるんや。攻撃隊が発艦後は後方で待機や」

『了解ッ！！』

両艦隊は攻撃隊を発艦させた後、後方へ退避した。

「よし、全艦砲雷撃戦用意や」

「全艦砲雷撃戦用意ッ！！」

俺の命令を宇垣が復唱する。

全艦艇が自艦の主砲を空母艦載機と交戦している元艦隊に照準する。

『一番砲、用意良しッ！！』

『二番砲、用意良しッ！！』

「長官、攻撃隊が帰還していきます」

攻撃を終了した攻撃隊が次々と、俺達の上を通過していく。

「全攻撃隊が上空を通過しました」

「全艦撃ち方始めェーーーッ！！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

戦艦、巡洋艦、駆逐艦から一斉にプラズマショックカノンを発射した。

ビーム弾は炎上して、慌てていた元艦隊の駆逐艦に次々と命中して爆沈していく。

「敵艦隊の駆逐艦の九割を撃沈破しましたッ！！」

オペレーターが報告する。

「ッ！？超大型戦艦が接近してきますッ！！」

メインパネルに、長門より三倍程巨大な戦艦がいた。

「……あれがランス・ハーンの旗艦『ハーレム』か……ふざけてんのか？」

「……」

俺の言葉に宇垣は何も言わない。

「全艦敵旗艦に照準やッ！！徹底的に撃ちまくれェッ！！」

艦隊は直ぐさま照準を敵旗艦に合わして、砲撃を開始する。

「……装甲が硬いみたいやな……」

「ですね……」

「しゃあないな。項」

俺は項を呼び出す。

『何ネ長官?』

「MS隊発進や。MS隊は敵旗艦のエンジンを叩いて動きを止めるんや」

『分かったネ。本当は抹殺したいけど我慢するネ』

「ん、頼むわ。それと、山下」

項との通信を切って山下に繋ぐ。

『何だ?』

「敵旗艦の足を止めたら白兵戦をして乗り込め。ランス・ハーンを発見したら麻酔弾を撃ち込んで捕えるんや。最悪の場合、射殺しても構わんわ」

『了解した』

……何か山下燃えてたな。

『済まない山口。ランス・ハーンを取り逃がした』

2時間後に敵旗艦を占拠した山下が報告してくる。

『何か、捕える寸前に何もない所から割れ目が現れて、その中に飛び込んでしまった。今、捜索しているが見つかっていない』

「……そうか、分かった」

俺は通信を切る。

「ランス・ハーンが何処行ったか分かるか？コマイ・マラル大佐？」

無傷で捕獲していた元の首脳陣の一人やね。

「……分からない。ハーンはたまに訳の分からない事を言ってたから……」

何か引っ掛かるけどまぁええや。

「ま、これで元は滅んだし一件落着やな」

そう思ってたよ……。

ランス・ハーンに捕まってた女性はランスの虜――所謂ランス中毒になっていた。

しかも、撤退出来ずに捕まったウチらの女性軍人もいた。

……はぁ。

「宇垣、イネスさん呼んで」

「長官。参りましたが何か用ですか？」

入ってきたのは日本皇国医務局局長の新井イネス少将やった。

ナデシコのイネスさんと思ってくれたらええよ。

まぁナデシコで分からんかったらエヴァの赤木リツコさんと思ってな。

……何かあの二人、何となく似てるのは気のせい……やんな？

「呼んできたんはランス中毒者の事や」

「……成る程」

「彼女達には悪いけど、彼女達の記憶を弄ってランスの所にいなかったようにしてくれへん？」

今やランスは第一級指名手配者やしな。ちなみにコマイ・マラルはランスを追いたいらしく日本軍の提督になっている。

「分かりました。彼女達には気の毒ですが……」

「……スマン……」

「いえ、長官が悪いのでありませんよ」

イネスはそう言って、俺に敬礼をしてから部屋を出た。

「……長官」

「ん？何やデーニッツ？」

書類処理をしていると、何か顔を青くしたデーニッツが入ってきた。

「……長官、無茶は承知です。お願いしますッ！！私はドクツ本星に戻らして下さいッ！！」

「……ドクツの戦況が不利やからか？」

「……」

俺の指摘にデーニッツは無言で頷く。

「……高橋、木梨大佐を呼んでくれや」

「は、はい」

5分後、第一潜水艦隊提督の木梨樹大佐が部屋に入ってきた。

「失礼します長官」

プルンと木梨の胸が揺れる。

……ごっちゃんですm（＿＿）m

「……木梨大佐、今から話すのは超機密や。参謀長の宇垣にも話すなよ？」

とりあえずは念を入れとく。

「木梨の伊号潜水艦隊十八隻はデーニッツ少将の旗艦ファルケナーゼをアラビア星域まで護衛。護衛後は、マダラスカル星域で暴れて敵の目を逸らすんや」

「は。しかし、上手くいくんでしょうか？」

「マダラスカル星域にはオフランスの脱出艦隊がいる。こいつらを叩けばオフランスは同盟国のエイリスに救援を求めるはずや……多分」

「多分て……」

「とにかくや。やばかったら退避しても構わんわ。ファルケナーゼを敵の目から逸らしたらええねん」

「……分かりました。やってみましょう」

「よし、出撃は一時間後や。急いで準備を頼むで」

「了解ッ！！」

木梨が慌てて部屋を出る。

「長官……」

「これでええやろデーニッツ？」

「は、はいッ！！」

デーニッツが喜ぶ。

「で、俺も行くからな」

「えええッ！！」

「一週間分の書類は処理してるから大丈夫や（キリ」

「は、はぁ……」

そして、十九隻の潜水艦は出撃した。

TURN27（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN28（前書き）

アドルフ救助です。

TURN28

密かに日本を出撃した日独潜水艦隊は四日後にアラビア星域までに到達した。

『では長官、デーニッツ少将。お気をつけて』

「あぁ、護衛ご苦労や木梨」

木梨の第一潜水艦隊とはアラビア星域で分かれた。

「さぁて頑張るか」

「はい」

――二日後、パリ星域――

「此処まで来たな」

「はい、後一歩です」

ちなみにファルケナーゼには俺とデーニッツしかおらん。

自動航行も出来るようになっているから、今回はあえて乗組員を乗らせなかった。

コォーンッ！！

コォーンッ！！

ちぃ、駆逐艦の亜空間ソナーやな。

「無音航行や」

「はい」

十分後、駆逐艦は通り過ぎた。

何か一時間は経った感じするけどな。

「……はぁ」

駆逐艦がいなくなった事に軽い溜め息をはく。

コォーンッ！！

コォーンッ！！

ゲ、また来たし。

それから計六回も駆逐艦が来たけど、ファルケナーゼには気がつかなった。

「……長官、先程はすみません……／／／」

「あぁええよ。気にするな」

「……／／／」

デーニッツが顔を真っ赤にしてるのは六回目の駆逐艦が近づいた時や。

きゅるる～とデーニッツの腹が可愛く鳴いたんやな。

よーするに腹減ったですはい。

流石に空腹音は自分ではどうしようもないから、デーニッツはアタフタとしてた。

んで、俺はデーニッツを膝の上に乗せて、両手で腹を押さえる。

確か手で腹を押さえると空腹感が紛れると、何か昔に聞いたからな。

そして、六隻目の駆逐艦が通り過ぎるまでデーニッツと密着してた。

乗せてる時、デーニッツの頭が丁度鼻の辺りにあったからデーニッツの髪はシャンプーみたいないい匂いでしたマル。

――ベルリン星域――

ファルケナーゼはベルリン星域に到達して、ベルリンの軍港に入港した。

――総統官邸――

「総統ッ！！」

二人でアドルフの部屋に乗り込むと、ドクツ第三帝国総統のアドルフ・レーティアはポケーッとしていた。

「デーニッツ……貴女日本から帰ってきたの……」

アドルフの傍らにいた宣伝相のグレシア・ゲッベルスがデーニッツの帰還に驚く。

「詳しい説明はファルケナーゼに乗った後やッ！！失礼すんでアドルフ総統ッ！！」

俺はベッドに横たわっていたアドルフを……まぁ所謂お姫様だっこやな。

「ちょ、ちょっと貴方何を……」

「ええからはよこいやッ！！」

俺はゲッベルスの叫び声を無視して廊下に出る。

すると、食事の用意を持ってきた女性提督がいた。

「き、貴様ッ！？総統に何をしているッ！？」

「トリエステッ！？」

部屋から出たデーニッツが驚く。

「知り合いか？」

「は、はい。彼女はトリエステ・シュテティン。ドクツ将官学校の同期生です」

「ん？デーニッツではないか？お前は日本に出向に行ってたはずでは……」

「とりあえず、事情は後や。お前も来いッ！！」

「え？ちょっと待てッ！！」

そして、俺とデーニッツはアドルフ、ゲッベルス、シュテティンをファルケナーゼに乗艦させてベルリン星域を脱出した。

「……そうか。デーニッツが私を助けてくれたのか……」

「はい」

何かもうやる気がないアドルフがそう言う。

「レーティアは一人でドクツを支えてきたのよ……」

ゲッベルスが小声で俺に教えてくれた。

成る程な……。

「さて、俺は発令所にいるから後は頼むわ」

「分かりました」

「ん？」

発令所におると、ゲッベルスが入ってきた。

「どうしたんや？」

「まだ貴方に御礼を言ってなかったわ。レーティアを、私達を助けてくれてありがとう」

「気にすんな。元はデーニッツが助けてほしいて言うたからな。デーニッツに感謝やで」

「それでも貴方が許可してくれなかったら私達は死んでたわ」

「……そうやな。有り難く受け取っとくわ」

「フフ、ありがとう」

ゲッベルスはそう笑って発令所を出た。

「ま、これで救出は成功したし良しとするか」

一週間後に日本星域に帰還した。

「これが溜めてた仕事です」

宇垣がにこやかに大量の書類を机に置く。

「……」

流石に高橋と五藤の三人では無理やと……。

「して下さい」

……ゲッベルスを秘書にするか。

多分、書類処理は得意そうやしな。

アドルフは今だに復活してへんから無理やけど。

てかアドルフも復活したら秘書にして書類処理やらそ。

書類処理をしながら俺はそう思った。

TURN28（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN29（前書き）

調子乗って連続投稿（、・ω・´）
今回は顔文字が多いですが気にしないで下さい。

TURN29

――海軍省――

「え？富嶽が日本に近づいてるやて？」

「そうなんですよ」

俺の言葉に五藤が頷く。

「何だその富嶽て？」

「中島飛行機の重爆撃機か？」

海軍長官の書類処理は多いので、皆に頼んで日替わりで書類処理をしてくれてる。

今日はキャシーとラスシャラが当番や。

てかラスシャラよ。

それは言ってはならんよ。

まぁ気持ちは分かるけどな。

「てか、キャシーは開戦前にマイクロネシアにおったよな？それやったら知ってるはずやけど……」

「開戦五日前に赴任してきたんだ」

「あ、そら分からんわな」

しゃあないな、説明するか。

「富嶽は人類の活動圏に五体の生存が確認されている惑星規模の巨大生物の一つや。ちなみに大怪獣て言われてる。富嶽は別名『星喰らい』と呼ばれてるねんな。富嶽はシベリア―日本―マイクロネシア間を定期的に回遊してるねん。富嶽は惑星に接近して、自身の重力に引かれてきた大気や破片を食べてるねん」

「へぇ～。じゃあ日本は富嶽をどうやって撃退しているんだ？」

ラスシャラが聞く。

「日本は富嶽を撃退するのに『神風の儀式』を帝が務めて富嶽を撃退するねん。まぁ見たら分かるで」

そして二日後、富嶽は日本星域に接近してきた。

――旗艦長門展望室――

「帝、ようこそ長門」

「はい。今日は頑張りますので」

エッヘンと帝が胸を張る。

帝は白と菊の紋章が刺繍された服に着替えてる。

「ではやるか帝」

もふもふの……神様である柴神様が言う。

「はい」

帝は大きめの鈴を手に取り、舞い踊る。

「我が身を糧に……今こそ吹かん宇宙―ソラ―の風」

「来たれ。厄災を討ち払う力よ。日本を守りし神風よ」

辺りに鈴の音色が鳴り響く。

『吹けよ神風ッ!!』

突然、富嶽の目の前に大きな渦が現れて、宇宙気流が起こる。

富嶽はゆっくりと日本星域を離れていった。

「……ふぅ。やりましたよ山口♪」

儀式を終えた帝が嬉しそうに言う。

「では帝。皇居に戻りますよ」

「はぁ～い（´・ω・`）」

ハルさんの言葉に帝は少し残念そうに言って、長門から降りた。

「で、間近で見た感想は？」

「……凄いとしか言えないな……」

「……そうだな……」

キャシーとラスシャラは唖然としている。

「まぁこの儀式は一般人は中々見れないからな」

「そうなのか？」

「そうそう」

「帰ってきたか」

海軍省に帰ってくると、都奈海がいた。

「どしたんや？」

「極寒対策艦と砂塵対策艦が完成したからその報告に来た」

「完成したんか？」

「当たり前だ。私を誰だと思っている？」

「ロリ（、・ω・´）」

バキィッ！！

「……身体を改造されたいのか？」

「……サーセン」

だからスパナは痛いっての。

「そういやハワイ会戦で宇垣長官が重傷を負って負傷したな」

「何故か私のところに担ぎ込まれたから仕方なしに改造をした」

そんな堂々と言ってええんやろか……。

「まぁ宇垣長官が怪我をしたら都奈海のラボに送るわ（、・ω・´）」

「フフフ……」

「フフフ……」

「……こ、怖いにゃ……」

俺と都奈海の笑い声に久重が怯えていた。

「あ、久重だ～」

「にゃにゃッ!?Σ（゜Д゜）」

祀梨が入ってきた。

「久重～」

「ごろにゃぁ～ん♪」

あ、久重と祀梨が遊び始めた。

「長官。書類は終わりましたか？」

あ、宇垣が来た。

「おぅ、そこに置いとるわ。お前来いや宇垣」

「はい？」

「ほぅ～れ久重。猫じゃらしやで～」

「にゃにゃッ！！」

久重とじゃれあう。

「……ま、たまにはいいですか」

宇垣も笑い、久重で遊んだ。

「……僕は疲れましたけどね」

お前が猫やからやさ久重。

「これ持って帰っていいですか？」

「宇垣参謀長ッ！？」

宇垣が嬉しそうに久重を抱いている。

「駄目だ」

「（´・ω・`）」

意外と宇垣の落ち込んだ表情は可愛かったと追記しておくか。

TURN29（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ３０（前書き）

今回は大帝国の四コマと実写版ヤマトを少し取り入れています。

ヤマトに関してのヒントはドメルです。

TURN30

――旗艦長門――

「と、いうわけでベトナムを占領するけどいいかな？」

『……』

「誰かそこで『いいともーーーッ！！』て叫べやてめぇらァーーーッ！！！」

『（そこはボケるところだったのかッ！？）』

たく、お前ら『いいとも』くらい見とけよ。

「閣下。ベトナムの一部の星域に豪雨が降っていますが……」

いずみが言う。

てか宇宙に豪雨は無理やろと思うけどな。

『ゲームでもそうやから我慢してｂｙ作者』

「この豪雨にいる艦隊には田中、リディア、リンファで頼むわ」

「ちょっと待てよ長官ッ！！」

「何や？田中？」

「聞けばこの豪雨は艦隊の攻撃を半減するらしいじゃねぇかッ！！」

「……別に問題ないやろ」

「何でだよッ！！」

「お前、考えてみろよ。攻撃が半減するなら敵を倒すまでに魚雷を二倍ぶっ放せるということやで」

「ッ！？」

『……』

何か田中だけ驚いてるな。

「そうかッ！？そいつはキモチイイぜッ！！見てろよーーーッ！！」

田中が燃える。

クックック、計画通りや。

「……意外と腹黒いですね」

「田中への扱いが上手くなったと言ってくれや」

宇垣に突っ込まれた。

「では作戦はこれで終いや。各自の奮闘を祈るッ！！」

俺が皆に敬礼をすると、皆も俺に敬礼をした。

――五日後、ベトナム星域――

「長官、右舷四十度、距離約百宇宙キロに豪雨を纏う敵艦隊と我が艦隊の前方約百宇宙キロにベトナム星域の主力艦隊を発見しました」

宇垣が報告する。

「よし、田中、リディア、リンファは豪雨の艦隊を攻撃や。残りは敵主力艦隊と当たるッ！！」

『了解ッ！！』

田中達三個艦隊は豪雨に向かう。

「さて、やるか」

敵主力艦隊には俺、祀梨、桜花、山本さん、平良、いずみ、ラスシャラが向かう。

「祀梨から攻撃隊を発艦させますか？」

「ん。祀梨、第一次攻撃隊を編成して敵主力艦隊を叩け」

『一回だけですか？』

「あぁ、後は砲撃戦でやるわ」

『了解です～』

祀梨との通信を切る。

そして祀梨と俺の艦隊から攻撃隊が発艦して、編隊を組んで敵主力艦隊に向かった。

――――ベトナム守備艦隊旗艦マネー号――――

「くそォッ！！何故だ……何故東洋の猿ごときに我が艦隊は負けるのだッ！！」

頭がツルピカのベトナム総督が悔しそうに叫ぶ。

「駆逐艦エンカウンター沈没ッ！！巡洋艦リバプール大破ッ！！戦闘不能ッ！！」

攻撃隊の攻撃後に始まった砲撃戦でベトナム守備艦隊は徐々に力を失っていく。

「総督ッ！！このままではッ！？」

「ウグッ……」

そして、ベトナム総督は決断した。

「残存艦は敵旗艦のレーダーを破壊しろッ！！最大戦速ッ！！」

円盤型の指揮艦は最大戦速で長門に突っ込んだ。

――――旗艦長門――――

「そういや宇垣」

「はい？」

「日本に帰ったら艦低の第三艦橋を撤去しよか」

艦低の第三艦橋は主に探索用のレーダーがあり、また第一艦橋が使用不能の場合は第三艦橋で指揮を取る事になっている。

「どうしてですか？」

「探索用のレーダーは既にレーダー探索艦が就役してるし、意味ないと思うねん。それ第三艦橋は突き出てるから砲撃戦で狙われやすいと思うしな」

「分かりました。ベトナム占領後に、平賀所長に言っておきます」

ズガアァァァーンッ！！

『レーダー機器損傷ッ！！』

「ち、主砲は撃てるんか？」

「主砲は問題ありません」

オペレーターが報告する。

ガキィィーンッ！！

突然の揺れにこけた。

「あてて……何が起こったんやッ！！」

「だ、第三艦橋に敵旗艦がくっついていますッ！！」

映像には第三艦橋の下に敵旗艦がくっついている。（ドメルと同じ状況）

……絶対に嫌な予感がするな。

「第三艦橋全員退避ッ！！」

「駄目ですッ！！敵旗艦と当たった衝撃で、扉が壊れて脱出不能のようですッ！！さらに第三艦橋の酸素が洩れていますッ！！」

「さらに敵旗艦から急激なエネルギー率が上昇していますッ！！」

宇垣とオペレーターが報告する。

ちぃッ！！

敵旗艦は長門ごと自爆するつもりかよッ！！

何かないんか……何か……。

あかん。

一個しか浮かばへん。

……糞ォッ！！やるしかないんかよッ！！

「……上空に味方機はいるか？」

「え？は、はい。柴神様の零戦がいます」

「……柴神様……」

俺は柴神様に通信を繋げる。

『どうした山口？』

「ミサイルは残っていますか？」

『あるにはあるが……お主まさかッ！？』

気づいたか。

「ミサイルで第三艦橋の通路を破壊して下さい」

『ッ！？』

流石に艦橋内が静まり返った。

「命令です。第三艦橋の通路を破壊して下さい」

『……私には出来ぬ……』

「柴神様、貴方しか上空にいないんです。撃って下さい」

『……しかし……』

「……撃って下さい……」

『……』

「撃てェェェーーーッ！！！柴神ィィィーーーッ！！！」

『……済まぬッ！！』

俺の怒号に柴神様も遂に決断して、ミサイルを第三艦橋通路にロックオンをしてミサイルを発射した。

ズガァァァーーンッ！！

ミサイルは迷わず通路に命中した。

「今やッ！！機関最大戦速やッ！！突っ走れェェェーーーッ！！」

第三艦橋が離れると同時に長門は急発進をする。

現場宙域には、切り離された第三艦橋と敵旗艦が残された。

そして、長門の緊急発進から一分後、敵旗艦は爆発。

第三艦橋を巻き込んだ。

「……」

俺は爆発する第三艦橋に敬礼をした。

「……済まない……」

……艦隊はどんよりとした空気をしながらベトナム星域を占領した。

TURN30（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN31（前書き）

本日は終戦記念日です。

遠い過去の歴史ではありません。

何のために日本が戦ったのかを今のチャラチャラしてる若者達は知るべきだと自分は思います。

菅内閣は靖国神社に行くべきです。

まぁ売国者の民主党は行かないと思いますが……。

とにかく、英霊の皆様は安らかにお眠り下さい。

TURN31

――三日後、日本星域――

「とりあえず、第三艦橋のところは撤去しておいた」

「ん。あんがとな都奈海」

長門は日本に帰還すると同時にドックに入って改装を受けていた。

「長門のレーダー機器は旧式だったから新型のレーダー機器に取り替える。第三艦橋が無くても探索は可能だ」

「そうか」

これで一先ずは安心やな。

「……山口……」

「……柴神様……」

ドックに柴神様が尋ねてきた。

「先日は済まなかった」

「そんな事はありませんよ柴神様。ただ、あの時は貴方しかいなくなったんです。一機でもいなかったら長門は爆沈して、今自分らはいませんでしたよ」

「うむ。しかし、あの五人には可哀相な事をしてしまった」

「はい。これを教訓にして、艦低には建造物を設置しない事にしています。また、戦死した五人は二階級特進して、遺族には充分な弔慰金を支払います」

「そうか。今回の事は私が全て預かる。君達にはお咎めはない」

「は…分かりました」

「うむ」

柴神様はそう言うと、ドックを出た。

「……柴神様も辛いだろうな。自ら見守ってきた人間を殺さねばならなかったのだからな……」

「……」

都奈海の言葉に俺は何も言えなかった。

――――海軍省――――

「た、大変です長官ッ！！」

宇垣が慌てて入ってきた。

「何や？」

「は、はい。アメリア軍がラバウル星域のガタルカナル星を占領しましたッ！！」

……何やろか。

この奇跡みたいな展開は？

「……アメリア軍の数は？」

「戦艦二、空母三、巡洋艦八、駆逐艦三十隻の艦隊です」

「まぁまぁの戦力やな。ラバウルの駐留艦隊は？」

「三川姫少将の第十二艦隊と、神晴海大佐の第十四艦隊です。それに、山口夏少将の第二機動艦隊です」

三個艦隊か……。

「その艦隊で出撃や。三個艦隊司令官は三川にやらせろ。俺は山下に兵力の応援を求めるわ」

「分かりました」

宇垣が部屋を出ると、俺は山下に電話をする。

『はい。山下だが……』

「あ、海軍長官の山口や」

『何だ？』

「相変わらずぶっきらぼうやな」

『悪かったな。そうだ、貴様。陸軍用の戦艦を作りたいから建造費を回してくれないか？』

……あ？

「お前、シバくで？まだ護衛の駆逐艦や巡洋艦に小型空母の建造なら分かるけど何やねん戦艦て？そんな資源があるんやったらこっちが作るわッ！！」

『な、何だとッ！？』

「何だとちゃうわボケェッ！！これが普通やッ！！陸軍戦艦てのはどの国にもないで」

『ググ……』

あ、噴火しそうやから止めとこ。

「まぁそれは置いといて。ガタルカナル星にアメリア軍が上陸したから再占領用の兵力を分けてほしいねん」

『……まぁ構わん』

何か冷めたみたいやな。

「ありがとう。助かるわ」

俺は通信を切る。

――――第十二艦隊旗艦鳥海――――

「提督、後１０分で戦闘宙域です」

「うむ、全員見張りを怠るな。夏の攻撃隊はどうなった？」

黒髪のポニーテールで左目にアイパッチを付けている第十二艦隊提督三川姫少将は参謀長の大西凛大佐に問い掛ける。

「報告では攻撃隊は戦艦一、空母一、巡洋艦一、駆逐艦七を撃沈しました。また、空母一、巡洋艦二が大破しました」

「そうか。しかし、こっちは巡洋艦と駆逐艦しかいないからな。脚で奴らを掻き回すしかないな」

三川が呟く。

第十二艦隊は巡洋艦鳥海を旗艦として七隻、駆逐艦十二隻。

神大佐の第十四艦隊は巡洋艦天龍を旗艦として四隻、駆逐艦十隻しかない。

「山口海軍長官から連絡は来ているか？」

「電文が来ています『最優先ハ敵艦隊ナリ。ケレドモ、敵艦隊ガ強力ナレバ敵補給船ヲ攻撃セヨ』と」

「ふむ、偵察機を放て。全てはそれからだ」

鳥海から零式偵察機が発進する。

「全艦の速度を二四宇宙ノットにしろ。対潜、対空警戒を怠るな」

それから二時間後、偵察機から連絡が来た。

「敵戦艦と空母が見当たらないだと？」

「はい」

実はこの時、敵艦隊司令官フレッチャー少将は航空機損失率が六十%を越えていたの戦艦ニューメキシコと空母レンジャーは駆逐艦六隻の護衛の元でニューカレドニア星に退避をしていた。

所謂逃げたのである。

「偵察機も周囲をくまなく探しましたが、ガタルカナル星から三百宇宙キロ圏内に戦艦と空母はいませんでした」

大西が報告する。

「……なら、行こう。全艦隊最大戦速ッ！！」

全艦隊が三十宇宙ノット以上の速度を上げてガタルカナル星を目指した。

――ガタルカナル星宙域――

「右舷2時の方向に敵艦隊発見ッ！！数は七、距離二万宇宙キロッ！！」

「全艦砲雷撃戦用意ッ！！右砲戦用意ッ！！」

全艦の主砲が敵艦隊に照準する。

「敵艦隊は気づいたか？」

「いえ。どうやら哨戒部隊のようです」

「フン。蹴散らせ」

三川はたった一言だけ言った。

「主砲発射ァッ！！」

ドシュウゥゥーーンッ！！

一斉にプラズマショックカノンが発射されて、全弾が敵艦七隻に命中して七隻は爆沈した。

「よし、このまま突っ走れェェェーーーッ！！」

合計三四隻の艦艇がガタルカナル星宙域になだれ込んだ。

――――アメリア軍輸送艦隊旗艦マコーレー――――

「巡洋艦クインシー沈没ッ！！駆逐艦パターソン大破ッ！！」

「……おのれぇジャップめ……」

部下からの報告に輸送艦隊提督リッチモンド・ターナー少将は怒りに満ちていた。

「フレッチャーの機動部隊がいれば……」

無いものにねだっては仕方ない。

「全艦隊撤退だッ！！」

「し、しかしガタルカナル星にはまだ陸軍が……」

「彼等にはゲリラ戦をしてもらうしかないッ！！グズグズするなッ！！死にたいのかァッ！！」

ターナーの言葉に乗組員達は慌ててマコーレーを動かす。
しかし、それを日本軍は見逃さなかった。
「て、敵艦のビーム弾が直撃しますッ！！」
オペレーターが悲鳴のような叫び声をあげる。
「お……俺がこんなところでッ！！」
ズガアァァァァーーンッ！！
その瞬間、マコーレーの艦橋と右舷にビーム弾が命中。
マコーレーはターナー少将達の遺骸と共にして爆沈した。

――――海軍省――――

「長官、三川少将より入電。敵艦隊と輸送艦隊は撃滅したようです。しかし、ガタルカナル星には多数のアメリア陸軍が上陸している模様なので陸軍による掃討を希望しています」
「ん。既に向かっているから守備は充分にと伝えてくれや」
「分かりました」

宇垣が部屋を出る。

「……インド方面に進出したかったけど、少し遅れそうやな」

俺は誰もいない長官室でそう呟いた。

TURN31（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN32（前書き）

今回は紺碧の艦隊が入ってます。

TURN32

「偵察の結果、ガタルカナル星を一時的に占拠したアメリア軍の出撃場所が分かった」

会議室に集まった皆を見渡して言う。

……ただ平良だけはいなかった。

理由は平良が代表の愛国獅子団を帝が解散させて軍籍も除名されたからやな。

ちなみにいずみは残ってる。

愛国獅子団を辞めたからな。（ついでにいずみは愛国獅子団にいた女性士官達を説得してこちら側へと引き抜いている）

ただ、去る時の平良の顔がニヤリとしてたから何かしそうなのは有り得るな。

「それで、何処だったんだ？」

ラスシャラが聞く。

「四国の近くにあるニュージーアイランド星域や。此処を偵察した

ら空母を含む三個艦隊が駐留していた。此処を叩けばオセアニア星海域のアメリア軍の基地は無くなるわけや」

「それで、派遣艦隊は？」

宇垣が俺に問う。

「……ラバウル星域の三川、神艦隊と夏ちゃんの第二機動艦隊。それにベコ、金杉、大原の六個艦隊でいくか。司令官は三川に任す」

「ふぇッ！？わ、私もですか？」

自身の上だけに雨雲が出来て、何故か雨が降っている少女――フェム・ベコが驚く。

先日のベトナム占領時に捕虜にした提督やねんな。

「そうやけど」

「で、でも私の雨のせいで、威力半減しますし……」

「大丈夫や。誰も文句は言わんわ。ただいつ雨降るかだけは教えてほしいねんけどな」

「ありがとうございます。でも、いつ降るかは私も分からないんです」

あらま。

「まぁそらしゃあないな」

雨降る時間だけ分かればええんやけど……。

機械類壊さんで済むし。

「まぁ相手は二個艦隊やから六個艦隊で大丈夫や思うけど油断はするなよ」

『了解ッ！！』

六人が敬礼をする。

そして六人は退席をして自艦隊に戻り、出撃をする。

「んじゃ今日はこれで解散や」

俺の言葉に皆が退席していく。

さて、俺も行くか。

「長官どちらへ？」

「迎賓館や」

宇垣の言葉に俺はそう答えた。

――ニュージ―アイランド星域――

「共和党支持者の俺が何故民主党大統領の再選のために命を張らねばならんのだッ！！」

戦艦ネブラスカの艦橋でアメリア軍ニュージ―アイランド星域艦隊提督のウィリアム・モルガン中将が舌打ちをする。

「敵艦隊の数は？」

「数隻の空母を含む大艦隊と偵察機は報告していますが、それ以降の応答が無く、恐らく落とされたと思います」

副官からの報告にモルガンは顔をしかめる。

「それでは敵艦隊の規模が分からんではないかッ！？」

モルガン艦隊には正規空母はワスプと、フレッチャー艦隊にいてモルガン艦隊に吸収された空母レンジャー。

護衛空母ボーグ、カード、ガンビアベイの計五隻の空母がいたが、搭載する航空機は少なかった。

対する山口第二機動艦隊は赤城型８４式正規空母七隻、鳳翔型７４式正規空母五隻の計十二隻の空母がいた。

一方的な差であった。

流石のモルガンも此処までは予想していなかった。

彼の頭の中には奇襲攻撃をかけて追い返すくらいしか考えてなかった。

モルガン艦隊は慎重に進みながら偵察機を放ってニューカレドニア星宙域に進出した。

此処はニュージ―アイランド星域を占領するのに重要な前線星宙域であった。

多数の隕石などが宙域をさ迷っている。

レーダー波を跳ね返す磁場を含んだ隕石もあるため、艦隊を隠すにはもってこいの場所だった。

しかし、此処には日本軍の艦隊がいた。

――伊号潜水艦伊一六八――

「敵さんの団体がお着きだ。全艦魚雷発射用意ッ！！」

隕石群の付近に前原一生大佐を提督にした第二潜水艦隊（十六隻）がいた。

「全艦魚雷発射準備完了ッ！！」

「魚雷撃ェッ！！」

各艦六発、全艦で九六本の光子魚雷が発射された。

「次弾用意ッ！！」

「次弾装填急げッ！！」

潜水艦隊で次弾装填が急がれる中、放たれた九六本の魚雷は八十本が敵艦隊に命中した。（残りは隕石群に命中）

「巡洋艦ナッシュビル大破ッ！！」

「駆逐艦シムス沈没ッ！！」

「落ち着けェッ！！敵潜は至近だッ！！必ず見つけて息の根を止めろッ！！」

駆逐艦が周囲に広がって亜空間用の爆雷を投下しようとした時、モルガン艦隊のレーダーが航空機の接近を探知した。

『て、敵機接近ッ！！数は百…二百…三百以上ッ！！』

レーダー員の報告にモルガンは思わず絶句した。

「ば、馬鹿な……」

この時になって偵察機から日本艦隊発見の一報が届いた。

「提督ッ！！偵察機が日本艦隊を発見しましたッ！！空母の数は…
…大型で十隻あまりと……」

通信参謀が電文を読んでいる最中に言葉を失った。

「……脱出だッ！！急いでこの魔の宙域から脱出するんだッ！！」

モルガンは叫んで、艦隊は慌てて動き出すがそうはさせまいと日本軍の攻撃隊がモルガン艦隊の上空から一斉に襲い掛かった。

結果で言えばモルガン艦隊は巡洋艦一、駆逐艦三隻を残して壊滅した。

ニューカレドニア星も日本軍の手に落ちた。

そしてニュージーアイランドもニューカレドニア星が落ちたのを受けて日本軍に降伏したのであった。

TURN32（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN33（前書き）

今回はオリジナルイベントです。

TURN33

――迎賓館――

「ごめんください」

「邪魔するなら帰って～」

俺が入ろうとすると、ゲッベルスの言葉に思わず帰ろうとする。

「はい～……ってちゃうわ阿呆ッ！！」

「……流石ね。大阪星出身は伊達ではないわね」

俺のツッコミにゲッベルスが唸る。

「何でゲッベルスが此処に？」

「レーティアを世話してるもの」

アドルフは相変わらずポケーッとしている。

「……グス…」

「行方不明のマンシュタインやロンメルを心配してるのよ」

成る程な。

まぁいつまでもメソメソしてたらあかんしな。

「そうや、アドルフ。明日、俺とデートしないか？」

「何ですってッ！？」

「……え？」

ゲッベルスが何か驚いてるな。

アドルフは何言われたか分かってないし。

「大丈夫やゲッベルス。アドルフを元気にするためや。何ならゲッベルスも行くか？」

「え、えぇいいわ」

「よし、そんじゃあまた明日来るわ」

俺は迎賓館を後にした。

――翌日、迎賓館前――

迎賓館前にゲッベルスとアドルフはいた。

「来るのかしら……」

「さぁ……」

二人がそう言っている時、電気軽自動車が来た。（作者らの間では軽自動車をケーと呼んでいる。これ重要（笑））

キィッ！！

「よぅ」

運転席から俺が顔を出す。

「こんにちはぁ～♪」

助手席に座る真希ちゃんが二人に挨拶をする。

「……貴方の子ども？」

「正確には養女やな。まぁ後ろに乗れや」

後ろの座席に二人を乗せて、走らせる。

「みーちゃん、何処に行くの？遊園地？」

「ハハハ、ちゃうで真希ちゃん。遊園地は一昨日行ったやろ。まぁ着いてからのお楽しみや。着くのに一時間くらい掛かるから何か飲み物でも飲んどきぃ」

「そこだよお姉ちゃん」

真希ちゃんが、クーラーボックスの場所を教える。

「……ねぇ山口。後ろから黒の車が追い掛けてくるのだけれど……」

ゲッベルスの言葉通りに、後ろには黒の車がいた。

「あぁ、あれは俺の護衛や。気にするな」

そして一行は何処かへと向かった。

「や、山口。一体何処まで行くつもり？山の中に入ってるんだけど……」

「もうちょいやな」

「……まさかみーちゃん、お姉ちゃん達とイケない遊びをするの？」

ブホゥッ！？Σ（ ゜Д ゜）

「いや違うからな真希ちゃん……ってお前らも身構えるなッ！！」

てか、真希ちゃん。

何故その言葉を知っているんや？

「お昼のドラマで言ってたよ」

「お昼のドラマは大人になってからやな」

「う～」

昼ドラが今だにやってるとはな……。

と、目的地に着いたな。

「はい着いたで」

車を止める。

「……うわぁ……」

アドルフが思わず声を出した。

「何だこのピンク色の木は？」

「これは桜や」

「サクラ……」

俺達の目の前には、見事に咲いている一本の桜の木があった。

「俺が日本海軍将官学校在学時に、野外演習で見つけたんや。春になったら桜花達と花見をしてるしな」

プップーッ！！

「あ、桜花達が来たな」

ワンボックスカーを運転している桜花が来た。

「早かったね三笠。つまみと酒は持ってきてるよ」

「よし、飲むか」

と、その前にアドルフのための物を出さないとな。

ゴソゴソと後ろの荷台から筆やら絵の具やらを出してアドルフに渡す。

「これは……」

「総統になる前は絵かきやったんやろ？これやるから桜でも描いたらええよ」

アドルフが絵を描けるようにセッティングする。

「はいよ。たまには息を抜いてやりや」

「……ありがとう山口」

やっとアドルフが笑ってくれた。

……意外と笑顔が可愛いな。

「おのれ山口めェッ！！我々のレーティアたんにィッ！！」

後ろで宇垣長官が悔しがっていた。

「さて、飲むぞォッ！！」

『オォーーーッ！！』

俺達は久々の息抜きを楽しんだ。

――――翌日、長官室――――

「や、山口はいるか？」

書類処理をしているとアドルフが入ってきた。

「ん？ジャージやなくて軍服やな？」

「あぁ。いつまでもメソメソしていられないからな。これからよろしく頼む」

「……それは日本軍の提督になると？」

「あぁ。ついでにシュテティンもだ」

「ええよ。よろしくな」

「あぁ。そうだ、これを……」

アドルフが俺に渡したのは昨日の桜の絵やった。

桜の木の下で俺達が仲良く酒を飲んでいるのを描いていた。

「私の御礼だ。受けとってくれ」

「おぅ、有り難く貰うわ」

俺はアドルフに礼を言う。

「う、うむ……／／／／／／」

何か顔を赤くしてるがフラグか？

「入るぞ」

そこへ都奈海が入ってきた。

「どうしたんや都奈海？」

「ワープゲート探索に出した隼が面白いところにワープアウトしていた」

「それは気になるな」

アドルフも会話に入る。

「場所は？」

「場所はな……カナダ星域だ」

物語は新たな展開に入ろうとしていた。

TURN33（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN34（前書き）

平良の反乱です。

そしてナデシコ設定。

TURN34

「今回、都奈海達の探索によってカナダ星域へ繋がる新たなワープゲートを発見した。そこで、インドカレー星域の攻略を一時延期してカナダ星域へ侵攻するッ！！」

海軍省の会議室で俺はそう言う。

「艦隊は俺、祀梨、桜花、アドルフ、いずみ、ラスシャラ、そしてキリングや」

俺はキリングを見る。

「……」

キリングは何も言わない。

「祖国と戦う事になるが構わんか？」

「えぇ構わないわ。今の私はアメリア軍のスカーレット・キリングじゃなくて日本軍のスカーレット・キリングよ」

キリングの目に迷いはなかった。

「……分かった。偵察機からの報告やと、敵守備艦隊はごく僅かみ

たいや。後は何かの研究所があるみたいやな」

「何かの研究所てのは何だい？」

桜花が聞く。

「流石にそこまで偵察機は調べられへんかったわ。ま、兵器の研究所とちゃうか」

俺は皆を見る。

「んじゃぁ会議はこれまでや。解散ッ！！」

俺の言葉に張り詰めていた空気が無くなる。

「た、大変ですッ！！」

皆が帰ろうとした時、五藤が慌てて会議室に入ってきた。

「どないしたんや五藤？」

「…マ…はぁ…マニラ…はぁ…２０００…はぁ…で解散したはずの愛国獅子団が…はぁ…反乱を起こして、マニラ２０００を占領しましたッ！！」

……マジかよ……。

「……カナダ星域攻略艦隊は作戦を中止してマニラ２０００に向かうッ！！全艦出撃準備やッ！！」

『了解ッ！！』

皆が自艦に戻る。

さて、俺も長門に行くか。

――――マニラ２０００星域――――

「んで、反逆者から何か声明文はあったか？」

「は、平良元少将がマニラ２０００を首都にした真日本帝国を建国を発表しただけでまだ新しいのは……」

「……そうか」

宇垣の言葉に俺は頷く。

「零式偵察機からの報告は？」

さっき平良達の艦隊を見つけたからな。

「はい。報告によると、敵艦艇の殆どが旧式の五十式艦艇です。ですが、平良の旗艦は実験戦艦敷島を奪取したので恐らくは敷島でしょう」

平良は軍を辞める際に、実験戦艦敷島を奪っていた。

この敷島、実はかなり厄介やねん。
敷島は電子戦艦とも呼ばれ、人間の中にナノマシンを入れて電子戦を主にしている。
言わば機動戦艦ナデシコやねはい。
ルリルリやな。
「てか、平良はＩＦＳ強化体質の人間を持っているんか？」
「分かりませんが、愛国獅子団の後ろには多数の企業や研究所がいたのでもしくは……」
絶対にいそうやな。
「電子妨害艦は？」
「既に、星域全体に妨害波を送っています」
「分かった。全空母は攻撃隊を発艦や。平良の周りを削っていけ」
全空母から攻撃隊が発艦する。
数は三百機程や。

――真日本帝国旗艦敷島――

「ぬぅ、おのれ山口めッ！！」

艦橋で平良が唸る。

「さっさと敵艦隊を制圧せぬかッ！！」

バキィッ！！

平良はオペレーター席に座っていた少女を殴る。

「……」

少女は何も言わない。

死んだような目をしていた。

「ち、人形の分際で……」

平良は舌打ちをする。

「敵攻撃隊が接近ッ！！」

「山口め、打つ手が早い。全艦対空砲火開けェッ！！」

真日本帝国艦隊は対空戦を開始した。

「敵艦隊はだいぶ沈んだな……」

旧式艦は対空火器も少ないから当たったな。

「敷島は？」

「小破しているようです」

「ん。敵護衛艦を叩いてから敷島を包囲や」

そして敷島は包囲されて、強襲艦が敷島に突撃。

陸戦隊が敷島艦内に突入して、平良達を捕らえた。

――――海軍省会議室――――

「捕まった気分はどうや平良？」

「山口ぃ……」

後ろに手錠をかけられた平良が唸る。

ちなみに、俺の横にはいずみがいる。

「福原大佐、貴様には失望したぞッ！！我々は日本を守るために戦っていたのではないかッ！！」

「……平良元少将。残念ですが、愛国獅子団は日本にとっては目の上のたんこぶです」

「……山口に毒されたか福原大佐ァッ！！」

平良が吠える。

「違います元少将。私は過ちに気づいただけです」

「ぬうぅ……」

「長官、帝が平良元少将と話しをしたいらしいです」

宇垣が言う。

「ええよ」

ブゥンとパネルが帝を写し出す。

『……平良……』

「……」

平良は帝を睨む。

『……何故分かってくれないのですか……』

「何をいきなり……。我々日本人は優秀な民族です。日本人が奴らを支配して何が悪いのですかッ！！」

『でも、日本も統一する前は四十七星に分かれて戦乱をしていたけど、統一出来たではないですか。だから世界の日本統一も出来るはずですッ！！』

「……もうよい。帝……貴様の妄想は聞きたくはない」

ガキィンッ！！

平良が手錠を外す。

いつの間にしよってんコイツは……。

「私はあの世で貴様の愚弄さを笑いながら見ていよう」

平良は隠し持っていた短剣を取り出し、そのまま喉を貫いた。

ザシュッ！！

会議室の床は一面、赤い水溜まりが出来た。

『……』

帝が顔を真っ青にしてるな。

「宇垣、死体を帝に見せないようにな」

「はい」

宇垣が死体をずらす。

「申し訳ありません帝」

『いえ、構いませんよ山口。平良の言うような世界にはならないようにしましょうね』

「はい……」

帝との通信を切る。

「ま、一応はこれで終わりやな」

真日本帝国の反乱は平良の死と共に終焉を告げたのであった。

TURN34（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ３５（前書き）

今回はイベントです。

夏と言えば海。

海と言えば水着（、・ω・′）

リーザ・リットンイベントもあります。

TURN35

――海軍省長官室――

「う～ん。提督の数が少ないなぁ……」

俺は書類を見ながら呟く。

先日の平良の反乱で海軍内でも多数の軍人が抜けていた。

しかも、輸送船団の提督も敵側におったしな。

カチャ

「みーく～ん。コーヒーだよ～」

「……コーヒーです」

真希ちゃんと少女が入ってくる。

髪の色は薄い紫色で、ツインテールにしている。

「おぅありがとうな真希ちゃん、瑠璃（るり）」

俺は二人に礼を言う。

ん？

瑠璃て誰かて？

平良によって無理矢理敷島を動かされていたＩＦＳ強化体質の少女ですはい。

ナデシコ？

気にするな。

この物語はナデシコよりかなり未来のはずや……多分。

瑠璃は平良を捕虜にした時に保護をした。

皆からのあだ名はルリルリや。

瑠璃は違法研究所のＩＦＳ強化体質の人間やから俺の養女にさせた。

真希ちゃんのお姉ちゃんとして頑張ってほしいな。

ん？

瑠璃を提督にしないのか？

流石に少女を提督にしないわ。

『原作はハニトラが提督をしてたけどｂｙ作者』

ちなみに、敷島をさらに強化した夕張型電子戦艦が建造されてる。

「長官、まだ終わりませんか？」

宇垣が入ってくる。

「まだや。後もうちょいや」

「早くしないと皆さん行きますよ？」

「桜花達の水着を見るまで俺は死なんッ！！（、・ω・′）」

「……」

そんな冷たい目線をするな宇垣。

お前の水着も勿論見るわ。

「死にたいですか？」

「せめて桜花達の水着を見てから……」

こめかみに拳銃を突き付けられた。

「ま、まぁとりあえずは書類終わったから行こか」

ドサッと書類を置く。

「……早いですね」

「水着を見るためにこの二日間の食事はおにぎりだけやで」

「……」

だからそんな冷たい目線をするな。

――二日後ハワイ星域、オアフ星――

「はい注目～」

砂浜にいる皆を呼ぶ。

「では今日は、日頃の疲れを癒して鋭気を養ってくれ。１７００まで自由やァァァーーーッ！！！」

『ウオォォーーーッ！！』

皆が雄叫びを上げ、水着に着替えて海に突撃する奴や肌を焼く奴もいる。

俺は真希ちゃんと瑠璃を水着に着替えさせて、更衣室前にいる。

「三笠じゃないか。何をしてるんだ？」

「あぁ桜花か。真希ちゃんと瑠璃の着替えを待って……」

後ろを振り返ると、桜花、いずみ、祀梨、宇垣、リディア、ラスシャラ、キャシー、ララー、キリングがいた。

まぁ皆さん水着なんやけど……。

「……皆の水着、効果抜群なんやけど……」

俺は鼻を押さえる。

ラスシャラ、キャシー、キリング、リディアは普通のビキニ。

ララー、宇垣はマイクロビキニを着ている。

祀梨は旧スクで白。

そして……桜花といずみは三角ビキニです。

三角ビキニを詳しく知りたい奴はウィキな。

「ほら言っただろ？三笠はこういうのが好きなんだよ」

桜花がニヤニヤしながら言う。

ちぃ、あのデカおっぱいめ。

そしていずみは意外と着痩せしてるねんな。

「もう、長官見すぎだよ」

リディアが指摘する。

「……俺、今日死ぬんやろか……」

「それは言い過ぎじゃないのか……」

「いやいや。ラスシャラのも似合ってるで」

「そ、そうか？」

ラスシャラが顔を朱くする。

「しかし、祀梨が旧スクで白を着るとはな……」

「フフフ、やる時はやるのですよ」

祀梨がニヤリと笑う。

「みーくんお待たせ～」

お、二人とも着替えたな。

「それじゃあ行きましょう♪」

ララーの言葉に俺達は海に突撃した。

――――ホテル――――

「ブハァッ！！Σ（ ゜Д ゜）……長官、あんた男だよ……」

鼻血を出してる田中が言う。

田中の手には俺がこっそりと激写した写真がある。

「カッカッカ。ひとみ君もあるじゃないか」

山本さんが笑う。

「古賀大尉はたまたま撮れたな」

どうやって撮ったのかは秘密や。

宇垣にばれたら絶対没収されて書類地獄になるからな。

「俺……頑張れる気がしてきたぜ」

『田中の艦隊特殊能力が変化しました』

……何か電波感じたな。

田中と山本さんにブツを渡して部屋に帰る。

カチャ

「みーくん助けてェッ！！」

真希ちゃんが俺に抱き着く。

「ど、どないした真希ちゃん……てお前誰や？」

部屋にはロープで縛られようとされていた瑠璃とカメラを持った水色の髪をして、目元を髪で隠した女性がいた。

「ゲッ！？え、え～と、そのぉ……」

俺は無言で女性の額に銃を当てる。

「ヒィッ！！」

「真希ちゃん、瑠璃のロープを解いてくれへんか？」

「うん」

案外緩かったのかロープはすぐ取れた。

「瑠璃、コイツをロープで縛れ」

「うん……」

瑠璃が女性を縛る。

「さて、俺はこの人と話す事があるからちょっと出るわ。桜花といずみを呼ぶからちょっと我慢しときな」

『うん』

二人は返事をし、俺は桜花といずみに連絡をして俺は女性を人気のない倉庫に連れていった。

翌朝、俺は女性――リーザ・リットンと一夜を過ごしてしまった。

まぁ理由はあれなんやな。

瑠璃の縛り方が何故か胸を強調するような縛り方をしていて、昼間に見た桜花達のも思い出してムラムラして、ついやっちゃったテヘ。

リットンが部屋にいた理由は俺の弱みでも握ろうと部屋に入ってんけど、真希ちゃんと瑠璃がいて、とりあえずロープで縛ろうとしたら俺が帰ってきた……ということらしい。

そしてリットンを解放したさらに翌日、俺はアメリアの新聞の一面を飾った。

「『日本海軍長官山口三笠は非常にエロい。記者を無理矢理押し倒して、あんな事やこんな事を一杯しまくった』だってさ三笠」

桜花がニヤニヤしてる。

「まぁカメラのフィルムは没収してるから信憑性はないはずや……多分」

「……はぁ」

宇垣に溜め息をつかれた。

「長官、アメリアの新聞記者が侵入してきたので逮捕しました」

兵士が言う。

……絶対にリットンや。

「それから取り調べ役に山口長官を指名していますが……」

「あんた一体何をしたんだい？」

桜花が呆れる。

何を……てねぇ（何故か目を逸らす）

「とりあえず、行ってくるわ」

その後、リーザ・リットンは定期的に俺を訪ねてくるようになった。

TURN35（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN36

――迎賓館――

「失礼するで」

部屋に入ると、胸元に大きなネックレスを首からかけている女性がいた。

「あら？貴方が山口長官ね」

「あぁ。俺が山口や」

「フフ、私に日本軍の提督になれと？」

「占いか？」

「えぇ。私の占いは外れた事はないわ」

確か作戦を決める時は全部占いでしとるとか聞いたな。

「で、なってくれるんか？」

「えぇ。退屈凌ぎにはなるでしょうからね」

女性――フリス・ハルゼーが笑う。

何故、ハルゼーが捕虜になったか。

まぁ簡単に言えば、侵攻してきたアメリア艦隊を撃破して捕虜にしたんやな。

カナダ星域攻略のためにハワイ星域で準備をしていたんやけど、その時にカナダ星域からワープアウトしてきたのがハルゼー艦隊やった。

どうやら、アメリア軍も新しいワープゲートに気づいたらしく、送り込んだのがハルゼーやった。

ハルゼー艦隊は戦艦四、エセックス級空母七、巡洋艦九、駆逐艦二十隻で侵攻してきた。

この時はハワイ星域に俺達がいたからあえなく全滅をしてハルゼーが捕虜になったんやな。

とりあえず、ハルゼーを連れて海軍省に戻った。

――海軍省会議室――

「さて、今日はやっとカナダ星域に侵攻する計画や」

俺の言葉に皆が頷く。

「攻略艦隊は前に言ったのと、＋山本さんとアドルフを加えるわ」

「分かった。腕が鳴るわい」

「うん、全力を尽くす」

二人が言う。

「では会議はこれで終いや。各自準備を怠るなよ？」

『了解ッ！！』

皆が俺に敬礼をして部屋を出る。

「ハルゼーは残ってくれ」

「いいわよ」

皆が出るのを確認すると、俺はハルゼーに話す。

「艦隊やねんけど、ハルゼーにはハワイで捕獲したエセックス級空母と最新鋭の天城型８９式空母を配備させるわ。戦艦は二、巡洋艦六、防空艦四、駆逐艦十六隻や」

「中々の艦隊ね」

「まぁな。ハルゼーはハワイ星域でＵＳＪから来る敵艦隊を迎撃してほしいねん」

「いいわよ」

「……案外ばっさりとしてるな」

「私は今は日本軍の提督だからね」

そうでっか。

「まぁ頼むわ」

「了解よ」

ハルゼーは俺に敬礼をして退室した。

「さて、長門に行くか」

俺は長門に向かった。

――――五日後、カナダ星域――――

「カナダ星域は小規模な守備艦隊と何らかの研究所だけですね」

「そうか、なら攻略は楽やな」

流石に九個艦隊は多かったな。

「守備艦隊には桜花、アドルフ、いずみに任せるわ。残りは研究所

に突っ込もうか」

「了解です」

艦隊が二手に分かれた。

――――ＣＯＲＥ研究所――――

「ノ、ノイマン博士大変ですッ！！ジャップが攻めてきましたッ！！」

ノイマンと同じ博士であるマンハッタンがＯＳの研究をしていたノイマンに報告する。

「……今忙しい……」

「い、いや忙しいとかじゃなくて早く逃げないと……」

「忙しいから……」

「で、でも早く逃げないと……」

「忙しい……」

ノイマンは再び研究に没頭し始めた。

「～～もう知りませんよッ！！」

マンハッタンはそう言うと研究所から脱出した。
その後、研究所は艦隊からの砲撃を浴びて爆発した。

――――旗艦長門――――

「長官、カナダ星域の攻略完了しました」

「おう」

宇垣が報告する。

「それと……幾つかのコロニーに先住民族のスペディオ族がいました」

「分かった。何か困った事があれば直ぐに駐留する防衛艦隊に申し出てくれと言っといてな。それと、先住民族に乱暴な事はするなよ？」

「心得ています」

宇垣が頷く。

「あぁそれと、祀梨と夏ちゃんの機動艦隊から外れた７４式空母をベトナムにいるジャカルタに配備しといて。そろそろ中型空母ではきついやろからな」

「分かりました」

宇垣が退室する。

「……それにしても、アメリアは何ちゅう物作ってんのやろ……」

俺はＣＯＲＥ計画とあるディスクを見て呟いた。

TURN36（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

艦艇紹介

今回は大帝国に登場する艦艇群を紹介します。

妄想百パーです。

――――５０式艦艇群――――

駆逐艦は武装七・六センチ単装プラズマショックカノン四基、四五センチ連装魚雷発射管一基搭載。

巡洋艦は武装十五～十七センチ単装プラズマショックカノン四基、七・六センチ単装プラズマショックカノン二基、四五センチ連装魚雷発射管二基を搭載。

戦艦は武装二八～三十センチ三連装プラズマショックカノン四基、七・六センチ単装プラズマショックカノン四基搭載。

――６０式艦艇群――

駆逐艦は武装十センチ連装プラズマショックカノン四基、対空連装パルスレーザー砲二基、四五センチ連装魚雷発射管一基を搭載。

巡洋艦は十八～二十センチ連装プラズマショックカノン四基、四五センチ連装魚雷発射管二基搭載。

戦艦は三十二～三十四センチ三連装プラズマショックカノン四基、十センチ連装プラズマショックカノン四基、対空連装パルスレーザー砲四基を搭載。

――７０式艦艇群――

駆逐艦は十二センチ連装プラズマショックカノン四基、対空連装パルスレーザー砲四基、五三・三センチ三連装魚雷発射管二基を搭載。

巡洋艦は二十～二十・三センチ連装プラズマショックカノン四基、二十ミリ対空連装パルスレーザー砲四基、五三・三センチ三連装魚雷発射管二基を搭載。

戦艦は三十四～三十五・六センチ三連装プラズマショックカノン四

基、二十ミリ対空連装パルスレーザー砲六基を搭載。

とまぁ一応こんな所です。

言っておきますが、百パー妄想ですので。

空母や重雷装駆逐艦や巡洋艦はまた次にします。

艦艇紹介（後書き）

物語が進めば追従更新します。

TURN37（前書き）

コア、若草会、そして潜水艦です。

TURN37

「アドルフ。このCORE計画を見てどう思う？」

「人間不足を解消するにはもってこいの計画だな。だが、全てが機械ではなく脳だけが人間の脳だと危ないと思うな」

「何で？」

「何かの拍子に自分が人間だったという事を思い出すと思う。いくら記憶を消したからといってな。脳はまだ分かっていない事が沢山あるんだ」

……成る程な。

「俺は単に、ヤマトの暗黒星団帝国と思ってたけどな」

「多分それは違うぞ」

アドルフに突っ込まれた。

「それと、山本提督は大丈夫なのか？」

「あぁ。今は容態も落ち着いているわ」

山本さんはカナダ星域攻略直後に旗艦日進の艦橋で吐血をして倒れていた。

幸いにも、看護師の古賀がいたから大事にはならなかった。

「……山本さんには働かせ過ぎたわ。しばらく休暇をさせるしかないわな」

「それが一番だろうな」

「ところで、この研究所は処分しよか？」

「そうした方がいいだろうな。私はそう思う。瑠璃ちゃんの優位を考えるとな」

「何で瑠璃が出てくるんや？」

「このＣＯＲＥは脳は人間だが、他は機械だ。電子戦が瑠璃ちゃんならウィルスを送り込んで即終了だぞ」

成る程な。

「まぁ子どもにはそんな事はさせへんけどな。とりあえずは処分しとこか」

俺達が戻ると、艦隊は研究所に一斉射撃を開始をした。

研究所は勿論跡形もなく消させてもらったわ。

――ホワイトハウス秘密部屋――

「……ドロシーは結局見つかってないわ」

「恐らくは……」

キャロル・キリングの言葉にハンナ・ロックは最悪の場合を考えたが言わなかった。

「ＣＯＲＥ研究所を破壊されたのは痛手だったわね。あれがないと、アメリア軍の人手不足の解消が出来ないわ」

「……ハンナ。そろそろ、日本と講和したらどうかしら？アメリア軍の士気はがた落ちよ」

キリングが言う。

「馬鹿言わないでッ！！最後に勝つのはアメリアよッ！！所詮は猿の国よ」

「その猿の国に攻められているのよッ！！ハンナが押しているルーちゃんの選挙だってダグラスに負けそうじゃないッ！！」

バァンとキリングが机を叩く。

事実、開戦後に始まった選挙フランク・ルーズとイーグル・ダグラスの争いになっていたが、フランクの票は全体の四割だがダグラスの票は六割になっていてルーズの負けは確定になりそうだった。

「そんなのダグラスのスキャンダルとかで巻き返せるわ。いえ、負けてもらうわ」

「それじゃあ初めから選挙の意味はないじゃないッ！！」

「キ、キャロルも落ち着いて。ほらハンナも……」

ヒートアップしそうだった話し合いに、クー・ロスチャが仲介に入る。

「もういいわ」

キリングは席を立つ。

「何処に行くのよ？」

「今日限りでキリング財閥は若草会を抜けるわ。こんなのやってられないわよッ！！」

キリングはそう叫ぶと、秘密部屋を出た。

「……ハンナ……」

「ほっときなさい。それより、ドロシーの財閥は買収するわよ。戦う戦力は一つでも増えないとね。最後に勝つのは私達よ」

「……うん……」

ロックの言葉にロスチャはただ頷く事しか出来なかった。

――――1週間後、海軍省長官室――――

『分かっているのか山口ッ！！お前ら海軍がだらし無いから輸送船が沈められるんだぞッ！！』

通信映像の先から山下が怒っている。

「分かってるよ山下。今、都奈海に対潜駆逐艦を作ってもらってる。それまでは辛抱してくれ」

『しかしだなッ！！』

「頼むから辛抱してくれ」

『お、おいッ！！』

山下との通信を無理矢理切る。

「……まさかアメリア軍が無制限作戦をするとは思いませんでした」

「……あぁ」

宇垣の言葉に俺は頷く。

カナダ星域を攻略後、アメリアは潜水艦による無制限作戦を宣言し

た。

これによって、非武装船である病院船等が多数沈められた。

アメリアの野郎、ドクツのUボートを捕獲して潜水艦の技術を取得してたんやな。

「全艦隊に打電や。しばらくは他星域を攻略しない。輸送作戦に力を入れるで」

「分かりました」

宇垣が退室する。

そういや暗号も解読されてるらしいから暗号を変えるか。

TURN37（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN38（前書き）

今回は田中イベントです。

TURN38

「今回、輸送船団の護送を護衛総隊から一時的に我々連合艦隊が行う」

海軍省の会議室で俺が言う。

「何でなんだよ長官？」

田中が俺に聞く。

「護衛総隊には対潜駆逐艦がまだ配備されていないからな。それまでの時間を俺達が稼ぐんや」

「輸送船団の護衛はカナダ星域からマイクロネシア星域。ラバウル星域からマニラ２０００星域。ベトナム星域からマニラ２０００星域までの三ルートや」

俺は映像で説明する。

「ベトナム星域からマニラ２０００星域までの輸送船団の護衛はラスシャラ、ララー、ベコ、大原でやってもらう」

「ラバウル星域からマニラ２０００星域までの護衛は有馬、角田、リンファ、ランファでやってもらう」

「最後に、カナダ星域からマイクロネシア星域までの護衛は俺、桜花、田中、いずみ、アドルフや」

俺は編成メンバーを言う。

「何でカナダ星域からの護衛は多いんだい？」

桜花が聞く。

「カナダ星域は鉄鉱石などの資源が豊富なんや。その分、輸送船が増えるねん」

「成る程ねぇ」

……他に質問はないみたいやな。

「んじゃぁ解散や。皆、しっかりと頼むで」

『了解ッ！！』

皆が俺に敬礼をした。

五日後、俺はカナダ星域にいた。

――旗艦長門――

「長官、準備完了しました」

「ん、全艦隊発進や。輸送船団も我に続け」

護衛艦隊と輸送船団がカナダ星域を離れる。

「空母に発光信号や。対潜哨戒機東海を発進させて上空警戒をさせるんや」

「了解です」

全空母から双発機の対潜哨戒機東海が発進する。

今のところ、対潜の武器はこの東海しかない。

「ま、無い物ねだりしてもしゃあないしな」

俺は呟く。

艦隊は輸送船団の速度に合わせて航行して、五日が過ぎた。

――五日後――

「もう少しでハワイ星域やな」

「はい、ハワイ星域からでも対潜哨戒機の東海が飛んできますので、一応の安心です」

「まぁ安心やねんけど、油断するなよ」

これまでに、敵潜水艦の襲撃は僅か一回のみ。

まだ、あるはずやからな。

「ッ!?東海五号機より入電ッ!!『我、敵潜水艦発見セリ』ですッ!!」

オペレーターが叫んだ。

「直ちに攻撃やッ!!」

東海には亜空間用の対潜爆雷が搭載されている。

上空にいた東海が発見場所に群がり、いざ爆雷を投下しようとした。

「ッ!?て、敵艦隊発見ッ!!」

オペレーターが叫ぶ。

ちぃ、こっちが本体か?

ならば潜水艦は陽動か？

「ちょ、長官ッ！！敵艦隊に近い田中艦隊が敵艦隊に向かいますッ！！」

あの阿呆ッ！！

「アドルフの艦隊を田中がいた宙域に展開やッ！！」

輸送船団の護衛艦隊は前衛に桜花、左翼に田中、右翼にいずみ、後衛にアドルフと俺がいた。

アドルフが田中が抜けた左翼に入り、菱形の体型になる。

「田中が向かった敵艦隊の数は？」

「はい、戦艦六、巡洋艦九、駆逐艦三十隻の艦隊です」

ちぃ、田中には重荷やな。

「攻撃隊の準備は？」

「既に第一次攻撃隊が発艦しています。ですが、空母の三分の一を東海で搭載していますので敵艦隊に充分なダメージを与えるかは不明です」

「それはしゃあないわな。田中に打電して交戦しつつ、少しづつ後退せぇと伝えて」

「了解」

オペレーターが打電をすると、5分もしないうちに田中から通信が来た。

『おい長官どういう事だッ！！何で後退しないといけないんだよッ！！』

「じゃあかましいわおんどりゃあァァッ！！！おめぇの采配ミスで巡洋艦三、重雷装型駆逐艦九も沈んどるんやッ！！後退せぇ言うたら後退せんかボケッ！！ええ加減にせぇへんとおめぇのドタマかちわるぞッ！！！」

キレた俺は無理矢理通信を切る。

『……』

艦橋にいる皆が黙る。

そんなに怖かったんやろか？

「……田中は動いたんか？」

「は、はいッ！！ゆ、ゆっくりとですが、こちらに向かって後退しています」

「ようやく言う事聞いたか。第一次攻撃隊は？」

「巡洋艦二、駆逐艦八隻を撃沈しました」

「確実にダメージは与えてますね」

オペレーターの報告に宇垣が呟く。

「桜花、アドルフ、俺の艦隊は砲雷撃戦用意や。目標、アメリア艦隊や」

三個艦隊の主砲が敵艦隊に照準をする。

「準備完了しました。射程に入ればいつでも撃てます」

宇垣の言葉に俺は無言で頷く。

そして、アメリア艦隊は三個艦隊の射程圏内に入った。

「全艦撃ちぃ方始めぇッ!!」

ドシュウゥゥゥーーンッ!!

俺の号令とともにプラズマショックカノンが火を噴いた。

ズガァァァーンッ!!

ビーム弾が直撃した艦は瞬く間に爆発四散する。

「長官、ハワイ星域より宇垣艦隊と高須艦隊が来ます」

やっと来たか。

まぁ新任の高須は手間取るからしゃあないな。

「長官、敵艦隊が撤退を開始しています」

「アイツらも諦めたな。全艦気を抜かずにハワイに入港や」

そして輸送船団はハワイに入港した。

TURN38（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN39（前書き）

総アクセス数が十五万を越えました。ありがとうございますm（＿）m

今回は田中イベントと帝イベントです。

TURN39

――1週間後、海軍省長官室――

「……それで、全体の被害状況は？」

俺は宇垣に聞く。

「はい、三ルートの輸送での損失は合計で巡洋艦三隻、重雷装型駆逐艦十一隻、駆逐艦二隻、輸送船三隻が撃沈。乗組員の死傷者も三千人になります」

「輸送船が沈んだ原因は？」

「二隻はベトナム星域からの輸送船です。これは大原提督の艦隊がエイリス軍の潜水艦の奇襲によって混乱の隙を突かれました。残りの一隻はカナダ星域からの輸送船で、田中提督の重雷装型駆逐艦の誘爆に巻き込まれました」

「……分かった。……輸送作戦は八割成功やな……」

俺はコーヒーを飲む。

「田中の容態は？」

田中は後退時に旗艦が被弾して負傷していた。

「軽傷でしたので命の別状はありません」

「そうか……。まぁ、これで少しは分かったやろな。安易な突撃の犠牲がどれだけになるかをな……」

「見舞いには？」

「……行かなあかんやろな」

俺は席を立つ。

目的地は勿論、田中の病室や。

――――田中の病室――――

「邪魔すんでぇ～」

病室に入ると、病室は荒らされていた。

まぁ田中がむしゃくしゃしたんやろな。

「畜生ッ！！畜生ッ！！」

田中が部屋の壁に向かって拳をぶつけていた。

あ、頭で当てた。

「大分荒れてるようやな田中」

「……あんたか……」

田中が視線を下に向ける。

「何だよ、笑いにきたのか？作戦に失敗した男なんだ。笑えばいいだろ」

「ハッハッハッ！！」

「なッ！？笑うなッ！！」

「何や？笑ったらあかんのか？お前が笑えばええ言うてんからな」

「ぐ……」

「で、お前はどうすんや？」

「汚名挽回の機会をくれッ！！今度こそ、敵艦隊を殲滅させるッ！！」

「名誉挽回な。それか、汚名返上や。それと……」

バキィッ！！

「グァッ！！」

俺は田中を殴る。

「な、何すんだッ!?」

「何するんやちゃうやろボケェッ!!敵艦隊を殲滅させる?調子乗んなッ!!」

「敵艦隊を殲滅させるんじゃないのかよッ!!」

「俺が聞いたんはもう一回輸送作戦に参加するか聞いたんやッ!!」

「え?」

「お前は敵艦隊と交戦した時点で輸送作戦を放棄したんや。資源が無かったら戦艦も駆逐艦も光子魚雷は作られへんのやッ!!お前はそこは分かってるんか?」

「あ……」

……コイツ分かってなかったみたいやな。

「ええか?戦争はただ戦うだけやない。資源が乏しい日本が生き残るためにも輸送は必要なんや」

「……すまねぇ長官。俺、全く分かってなかった……」

「分かればええんや。上村彦之大将を見習ったらええんや」

上村彦之はロシアン王国と日本が戦った日露戦争時の第二艦隊提督や。

まぁ、日露戦争の上村彦之丞中将と似たような人やな。

上村中将を知りたい人はウィキで。

「あぁ。長官ありがとう」

「おぅ、んじゃぁ俺は行くわ。皇居に行かなあかんしな」

田中の病室を出た後、皇居に向かった。

――――皇居――――

「山口、日本の領土の数が十三個になりました。これも山口のおかげです」

「いえ、山下や皆が頑張ってくれたからですよ」

皇居には柴神様、宇垣長官、山下、俺、女官長ハルさんがいた。

「そこで、山口の功績として二回目の帝勲章をあげちゃいます」

ちなみに、一回目はハワイ占領時に貰った。

そして副賞は帝の外出緩和にした。

いやぁ、女官長のハルさんがかなり反対したけど帝も年頃の女の子

やなんしな。

帝が可哀相やったしな。

「ありがとうございます帝」

「副賞は何にしますか？」

ん～、何にしよっか……そうや。

「帝、先日に自分に新しい家族が増えました」

「あぁ瑠璃ちゃんですね。可愛いですね」

「（……確かに可愛い）」

山下が何か言ってる。

「まだまだ遊び盛りなので家が少々汚いのですよ」

「それは大変ですね」

「はい、そこで帝にメイドさんとして一週間に一回掃除をしに来てほしいんですよ」

『な、何ィィィーーーッ！！！』

あ、皆が絶叫した。（柴神様は驚いてる）

「き、貴様馬鹿にも程があるぞッ！！」

うっさいぞ山下。

「み、認められませんッ！！帝、そのような話しは断るべきです」

ハルさんが一番アタフタしてるな。

「いいですよ」

『なぬゥッ！？Σ（ ゜Д ゜）』

帝の言葉に、山下、宇垣長官、ハルさんが驚く。

「し、しかし帝……」

宇垣長官が何かを言おうとした時、柴神様が動いた。

「まぁ良いではないか」

「柴神様ッ！？」

「帝の意思を尊重しようじゃないか」

「……はい」

流石に柴神様に言われたら三人も大人しくするしかないわな。

「（山口、ありがとう）」

柴神様が小さく言う。

「（皇居にいると帝は退屈してしまう。真希ちゃんと瑠璃ちゃんの遊び相手をしてたら帝も喜ぶ。そうであろう？）」

「（……バレてましたか……）」

「（私は何年も生きているからな）」

俺と柴神様が話し合う。

「では、副賞は私が山口のメイドさんという事で決まりです」

帝がにぱぁと喜ぶ。

「帝、まだ話す事があるのではないか？」

「あぁそうでした」

ん？何かあんの？

「実はですね、私も日本軍の提督になろうと思います」

……。

『……えぇぇーーーッ！！！』

こ、これには俺も驚いた。

TURN39（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN40（前書き）

後半ラスシャライベントです。

TURN40

「……帝、それはいくらなんでも……」

山下と宇垣長官は今だに呆然としている。

「既に柴神様とハルさんの許可は貰ってますよ」

「「何とォッ!?」」

山下と宇垣長官が叫ぶ。

何か叫んでばっかやなこの二人。

「……戦場は死ぬかもしれませんよ?それでも構わないのですか?」

「はい。それに山口が守ってくれるでしょ?」

……そう言うかぁ。

「……分かりました。帝の参戦を許可します」

「山口ッ!!」

「大丈夫や山下。柴神様に帝の副官をしてもらうからな。ところで帝、旗艦は何に？」

「平賀所長に頼んでます」

「フハハハハハッ！！！出来た……出来ましたぞ帝ォッ！！」

何気にテンション高ぇ都奈海が入ってきた。

「出来たんですか都奈海さん？」

「はい、帝に相応しい旗艦が出来ましたよッ！！」

都奈海は映像を見せる。

「主砲は長門と同じ三連装五十一センチプラズマショックカノンを三基、副砲に三連装三十五．六センチプラズマショックカノンを二基、対空砲はパルスレーザー、対宙艦ミサイルに迎撃ミサイル、そして、零戦四八機を搭載しています」

「それは凄いですよッ！？」

帝が驚いてる。

「旗艦の名前は『大和』にしました」

……イスカンダルに行くんやろか。

「とりあえず、帝の艦隊を編成しますか……」

俺は機器を操作する中、艦艇を探す。

……。

「……」

「山口、どうかしましたか？」

「あ、いえ。何でもありませんよ。艦艇ですが、新型艦が少数ながらありましたので、それを配備させます」

俺は機器を操作する。

「艦艇は巡洋艦矢矧、駆逐艦冬月、涼月、朝霜、初霜、霞、磯風、浜風、雪風です」

よーするに菊水一号作戦の戦艦大和沖縄特攻やな。

何でこんな奇跡があるんやろか？

「艦艇が少ないですね……」

「新型艦を帝艦隊に優先的に配備させますので」

「分かりました」

帝が頷く。

「では皆と顔合わせのために海軍省に行きますか」

「はぁい」

御前会議はそこで閉会となった。

――――海軍省会議室――――

「というわけで提督になりました帝です」

『……（゜Д゜）』

やっぱそうなるわな。

「なぁ山口。お前の国、少しおかしくないか？」

ラスシャラが言う。

「まぁ……気にするな」

「その間は何だよッ！！」

気にするな。

「とりあえず、帝はしばらく練習の日々やと思うけど我慢して下さい」

「はい」

帝が頷く。

「……よかったのかい？帝を戦場に出して……」

帝が皆に挨拶をしてる中、桜花がこっそりと聞いてくる。

「まぁ、それが帝の意志やからな。帝の決定には従わざるをえないからな」

「そりゃあそうだね」

あ、大原が帝に握手されて号泣してるし。

「ま、帝を死なせないように頑張ろや」

「それもそうだね」

俺と桜花が笑いあった。

「あれ、ラスシャラやん。何してんのや？」

廊下で何やら武器に何かをしていたラスシャラを見つけた。

「あぁ、武器の手入れだ。手入れはよくしないと故障するかもしれないからな」

「そうやなぁ。今から射撃場に行くけど行くか？」

「あぁ」

――――射撃場――――

タァーンッ！！

ラスシャラが放った弾丸は見事ど真ん中に命中する。

「流石やな」

「これでもゲリラのリーダーなんだからな」

ラスシャラが得意げに胸を張る。

……中々やな。

「……何を見ているんだ？」

「……言ってほしいんか？」

「言った瞬間に額に風穴が開くが？」

「それは勘弁願いたいな」

俺はラスシャラに土下座をしていた。

「射撃場に来るなら何か撃てば？」

「それもそうやな」

そして何故かあった三八式歩兵銃で射撃をしていた。

タァーンッ！！

三八式歩兵銃は反動が少ないから撃てるのは楽や。

て、弾は何処や？

左手で弾を探してると、同じく弾を探していたラスシャラの右手に触ってしまった。

「ぁ……」

ラスシャラの顔が一気に赤くなる。

「～ッ！？きょ、今日は帰るッ！！」

ラスシャラはそのまま帰った。

「……色んな意味でのフラグが立ったんか？」

俺は呟き、再び三八式歩兵銃を撃った。

TURN40（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN41（前書き）

山下イベントです。

TURN41

――海軍省長官室――

「今日の卵焼きは美味いな」

俺は長官室で昼メシの弁当を食べていた。

真希ちゃんは幼稚園、瑠璃は学校やな。

「失礼するぞッ！！」

「な、何や？」

昼メシを食べてるといきなり山下がズカズカと入ってきた。

「何や山下？」

「至急、攻略してもらいたい星がある。これを見てくれ」

山下が何らかの映像を出す。

「これは？」

「アメリア軍の妨害電波衛星だ。十日程前から妨害電波が出されて

いたのは知っているだろう？」

「あぁ。今、都奈海に妨害電波を無効化する特殊艦を作ってもらってるけどな……」

「コイツを叩けば、妨害電波も止む。山口、一気に占領するべきだ」

「だがな、コイツの位置を見ろや。アメリアのＵＳＪから近いで？罠という線もあるで」

「罠だと？フン、そんなの突撃して撃ち破ってくれるわ」

「あのなぁ、今時精神論は無理やで。それに占領はせん。むしろほっとく」

「な、何だとォッ！！」

山下が激怒する。

「ＵＳＪ星域にはアメリア星海域防衛に集められた多数の艦隊がいるんや。ノコノコと行ったら返り討ちやで」

「だが、此処を占領するのは重要だッ！！何としてでもやるべきだッ！！」

「山下、何でもかんでも突撃はあかんで？無理な戦はやらん。海軍からは一隻も出さんで」

「～～なら我々でやらせてもらうッ！！海軍の腑抜けがァッ！！」

怒りで顔を真っ赤にした山下がバァンと部屋を出ていく。

「……何事もないことを祈るか……」

――――数日後――――

「長官、山下長官達陸軍部隊が妨害電波衛星に向けて出撃しました」

「……あの阿呆は……」

宇垣の報告に俺は頭を抱える。

「どうしますか？」

「……とりあえず、様子見や。艦隊の状況は？」

「今、出撃可能な艦隊は我々と帝の艦隊だけです。残りはゲイツランド星域攻略の準備や輸送船団の護衛のためにいません」

「……分かった。帝に連絡しといて。発進準備をさせといて」

「分かりました」

全く山下は……。

――二日後――

「長官、妨害電波衛星攻略に向かった陸軍部隊が苦戦しています。どうやら罠があったようです」

「そうやろなぁ。全艦の発進準備は？」

「何時でも行けます」

宇垣の言葉に俺は頷く。

「全艦艇発進や。目標は妨害電波衛星や」

俺の艦隊と帝の艦隊が出撃した。

――妨害電波衛星宙域――

「敵艦隊の数は？」

「凡そ三個艦隊です」

俺の問いにオペレーターが答える。

「攻撃隊は？」

「全機発艦準備完了。何時でも行けますよ」

「よし、攻撃隊は全機発艦やッ！！徹底的に叩けェッ！！」

空母から攻撃隊が発艦をして、上空で編隊を組んで敵艦隊に向かう。

「全艦砲雷撃戦用意やッ！！」

全艦の主砲が敵艦隊に照準する。

「長官、攻撃隊から入電。『敵艦隊ハ小型艦中心ノ艦隊ナリ。我、巡洋艦七、駆逐艦十四撃沈ス』以上です」

「ん。空母と護衛艦は後方に退避して攻撃隊を収容や。敵艦隊をレーダーで捉らえたか？」

俺はオペレーターに聞く。

「はい、間もなく、長門と大和の射程距離に入ります」

「ふむ、丁度ええ機会や。ビームは拡散モードに変えるんや」

都奈海が作った対航空機用のビーム弾の拡散モードや。

拡散波動砲の縮小バージョンと思えばええな。

「拡散モードに切り替え完了しました」

「よし、撃ちぃ方始めッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

艦隊が一斉にプラズマショックカノンを発射した。

発射されたビーム弾は、途中で無数のビームに分かれて敵アメリア艦隊に直撃した。

ズガアァァァーンッ！！

小型艦中心やったアメリア艦隊は瞬く間に、宇宙に花火を咲かした。

「残ったアメリア残存艦隊が後退していきますッ！！」

「ほっとけ。これより妨害電波衛星に降下して陸軍部隊を救助するで。帝には周辺を警戒してもらうか」

「帝より通信です」

『ヤッホー山口』

「どうしましたか帝？」

『はい、山下の事任しましたよ？』

「はい、お任せ下さい」

『はい』

帝はそう言って通信を切った。

「山口艦隊は全艦降下やッ！！」

艦隊は妨害電波衛星に着陸した。

「こりゃぁ酷いな。宇垣達はあっちを探してくれ」

衛星は至る所に敵味方の死体があった。

「分かりました」

宇垣達と分かれて、山下を探す。

ガサッ！！

「ッ！？」

俺は後ろからの物音に素早く小銃を向ける。

そして、物陰から一人の人間が出て来た。

「……山口……」

出て来たのはボロボロの山下やった。

「山下か。いやぁ生きててよかったわ。ほら、戻るで」

「……私は私のミスで多くの部下を死なせた……」

「それがどないしたんや。誰にやってミスはあるんや」

「し、しかし……グ……」

山下が倒れる。

「お、おい。しっかりしぃやッ！！」

俺は山下をおんぶする。

あ、山下の柔らかいのが当たってる……。

と、とりあえず運ぶか。

俺は山下の柔らかいのに当てられながら長門に帰還した。

「はい撤収」

残存部隊を収容した艦隊は衛星から離れて、日本に帰還した。

TURN41（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ４２（前書き）

宇垣参謀長は女性です。

TURN42

それから数日後。

――――ゲイツランド星域――――

「長官、ゲイツランド星域は全て攻略完了しました」

「ん」

宇垣の報告に俺は頷く。

「……ゴメンな瑠璃。お前をまた戦に駆り出して」

「気にしなくていい。三笠の役に立てるならなんでもする」

オペレーター席に座ってる瑠璃が言う。

今回のゲイツランド星域は瑠璃の力が必要やった。

アメリア軍は防衛艦隊に大バリアを搭載した大型レーザー砲があったからや。

流石に正面から攻撃したら壊滅する。

航空戦をするにしても、ゲイツランド星域は暗黒星雲があるから視界はほぼゼロ。

どうしようかと悩んでたらたまたま乗り込んでいた瑠璃が敵アメリア軍のシステムを掌握。

主砲も撃てない、バリアも展開出来ないアメリア軍は降伏をした。

「まぁ、瑠璃には有り難いけどあまりしたらあかんよ？瑠璃の力を手に入れたい奴やっておるんやしな」

「……分かった……」

瑠璃が頷く。

瑠璃の力はシステムを掌握するに限るからな。

劇場版ナデシコの火星を掌握したルリちゃんと同じやしな。

「さて、一応の防衛艦隊を布陣させて帰還するか」

ＵＳＪ攻略は並大抵でいけるわけないしな。

そして、防衛艦隊を配備した後は日本に帰還した。

――――海軍省長官室――――

「偵察機からの情報は？」

「は、偵察機からの報告では戦艦を主力にした艦隊が六個、空母を主力にした艦隊が五個の十一個艦隊が布陣しているとのことです」

むぅ、どちらも多いな。

「攻略戦の時はハワイの宇垣さん達も使うか」

ＵＳＪを攻略したらハワイに防衛艦隊はいらんのやしな。

「ですが、ハワイ星域の防衛艦隊は新型の７０式艦艇群を装備していません」

「それは新たに７０式を建造するしかないけど、鉱石は足りるか？」

「正直足りません」

宇垣が即答する。

「……なら明石大佐に頼むか」

俺は法螺貝を出す。

『ブオォォーーーッ！！』

法螺貝を鳴らすと、宇垣がいきなり明石大佐になった。

「……変身の術か？」

「……如何にも。用件は鉱石の収集で？」

「あぁ頼むわ」

「……」

明石大佐は無言で頷くと、スゥッと消えた。

「……とりあえず、宇垣探すか」

俺は宇垣を探し始めた。

ちなみに宇垣は俺の長官室のロッカーの中で亀甲縛り（何故か下着のまま）の状態で発見された。

傍にあった明石大佐の文によると、「長官が一回誰かにやらせてみようと思案していたのを聞いたのでやってみた」らしい。

いや、何で知ってるん？

しかも誰にも話してもいないし。

何か明石大佐はストーカーみたいやな。

「……うぅ、もうお嫁に行けません……」

宇垣はまさにｏｒｚ状態やし。

「なんなら俺の嫁になるか？」

「え？」

「冗談やからそんなに顔を真っ赤にするな」

冗談やのに本気と考えたなコイツは……。

『長官、アメリア軍の輸送船団が来ました』

ドック長が連絡してきた。

「あぁ、明石大佐の忍法にかかった奴らや。鉱石を渡すと帰るから心配すんな」

『はぁ……分かりました』

ドック長は半信半疑の顔で通信を切った。

まぁこれで資源面は確保したな。

「攻略艦隊はどうしますか？」

「う～ん、十個艦隊でええやろ。俺の艦隊が二個艦隊分の動きをし

たらええんやしな」

後は提督やけどこれは後で考えるか。

「都奈海に連絡して新型艦の建造を急いでもらうか」

俺は都奈海に電話を掛ける。

『何だ？』

「俺や。資源の調達は明石大佐がしてくれたから急いで新型艦を建造してほしいねんけど」

『分かった。工員の奴らも暇そうだったからな』

「頼むわ」

俺は電話を切る。

「宇垣、皆を集めてくれ。アメリア軍の残存艦隊を叩くで」

「分かりました」

さぁてやるか。

俺は冷めたコーナーを飲みながらそう思った。

TURN42（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN43

それから再び半年の時が過ぎた。

――宇宙歴９４１年２月、ＵＳＪ星域、旗艦長門――

「全艦隊はいるな？」

「はい、全艦隊います」

俺の言葉にオペレーターが答える。

ＵＳＪ星域攻略のために念の念を押して、半年の艦隊訓練と艦隊整備をしてきた。

そして攻略艦隊は俺の艦隊を入れて十六個艦隊や。

まず、空母部隊は祀梨、夏ちゃん、帝、ハルゼー、そしてハワイ星域会戦で捕虜にしていたドーリトルの五個艦隊や。

ドーリトルはかなり航空戦に詳しかったからな。

マジでかなりの戦力やな。

戦艦部隊は桜花、いずみ、ラスシャラ、宇垣さん、アドルフ、キリング、そして山本さんの七個艦隊や。

山本さんの病気はかなり深刻になってるらしいが、本人たっての希望やった。

しまいには切腹をしそうやったから俺が折れた。

雷撃部隊は田中とリディアの黄金パターンや。

そして奇襲部隊としてデーニッツの潜水艦隊や。

砲撃戦のような乱戦には持ってこいの艦隊やからな。

俺の艦隊は空母（六隻）と戦艦（四隻）やからどっちにでもいける。

よーするに救援部隊やな。

ちなみに、輸送船団の護衛に大原と金杉の二個艦隊がいるけど、戦闘はしないと思うから数には入れてない。

「長官ッ！！三号索敵機より緊急電ッ！！『我、敵艦隊発見ス』」

「三号索敵機に空母の確認を急がせるんや」

ミッドウェーの二の舞にしたくないしな。

勿論、今回は二段索敵をしている。

「三号索敵機より再度入電ッ！！『大型空母八以上。戦艦九隻ヲ視認ス』です」

「よし、各空母に連絡や。第一次攻撃隊発艦やッ！！第一次攻撃隊総隊長は柴神様に任せる」

空母艦隊から第一次攻撃隊から飛行甲板に並べられ、電磁カタパルトから次々と発艦していく。

「第一次攻撃隊の数は？」

「約三百五十機です」

ふむ……。

「第二次攻撃隊の発艦を早めるか」

「分かりました。第一次攻撃隊が全機発艦次第、第二次攻撃隊も発艦させます」

第一次攻撃隊は編隊を組んで、アメリア艦隊に向かった。

――――アメリア艦隊旗艦ワシントン――――

「敵機接近ッ！！」

「……来たか……」

オペレーターの言葉にＵＳＪ星域艦隊提督ドゥービル・ドワイト大将が呟く。

「戦闘機隊を上げろ。さぁ始まるぞ」

ドワイトはニヤリと笑った。

――――柴神様機――――

『右舷２時の方向に敵艦隊発見ッ！！』

一機の４２式宇宙艦上戦闘機烈風がバンクをする。

柴神が右舷２時を見る。

そこには大艦隊がいた。

「……まさに決戦……か」

柴神は無線マイクを取る。

「全機に告ぐ。全軍突撃せよッ！！」

『上空から敵戦闘機ッ！！』

柴神は反射的に機体を傾けさせる。

ビシュンビシュンッ！！

幾つもの、エネルギー光線が多数の烈風を貫いた。

ズガァァァーーンッ！！

「上空迎撃機かッ！？進藤と二階堂の部隊は敵戦闘機は駆逐せよッ！！残りは全機私に続けッ！！」

『了解ッ！！』

攻撃隊が敵アメリア艦隊に突入すると、アメリア艦隊は一斉に対空砲火を開いた。

勿論、柴神の零戦も例外なく狙われる。

「くぅッ！？」

柴神はパルスレーザーで敵戦艦の艦橋を掃射しながら二発の対宙艦ミサイルを発射した。

二発は敵戦艦の主砲を破壊して戦闘力を失わせる。

そこへ、雷撃隊隊長友永大尉率いる４２式宇宙艦上雷撃機天山九機（ぶっちゃけ、烈風はヤマトのコスモタイガー、天山はＣＴ艦攻）が突入をする。

しかし……。

ビシュンビシュンッ！！

被弾した戦艦の周りに一隻の巡洋艦と数隻の駆逐艦が集まり敵戦艦を守ろうと対空砲火を放つ。

そしてその対空砲火のレーザー光線は友永機の左翼の三分の一をもぎ取り、操縦席も被弾した。

「友永ッ！？」

戦況を見守っていた柴神は思わず叫ぶ。

友永機は火こそ噴いていないが、操縦席は血だらけであった。

友永は最後の力を振り絞り、柴神に敬礼をすると、満身創痍で対空砲火を放っていた巡洋艦に突撃を開始した。

「友永ァッ！！」

柴神は再び絶叫する。

友永の天山は対空砲火で機体が穴だらけになりがらも、絶好の雷撃位置で亜空間魚雷二本を投下した。

魚雷は亜空間に沈むが、直ぐに巡洋艦に直進する。

巡洋艦は回避をしようとするが、そこへ友永機が巡洋艦の艦橋に体当たりをした。

ズガァァァーーンッ！！

巡洋艦の艦橋は破壊された。

その直後に二本の魚雷が巡洋艦に命中した。

ズガアァァーーンッ！！

巡洋艦は航行不能になり、落伍する。

その間を、対空砲火から生き残っていた天山五機が突入した。

四隻の駆逐艦は戦艦を守ろうと対空砲火を放つが、天山五機はものともせず絶好の雷撃位置で十本の亜空間魚雷を投下した。

魚雷は二本が二隻の駆逐艦に一本ずつ命中して沈没し、八本は炎上していた敵戦艦に命中。

敵戦艦は爆沈した。

「……すまぬ……」

柴神は散った友永に無言で敬礼をして、再び戦場を駆け抜けた。

TURN43（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN44

――旗艦長門――

「第一次攻撃隊より入電ッ！！『敵戦艦一、空母三、巡洋艦三、駆逐艦七隻ヲ撃沈ス』以上ですッ！！」

「第一次攻撃隊の被害は？」

俺はオペレーターに尋ねる。

「……報告では烈風二十二機、天山四七機が撃墜されたようです」

「……敵さんも必死やな。第三次攻撃隊の準備は？」

俺は宇垣に尋ねる。

「後5分で完了します。完了次第発艦します」

「分かった。それと上空迎撃機を増やしとけ。何時敵機に見つかるか「敵機接近ッ！！偵察機のようです」……ほらな？」

「……ですね」

宇垣は苦笑する。

「機種は？」

「アベンチャー雷撃機のようです」

オペレーターが報告する。

「落としますか？」

「……」

俺は考える。

「……落とそう。敵に正確な艦隊を知られたくないしな」

そして、アベンチャー雷撃機は上空迎撃機の烈風に落とされた。

――――淵田美津雄中佐機――――

「ハッハッハ。こりゃあぎょうさんおるでッ！！」

第二次攻撃隊総隊長の淵田美津雄中佐は愛機の天山の偵察席で声を荒げる。

『敵戦闘機接近ッ！！』

「よっしゃ、板谷ッ！！任したでッ！！」

『了解ッ！！』

制空隊隊長の板谷繁少佐の烈風がバンクして敵戦闘機群に向かう。

「さぁて、やるで松崎ッ！！手負いの艦から叩けェッ！！水木、ト連装やッ！！」

「了解ッ！！」

操縦席の松崎大尉が頷き、淵田中佐の天山は敵アメリア艦隊に突入し、通信席にいた水木一飛曹が『トトト……』とト連装を打った。

――――アメリア艦隊旗艦ワシントン――――

「偵察機が敵艦隊を発見しましたッ！！」

「ＯＫ。なら敵の攻撃隊が攻撃終了後に空母艦隊は後方へ退避して攻撃隊を発進させろ。ワンサイドゲームで終わらせるなよッ！！」

「イエッサーッ！！」

アメリア艦隊の対空砲火が一層激しくなった。

――淵田中佐機――

「敵艦隊の対空砲火が激しくなりよったな……」

淵田は対空砲火を見て思う。

「全機に告ぐ。敵戦艦と空母の攻撃は後回しやッ！！先に護衛艦を叩けェッ！！」

天山隊は目標を大型艦から小型艦へと変更する。

「魚雷用意ッ！！」

淵田の一個中隊五機は防空巡洋艦アトランタ級に狙いをつける。

ズガァァァーーンッ！！

「四番機やられましたッ！！」

水木一飛曹が報告する。

「距離千ッ！！」

「魚雷撃ェッ！！」

四機から八本の亜空間魚雷が投下された。

アトランタ級は必死に回避行動を取るが、六本が突き刺さった。

ズガァァァーーンッ！！

アトランタ級は誘爆を繰り返しながら沈没した。

――――旗艦ワシントン――――

「護衛艦艇の一部が落伍ッ！！敵機が落伍した部分から侵入しますッ！！」

「えぇい対空砲火で防げッ！！」

「駄目ですッ！！射程範囲に味方艦がいますッ！！」

「ぬぐぐ……」

ドワイトは悔しそうに拳を握りしめる。

「敵機が空母に向かいますッ！！」

「……フッ」

オペレーターの言葉にドワイトはニヤリと笑った。

「どういう事だッ！！」

天山の操縦席でパイロットが叫ぶ。

「何故空母が墜ちんッ！！」

そこには、ボロボロになりながらも今だに浮いている空母群がいた。

――――旗艦長門――――

「長官、第二次攻撃隊の雷撃隊隊長の村田少佐より緊急電ですッ！！」

「何や？」

「『我、敵空母群ヲ攻撃シ、損傷ヲ与エルモ沈ム気配ナシ』以上ですッ！！」

……何でや？

「……長官、まさか空母群は……」

俺は宇垣を見る。

「……改造空母……か？」

商船を改造したカサブランカ級護衛空母があるからな。

「恐らくそれだと思います」

「攻撃隊の状況は？」

「第三次攻撃隊はもう少しで敵艦隊に到達します。第四次攻撃隊は後十分で準備が完了します」

「……第三次攻撃隊はそのまま敵艦隊を攻撃や。偵察機の数を増やすんや。第四次攻撃隊は一時待機や」

「分かりました」

宇垣が頷いたその時、オペレーターが叫んだ。

「敵の攻撃隊接近ッ！！」

TURN４４（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ４５（前書き）

今回のは投稿してええのか迷いました。

批判が来れば削除又は修正する可能性があります。

TURN45

アメリア軍の空母艦隊（エセックス級十四隻、カサブランカ級護衛空母二三隻）はドワイトの艦隊から少し離れたところにいた。

――ルメイ艦隊旗艦バンカーヒル――

「ルメイ提督、第三次攻撃隊発艦完了しました。引き続き第四次攻撃隊の発艦開始します」

オペレーターがドレッドの髪型をした空母艦隊提督のリース・ルメイ大佐に報告する。

「うむ、これだけ出せば勝てるだろうな。それに……」

ルメイは発艦しようとしているアベンチャー雷撃機を見た。

アベンチャーには二本の大型ミサイルが搭載されていた。

「……我々にはジャップに勝てる武器がある……」

ルメイはそう言った。

――旗艦長門――

「敵機の数は？」

「凡そ三百機余りですッ！！」

「上空には烈風が百二十機……」

……まぁ大丈夫やろ。

「全艦、対空戦闘用意。空母艦隊は後方に退避や」

空母艦隊が後方に下がる。

「烈風隊が空戦に入りますッ！！」

烈風隊と敵の戦闘機であるヘルキャットが猛烈な空戦を展開する。

「アベンチャー雷撃機が烈風隊の包囲網を突破しましたッ！！右舷2時、距離五万宇宙キロッ！！」

「ビーム弾は拡散モードに変更やッ！！全艦取舵三十ッ！！」

「変更完了ッ！！とぉりかぁじ三十ッ！！」

全艦が取舵三十に切る。

「長門、撃ちぃ方始めェッ！！」

ドシュウゥゥーーンッ！！

長門の五一センチ連装ショックカノン四基が火を噴いた。

ビームエネルギーは途中で幾つにも分散してアベンチャー雷撃機を破壊していく。

「十九機撃墜ッ！！」

「主砲連続斉射やッ！！叩き落とせェッ！！」

主砲が連続斉射でアベンチャー雷撃機を落としていく。

しかし、十数機のアベンチャー雷撃機が宇垣艦隊を狙った。

宇垣艦隊は必死に対空砲火と之字運動をするが巡洋艦衣笠がアベンチャー雷撃機に捉えられた。

八本の大型ミサイルが衣笠を狙うが、六本が外れて二本が衣笠の左舷に突き刺さった。

グサァッ！！

シュアァァッ！！

突き刺さった瞬間、衣笠の装甲が溶けて、大型ミサイルが少しだけ進んだ瞬間に大型ミサイルは爆発した。

ズガァァァーーンッ！！

ズガァァァーーンッ！！

「衣笠大破ッ！！航行不能ッ！！」

「何やてッ！？」

たった二本のミサイルで航行不能やて？

「映像はあるか？」

「映像出します」

巻き戻し映像では確かにミサイルの突き刺さった衣笠が大破していた。

……て待てや。

「……まさか……」

「？どうしました長官？」

「い、いや。何もないわ」

……まさかヤマトの武器か？

「衣笠の乗組員の収容を急がせるんや。敵機は？」

「既に退却しています」

「報告します。衣笠ですが、高度の放射能を探知。それに乗組員も放射能に汚染されています」

「……衣笠の乗組員は直ちに放射能を除去させて後方に退避させるんや。衣笠は処分する」

……やっぱりか……。

ヤマトのディンギル帝国が使っていたハイパー放射ミサイルやな……。

何で知ってたんやろ？

たまたまやろか……。

「全艦艇の乗組員には直ちに宇宙服を着させろ。またくるで」

「分かりました」

「第二波接近ッ！！距離五万七千宇宙キロッ！！」

宇垣が答えた時、オペレーターが第二波の接近を知らせた。

「直掩の烈風は？」

「烈風隊百二十機は既に交戦中ッ！！ですが一部の敵機が包囲網を突破ッ！！」

「数は？」

「約百機ッ！！距離三万ッ！！」

ちぃ、多いな。

「全艦対空砲火開けェッ！！一機も生かして帰すなッ！！」

全艦から一斉に対空砲火が発射されて、弾幕を作る。

「敵機の半数が長門に向かってきますッ！！」

ちぃッ！！

「旗艦の集中狙いか……」

アベンチャー雷撃機は対空砲火をものともせずに長門に突入する。

「敵機ミサイル発射しましたッ！！」

「全速回避ッ！！」

「駄目です間に合いませんッ！！」

その時やった。

「く、駆逐艦峯風がミサイルとの間に割り込んできますッ！！」

長門を護衛していた直衛艦の駆逐艦峯風がミサイルの射線に割り込んできた。

峯風の艦橋では艦長以下艦橋にいた全員が長門に敬礼をしていた。

そして峯風に八本の放射ミサイルが命中した。

TURN45（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ４６（前書き）

新米士官先生のタイトルと被ってそうなので再びタイトル変更しました。

大帝国の小説書いてるのに、全く新しい大帝国の小説をいつの間にか書いてる俺は馬鹿なんやろか……。

三笠「馬鹿やろな」

TURN46

「峯風沈没ッ！！更にミサイル接近ッ！！右舷に四本ッ！！」

「対空砲火はミサイルを狙えッ！！」

右舷のパルスレーザー対空砲がミサイルに照準して一斉に攻撃する。

「一本撃破ッ！！ですが三本が……」

「総員衝撃に備えろッ！！」

「ッ！？ま、待って下さいッ！！駆逐艦望月がミサイルとの間に……」

「何ッ！？」

確か望月艦長の清田中佐は……。

「待てや清田ッ！！お前、先月奥さんと結婚したばかりやろッ！！」

望月の艦橋で清田は長門に敬礼をしていた。

「ミサイル、望月に着弾しますッ！！」

その瞬間、駆逐艦望月は木っ端みじんに破壊された。

「清田ァーーーッ！！」

俺は思わず叫んでしまった。

「長官ッ！！八号索敵機より入電ッ！！『我、敵空母艦隊発見ス』」

「長官ッ！！後方の小沢艦隊から緊急電ですッ！！『我、攻撃隊発進ス』以上です」

流石祀梨は早いな。

「全艦、何としてでも耐えろよ……」

俺はそう呟いた。

「見ろ斎藤ッ！！敵空母艦隊だぞッ！！」

第四次攻撃隊隊長の村田重張少佐は愛機の天山の操縦席で後部座席にいる斎藤飛曹長に声をかける。

「こりゃあ大量ですよ隊長」

「よし、全機突撃態勢を作れッ！！」

村田機から『トツレ連装』が発信される。

「敵空母艦隊上空には敵戦闘機がいない……まさに天佑だな。斎藤ッ！！全軍突撃せよッ！！」

村田機から『ト連装』が発信されて、攻撃隊は一斉にルメイ艦隊に群がった。

――――旗艦バンカーヒル――――

「敵機来襲ッ！！」

「く……後少しで攻撃隊が発進出来たのに……」

ルメイが悔しそうに呟く。

しかも、間が悪い事に上空直掩の戦闘機群はいなかった

戦闘機群は各空母で燃料補給をしていたのである。

「全艦対空戦闘ッ！！対空砲火開けッ！！後退しつつドワイト艦隊に合流するッ！！急げッ！！」

「敵機急降下ァッ！！直上ォッ！！」

オペレーターの言葉にルメイは上を見た。

上空から烈風が急降下爆撃を開始した。

「し、しまったッ！？回避行動ッ！！」

「ま、間に合いませんッ！！」

オペレーターは絶叫した。

「くらえッ！！」

烈風のパイロットがミサイルを発射する。

ミサイルは飛行甲板に整列していたアメリア攻撃隊に命中した。

ズガアァァーーンッ！！

ズガアァァーーンッ！！

瞬く間に空母群は誘爆して炎上する。

しかも、誘爆のミサイルは放射能のが入ったミサイルである。

更に空母群が炎上する中、空母群の止めを刺すべく雷撃隊の天山が艦隊に突撃。

天山隊は次々と亜空間魚雷を投下した。

亜空間魚雷の目標は空母群であった。

亜空間魚雷が命中した空母は次々と炎上を拡大し、或いは爆発を起こしながら沈んでいく。

「……くそぉ……」

炎上する旗艦バンカーヒルの艦橋でルメイは悔しそうに言う。

「提督ッ!!退艦を願いますッ!!」

「……覚えておけジャップ……」

ルメイはそう呟いてバンカーヒルから退艦した。

その直後、バンカーヒルは爆沈した。

――――ドワイト艦隊旗艦ワシントン――――

「何?空母艦隊がやられただと?」

「はい。ルメイ提督は無事ですが、空母艦隊は護衛艦を残して壊滅しました」

オペレーターが報告する。

「……スーパー放射ミサイルの効果は絶大だと航空屋は言っていたが、自滅するとはな……」

ドワイトは掃除が完了した右手を装着する。

「全艦、全速前進。これより敵ジャップ艦隊と艦隊決戦をする」

ドワイト艦隊は空母艦隊の負傷者を護衛艦に乗せて後方に退避させて、残りは全て艦隊に組み込ませて日本艦隊に向かった。

――旗艦長門――

「艦隊の被害ですが、駆逐艦八、巡洋艦三、戦艦一隻が沈没或いは航行不能です」

「……何とか被害は最小限やな……」

あれから二波の敵攻撃隊が来たが、何とか退けた。

「損傷艦は後方の空母艦隊と合流や」

「分かりました」

宇垣が頷く。

「紫雲偵察機より緊急電ッ！！『我、敵艦隊発見ス。敵艦隊ハ我ガ艦隊ニ向カッテ進撃中也』以上です」

「敵艦隊は艦隊決戦を挑むんか……なら答えてやるか。全艦、輪形陣を組めッ！！敵艦隊と決戦やッ！！」

全艦隊は輪形陣を組むと、敵アメリア艦隊に向かった。

TURN46（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ４７（前書き）

始めに言います。

すみません、艦隊決戦と言いつつ艦隊決戦はこの話で終わります。

アルェ～？何でやろ……。航空戦は二話続いたのに……。

期待していた皆さんには申し訳ありません。

TURN47

それから二時間が経過した。

「ッ！？敵艦隊発見ッ！！パネルに映します」

パネルに敵アメリア艦隊が映し出される。

「さぁて、やるか。全艦砲雷撃戦用意やッ！！敵アメリア艦隊と同航戦でする」

「砲雷撃戦用意ッ！！取舵一杯ッ！！」

正面から来るアメリア艦隊と同航戦に持ち込む。

――――旗艦ワシントン――――

「ジャップの艦隊が同航戦に入りますッ！！」

「ヤマグチめ、中々ファイトがあるじゃないか」

オペレーターの報告にドワイトがニヤリと笑う。

「全艦砲雷撃戦用意。目標、敵ジャップ艦隊旗艦ナガトだッ！！」

「サーッ！！」

ワシントン以下の艦艇が長門に照準する。

――――旗艦長門――――

「同航戦に入ります」

「よし、照準は敵旗艦や」

「了解」

長門の五一センチ連装プラズマショックカノン四基が敵旗艦に照準を合わせる。

「照準完了ッ！！」

『撃ェーーーッ！！』

記録によればこの時、俺とドワイトは同時に攻撃命令を言ったみたいや。

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

両艦隊から一斉にビーム弾が発射された。

ズガァァァーーンッ！！

ズガァァァーーンッ！！

「命中命中！！敵旗艦に命中していますッ！！」

オペレーターが叫ぶ。

「敵艦のビーム弾が着弾しますッ！！」

「目標はッ！？」

「ぜ、全弾が長門に向かってますッ！！」

うげΣ（ 。Д 。）

「回避航行ッ！！」

「間に合いませんッ！！」

あらぁ～。

「みーくん、大丈夫だよ。真希がみーくんを守るよ」

真希ちゃんがいつの間にかバリアを展開していた。

「バーリアッ！！」

ビーム弾が当たろうとしたその瞬間、長門はバリアに包まれた。

バリアに包まれているため命中はなかった。

――――旗艦ワシントン――――

「マジックみたいだな……」

「冷静過ぎますよ提督」

冷静過ぎるドワイトに副官がツッコミを入れる。

「ハワイ星域会戦でナガトに命中弾が無かったと報告がある。恐らくあのバリアのおかげだろう」

「ではどうしますか？」

「……接近戦に持ち込むか。上手くいけば叩ける」

「分かりました。取舵二十」

――旗艦長門――

「敵アメリア艦隊が徐々にですが接近してきます」

「……ビーム弾が効かんから、接近して魚雷とかで叩く寸法やろか……」

「恐らくは……」

俺の言葉に宇垣が同調する。

「なら……田中とリディアッ！！突撃やッ！！」

『待ってましたッ！！』

『頑張りますね』

両艦隊は速度を上げて敵アメリア艦隊に突撃する。

「全艦は田中、リディア艦隊を援護やッ！！ところでデーニッツはまだか？」

――旗艦ワシントン――

「フン、奴らは分かっていたようだな」

「恐らく」

ドワイトの言葉に副官が頷く。

「どうしますか？」

「ジャップの水雷戦隊を迎撃だ。ジャップの水雷戦隊は手強いからな」

「了解しました。ターゲットをジャップの水雷戦隊に変更します」

全艦の主砲が田中、リディア艦隊に照準する。

「ファイヤ『ズガアァァーンッ！！ズガアァァーンッ！！』……何だと？」

ドワイトが攻撃開始を告げようとした時、戦艦群が次々と爆発をして火災を発生させた。

「何事だ？」

「分かりませんッ！！」

ズガアァァーンッ！！

また戦艦が一隻、炎に包まれた。

「ッ！？亜空間ソナーに反応ッ！！ジャップのサブマリンですッ！！」

オペレーターが絶叫した。

――旗艦ファルケナーゼ――

「……間に合いました……」

潜望鏡を覗いているデーニッツが呟く。

本当ならもっと早くに雷撃する予定だったが、ファルケナーゼの機関が故障したのでそれの修理に手間取ったのである。

「亜空間魚雷装填完了ッ！！」

「行きますッ！！全弾発射ッ！！」

潜水艦群から次々と亜空間魚雷が発射され、それらは敵アメリア艦隊に突き刺さった。

――旗艦長門――

「敵アメリア艦隊が乱れていきますッ！！」

「今やッ！！この気を逃すなッ！！全艦撃ちまくりながら突っ込み

エェェーーーッ！！！」

全艦隊が一斉に突撃を開始した。

――――旗艦ワシントン――――

『第八居住区火災ッ！！』

『四番砲搭被弾ッ！！攻撃不能ッ！！』

『Eブロックに火災ッ！！ひ、ギャアァァァァァッ！！』

「提督、ワシントン大破。航行不能です」

副官がドワイトに告げる。

「……ここまでだな。総員退艦せよ」

艦橋要員達は次々と艦橋を出るが、ドワイトは出なかった。

「提督お急ぎ下さい」

「俺は残る」

「て、提督ッ！！」

「俺がいたら救命艇の酸素が無くなっちまう。それに俺に家族はい

ない」

「……分かりました。私もご一緒させてもらいます。私も家族はいませんし」

「……いない者同士か……それもまたいい」

ドワイトが笑う。

ガンッ！！

何かがぶつかった音がした。

『じ、ジャップの陸戦隊が乗り込んできますッ！！』

「……俺達も年貢の納め時のようだな……」

「えぇ……」

そして、ドゥービル・ドワイトは捕虜になった。

TURN47（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ４８（前書き）

このＴＵＲＮから改行しています。

具体的には。

……。

と会話以外は一マス開けています。

リディアは可愛いんです。

TURN48

「……ぅ……」

朝起きると、俺は全裸やった。

隣ではリディアが同じく全裸で寝ていた。

とりあえず、俺は服を着るために着替える。

「……ん……」

あ、リディアが目を覚ました。

「……お早うございます長官」

「あぁお早うリディア」

さて、何故こうなったか説明するか。

まぁ理由といっても、昨日リディアが「長官、遊園地行きましょう」と誘われた。

何でも、ＵＳＪ星域には大型の遊園地があるらしい。

ＵＳＪて、大阪星のユニバやろか……。

現実世界にも大阪にユニバあるしな。

まぁそれに行くためにリディアから誘われたんやな。

俺もたまたま非番やったから了承して一日中遊んでた。

んで、ちょっと高そうな店でメシを食べた。

酒も飲んでたからテンションが上がっていた。

その時にリディアが躓いて、助けようとした俺も躓いて気づけばリディアの胸に手が触ってた。

思わず、誰もいなかったからつい軽くキスもしてしまったらリディアが頷いてラブホへ直行。

いやぁ～、酒の力て偉大やねんなぁと思ったな。

ララーと似てるが気にするな。

「……昨日は凄かったよ。私、処女だったのに……／／／」

リディアが顔を赤くする。

……正直に言います。

スゲー可愛いですッ！！（キリ（、・ω・´）

「リディアッ！！」

「へ？えぇぇッ！？／／／」

俺は思わずリディアに抱き着く。

「ちょ、ちょっと長官……」

「もう一戦レッツゴーやッ！！」

「で、でも昨日、五回も私に出したのに……」

とりあえず、リディアが何か言う前に口を塞いだ。

「ちゅ……ん……ちゅむ……ん……ふ……」

リディアが顔を赤くする。

というわけで三笠、行きまぁすッ！！

――――旗艦長門――――

「ぅ～、歩きにくいよ～」

「いやマジですみません」

やっぱ、処女喪失後は歩きにくいねんな。

「まぁいいよ。次は優しくしてね？」

「次もありすか？」

「……ぅん……」

リディアが可愛いのでとりあえず頭を撫でておいた。

――――長官室――――

「ここはハローと言うべきかなドワイト提督？」

「フフ、コンニチワでもいいぞ」

俺は捕虜にしたドワイトと話しをしていた。

「ドワイト提督が我が軍に入ってくれればかなり戦力は助かるんやけどな……」

「……条件によるな……」

成る程な。

「勿論、給料や待遇は良くするで。副官は貴官の副官をしていたフレッチャー君にしてもらう。それに貴官が好きなペイントとカスタムも許可するで。ただし、ペイントは自宅と旗艦のみな」

「……OKだ。流石は日本軍の海軍長官だ」

ドワイトが了承する。

「契約は成立やな。あぁそれとやけど、カスタムする時はドリルを付けてみないか？」

「ドリルだと？」

「ドリルは男の浪漫やと思うんやけどな……」

「……いいぜ長官。何だか燃えてきたぜ」

ドワイトが笑う。

色んな意味で友情が出来た。（笑）

――――食堂――――

「……はぁ……」

食堂で真希ちゃんと瑠璃と一緒に食べていると、何か元気が無いキリングとそのメイドのコロネアがいた。

「どないしたんやキリングと細目？」

「……長官」

「長官、死にたいんですか？」

コロネアがナイフを構える。

「いや冗談やろが……いやな、お前ら元気が無いから気になってな」

「……昨日、両親から連絡が来て妹のキャロルが若草会に行ったまま行方不明なのよ」

「ルーズに捕まった……可能性が高い……か……」

キリングが無言で頷く。

「ま、心配すんなや。いくらルーズでも財閥の長を殺せば何かと面倒になるし、恐らく人質になってるかもな」

「……そう願いたいわ」

キリングが頷く。

「さて、メシを食おうや……て麺が伸びとるし……」

いつの間にかラーメンの麺は伸びていた。

ちなみに、真希ちゃんと瑠璃は既に食べていた。

「フフフ……」

キリングが笑う。

俺はラーメンを食べる。

「そういや、こないだの会戦で使われたミサイルは何か分かったか？」

「えぇ。両親に聞いたらスーパー放射ミサイルと言うミサイルらしいわ。ＵＳＪ星域で炎上していた無人の水雷艇母艦を捕獲したらあったらしいわ」

……まんまハイパー放射ミサイルやなぁ。

「ま、都奈海に対策をしてもらってるから何とかなるやろ」

俺は再びラーメンを食べ始めた。

TURN48（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN49（前書き）

古賀提督イベントとクーの接触イベントです。

TURN49

――旗艦長門長官室――

俺はいつものように書類業務をしていた。

「た、大変です長官ッ！！」

宇垣が慌てて長官室に入ってきた。

「何や宇垣？ガミラスが遊星爆弾でも発射したんか？」

「違いますッ！！山本中将が倒れましたッ！！」

「な、何やてッ！？すぐに病室に行くでッ！！」

「はいッ！！」

俺は仕事を放り出して、山本さんの病室に向かった。

――山本さんの病室――

「山本さんッ！！」

「……おう、三笠」

病室に入ると口元に血の跡が付き、顔もやせ細っている山本さんがベッドで横になっていた。

「……すまねぇな三笠。俺ぁ、もう駄目なようだ……」

山本さんは苦しそうに俺に言う。

「山本さん……」

「……三笠、日本を……頼むぞ……」

「……はい……」

俺は思わず涙を流していた。

「……ひとみ君……頼みがあるんじゃ……」

「何ですか山本さん？」

傍らにいた古賀が山本さんに問いかける。

「……俺の……代わりに提督になってほしいんじゃよ……」

「えぇぇッ！？で、でも私にはそんな大役出来ません……」

古賀が慌てる。

「……なぁに、大丈夫じゃよ。ひとみ君なら出来る……」

「山本さん……」

「……これで……思い残す事はない……三笠……頼んだぞ……
……」

『山本さんッ！？』

古賀が慌てて脈を計る。

「……」

古賀は無言で首を横に振った。

「……全員、山本無限中将に敬礼ッ！！！」

ザッ！！

俺達は山本無限中将に敬礼をした。

その後、山本中将の遺体は日本星域に移送され、国葬となった。

よく考えたら日露戦争でも大活躍してたらしいからな。

そして、山本元帥――二階級昇進をして元帥となった――は皇居

の近くにある戦没者を奉る靖国神社に軍神として奉られる事になった。

本人は多分望んでないと思うけどなぁ。

――――旗艦長門長官室――――

「失礼します」

俺はいつものように書類業務をしていると、古賀が入ってきた。

看護師の服ではなく、将官服を着ている。

「……なるんか？提督に？」

「……それが山本さんの願いですから……」

古賀は覚悟を決めていた。

「一応は軍隊経験はあるしな。何か山本さんから提督について聞かされた事とかある？」

「聞かされた事は無いですけど、本を読まされました」

古賀が俺に差し出した本は『君も明日から提督にッ！！提督の大戦略』の初級、中級、高級の本やった。

……これ、俺も持ってるし。

「読破はした？」

「はい、しました」

まぁ大丈夫やろ。

「艦隊は山本さんの艦隊をそのまま預けるわ。旗艦も山本さんと乗っていた日進でええやろ」

「何から何までありがとうございます」

古賀は俺に頭を下げる。

「ええよええよ。ところでその将官服は……」

「はい、山本さんのです。これがあると山本さんが近くにいるみたいでホッとするんです」

「……そうか。ま、これから宜しくな」

「はいッ！！」

古賀は俺に敬礼をした。

それから数日が経過した。

俺達日本連合艦隊（今まで海軍の艦隊に名称は無かったから俺が付けた。やっぱ日本海軍と言えばこれやからな）は再びＵＳＪ星域にいた。

勿論、理由はあった。

「長官、避難船の収容を始めます」

「おぅ」

俺の言葉に宇垣がテキパキと動く。

アメリア本国で、ルーズが暴走をしているために巻き添えを喰らいたくないアメリア市民が日本の星域に避難民として避難してきている。

今のところ、落ち着く場所としてハワイ星域とＵＳＪ星域を指定にしている。

「もう少しで収容人数は十億人を越えますね」

「ふむ、日本の人口の一億二千万人は越えたか……」

「あの、日本の人口は四十七億二千万ですけど……」

宇垣が訂正する。

「……気にするな。ただの電波を拾っただけや」

「は、はぁ……」

宇垣が不思議そうに言う。

「長官、長官にお会いしたいという女性がいるんですけど……」

兵士が報告に来る。

「誰やろ？」

「若草会と言えば分かると言っていますが……」

……成る程なぁ。

「分かった。長官室に通さして」

「分かりました」

さて……と。

――――長官室――――

「それで……若草会が何の用なんやろか？」

俺はソファーに座る女性に言った。

ちなみに俺の左右には宇垣と、キリング、コロネアがいる。

「私はロスチャ財閥で若草会のメンバーのクー・ロスチャと言います」

「すっきり白ブドウか？」

「え？」

「いや違いますから」

分かってるわ宇垣。

「ふむ。で、そのロスチャさんが俺に何の用？」

「……お願いします。ハンナを…若草会リーダーのハンナ・ロックを助けてほしいんですッ！！」

ロスチャは俺らにそう言った。

TURN49（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN50（前書き）

祀梨とアドルフイベントです。

三笠「何かヒロイン多くないか？」

自分が大帝国の好きなキャラをヒロインにしてるからな。

ザッと二十人くらいか？

三笠「……俺を殺す気か？」

……もげろ。

三笠「ぶっとばすでッ！！」

TURN50

若草会のメンバー、クー・ロスチャ（実は男だった事にすんげー驚いたッ！！ラピュタの空賊みたいにすんげー連発やった……）との会談から一週間が経った。

――――シカゴX星域――――

「長官、敵艦隊はあらかた片付けました」

オペレーターが報告する。

「分かった。山下に連絡や。突撃や」

陸軍の輸送船団が動く。

「そういやルメイは捕まえたか？」

「はい、捕まえました」

宇垣の言葉に俺はホッとする。

ルメイはアメリア軍の中でも最後の航空艦隊提督やからな。

是が非でも捕まえたかった。

「……しかし、これでルーズが和平停戦してくれたらええねんけどなぁ……」

俺は長官席にどっぷりと座った。

ロスチャの要求は若草会リーダーのハンナ・ロックの救出やった。

キリングによれば、世界の資源を掌握するロック財閥の令嬢らしい。

俺の回答は「まぁええよ」や。

アメリア滅ぼすから丁度ええしな。

そんかわり、若草会は解散して、四財閥も縮小する事を条件にした。

ただで救出はしないからな。

ギブアンドテイクてやつやな。

ん？違うって？

……気にするな。

それから二週間をかけてシカゴX星域を占領した。

――――海軍省長官室――――

「ハンナ・ロックはシカゴX星域では見つかっていない。……てことはワシントン星域の何処かに隠れているか、ルーズに捕まって性奴隷にされてるかやな」

「何で分かるんですか？」

長官室に遊びに来ていた祀梨が俺に聞いてくる。

「ルーズは今まで若草会の圧力に耐えていたけど、遂に怒りが頂点に達して決壊した。となればや、今まで自分を馬鹿にしていた彼女を俺の物にしてやる……となるわな」

「それはエロゲから？」

「あったり～」

大体はそうなんのや。

「長官、自分がハッキングして調べてみましょうか？」

「出来んのか？」

「趣味がハッキングなのを忘れちゃ駄目ですよ」

祀梨がVサインを作る。

「……分かった。ハッキングしてみてくれ。ただし、無茶はすんなよ？」

「分かりましたよ」

一応、都奈海を呼んどくか。

「フンフ～ン♪こんなのは効きませんよ」

祀梨が次々とセキュリティを突破していく。

「俺様攻め、ボクっ子攻め、ヘタレ攻め……」

……セキュリティを作ったやつは祀梨と同類かよ……。

「何をしているんだ？」

「ん？アドルフか」

都奈海と一緒にアドルフが来た。

「たまたま平賀所長の研究室にいたんだ。面白そうだから見に来たんだ」

成る程ねぇ。

「わわッ！！やばいセキュリティ触っちゃったッ！！……な、何ですとッ！！」

何か祀梨が一人で騒いでるな。

「……そんなカップリングは……駄目です……」

「お、おい祀梨？」

「……きゅぅ～～」

「山口、早く小沢を助けないと脳細胞が破壊されるぞッ！！」

都奈海が叫ぶ……ってマジかよッ！！

「どないしたらええんや？」

「小沢を叩き起こすしかない。お前も中に入り込め」

「……マジすか？」

「マジだ」

「……分かった。ついでにアドルフも行くで」

「え？わ、私もかッ！？」

「生贄は一人でも……何でもないわ」

「今生贄て聞こえたぞッ！！」

とりあえず、俺とアドルフでネット世界へ行った。

プラグインッ！！トランスミッションッ！！（、・ω・´）（違うわ）

「……膨大なデータやな……」

「まぁネット世界だからな……」

俺とアドルフはどんどんと下に落ちていく。

「……まぁいたな……」

「……あぁ……／／／」

アドルフが顔を赤い理由は、祀梨が自慰してるからやな。

「……田中×山口の受けは田中ですぅ。受けは山口じゃないですよぅ……」

「……／／／」

アドルフ、見てない振りをして見てるんやな。

てか、田中×俺のカップリングかよ……。

「まぁ……とりあえずは二人共美味しくいただくか」

「え？私もッ！？」

「正直言うと、もう我慢出来ないし。原作の祀梨のイベントも大体こんな感じやったしな。アドルフはおらんかったけど……」

「原作て何だァァァーーーッ！！」

ただの電波や。

とりあえず、アドルフの口を塞ぐ。

「ちゅむ……んむ……ちゅる……ん……」

アドルフが顔を真っ赤にする。

可愛いなぁ。

「……それで色んな意味での刺激を与えたのか？」

「……まぁそうやな……」

俺の左右にはアドルフと祀梨が撃沈していた。

「……ハーレムでも目指すのか？」

「いや、そんな気はないんやけどな……」

何でやろな？

『元がエロゲーやからやｂｙ作者』

「それで、ハンナ・ロックの居所は分かったのか？」

「ホワイトハウスにいるみたいや。飾った人形みたいになってるわ」

「……殺されたのか？」

「いんや。予想通りに性奴隷にされてるわ。それでもまだしっかりとしているけどそろそろ限界やろな」

「……明石大佐に頼んでみてはどうだ？」

「明石大佐はソビエトの動きを見張ってもらってるねん。最近、シベリア星域に複数の艦船が増えてるらしいしな」

俺は長官席に座る。

「即刻、アメリアを制圧しないとな」

俺はそう言った。

TURN50（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN51

幾度かの偵察によれば、ワシントン星域には小規模の有人艦隊と特殊機械でルーズの脳波の命令で動く無人艦隊がいた。

――旗艦長門長官室――

「ルーズの脳波の命令で動く無人艦隊か……」

ヤマトの永遠にの無人艦隊もそう動くようにしてたら壊滅はなかったかな？

「これは諸刃の剣だな」

報告を聞いていた都奈海が言う。

「何でや？」

「旗艦が被弾した場合、火災や爆風等の衝撃で特殊機械の部品等が破損したら脳細胞が焼け切れて、下手をすれば廃人になる可能性は大だな」

成る程な。

「なら、卑怯やけどルーズの旗艦を真っ先に叩けば一気に勝てるな」

「といっても私のは理論だが……」

「ですが閣下。偵察機の報告ですと、ルーズ艦隊には防空艦艇を多数配備していると……」

今日の書類業務手伝いのいずみが言う。

「それが問題やねんけど、一個だけ手はあるねんな」

「手……ですか？」

いずみが首を傾げる。

「あぁ。それよりいずみ。元愛国獅子団を狙った殺人事件が起きてるから気をつけなあかんで」

「はい、近所に宇垣さんとキャシーさんが住んでますので二人に帰り道を一緒に帰ってます」

「そうか……。ま、気をつけてな」

「はい」

いずみが頷く。

「で、一個だけの手とは？」

都奈海が聞いてくる。

「あぁ、柴神様と零戦や」

俺は二人に笑った。

――会議室――

俺は提督達を長門の会議室に集合させた。

「皆を集めたのは他でもない。……いよいよ、アメリア共和国最後の星域であるワシントン星域を攻略するッ！！」

『ッ！？』

その瞬間、提督達の表情が変わった。

「それで……ワシントン星域を占領したら私達はどうする気なの？」

キリングの隣にいたツインテールの女性――確か妹のキャロル・キリングやったな――が俺に聞く。

「……別にどうもしないで？お前らは日本人やねんからな」

帝が進めている日本人化政策は国民に受けていた。

「エッヘンです」

帝が無いむ……ゴホン。

帝が胸を張る。

「……山口、覚えておいて下さい」

マジで止めて下さい。（汗）

「アメリア有人艦隊の攻撃艦隊はアドルフ、田中、キリング妹の三個艦隊でやってもらいわ。んで、ルーズの無人艦隊には俺、祀梨、桜花、古賀、リディア、キリング、ハルゼーの七個艦隊でやる」

「えッ！？」

編成艦隊に自分の名前があった事に古賀が驚く。

「古賀はまだ提督での実戦経験は無いけど、山本さんの横でいつも戦況は見ていたと思うから名をあげたんや。補佐としてキリング、頼むで」

「了解です。長官の期待に答えましょう」

キリングが俺に敬礼する。

「わ、私もですッ！！」

古賀も慌てて俺に敬礼する。

「よっしゃ、期待してるからな。それと、今回の作戦でこの戦局の鍵を握る人物がこの中にいる」

『……』

皆がその誰かを探している。

「それはな……柴神様と専用機の零戦やッ！！」

「うん？私かね？」

柴神様が驚く。

「それは今から説明しますよ柴神様。宇垣」

「はい」

宇垣が部屋を暗くしてプロジェクタを起動させた。

「では説明します」

宇垣の説明が始まった。

それから五日後、日本連合艦隊はワシントン星域に進出していた。

――旗艦長門――

「長官、前方と左舷１０時に敵艦隊を発見しましたッ！！」

オペレーターが報告する。

「ん、左舷１０時は有人艦隊やな。アドルフ以下の艦隊は左舷１０時の有人艦隊を攻撃や」

アドルフ以下の三個艦隊が進路を左舷１０時に変更する。

「祀梨、ハルゼーの艦隊は攻撃隊の発艦準備や」

『いつでも行けますよ』

『こっちも行けるわよ』

二人が通信で報告してくる。

「あんがと。……柴神様、行けますか？」

俺は祀梨の旗艦翔鶴にいる柴神様に声をかける。

『うむ、何時でも行けるぞ』

「了解です。柴神様、発艦せよ」

『うむ』

翔鶴の電磁カタパルトから柴神様の専用機である零戦二一型が発艦する。

柴神様はそのまま単独でルーズの無人艦隊に向かった。

「長官……本当に成功するんでしょうか？」

隣にいる宇垣が俺に聞く。

「現状で、これを出来るのは柴神様と零戦だけや」

俺は宇垣に言う。

柴神様だけの単独攻撃は勿論理由はあった。

それは柴神様の空戦テクニックと、専用機である零戦の可変戦闘能力にあった。

TURN51（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ５２（前書き）

この世界の柴神様の零戦は可変戦闘が出来るようになっています。

ＯＰでは普通に上昇していたとか言わないで……（滝汗）

TURN52

「……まさか、私がこの戦いの鍵とはな……」

零戦の操縦席で、柴神様が笑う。

――――回想――――

「まず、これを見てくれ。偵察機が撮影してきたルーズの旗艦を守る艦隊や」

映像には多数の防空巡洋艦やバリア艦、ミサイル妨害艦がルーズの旗艦を護衛していた。

「ビームによる砲撃、ミサイルによる飽和攻撃、航空機による攻撃はルーズ艦隊にはあまり効かへんと思う」

「じゃあ、近づいて光子魚雷を放ったらどうかな？」

雷撃屋らしいリディアが言う。

「それも考えたみたわ。シミュレータでやってみたけど、田中、リディアの艦隊で突撃させたら両艦隊とも五割近くの艦艇を喪失する計算になっとるから却下やねん」

「そうなんだ」

リディアが頷く。

「じゃあ、どうして柴神様と零戦が鍵になるのかしら?」

キリング姉が三笠に言う。

「柴神様の専用機の零戦は、不老不死の柴神様の能力を最大限に出せるように可変戦闘が出来る機体やねん」

今で言うとＵＦＯの不規則な飛行や、ヤマトのディンギル軍の戦闘機等。

「柴神様は可変戦闘が出来る零戦でルーズ艦隊の防空巡洋艦の戦闘能力を潰してほしいんです。防空巡洋艦を潰したら後は祀梨とハルゼーから攻撃隊を発艦させます」

三笠が柴神様に言う。

「……良かろう。日本のために思う存分暴れてやろうではないか」

柴神様はニヤリと笑った。

――――回想終了――――

柴神様は懐から必勝と書かれた日の丸の鉢巻きを取り出して付けた。

「……では行くとするかッ！！」

零戦は速度を上げて、ルーズ艦隊に突入した。

――――ルーズ艦隊旗艦フランクリン――――

『テキセントウキセッキン』

「たった一機の航空機で何が出来るんだッ！！」

ＡＩの報告にルーズが吠える。

「撃てッ！！叩き落とせッ！！」

ルーズの命令は直ぐに無人艦隊に伝わり、防空巡洋艦の主砲が砲身を高く上げる。

そして一斉に対空砲火を放った。

――――零戦――――

「これぐらいの対空砲火は何ともないッ！！」

柴神様は迫り来るレーザー光線を左右に、上下に、斜めにと人間では操作不可能な可変戦闘を繰り返しながら一隻の防空巡洋艦の艦橋に、搭載している十二・七センチ単装プラズマショックカノンを叩き込んだ。

ズガァァァーーンッ！！

艦橋にはルーズの命令を傍受する通信機具があり、爆風とエネルギー光線で破壊されてしまう。

被弾した防空巡洋艦はたちまちの内にコントロール不能となり、僚艦に衝突する。

「よしッ！！」

柴神様は次々と防空巡洋艦の艦橋を破壊していった。

――旗艦長門――

「敵ルーズ艦隊が乱れましたッ！！」

オペレーターが報告する。

「祀梨、ハルゼーッ！！攻撃隊は全機発艦やッ！！攻撃目標はバリア艦と防空巡洋艦やッ！！」

『了解です』

『任しといて』

二人は頷く。

両艦隊から攻撃隊が発艦していった。

――旗艦フランクリン――

「えぇいッ！！たった一機の戦闘機にこうまでやられとはッ！！」

艦橋でルーズが罵倒する。

『テキコウゲキタイセッキン』

「迎撃だッ！！迎撃しろッ！！」

ＡＩの報告に、ルーズが怒鳴る。

『ゲイゲキフノウ。イージスカンブタイカイメツジョウタイ』

「何だとォッ！！」

ルーズが吠えると同時に、攻撃隊が一斉に攻撃を始めた。

――――旗艦長門――――

「全艦隊、速度を上げろ。これよりルーズの止めを刺すッ！！」

「はいッ！！」

全艦隊が速度を上げる。

「ルーズ艦隊との接触は何時頃になるんや？」

「恐らくは2時間くらいでしょう」

俺の問いに、宇垣が答える。

「今のうちに乗組員達に戦闘食を配らせるんや。腹減ったままやと戦闘にならんしな」

「分かりました」

そして乗組員に戦闘食が配られた。

ちなみに、今日の戦闘食はお握り三個、沢庵数切れ、茹卵一個やった。

……何で大和の最後の戦闘食なんやろか……。

2時間後、俺達はルーズ艦隊を発見した。

TURN52（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN53（前書き）

ルーズは少し変えてます。

TURN53

――旗艦フランクリン――

『大統領～、大丈夫ですか～？』

ルーズの脳波で動かす無人艦隊を開発したマイク・マンハッタンはルーズの無事を確認する。

「ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ。いけ、敵を潰せッ！！」

『あ～、こりゃぁ駄目だな。急いで逃げるか』

マンハッタンはそう言って通信を切った。

「……行ったか……」

すると、今まで精神が崩壊していたと思っていたルーズは何食わぬ顔でいた。

「……これでも、昔は一戦隊の司令官をしていたんだ」

ルーズは連合艦隊を見て微笑んだ。

「行くぞッ！！八十一番から百一番の艦隊は左翼へッ！！六十番か

ら八十番は右翼へ展開せよッ！！残りは正面に展開だッ！！主砲フアイヤーッ！！」

『ホウゲキカイシ』

ＡＩが告げると、全艦隊は分かれて一斉に連合艦隊に向けて砲撃を始めた。

――――旗艦長門――――

「敵艦隊は三方面に展開しますッ！！」

「古賀とキリング姉は左翼へ展開やッ！！桜花とリディアは右翼へ展開ッ！！祀梨とハルゼーは後方へ後退して攻撃隊を出すんやッ！！正面の敵は長門が引き受けるッ！！」

「長官ッ！！アドルフ艦隊より通信ですッ！！」

通信をパネルに切り替えるとアドルフが映る。

『アメリアの有人艦隊は壊滅させた。直ちに第一艦隊に向かうぞ』

ちなみに第一艦隊は俺の艦隊の事や。

「分かった。期待してるで。皆、今が頑張り時やッ！！」

『オゥッ！！』

皆が頷く。

「敵艦隊、ビーム発射ッ！！」

「無人バリア艦はバリア展開ッ！！」

無人バリア艦は艦隊を包み込むバリアを展開する。

ビーム弾は全てバリアで弾いた。

「今度はこっちの番やッ！！全艦砲雷撃戦用意ッ！！」

「全艦隊砲雷撃戦用意完了ッ！！」

「全艦撃ちぃ方始めェッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

全艦艇から一斉にプラズマショックカノンが発射された。

――――旗艦フランクリン――――

『クチクカンホープチンボツ。ジュンヨウカンクインシータイハ、コウコウフノウ』

ＡＩがただ冷静に状況をルーズに報告する。

「左右の艦隊から崩せッ！！魚雷も撃ちまくれッ！！」

――――旗艦日進――――

「戦艦春日被弾ッ！！被害は軽微ですッ！！」

オペレーターが古賀に報告する。

「分かりました。全艦被害を気にせず突撃ッ！！」

古賀艦隊は速度を上げて左翼艦隊を砲撃していく。

しかし、左翼艦隊の抵抗は激しかった。

ズガァァァーーンッ！！

「キャアァァッ！！」

古賀は衝撃で床に叩きつけられた。

『左舷損傷ッ！！』

『左舷五番隔壁閉鎖ッ！！空気が洩れていますッ！！』

『宇宙服の着用しろッ！！ダメコン隊かかれッ！！』

各部署から次々と報告が来る。

「やっぱり古賀提督では……」

朝倉砲術長が呟く。

「提督ッ！！指示をッ！！」

「……」

古賀は無言で立ち上がり、艦橋要員を睨みつけた。

「何をしている朝倉砲術長ッ！！」

「……え？」

「貴様の任務は何だッ！？敵艦を砲撃する事のはずだッ！！サッサと撃たないかッ！！」

「は、はいィッ！！」

「これくらいの事でへこたれるな糞どもッ！！日進は沈まんッ！！」

『はいッ！！』

何時もにこやかだった古賀は今では目つきが悪く、レディースの総長のようになっていた。

――スカーレット艦隊旗艦肥前――

「日進より通信です。『被弾するも被害は軽微なり』以上です」

オペレーターがスカーレットに報告する。

「それならいいわ。全艦速度を上げて突撃よッ！！」

「御嬢様、コーヒーです」

スカーレットのメイドであるコロネアがスカーレットにコーヒーを差し出す。

「ありがとうコロネア」

そして、ルーズの左翼艦隊は徐々に押され始めた。

――旗艦長門――

「長官ッ！！古賀、キリング艦隊が突撃を開始しましたッ！！敵左翼艦隊は押されていますッ！！」

「こっちも負けんなッ！！対宙艦ミサイル発射ァッ！！」

シュバババッと長門の両舷から多数の対宙艦ミサイルが発射される。（ヤマトの対空ミサイル発射口と一緒）

ミサイルは対空砲火で数を減らしながらもルーズ艦隊の旗艦フランクリンに命中した。

TURN53（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN54（前書き）

後半は……まぁ桜花フラグのための下準備です。

TURN54

ズガアァァーンッ！！

「グオォッ！！」

ルーズは衝撃で床に叩きつけられた。

『サゲンソンショウ。カサイハッセイ』

「ぬうぅ……直ぐに消火せよッ！！被弾周辺の隔壁は閉鎖しろッ！！」

『イエッサー』

それでも、旗艦フランクリンが沈む気配はない。

『サヨクカンタイノソンショウリツガ八十％ヲコエマシタ』

「……所詮は無人艦隊か……」

ルーズはヨロヨロと立ち上がって席に座る。

「……これまで……か……」

『コウホウヨリハンラングンセッキン』

ＡＩは冷たくルーズに報告した。

――旗艦長門――

「ルーズ艦隊の後方から反乱軍の艦隊やて？」

「はい、反乱軍艦隊旗艦モンタナがいます」

オペレーターがパネルに映す。

……確かに反乱軍艦隊旗艦モンタナやな……。

「反乱軍艦隊の様子はどうなってんのや？」

「は、ルーズ艦隊を後方から攻撃しています。ルーズ艦隊の足並みが乱れています」

……今がチャンスやな。

「全艦隊一斉に突撃やッ！！ルーズの腹に主砲を叩き込めッ！！」

連合艦隊は一斉に突撃を開始した。

――――旗艦フランクリン――――

「……」

『ショウカフノウ』

ＡＩは絶えずその言葉を繰り返していた。

既に延焼は艦橋にまで及んでいた。

バキャンッ！！

「ゴホゴホッ！！……やっと見つけたぞルーズ」

艦橋に入り込んできたのは反乱軍のリーダーであるイーグル・ダグラスであった。

「……ダグラスか……」

「さぁ観念しな」

ダグラスは銃を構える。

「……私はアメリアを幸せにしたかった……」

ルーズが語りだす。

「私の家庭は貧しくてな。父親はギャンブルに走り、母親は他人の男に己の股を開かせていた。私はそんな暮らしを国民にはさせまい

と誓って政治家を目指した。……それが今や若草会の奴隷で、遂にキレたら国民には暴走と呼ばれた。何のために私は大統領になったんだッ！！」

「……」

ルーズの叫びにダグラスはただ黙っている。

「……ダグラス。君には済まない事をしたな」

「……太平洋艦隊司令長官の解任か？」

「本来なら続投だが、若草会が入り込んでな。済まなかった」

「今更謝られてもな……」

「フフフ、そうだな……」

ルーズは笑う。

「……ダグラス、アメリアを頼んだぞ……」

「言われるまでもないさ」

「……そうか」

ルーズはダグラスの言葉に微笑み、懐から銃を取り出してこめかみに当てて引き金を引いた。

タアァーンッ！！

「……見届けたぜ。貴方の最後をなルーズ司令」

かつて、ルーズの部下だったダグラスはルーズに最後の敬礼をしてフランクリンを後にした。

そして、ダグラスが脱出したかを合わせるように、ルーズ艦隊旗艦フランクリンは大爆発を起こしながら沈没をした。

それから二週間が経過した。

――――海軍省――――

「はぁ……」

「何を溜め息を吐いてるんですか？」

「いやぁ、相変わらず書類が減らんなぁとな……」

相変わらず、俺の机には多くの書類があった。

「アメリアを滅ぼしてから一気に増えた気がするわ……」

「増えてないわ。多分……」

俺の秘書になっているゲッベルスが呟く。

ゲッベルスは書類業務が得意と分かって直ぐさま秘書に採用した。

アドルフを愛でる時間が無くなるとか言ってたけど、ゴスロリはどうや？て言ったら即採用されていたな。

アドルフ、ありがとう。

「それで、何時エイリスとソ連に攻め込むのかしら？」

ドクツはエイリスとソ連に滅ぼされたも同然やったのでゲッベルスが聞いてくる。

「即進撃……と行きたいけど、念には念を入れて全艦隊の艦艇を８０式に更新してからやな」

後三割くらいらしいしな。

「まぁ、問題は古賀の二重人格かな？」

古賀の怒る人格はかなり兵士達の間では人気らしいな。

山本さんは知ってたんやろか？

「三笠」

桜花といずみ、キャシー、ラスシャラ、山下が入ってきた。

「何や？」

「昼ご飯を作ったんだけど食べないか？」

「貰う（即答）」

いや桜花のは美味いしさぁ。

「カレーなんだけど……」

「ええよええよ」

桜花に皿を渡してカレーを注ぐ。

美味そうやなぁ。

「いっただきまぁす」

……△♪☆∀つ！？≠∞♂★⊥。

バタッ！！

……カレーを食べた瞬間、何かとてつもない痛さが舌からしてきて、俺は意識を失った。

TURN54（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN55（前書き）

今回からオリイベントに入ります。

TURN55

「……知らない……天井だ……」

嘘や。医務室の天井や。

だって一回言ってみたかってんや。

「あ、起きたかい？」

桜花がヒョコッと顔を出す。

……とりあえず、桜花を呼び寄せてアイアンクローをかけた。

「ノーッ！！ノーだよ三笠ッ！！」

「何がノーやねん桜花ッ！！俺に対人兵器を食わせたやろッ！！」

「あれは山下長官にキャシー、ラスシャラが作ったんだよ」

「お前は一体何を教えたんやッ！？どうやったらあんな味になんねんッ！！三途の川で死んだ親父と母さん見たでッ！！」

二人とも驚いてたからなぁ。

「とりあえずムカつくから胸を揉むッ！！」

「何でそうなるのさッ！！ん……や……くふ……」

……正直に言うと、かなりエロいっす。

「……手を離せ」

首筋に日本刀を突きつけられる。

「山下ッ！？」

「全ては聞いてた。その……済まなかった……」

山下達が頭を下げる。

「い、いやええねん。次は失敗しんかったらええんやからな」

「分かった。次は美味いもんを作るぞ」

「あぁ」

キャシーとラスシャラが頷く。

「次は肉じゃがを作る」

「そりゃあ嬉しいけど、何でそこまですんのや？」

「……こないだの恩を返してもらってないからな……／／／」

……山下可愛いなぁ。

「期待してるからな」

「あぁ」

三人は頷いた。

翌日には俺も退院をした。

――――海軍省長官室――――

「日本人差別団体やて？」

「はいそうです」

五藤が頷く。

今までは高橋に秘書みたいな役割をしていたけど、高橋は新たに設立させた海上護衛隊の事務官をしている。

理由は海上護衛隊司令長官の大井敦大佐と付き合っているからや。

何でも、たまたま輸送船団を護衛する時に出会ったらしい。

高橋もよかったやろな。アステカの女神やらんでええし、やっと幸せな暮らしを手に入れてんからな。

「んで、その団体が何て？」

「は、はい。『猿と中南華人との間に生まれた日本人は我々白人を奴隷させようとしているのに我慢出来ない。我々は日本に宣戦を布告する』と……」

「……めんどくさいなぁ」

俺は溜め息を吐いた。

「恐らく、輸送船団を狙って攻撃してくるのではないですか？」

宇垣が言う。

「まぁ軍備が無かったら輸送船団を狙うはな……」

「それと、団体繋がりで報告があるんですけど……」

「何や？」

「元愛国獅子団の団員を狙った殺人や暴行がかなり増えています。逮捕者は元愛国獅子団に圧力をかけられていた平和団体の人達です」

……。

「日本人通しで殺しあうなよな……」

「今のところ、陸海軍にいる元愛国獅子団の団員にはそういった事件は無いんですが……」

「……警戒は必要やろな」

「海軍には平良の従妹である福原がいます」

「……福原が狙われるのは百パーやろな。宇垣、福原を呼んできてくれ」

「はい」

「お呼びですか閣下？」

福原が俺に敬礼をする。

「あのないずみ。最近、また元愛国獅子団の団員を狙った犯行が増えてきてるねん」

「はい、存じています。以前、閣下に言われたので、キャシーさんに桜花さん、それにラスシャラさんにお願いして護衛してもらってます。家が近所なので」

「うん。それは聞いてるねん。……それでいずみには悪いと思うね

んけど、犯行が終息するまでウチの居候しぃひんか？」

「……閣下の家にですか？」

「あぁ。俺の家は海軍省に近いし、いざ何かあれば陸戦隊の手助けもある。最近、真希ちゃんと瑠璃が二人で家にいる事が多いから、二人と遊んでくれる大人が欲しかってんや」

「……宜しいのですか？私何かのために……」

いずみが上目遣いで聞いてくる。

……狙ってるんやなくて、多分素でやってるな。

「ええよ。大事な部下やねんからな」

「……ありがとうございます閣下」

何か複雑そうな顔をしてるけど、俺何か地雷踏んだか？

『誘爆する程踏んだと思うなｂｙ作者』

「話しは聞かせてもらったよ三笠」

「ん？桜花やん。それにキャシーとラスシャラまで……」

「あんた、何フラグを立てようとしてんだい」

「……桜花の給料は四割程カットでええな」

「いやそれはマジ勘弁だね」

桜花が土下座をする。

「まぁええわ。んで？まさかそれを言うために来ただけか？」

「んなわけないだろ。あたしらもしばらく泊めてもらおうと思ってさ」

「……なして？」

「面白くなりそうだから」

桜花がニヤニヤしている。

「それに海軍省に近かったら遅刻しないで済むしね。それと最近真希ちゃん達と遊んでなかったからね」

「……八割それが狙いやろ？」

「……ばれたか……」

キャシーがエヘヘと笑う。

「ま、今日は俺も仕事終わったし、早上がりするか。宇垣、後は頼んだで」

「……はい」

？？何か宇垣は複雑そうな顔をしてたけど……。

――海軍省正門――

「夕飯の材料買うか」

「金曜だからカレーにするか？」

ラスシャラが提案する。

「……そうやな。今日はカレーやな」

俺達は正門を出た。

「失礼」

「ん？」

正門の右横に二人の男性が立っていた。

「真ん中にいる方は福原いずみ少将とお見受けしますが……」

ちなみに真ん中はいずみで、左右には俺と桜花でガードしている。

「はい、私は福原いずみですが……」

タタタッ！！

その時、後ろから走る音が聞こえてきた。

振り返ると、短刀を握りしめた男性が走ってきた。

「福原いずみ天誅ゥゥゥーーーーッ！！！」

TURN55（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN56（前書き）

一気にいずみイベント。

物語も駆け足くらいになります。

TURN56

「福原いずみ天誅ゥゥゥーーーッ！！！」

ちぃッ！！

俺はいずみの前に出る。

「閣下ッ！？」

いずみが叫んだ。

タアァーンッ！！

短い発砲音が響いた。

「ガフッ！！」

短刀を持っていずみに襲い掛かろうとした男性――刺客は、喉を貫かれた。

「ふぅ……」

「ラスシャラッ！！」

撃ったのはラスシャラやった。

「ちぃッ！！」

先に尋ねてきた男性二人――刺客は短刀と拳銃を出した。

タアァーンッ！！

「グァッ！！」

「正当防衛だ。悪く思うなよ」

キャシーが短刀を持った刺客の額に拳銃の弾丸を叩き込んだ。

「くそがァッ！！」

拳銃を持った刺客がいずみに狙う。

「いずみッ！！」

俺はいずみを庇った。

タアァーンッ！！

……銃声が響くが、痛みはない。

「……ガフッ！！」

拳銃を持った刺客は血を吐いて倒れた。

「……ふぅ」

銃口から煙が出ている拳銃を持った桜花が息を吐く。

「スマン桜花。助かったわ」

「なぁに、いいってことさ」

桜花が笑う。

「……貴様らは…愛国獅子団を何故庇うのだ……」

あ、生きてたんやな。

「コイツは確かに愛国獅子団に所属してたけどな。コイツは過ちに気づいたんや」

「……そうか……」

「長官ッ！！御無事ですかッ！？」

「あ、宇垣」

宇垣が陸戦隊を引き連れてやってきた。

「犯人は三人で二人死亡、一人重傷や」

「分かりました。後は我々がやります」

「分かった」

陸戦隊が刺客を運ぼうとする。

「……福原少将」

「はい……」

刺客が呟く。

「……すまなかったな……」

刺客は病院に収容された。

「……さて、帰るか」

「そうだね」

俺達はスーパーで材料を買って家に帰った。

――――自室――――

「……ふぅ」

俺は今、自分の部屋でビールを飲んでいた。

時刻は既に夜中の１２時を過ぎた。

コンコン

「はい？」

「閣下、失礼します」

いずみが入ってきた。

「どないしたいずみ？」

「……先程はありがとうございます」

いずみが頭を下げる。

「俺は何もしてへんよ。桜花達がやってくれたんや」

「ですが、閣下は私を庇ってくれました」

「そりゃあな……」

女の子を守らんかったら男が廃るしな。

「閣下。私はこれ以上、皆さんの迷惑にならないように軍を辞めようかと思います」

「いずみ……」

「私がいれば長官にも迷惑がかかります」

「阿呆かお前は」

「……閣下？」

「お前の何処が迷惑やねん。むしろ、田中の暴走が俺の悩みの種や」

俺はいずみの肩に手を置く。

「だからお前は迷惑やない。俺が保障するわ」

「……閣下……」

いずみはいつの間にか泣いていた。

「閣下。失礼します」

すると、いずみはコップに注いでいたビールを取って飲み干した。

「いずみ？」

「閣下。酔いに任せて言います。私は閣下が好きですッ！！」

「ふわぁ……」

トイレから出た桜花は欠伸をしながら寝室に向かっていた。

「ん？」

すると、三笠の部屋のドアが少し開いていた。

桜花は覗くと、三笠といずみがいた。

「私がいれば長官にも迷惑がかかります」

「阿呆かお前は」

「……閣下？」

「お前の何処が迷惑やねん。むしろ、田中の暴走が俺の悩みの種や」

「まぁそうだね」

桜花が笑う。

「閣下。酔いに任せて言います。私は閣下が好きですッ！！」

「ッ！？」

いずみの言葉に桜花は固まった。

「……いずみ……」

「閣下。私は本気です」

いずみの頬は林檎のように赤くなっていた。

「ッ！？」

その時、俺はある奴の姿が過ぎった。

「……いずみ。俺もいずみが好きや。でもな、俺はもっと好きな奴がおんねん」

「……」

「でもいずみの事が好きな気持ちは本物や。日本も他国みたいに一夫多妻制ならええねんけど……」

「……知らないんですか閣下？」

「ん？何が？」

「日本は一夫多妻制ですよ。つい最近決まった法律ですよ」

「……マジ？」

「はい。人口減少を抑えるために決まりました」

……なら……。

「……戦争終わるまでいずみの恋人としておらしてや」

「……はい」

いずみが微笑んでくれた。

その時、何か聞こえたような気がした。

「閣下は巨乳の人が好きですからかなり妻は増えるでしょうね」

「……」

ぐうの音も出ないとはこの事やな。

「閣下……」

「何や？」

「恋人の証拠を見せてくれませんか？」

いずみはそう言って眼を閉じた。

……えぇいくそ。

そして、俺はいずみとキスをした。

「……三笠……」

隣でキャシーとラスシャラが寝ている中、桜花は呟いた。

TURN56（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN57（前書き）

桜花イベント。

TURN57

「……はぁ……」

南雲は自艦隊の旗艦榛名で何度も溜め息を吐いていた。

『南雲先輩、どうかしたんですか？』

「ん？夏ちゃんかい」

第二機動艦隊提督の山口夏が通信を入れてきた。

「いや、別に大した事じゃないんだよ」

『……でも、作戦中に先輩が溜め息を吐くなんて初めてですよ』

今、南雲達は作戦行動中であった。

先日、日本人差別団体――レッドファランクスの本拠星を発見したため、攻略艦隊が派遣されていた。

艦隊は三笠、山口夏、桜花、キリング姉、帝、いずみの六個艦隊である。

「……ちょっと考え事をしていたんだよ」

『考え事ですか？』

夏ちゃんが桜花に聞く。

「あぁ。だから大丈夫だよ夏ちゃん」

『……分かりました。ではまた後で』

夏ちゃんは桜花に敬礼をして通信を切る。

「提督ッ！！前方に敵艦隊ですッ！！敵艦隊は小型艦中心の艦隊で素早いですッ！！」

オペレーターが叫ぶ。

「……よしッ！！全艦撃ちぃ方始めッ！！」

「了解ッ！！全艦撃ちぃ方始めッ！！」

桜花艦隊は一斉に砲撃を開始した。

――――旗艦長門――――

「南雲艦隊と敵艦隊が砲撃戦に展開していますッ！！」

「……まだ艦隊はいるやろな……」

オペレーターの言葉に俺はそう言う。

「まだ、二個艦隊程はいるでしょう」

宇垣も同調する。

「ッ！？左舷１０時の方向から敵艦隊ッ！！約二個艦隊に相当しますッ！！」

「……おったな…」

「おりましたね……」

「左舷の艦隊はキリング姉と帝を向かわせるんや。桜花の艦隊の増援としていずみの艦隊を向かわせるんや」

「分かりました」

宇垣が頷く。

――――旗艦榛名――――

「提督。旗艦長門より入電しました。増援として福原艦隊が来ます」

「……分かった……」

桜花は知らず知らず右手を強く握りしめていた。

「全艦射撃を強めるんだッ！！いずみの艦隊が来るまで終わらせるよッ！！」

『了解ッ！！』

榛名の艦橋要員が叫ぶ。

その時、オペレーターが叫んだ。

「ッ！？右舷から亜空間魚雷が接近しますッ！！数三本ッ！！」

「ちぃ、潜水艦かッ！！取舵一杯ッ！！」

榛名は急速回避をする。

一本は外れたが、残る二本は命中した。

ズガアァァーーンッ！！

ズガアァァーーンッ！！

『右舷中央部に亜空間魚雷一本命中ッ！！』

『四番砲搭に亜空間魚雷命中ッ！！』

「被弾部分の隔壁閉鎖ッ！！消火活動急げッ！！」

命中の衝撃で、後ろの壁に頭をぶつけて頭から血を流す桜花が指示を出す。

――旗艦長門――

「戦艦榛名に亜空間魚雷二本命中ッ！！」

「……榛名に通信や」

程なく桜花が通信に出た。

桜花の頭には包帯が巻かれていた。

「大丈夫か桜花？」

『……あぁ。少しやられたよ』

「無茶はすんなよ」

『それくらい分かっているさ』

桜花は済まなそうに通信を切った。

……何かあったんやろか……。

「まぁ今は敵に集中や。榛名を雷撃した潜水艦は？」

「駆逐艦の対潜魚雷が命中。爆沈しました」

「分かった」

オペレーターからの報告に俺は頷いた。

「敵レッドファランクスの防衛艦隊は壊滅した模様です」

「ん。上陸船団は速度を上げろ。サッサと占領すんでッ！！」

俺の艦隊と帝艦隊、上陸船団は速度を上げてレッドファランクスの本拠星に突入した。

――――本拠星――――

「う～ん。何ちゅう豪華な造りをしとんねん」

俺は豪華な造りをした宮殿ぽいところにいた。

「んで敵の大将は？」

「既に捕縛しましたが、大分錯乱状態になっています。恐らく取り調べはしばらく不可能かと思います」

「……そりゃあしゃあないな。とりあえず、この豪華な造りとかは接収するか。多分かなりの資源になるやろな……」

マジでかなりあるからな。壁も金ぴかて、中南華帝国みたいやな。

「それと……後で桜花を長門の長官室に呼んでくれ。二人で話しがしたい」

「はい」

――――長官室――――

「入るよ三笠」

「あぁ……」

長官室に桜花が入ってくる。

「それで何だい急に？」

「……お前、最近様子がおかしいで」

「ッ……」

……図星みたいやな。

「何かあったのか？」

「……何でもないよ」

「何でもなかったら何で今日は負傷してんねんッ！！対潜警戒は基本やろッ！！」

「……」

桜花が黙る。

「……悪ぃ、少し言い過ぎたわ」

「……いいんだよ三笠。理由はあるんだ」

桜花が一旦言葉を切る。

「実はさ、この間のいずみの事件の後に皆で三笠の家に泊まっただろ？」

「あぁ泊まったな」

「そん時にあたしは見てしまったんだよ……」

……まさか……。

「いずみが三笠に告白したのを見てしまったんだよッ！！」

……物音が聞こえてたような気がしてたけど、桜花やってんな。

「それからだよ。いつもいつも三笠の事を意識し始めたのは……」

「桜花……」

「でも、分かったよ。三笠、あたしは三笠が好きだッ！！」

俺はその言葉に、頭の中が真っ白になりながらも桜花を抱きしめた。

TURN57（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

一発ネタ　次元世界の管理者達との出会い（前書き）

『新たなる世界　日本の歩み』を読んでいたらつい書いてしまった……。

連合艦隊エンド2のそれからの話しからなります。

ネタばれありです。

一発ネタ　次元世界の管理者達との出会い

日本皇国は、アメリア共和国、エイリス帝国、人類統合ソビエト連合を倒して領地を拡大し、あまつさえ別宇宙世界の支配者であるラムダスとの戦いをも制した。

ラムダスとの戦い後は、戦争する事も無くなり、人類は平和な日々を過ごしていた。

――日本海軍省長官室――

「……」

「長官。魂が抜けかけていますよ」

宇垣の指摘が来る。

「……もうね、しんどいの……」

俺は今、ラムダス戦後の後処理をしていた。

詳しく言うと、ラーゲリ星域で沈没した艦船の被害申告を書いて

た。

Hエンジンの実験が一年も掛かったので、ラーゲリ星域に集結した全世界の艦船九千隻は、連合艦隊が突入時には僅かに二千二百隻しか残っていなかった。

「ま、皆が頑張ってくれたから今の世界あるんやろな」

俺はそう言って再び書類業務に取り掛かった。

「そろそろ昼やな」

「はい」

宇垣は、俺に弁当を渡してきた。

「今日の当番は私ですので」

「そうか。ありがとうな纏」

「いえ……／／／」

宇垣――山口（宇垣は旧姓）纏は顔を赤くする。

え？嫁さんはどうなったかやて？

……胸の大きい人と結婚したわ。

しかも複数とな。それ以上は秘密な。んで宇垣（仕事中は旧姓で呼んでいる。もう宇垣で馴れてしまったからな）嫁さんの一人や。

ちなみに、巨乳のイタリン総帥とは結婚してないから。

田中の嫁やからな。田中も複数の女性と結婚している。

……何があったんや田中ッ！！

「何をブツブツ言っているんですか長官？」

「うんにゃ、何もないわ」

ま、今はメシやメシ。

俺は宇垣からあ～んとされて、卵焼きをほうばった。

「宇宙はいつ見てもええなぁ……」

午後からは訓練なので、艦隊を率いて宇宙に出た。

相手は嫁の一人であるマリーや。

『行くよミカサッ！！』

「今日も返り討ちにしてやるわ」

訓練想定は日本星域に侵攻してきた敵艦隊の撃破やからマリーが敵となる。

「敵機来襲ッ！！数は約二百ッ！！」

「陣風を上げろッ！！一機残らず叩き落とせェッ！！」

艦上戦闘機烈風の後継機である陣風が次々と発艦していく。

「さぁて、やるかッ！！」

壮大な訓練が始まった。

三時間後、訓練は俺の勝利で終わった。

『ぅ～、また負けたぁ～』

通信越しでマリーが頬を膨らます。

「まだまだ甘いな。とりあえず俺らと合流や」

『うん、分かった』

マリーが通信を切る。しかし、5分後に再びマリーから通信が来た。

「何やマリー？ケーキの買い食いはあかんで。また太るしな」

『な、何でミカサが知っているんだよッ！！と、そうじゃなくて、正体不明艦を発見したよ』

「正体不明艦やて？」

『うん。ほら』

マリーが通信の映像を見せる……てこいつは……。

「……次元航行艦やて……」

『何か言ったミカサ？』

マリーが首を傾げる。

「いや何もないわ」

『それでどうする？』

映像では次元航行艦は煙を噴いている。

恐らく戦闘で損傷して転移したんやろうけど……。

「構わんわマリー。撃沈せぇ」

『いいの？』

「恐らく、アメリア軍が一時期使用していたスーパー放射ミサイルの搭載艦の可能性が大やな。都奈海からの報告では別宇宙世界の艦やしな」

『何で撃沈するの？』

「もし、乗組員が遭難信号を出していて、それを傍受した向こうが大艦隊を率いてやってくるかもしれんからな。俺達がやったと思うやろし。マリーもスーパー放射ミサイルの攻撃は受けたくないやろ？」

『まぁそうだね』

マリーは嫌そうな顔しながら言う。

あれも、対スーパー放射ミサイル艦首ビーム砲があるから問題はないけど、飽和攻撃されたら堪らんしな。

『それじゃあ、一、二番撃ェーーーッ！！』

映像では、次元航行艦にビーム弾が命中して爆発四散していった。

『それじゃあ、合流するね』

「分かった」

こうして、次元航行艦との接触は絶った。

――――救助編――――

『それでどうするの？』

マリーが俺に聞いてくる。

「……とりあえず救助や。生存者がいるなら救助。救助が終わり次第、正体不明艦を曳航して俺らと合流や」

『了解ッ！！』

マリーとの通信を切る。

「……厄介になってきたな……」

それから三時間後、マリー艦隊と合流した。

――マリー艦隊旗艦フッド――

「ミカサッ♪」

マリーが俺に抱き着く。

「こらマリー。今は公務中や。抱き着くのは公務が終わってからや」

「はぁ～い」

マリーはさっきと同様に頬を膨らます。

「んで生存者は？」

「生存者は二名だけだよ。今は医務室で寝ているよ」

「……見に行くか。起きとるかもしれんし」

――医務室――

俺は医務室に入って唖然とした。

ベッドに寝ていたのは、リリなののフェイト・Ｔ・ハラオウンとティアナ・ランスターやった。

「……ん……」

すると、フェイトが目を醒ました。

「……あの此処は？」

「……此処は旗艦フッドの医務室や」

「ほ、他の生存者はッ！？」

「残念やけどあんたら二人だけや」

「そう……ですか……」

明らかに落胆しているな。

「あの、貴方は？」

「これは失礼した。俺は日本皇国海軍長官の山口三笠大将や」

俺はフェイトに敬礼をした。

……何かめんどくさくなってきたな。

敬礼をしながら俺はそう思った。

一発ネタ　次元世界の管理者達との出会い（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますｍ（＿＿）ｍ

TURN58（前書き）

桜花イベント続き。

ブラックのコーヒー用意（キリ（ヽ・ω・´））

TURN58

「でも、分かったよ。三笠、あたしは三笠が好きだッ！！」

俺はその言葉に、頭の中が真っ白になりながらも桜花を抱きしめた。

「み、三笠……／／／」

桜花はいきなりの事で顔を赤く染める。

「……桜花、ありがとう」

「え……」

「俺もな、桜花の事が好きや。将官学校で初めて会った時からな。言わば一目惚れやったな」

「……三笠……／／／」

桜花の顔がかなり赤くなる。そのうち、湯気でも出そうやな。

「まぁ黒島と付き合ってからは諦めて仲のいい友達と接していたけどな」

「……」

桜花は黒島の単語に複雑そうな顔をする。

俺は桜花の頭を撫でる。

「そんな顔をすんなよ」

「……ゴメン……」

……可愛いす。いやマジで。

俺は桜花の胸に顔を埋めた。

「ちょ、三笠……／／／」

「今、すっげー幸せや俺は……」

『リア充死ねッ！！ｂｙ作者』

……何か変なの聞こえたけどまぁええか。

「とりあえず……」

そして俺はそそくさと長官室の鍵を閉めた。

「何してんだい三笠？」

「ん？今から運動すんねんやんか」

「ま、まさか……運動って……／／／」

桜花が顔を真っ赤にする。

フハハハ、そのまさかやな。

「大丈夫大丈夫。最初は優しくするからな」

「最初だけッ！？」

「んじゃベッド行こか」

「ちょ、三笠。あんた本気でする気かい」

「本気やなかったらこんなんせんわ」

俺はそう言って、桜花の口を塞いだ。

「ちゅむ……んむ……ちゅる……ん……」

……さて、やりますか（キリ（、・ω・、）

「ぅ～。三笠の馬鹿……」

「アッハッハッハッハッハッハ」

桜花がジロリと俺に睨んでくるが、俺は笑ってごまかす。

「結局、六回もするし……」

「だって桜花が可愛かったからな（、・ω・′）」

「ぅ～……」

桜花は黙ってしまった。

「まぁ、嫁さん第一号よろしくな」

「……何人の女を嫁にする気だよ……」

さぁ？それは作者次第やからな。

「とりあえず仕事するか」

俺は服に着替える。

「あたしも手伝うよ」

「スマンな」

「嫁さん第一号だからね」

桜花はそう言って笑った。

五日後、日本星域に戻った。

――――自宅――――

「みーちゃんお帰りなさい」

「お帰りなさい三笠」

玄関に入ると真希ちゃんと瑠璃が出迎えに来てくれた。

「ただいま真希ちゃん。瑠璃」

「ただいま真希ちゃん、瑠璃ちゃん」

桜花もにこやかに二人に言う。

「……三笠……」

「何や瑠璃？」

「（桜花と付き合ってるの？）」

「ブッ！？」

俺は驚いた。何故知ってるねん。

「（雰囲気見れば分かる。三笠は胸が大きい人好きだから）」

「（……何で知ってるの？）」

「（調べた。ちなみに、三笠と結婚しそうと予想しているのは桜花、いずみ、山下、宇垣、祀梨、古賀、ララー、スカーレット、キャシー、ラスシャラ、アドルフ、ゲッベルス、リディア、リンファくらいです。巨乳の女性捕虜がいれば増えるかも）」

……コイツ、侮られへんッ！！

「（別に私は気にしないから大丈夫。決めるのは三笠だから）」

「（ありがとうな瑠璃。とりあえず内緒な）」

「（分かった）」

「瑠璃お姉ちゃんとみーちゃんは何を話しているの？」

「ん？ちょっと将来の事についてな」

「うにゅ？」

真希ちゃんは可愛らしく首を傾げる。

「閣下。お帰りなさいませ。夕食は出来ていますよ」

台所から将官服の上からエプロンを着たいずみが玄関に来た。

「ラスシャラさんやキャシーさん、山下さんも手伝ってもらってます」

あいつらも来てたんか。

「んじゃぁサッサとメシを食うか」

「私お腹ペコペコだよ」

真希ちゃんはお腹すいたようにお腹を押さえる。

「ハハハ。なら早く着替えてくるわ」

今日は大丈夫やろか……。

その後、味は大分マシになったが俺は三人の対人兵器?に撃沈する事になった。

TURN58（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN59（前書き）

昨日、久々に大帝国をしたらアドルフルート突入した。

やっと出来た……（涙）

TURN59

日本皇国は、アメリア共和国を滅ぼしてから暫しの休息の後、インドカレーに侵攻を開始した。

――旗艦長門――

「さて、インドカレーに来たはええけど、あの要塞は何なん？」

映し出されたパネルには全長三キロ程度の大型要塞があった。

「はぁ、情報ではインドカレー総督自慢の要塞らしいですが……」

「……かなり旧式化している箇所が何箇所かあるな。ラスシャラ、ラフラー、アドルフ、祀梨の艦隊は要塞を攻撃や。要塞攻撃司令官はアドルフや」

『了解した』

アドルフが俺に敬礼をする。

「んで次はと……」

「左舷１１時の方向に東インド会社の私設艦隊のようです」

オペレーターが分析する。

「まぁ軍隊経験は無いと思うし、烏合の衆やろな。桜花、キャシー、リディア、デーニッツが当たれ。司令官は桜花や」

『任しといてよ三笠』

桜花が笑う。

「残りの全艦隊は後方のネルソン艦隊を叩くッ！！！ロック、攻撃隊発艦準備やッ！！」

『もう全機発艦出来るわ』

強い精神力があったため、地獄から蘇ったハンナ・ロックを第四機動艦隊提督に任命させたけど、中々やるな。

ちなみにクーと付き合っている。

「仕事早いなぁ。……全機発艦ッ！！第一目標はネルソン艦隊旗艦ヴィクトリーやッ！！一隻残らず叩き落とせェッ！！」

俺の艦隊と、ロックの艦隊の空母から航空機が発艦していく。

「全艦砲雷撃戦用意や」

「全艦砲雷撃戦用意ッ！！」

ネルソン艦隊に向かう俺、帝、リンファ、古賀の艦隊の主砲がネルソン艦隊に照準をつける。

「ロックは後方で航空戦や」

『分かったわ』

上空で編隊を組んでいた攻撃隊はいつの間にかネルソン艦隊を攻撃していた。

「ネルソン艦隊の足並みが乱れていますッ！！」

オペレーターが報告する。

「ん。速度このままや」

ロックの第四機動艦隊から断続的に攻撃隊が飛来して、ネルソン艦隊を血祭りにあげていく。

「よし、攻撃隊はそこまでや。後は俺らがする」

『別に手柄は横取りしないわよ』

「いやそうやなくて、砲撃の腕が鈍らんようにしなあかんからな」

『まぁいいわ。全機攻撃中止して帰還よ。残弾がある場合は破壊された要塞に叩き込みなさい』

要塞はあっという間に破壊されたな。まぁ旧式化してたからな。

ロックの命令を受けた攻撃隊は攻撃を中止して第四機動艦隊に帰還する。

「ネルソン艦隊との距離は？」

「約三万二千宇宙キロです」

俺の問い掛けに、オペレーターが答える。

「よし、全艦に告ぐ。これよりネルソン艦隊に止めを刺すッ！！全艦撃ちぃ方始めッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！！

全艦のプラズマショックカノンが一斉に唸りをあげた。

――――旗艦日進――――

「チキン砲術長当てろッ！！貴様の下に付いているのはただの飾りかッ！！」

「サーッ！！撃てェッ！！」

日進の艦橋はこのような事が起こっていたが、特に問題はなかった。

そして、ネルソン艦隊に砲撃を開始して２０分後、遂にネルソン艦隊は撤退を始めた。

「ネルソン艦隊が撤退しますッ！！」

「ほっとくか。奴らが刃向かう力はもう無いしな」

俺はネルソン艦隊を見逃した。ちなみにネルソン艦隊の残存艦艇は戦艦二、巡洋艦三、駆逐艦七隻しか残っていなかった。

ドゴオォォォーーンッ！！

急に爆発音が鳴り響いた。

「な、何やッ！？」

「インドカレー星域の惑星が次々と爆発していきますッ！！」

……ネルソンの置き土産か？

「……いや多分東インド会社の仕業やろな。利益を取られるなら……」

「あえて我々に取られないようにするために惑星を爆破ですか？」

「恐らくな」

俺は長官席に座る。

「インドカレーの主要惑星のデリーは無事か？」

「はい、爆発していません。爆発したのは惑星ボンベイ、ダッカなどです」

「そうか。陸軍に通達や。これより降下作戦を開始するってな」

「分かりました」

オペレーターが陸軍艦隊に通達する。

ま、一先ず海軍の出番は終わったな。

インドカレー星域の占領には二週間程かかったが占領した。

そして謎のメッセージが届いたのは翌日やった。

「は？通信カプセルやて？」

「はい、かなりダメージは喰らっていますが再生は可能です」

「まぁ聞いてみるか。セットして」

「はい」

宇垣が通信カプセルをセットした。

『……を……宇宙……や……終焉……す……私……イズカンダル……ウーシャ……』

ブーーーッ!!Σ（゜Д゜）

「うわッ!!汚ッ!!」

思わず飲んでたコーヒーを吐いたけど問題はない。

……けど……。

「……そう来るか普通?……」

アニメぽくなってきたな。

TURN59（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ６０（前書き）

何故か今更学園黙示録をＹｏｕＴｕｂｅで見ている俺は一体……。

三笠「馬鹿やろ……」

……何も言うな。アドルフルートは意外と難しいし。

TURN60

「山口入るぞ」

通信カプセルの出所を調べるために都奈海に分析をさせてたけど見つけたんか？

「見つけたんか？」

「あぁ」

都奈海が宇宙地図を広げる。

「通信カプセルの発進場所は此処だ。エイリス帝国の植民地星域にあるアンドロメダ星域だ」

……まんまアニメと一緒やな。

「遠いな……」

「あぁ。時間は掛かるだろうな」

「内容の解読はあれ以上は無理か？」

「無理だな。損傷が激し過ぎる」

……そうか。

「分かった。急に済まなかったな」

「なに、気にするな」

都奈海はそう言って研究室に帰った。

「……今度、牛乳でもプレゼントするかな……」

多分殴られそうやな。

「長官大変ですッ！！」

五藤が慌ただしく入ってきた。

「どないしたんや五藤？」

「ソ、ソ連が日本皇国に宣戦布告をしたんですッ！！日本星域にソ連艦隊が侵入してきましたが、ランファ、三川、ドーリトル、大原艦隊がソ連艦隊を壊滅させました」

……遂にきよったなソ連め。

「二日以内に日本星域に帰還出来る艦隊は？」

「先程の四個艦隊に、宇垣艦隊、有馬艦隊、金杉、金艦隊がいます」

宇垣が報告する。

「よし、八個艦隊は直ちに日本星域で極寒対策艦を艦隊に配備させたら陸軍の攻略船団を護衛しながらシベリアを攻略するんやッ！！」

「分かりましたッ！！」

宇垣は俺に敬礼をして部屋を出た。

すると、一分もしないうちに扉を閉めていたはずやのに扉が開いた。

「長官……」

入ってきたのはリンファやった。

「リンファか。どないしたんや？」

「……」

何かモジモジとしとるな。

「何かあったんか？」

「……実は長官に赤本を取り上げられてから半年近くになりました」

……そういや赤本没収にしてたんや。すっかり忘れてたわ（汗）

「最初は赤本を読みたいと思っていたんですが、今では読みたいとは思わないんです。私も……赤本に洗脳されてたみたいです」

「そうか……」

「その……御礼と言うか……」

リンファがモジモジと服を脱ごうか脱がないかしている。

……そういう事かい。

「リンファ。赤本からの呪縛を解き放ってセックスで御礼か？少し俺を甘すぎやないか？」

いくら何でも御礼でそれをするのは気が滅入るしな。

「ち、違います。長官が赤本を私から取り上げてくれて本当に感謝しているんです。で、御礼をと考えて桜花さんに相談したらこれが手っ取り早いと……」

……犯人は桜花かよ……。

「それに私も長官が好きです。赤本が読みたい時、長官はいつもその気にならないように私にスポーツさせたり食事に誘ってくれました」

そういや禁断症状が出てる時に、そんなん行ったな。

「だから……」

「分かった分かった。お前の気持ちは分かったよ。ただな、それは後な。後ろに般若いるから」

リンファの後ろにはいつの間にか帰ってきたのか宇垣がいた。

「……アハハハ……」

リンファは気まずそうに長官室を出た。

「さて、長官は仕事をしてもらいます」

ドサッと、宇垣が書類を置くけど国語辞典約二個分程の高さがあるな。

「……鬼や……」

「……（そうでもしないと二人きりになれないんですよ）」

「ん？何か言ったか？」

「い、いえ何も」

宇垣が何か言ったような気がしたけどまぁええや。

俺は書類業務に取り掛かった。

「長官。シベリアは陥落したとのことです」

「そうか」

二日後に、シベリア陥落の一報が届いた。

「エイリスを攻略するまでシベリアでソ連軍の侵攻を粘るしかないな」

「そうですね。極寒対策艦の新型艦特式極寒対策艦白金もまだ数隻しか配備されてませんしね」

宇垣が頷く。

「戦況が厳しければ、クーの戦艦部隊も投入させるわ。ロックの第四機動艦隊もシベリア方面に進出させるか」

二人を離れさせたらロックが何を言ってくるか分からんからな。

「んじゃぁ、アラビア攻略の会議でもするか」

俺は宇垣に言った。

TURN60（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN61（前書き）

アドルフルート難しい……。

何でやろ……。

三笠「お前の指揮が悪いんやろ」

それを言うな。（汗）

TURN61

宇宙歴９３９年、１２月８日に日本皇国がアメリア共和国、エイリス帝国、オフランス王国などに宣戦布告をして二年が経過した宇宙歴９４１年１２月８日に、日本皇国はアラビア星域攻略に乗り出した。

――――アラビア星域旗艦長門――――

「全艦隊、ワープアウトしました」

「ん」

宇垣からの報告に俺は頷いて、席を立つ。

「全艦隊、速度全速。祀梨と夏ちゃんは攻撃隊発艦用意や」

『ほいほい』

『了解です』

二人が返事をする。

「敵艦隊の数は？」

「前方約七万宇宙キロにネルソン艦隊です。右舷3時から東インド会社の艦隊が来ます。距離三万宇宙キロッ！！」

「東インド会社の艦隊にはリディアが向かえ」

『任しといて』

リディアが頷き、艦隊を率いて東インド会社の艦隊に向かう。

ちなみに攻略艦隊は俺、祀梨、夏ちゃん、桜花、いずみ、古賀、キャロル、ダグラス、リディアの九個艦隊に、その後方にいる攻略船団の護衛にはスカーレット、リンファ、帝、田中、ラスシャラ、キャシーの六個艦隊が護衛している。

艦隊が多過ぎやないかと思うが、アラビアを占領したらスエズ星域、マダラスカル星域の二方面の星域に繋がるルートがあるので、どっちかを攻める場合に防衛艦隊として残させなあかんから艦隊が多いねん。

『長官、攻撃隊発艦準備完了ですよ』

『私の艦隊も準備出来ました』

「ん。攻撃隊は発艦。ネルソン艦隊のバリア搭載艦を第一目標にして攻撃やッ！！」

攻撃隊は次々と空母から発艦していった。

――リディア艦隊旗艦摩耶――

「リディア提督、東インド会社艦隊は一個艦隊と資源採掘用のコロニーです」

オペレーターがリディアに報告する。

「先にコロニーから片付けちゃおか。全艦主砲発射用意」

リディア艦隊の艦艇の砲身が、コロニーを照準する。

「発射用意良しッ!!照準完了ッ!!」

「撃ェーーーッ!!」

ドシュウゥゥゥーーンッ!!

プラズマショックカノンが唸りをあげ、ビーム弾は全弾がコロニーに命中した。

ドゴオォォォーーンッ!!

「コロニー爆沈ッ!!」

「いよしッ!!」

リディアは思わずガッツポーズをした。

――東インド会社艦隊旗艦ロイヤル・ソブリン――

「アアァァァーーッ！！！」

東インド会社社長のクリオネ・アルイメンはコロニーの爆沈に絶叫した。

「わ、私の会社がァァァーーーッ！！！」

「……俺達も失業だな……」

艦橋にいた雇われインドカレー人がポツリと呟いた。

ズガアァァーーンッ！！

その時、艦体が揺れた。

「な、何ッ！？」

『左舷中央部損傷ッ！！』

『左舷副砲使用不能ッ！！』

「日本艦隊からの砲撃ですッ！！」

オペレーターが叫ぶ。

ズガアァァーンッ！！

『エンジン被弾ッ！！ギャアァァァッ！！』

「ロイヤル・ソブリン戦闘不能ッ！！」

「ァ～どうしたらいいの～ッ！！」

クリオネはそう叫んだ。

――旗艦長門――

「攻撃隊が帰還します。敵艦隊の数は残り二十隻あまりです」

「……ネルソンに打電や。『降伏セヨ』それだけや」

……降伏はせんやろな……。

「ネルソン艦隊より入電。『我、拒否スル』以上です」

「……分かった。こうなりゃ無理矢理ネルソンを捕まえる。田中は高速でネルソン艦隊の後方へ駆け抜けて回頭してネルソン艦隊のエンジンを叩けッ！！道は俺達が作るッ！！」

『オゥッ！！任せろッ！！』

「全艦撃ちぃ方始めェッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

全艦隊が一斉に主砲を発射する。

「今やッ！！突撃や田中ッ！！」

『オゥッ！！』

田中艦隊が一気にネルソン艦隊に突撃する。

ネルソン艦隊は砲撃をするも高速で移動する田中艦隊には当たらず、後方に田中艦隊を逃す。

後方に回った田中艦隊は一斉にエンジンに主砲を発射した。

「田中艦隊がエンジンの破壊に成功しましたッ！！」

「よし、接近して陸戦隊を出せッ！！」

パルスレーザーで主砲などを掃射しつつ、ネルソン艦隊に次々と接舷して陸戦隊を出す。

それから一時間半後には決着がついた。

無論、俺らの勝利やった。

「長官、捕獲したロイヤル・ソブリンに東インド会社の社長がいるみたいです」

「なら会いに行くか」

どんな奴かみたいしな。

――――ロイヤル・ソブリン艦橋――――

「さぁ、わてと来てもらうか」

「ん？」

艦橋に入ると、女性と何かよく分からん丸こい奴が……て。

「プルーペット？」

「うん？あ、三笠さんやないでっかッ！？」

「長官、お知り合いですか？」

宇垣が聞いてくる。

「小さい頃、近所の店に商人の弟子入りに来てたんや。そん時から

知り合いや」

「よう遊んだな」

プルーペットが頷く。

「プルーペット、そいつが東インド会社の社長か？」

「そうやで。三笠欲しいんか？」

「秘書として是非欲しいねんけど、書類業務も楽になるしな」

「そうやなぁ。友人の頼みとして、ウチに資源を三千提供してくれたら譲るわ。これでも大分まけた方やで」

まぁ三千くらいなら大丈夫やな。

「よっしゃ、乗ったるわ。三千で手ぇ打つわ」

「流石わての友人や。手続きはわてがするわ」

「おぅ」

「ほな、わては帰るわ。あぁ、これはわてのメアドや。何か傭兵欲しかったらわてに言うてな」

「分かったわ」

プルーペットはそう言って帰った。

「と、いうわけで貴女は我々の捕虜になるけどええかな？」

「……そうね。プルーペットの手先になるよりマシね」

プルーペット、危ない仕事してないやろな？

とりあえずはアラビア星域も占領した。

TURN61（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN62（前書き）

ネルソンとクリオネイベントです。クリオネは面白い。

三笠「アドルフルートは？」

シカゴXから侵攻中やな。

TURN62

アラビア星域を攻略してから二週間が経った。

その間に、捕虜にしたネルソンが帝に会いたいという事やから帝と面会させた。

――――皇居――――

「帝、貴女が目指す世界日本化とは何ですか？」

「えっとですね、世界日本化は……」

帝がネルソンに日本化の説明をした。

「……成る程。帝、貴女の考えは子ども並です」

「あぅ……」

帝ががっくりする。

「ですが、恐れを全く知らなく困難にも立ち向かえるでしょう」

「……ありがとうございます」

帝がネルソンに頭を下げる。

「ヤマグチ、私を軍に入れてもらえないか？」

「ええんか？」

「構わない。我が祖国は腐敗に満ちている。一度滅ぶべきだろう」

ネルソンはそう断言した。

「……分かった。ネルソンに一個艦隊を預けるわ」

「ありがとう。ただし、私は女王陛下に剣は抜かない」

「あぁ分かった」

そして、帝との謁見は終わった。

そういや迎賓館行ってなかったな。アルイメンを忘れてた（汗）

俺はそそくさと迎賓館に向かった。

――――迎賓館――――

「……何よ何よ何よッ！！あの男は私を助けたのに、二週間も音沙汰が無いなんてぇ……」

迎賓館のとある部屋でクリオネ・アルイメンが怒っていた。

コンコン

「誰よ？」

「俺や。山口や」

「げきょッ！？……入りなさいよ」

「いやスマンな。後処理で中々こっちに行けんかったわ」

俺はアルイメンに謝る。

「……本当は忘れてたんじゃないの？」

ジト目でアルイメンが俺を見てくる。……おっしゃる通りや。

「それはないって。んで、日本軍に協力してくれるか？」

「……貴方は私をプルーペットから買ったじゃない。私に拒否権は無いわ」

「別に買ったわけとちゃうんやけどな……まぁありがとうな」

俺はアルイメンに握手をする。

「んじゃまか、早速海軍省に行くか」

俺はアルイメンの手を取って海軍省に向かった。

「え?え?えぇぇッ!!」

何かアルイメンが叫んでるけど無視や無視。

――――海軍省長官室――――

部屋に入ると、俺の机は書類がよーさんあった。

俺が目を通してハンコするだけでええんやけどな。

「……あら、新入りかしら?」

目の下にクマが出来ているゲッベルスが言う。

俺の机の左右には秘書のゲッベルスと事務員の五藤の机がある。

「あぁそうや。アルイメンは各地から送られてきた書類に不備が無いかチェックしてな。ゲッベルスはもう休んでええよ。今日はアドルフも休みやしな」

「そうさせてもらうわ……」

ゲッベルスはフラフラと席を立つ。

「ほらほらしっかりな」

「ごめんなさい」

ゲッベルスに来る途中に買って缶コーヒーを渡し、ゲッベルスは部屋を出た。

「アルイメンは此処でやってもらうわ」

俺
五　ゲ
藤　ア

→机の位置。

「……膨大な量ね」

「占領星域が増えたらこうなるからな。アルイメンが会社の社長をしてたから頼みたいんや。勿論、提督もやってもらうけどな」

「……いいわ。私もやり甲斐はあるわ」

アルイメンは腕部分の服を捲って仕事に取り掛かった。

「会社を作りたいやて？」

「ええ、そうよ」

書類業務もある程度終わってきた時にアルイメンが言ってきた。

「貴方に借りは作りたくないからね」

「まぁ、そりゃあ構わんよ」

「じゃあ決まりね。決算日の時に儲けたお金の三割は日本軍に提供するわ」

「ええよ」

「もし、払えなかったら私が何かするわ」

「まぁええけど……」

何か起こりそうやな。

そして、アルイメンは会社を作った。

「長官」

宇垣が入ってきた。

「何や？」

「はい、スエズ星域から電文が来ています」

「何やて？内容は？」

「三日以内にエイリス帝国の前女王が視察に来る。その時、警備は手薄になると書いています。どうしますか？」

「……多分罠やな……」

「……では？」

「ほっとけや」

「分かりました」

電文はほっとかれた。

TURN62（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

短編　山口多聞の奮闘記（前書き）

霧島那智の龍の艦隊とか見てたらつい書いてしまった一発ネタです。
（汗）無視しても構いません。

短編　山口多聞の奮闘記

私はあの時、ミッドウェーで飛龍艦長の加来と一緒に飛龍と運命を共にしたはずだった。

だが私は八百万（やおよろず）の神々の力をお借りしたのか、生きていた。

そこは確かに日本だった。しかし、私が考えていた軍隊や日本の町並みはかなり違っていた。

海戦は宇宙になっていた。

しかし私の周りでは戦争のせの字も聞かない平和な日本であった。

だが、度々中国――中帝国が日本に戦争を仕掛けていた。

やはり前世で軍人だったせいなのか、私は直ぐに宇宙海兵学校に入隊した。

そして、卒業後は新型戦艦伊勢の艦長になった。

この世界の日本は年功序列ではなく実力主義らしい。

私は中帝国との戦争に入り、数々の武勲をあげた。

しかし、満州宙域で裏切りによって連合艦隊は壊滅した。

残ったのは伊勢と東郷の第四艦隊のみだ。

私は帝に呼ばれ、海軍長官になってほしいと言われた。

だが、私は丁重に断った。

指揮は東郷の方が私より上だ。なら、私は部下で充分だ。

ただ、機動部隊の指揮官はやってみたいと思うのは前世で二航戦司令官をしていたからだろうな。

「……早く空母が出来ないものか……」

私は伊勢の艦橋の長官席でそう呟いた。

外は北京星域の守備艦隊と戦闘していた。

――山口多聞――

スキル

大制空。闘魂（攻撃十％上昇）

配備枠補正。

戦艦伊勢（攻撃＋二十％上昇。固定）
航空＋六十％。

航空＋六十％。

鉄鋼弾＋三十％。

→ゲームやってれば分かると思います。

思いっきり妄想です。

短編　山口多聞の奮闘記（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN63（前書き）

シャルロットイベントの伏線（多分）になります。やっとアドルフルートクリアー（涙）

シャルロットのHCGも捕獲したし、トリエステのも頑張ろ。

TURN63

――海軍省会議室――

「次の攻略目標はマダラスカル星域や」

皆が集まってもらった会議室で俺は皆に言う。

「スエズ星域の総督から内通の電文がこれは無視する」

「何でだ？裏切り行為は最低だが、攻略する側にとっては勝ったも同然だぞ？」

ダグラスが文句を言う。

「確かにそうやけどな。明石大佐に警備が手薄になる日に来る艦隊の数を調べてもらったら三十個艦隊やねん」

『ッ！？』

尋常やない艦隊の数に皆が驚く。

「そしてその艦隊の中央に布陣しているのはエイリス帝国前女王のエリザ・ブリテンや」

「……大名行列だな」

珍しく田中が呟く。

「流石に三十個艦隊の相手は嫌やからマダラスカルから攻めるんや」

拡散波動砲があったら一発やけどな。

「分かったかダグラス？」

「……分かった。流石に三十個艦隊の相手は厳し過ぎるぜ」

分かってくれて何よりや。

「んで、マダラスカル星域攻略やけど艦隊は「山口」……何やラスシャラ？」

ラスシャラが俺の言葉を遮る。

「……頼む。私を攻略艦隊に加えてくれないか？」

「……何か理由があるんか？」

「……あぁ」

ラスシャラが頷く。

「ま、構へんよ。それに元から入れるつもりやったしな」

「……ありがとう山口」

ラスシャラが俺に頭を下げる。

「んじゃぁ続きな。艦隊は俺、帝、ラスシャラ、ダグラス、キャロル、古賀、アドルフの艦隊でいく。マダラスカル星域の守備艦隊はアドルフ救出時の陽動作戦で大半が撃破されて少ないらしいからな。まぁ念のためやな、それじゃぁ解散や」

「敬礼ッ！！」

ザッ！！

宇垣の言葉に全員が俺に敬礼をする。無論、俺も返礼をしている。

そして、攻略船団と合流して俺達は出撃した。

――――マダラスカル星域――――

「長官。マダラスカル星域に到着しました」

「おぅ。……それにしても敵さんはおらんな……」

マダラスカル星域に到達する前に偵察機を三度飛ばしたけど、全く敵艦隊と接触する事はなかった。

――ラスシャラ艦隊旗艦河内――

「……ビルメ・ミャー様。私は帰ってきました。小さい時、野垂れ死にしそうだった私をビルメ様は助けて下さった。……恩を仇で返す事になってしまいましたが、私は今、立派に生きています」

河内艦橋でラスシャラはそう呟いた。

「ラスシャラ提督。マダラスカル星域の主要惑星アンタナナリボですッ！！」

オペレーターがラスシャラに報告する。

「敵艦隊はいない……か……」

「旗艦長門より入電ッ！！強行突入するとの事ですッ！！」

「山口も一気に占領出来ると踏んだんだろう。我が艦隊と長門に続けェッ！！」

そして、全艦隊が一斉に降下を開始した。

「それで、貴方がビルメ・ミャー様で？」

とある病院で入院をしているラスカル……もとい、女性マダラスカル人に聞く。

「あぁそうだよ。私がビルメ・ミャーだ」

「自分は日本海軍長官の山口三笠大将です。最初に言いますが、我々は貴女達を弾圧する意思は全くありませんので」

「そのようだね。実際、皆も暴力を受けたとか無いと言っているからね」

「帝は世界を全て同じ日本人としますので差別は起きないと思います」

「それは有り難いね」

「ビルメ様ッ！！」

その時、ラスシャラが病室に入ってきた。

「おやおや久しぶりだねラスシャラ。そうかい、日本軍にいたのかい」

「はい。ビルメ様も相変わらずお元気で……」

「いやいや私も歳を取ったさ」

成る程。ラスシャラが攻略艦隊に入りたかったのはこれが理由か。

「少し話しをしとき。俺は街の様子を見てくるわ」
「済まない」
俺は病室を出て、街に向かった。

「ふむ。賑やかやな」
街は活気に溢れていた。
「……ッ！！……ッ！！」
ん？何か悲鳴みたいなんが聞こえるな。
俺は辺りを見渡す。
この路地からやな。とりあえず銃は持っとくか。
俺は九ミリ拳銃を右手に持って路地を進んだ。

「……最悪やな……」
少し進んだ先には開けた場所があり、そこで複数の敗存のオフラ

ンス王国軍人が一人の女性をレイプしていた。

「……」

俺は九ミリ拳銃を構えて、引き金を引いた。

タアァーンッ！！

「グビッ！？」

軍人の喉に命中して、その軍人はそのまま絶命した。

『ッ！？』

オフランスの軍人が俺に振り返るが、構わず引き金を引いた。

タアァーンッ！！

タアァーンッ！！

タアァーンッ！！

「ヒ、ヒイィッ！！」

唯一生き残った軍人は慌てて何処かに逃げた。

「ふぅ……大丈夫か？」

俺はレイプされていた女性に声をかけた。

女性は身体中に男の精液を浴びさせられていた。

「……」

女性は俺を見つめるが何も言わない。

「あ～本部。強姦されていた女性を保護した。至急、援軍を送ってくれ。場所は……」

そして、女性を保護した。

TURN63（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN64（前書き）

パルトネー提督フラグ。

ゲームとは少し違いますが……。なにせ、これを作った後にアドルフルートが出来ましたからね。

TURN64

「……三笠はトラブルのフラグでも付いているのかい？」

「……多分……」

現場に駆け付けた桜花に溜め息を吐かれた。

全部悪いのは作者のせいや……。

「ところで三笠。この女性、どっかで見た事ないかい？」

「うん？」

桜花に言われて、俺は女性を見る。

水色のロングで、白いドレス……まさか。

「オフランス王国の前国王のシャルロット・パルトネーか？」

「……多分ね……」

「……てことは駐留部隊に反乱されたか？」

前国王の娘を差し出せば自分の命が助かる。

多分そう考えたんやろな。

「ともかく、パルトネーをサッパリさせてから桜花が事情聴取しといてや。俺やと、さっきのが思い出すかも知れんからな」

「分かったよ。今度デートしてくれたらいいよ」

「任しとけ」

俺は長門に戻った。

「三笠。聴取終わったよ」

長門の長官室におったら桜花が入ってきた。

「どうやった?」

「やっぱ駐留部隊に捕われそうになって逃げたけど、捕まってレイプされてたみたいだよ」

「そうか……」

「それと、ビルメ・ミャー様が入ってきてパルトネーを落ち着かせているよ」

「ビルメ殿やったらパルトネーを任せて大丈夫やな」

マダラスカルの母と呼ばれているからな。

「山口」

そこへ帝が長官室に入ってきた。

「どうしましたか帝？」

「パルトネーさんとお話しがしたいんですけど」

「話しですか？」

「はい、マダラスカル人は全て日本人とするので差別はさせないように言いますので」

「分かりました。桜花、案内して」

「あいよ。じゃあ行きましょうか」

「はい」

二人は長官室を出た。

「……山口長官」

「お、明石大佐」

明石大佐が現れた。

「……スエズ星域にいたモントゴメリーの艦隊が動いた」

「前女王を乗せてか？」

「いや、スエズ総督の密通を暴いた。スエズ総督の代理をしている。そして、娘のマリー・ブリテンが南アフリカ星域の守備艦隊提督として南アフリカ星域にいる」

マジか？

「分かった。ありがとう明石大佐」

「……」

明石大佐が消えた。

「……向こうもそれ程本気か……」

なら……俺はこっちを取るか。

俺は地図に印を付けた。

「……失礼します」

「ん？」

シャルロット・パルトネーとビルメ殿が入ってきた。

「これはこれは。お二人どうして此処に？」

「シャルロットが貴方に話しがあるみたいなんだ」

俺に話し？

「……ぁ、あの……私を日本軍に置いてくれませんか？」

「……パルトネー殿。それは日本軍の提督になるという事ですか？」

「は、はい」

「理由を聞いてもよろしいかな？」

「……私は今まで、何も知らずに生きてきました。でも、貴方に助けられ、ビルメ様にも国の王として意味を聞かされました。私は世界を知りたいのです」

それが決意した理由か……。

「……分かった。今から貴女は日本軍の提督です。パルトネー提督」

「……ありがとうございます」

パルトネーが頭を下げる。

「とりあえず、これ貸すから勉強しぃ」

俺はパルトネーに『君も明日から提督にッ！！大戦略初心者用』の全三巻を渡した。

「ありがとうございます長官」

二人は頭を下げて長官室を出た。

さてと……。

「宇垣、今すぐ全員を会議室に呼んでくれ」

――――会議室――――

「皆に集まってもらったんは同時星域攻略をするんや」

『ッ！？』

俺の言葉に皆が驚く。

「明石大佐の偵察で、スエズ星域にはモントゴメリーの艦隊はいないと確認した。残っているのはエリザ・ブリテンがスエズ総督代理になっただけや」

「……そして攻め込むと？」

「あぁ」

ダグラスの言葉に俺は頷く。

「ダグラスは南アフリカ星域攻略司令官をやってもらう。存分に暴れろ」

「ＯＫ。腕が鳴るぜ」

ダグラスがニヤリと笑う。

「んじゃぁ、今から艦隊編成を言うわ」

それから二日後、連合艦隊は同時星域攻略を開始した。

TURN64（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

一発ネタ　ある一隻の巡洋艦との出会い（前書き）

また一発ネタです（汗）

ヤマト復活篇の拡散波動砲を見ていたらつい……。

一発ネタ　ある一隻の巡洋艦との出会い

それは南京モン星域を攻略してから数日後の事であった。

――――海軍省長官室――――

「何？無人の国籍不明艦を捕獲しただと？」

「はい」

新海軍長官になった東郷毅大将の言葉に参謀長の秋山敬一郎中将が頷く。

「発見した時、不明艦には乗組員がおり、救出しましたが全員死亡していました。それと至る所に被弾の痕跡があり、煙も噴いていました」

「それを捕獲したと……」

「はい。平賀所長が検査をしていますが、艦種は巡洋艦で前部に二連装の主砲が二基と、前部の下部にもう一基あります。それと、艦首にも砲口があると報告しています」

「ふむ……。とりあえず、全力を挙げて検査をしてくれと平賀所長に言ってくれ」

「分かりました」

それから一週間が過ぎた時、平賀所長が報告に来た。

「東郷君。あの巡洋艦は凄すぎるぞッ！！」

平賀が興奮をしながら説明していく。

「……波動エンジン……だと？」

「あぁ、超光速航法エンジンだ。宇宙エネルギーを圧縮し超光速タキオン粒子に変換して動力としているため事実上の無限動力機関だ。それに同粒子が反動推進剤をも兼ねるため航続距離も無限大だ」

「……何なんですかそのチートなエンジンは？」

「それと、艦橋らしきところで戦闘映像があった」

平賀が映像を流す。

捕獲した巡洋艦の同型艦やそれを上回る戦艦等が、謎の艦隊を相手に戦闘をしていた。

『拡散波動砲発射ッ！！』

彗星を撃破するために巨大なエネルギーが彗星を襲う。

しかし、彗星は防御ガスを薙ぎ払ったに過ぎなかった。
そして大型のミサイルが来たところで映像は切れた。
「……何という戦闘なんですか。これは我々がしてきた戦闘とは違います」
秋山は拡散波動砲に恐怖をしていた。
「……平賀所長。この波動エンジンの製造は可能か？」
「長官ッ！？」
東郷の言葉に秋山は絶句した。
「一応、作れる事は作れるぞ」
「分かった。至急、波動エンジンを作ってはくれないか？日本帝国を救えるかもしれないんだ」
「分かった。出来るだけ早く作ろう」
平賀所長は急いで長官室を退出した。
「……長官。本当に波動エンジンとやらを作るおつもりですか？」
「……あぁ」
秋山の言葉に東郷は頷いた。

「俺は波動エンジンが日本帝国を救えるきっかけを作ってくれるのかもしれん」

「……分かりました。最期までお供いたします」

「……それは告白か？」

「違いますッ！！！」

秋山の怒号が長官室に響いた。

そして、日本帝国は中帝国を滅ぼした後、ガメリカ共和国、エイリス帝国、オフランス王国に宣戦を布告した。

――――マニラ２０００星域、旗艦山城――――

「南雲提督。前方に敵ガメリカ艦隊です」

「よし、拡散波動砲発射用意だよッ！！」

オペレーターからの報告に南雲圭子提督は頷いて、拡散波動砲の発射用意を命令した。

波動エンジンは開戦時には艦隊旗艦しか配備されていなかった。

しかし、今回の奇襲では旗艦一隻だけでも充分だった。

「エネルギー充填百％ッ！！」

「ターゲットスコープオープンッ！！明度２０ッ！！」

艦長席に座る南雲の前に照準器が出現した。

「エネルギー充填百二十％ッ！！」

「目標、前方の敵ガメリカ艦隊ッ！！」

艦長席で南雲が叫ぶ。

――ガメリカ艦隊旗艦エンタープライズ――

「敵ジャップの旗艦から高エネルギー反応ですッ！！」

「何ッ！？」

オペレーターからの報告に太平洋艦隊司令のダグラス・イーグル大将は驚いた。

――旗艦山城――

「対ショック、対閃光防御ッ！！」

南雲の言葉に艦橋要員がバイザーをかける。

「発射十秒前……五、四、三、二、一、拡散波動砲発射ァッ！！！」

シュゴオォォォーーーッ！！！

山城の拡散波動砲が発射された。

――旗艦エンタープライズ――

「高エネルギー反応来ますッ！！」

「全艦、急速離脱だッ！！」

イーグル艦隊は素早く離脱する。

しかし、波動エネルギーはイーグル艦隊の手前で何十本に分かれてイーグル艦隊に襲い掛かった。

ズガアァァーーンッ！！

波動エネルギーを貫かれた艦艇が次々と爆沈していく。

「機関フルパワーだッ！！」

ダグラスの旗艦エンタープライズは何とか拡散波動砲の攻撃を回避出来たが、生き残ったのは僅かにエンタープライズただ一隻のみだった。

「……これより戦場から離脱する……」

ダグラスはそう言って艦長席に座り込んだ。

「……本国に通信しろ。日本軍は神の槍を手に入れたとな」

これ以降、波動砲（集束、拡散）はロンギヌスの槍と呼ばれ、日本帝国とドクツ第三帝国、イタリン共和帝国を勝利に導くのだがそれはまた別の話しであった。

一発ネタ　ある一隻の巡洋艦との出会い（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿＿）m

TURN65（前書き）

結局こうなりました。

TURN65

――南アフリカ星域――

イーグル・ダグラス中将率いる攻略艦隊は南アフリカ星域にまで進出していた。

――旗艦フロリダ――

「ダグラス司令官。全艦確認しました」

「おぅ、全艦隊に告ぐ。これより南アフリカ星域の攻略を開始する。気を引き締めろよッ！！」

「司令官ッ！！右舷2時の方向から敵艦隊が来ますッ！！数からして南アフリカ星域の守備艦隊と思われますッ！！」

オペレーターがダグラスに報告する。

「分かった。山口ッ！！後方に退避しながら攻撃隊発進だッ！！」

『了解ですッ！！』

ダグラスは山口夏に指示を送り、山口機動艦隊からは攻撃隊が発艦していく。

「敵艦隊が盛んに発砲していますが、当たりませんッ！！」

「……攻撃隊が上がったのを見て動揺して砲撃を始めちまったんだろう。全艦戦闘準備だッ！！攻撃隊の攻撃が終わり次第、砲雷撃戦をするッ！！」

「了解ッ！！」

オペレーターが各艦隊に伝えていく。

「さぁ、パーティの始まりだぜッ！！」

フロリダの長官席でダグラスはニヤリと笑った。

その上では、編隊を組んだ攻撃隊が敵南アフリカ星域守備艦隊に向かって行った。

――――スエズ星域――――

「長官、偵察機からの報告です。モントゴメリーの艦隊は見当たらないとの事です」

宇垣が偵察機からの電文を読み上げる。

「ん。なら問題は無いな。全艦隊速度を上げろ。祀梨、攻撃隊発艦用意や」

『了解です』

祀梨の各空母の飛行甲板に航空機が並べられていく。

「長官、敵艦隊です。左舷１１時の方向から戦艦十二、巡洋艦二十四、駆逐艦多数が来ますッ！！距離は二十万宇宙キロッ！！」

……来たな。

「祀梨。攻撃隊は？」

『何時でも行けますよ』

祀梨がＶサインをする。

「よし、なら攻撃隊発艦やッ！！攻撃は一回のみにするッ！！」

『了解です』

何時、砂塵が吹くか分からんからな。てか、宇宙に砂塵が吹くんか？

『そこはゲームやからｂｙ作者』

――――スエズ星域守備艦隊旗艦バーラム――――

「総督代理ッ！！敵艦隊より航空機が来ますッ！！」

「……護衛空母はいないし、クルードも帰っちゃったから艦隊も寂しいわね。全艦対空砲火を開いてね」

バーラムの長官席で、エイリス帝国前女王のエリザ・ブリテンが命令する。

「了解ッ！！全艦対空砲火開けッ！！」

スエズ星域守備艦隊は対空火器を艦隊上空に仰角を上げて、一斉に発射した。

対空砲のレーザーが拡散をして烈風や天山に襲い掛かる。

動きが早い烈風は避けられたが、動きが遅く回避出来なかった天山にレーザーが命中。

被弾した天山は部品を撒き散らしながら落ちていくか、亜空間魚雷に誘爆して爆発四散する機もあった。

「全機突撃ッ！！」

攻撃隊指揮官の村田茂治少佐は全機に突撃命令を出した。

攻撃隊は一斉にスエズ星域守備艦隊に襲い掛かる。

勿論、守備艦隊の対空砲火は激しくなるが歴戦の攻撃隊はものともせずに守備艦隊に突撃していく。

「魚雷用意ッ！！」

村田少佐の九機一個中隊は旗艦バーラムを狙った。

バーラムからは対空砲火が村田中隊を襲う。

ズガァァァーーンッ！！

ズガァァァーーンッ！！

「四番機、七番機やられましたッ！！」

後部座席の平山一飛曹が村田に報告する。

「距離はッ！？」

「距離千二百……千ッ！！」

「投下ァッ！！」

村田は亜空間魚雷二本を投下して、列機も村田に習って亜空間魚雷を投下した。

バーラムは回避行動に入るが、五本の亜空間魚雷が命中した。

ズガァァァーーンッ！！

「キャアァァッ！！」

『左舷中央部に魚雷命中ッ！！』

『酸素が洩れているぞッ！！隔壁閉鎖急げッ！！』

バーラムの各所から被害報告が届く。

「ッ！？後方よりモントゴメリー艦隊ですッ！！」

オペレーターが歓喜に近い報告をした。

「……クルードが？」

転倒した際に、負傷して頭から血を流すエリザ・ブリテンが呟いた。

――モントゴメリー艦隊旗艦レパルス――

「遅くなりましたエリザ様」

『クルード……どうして？』

「帰ったように見せかけて付近に潜んでいました。奴らが侵略に来なかったらそのまま帰るつもりでしたが……」

レパルスの艦橋でモントゴメリーはエリザ・ブリテンに説明する。

「エリザ様は下がって下さい。後は我々に」

『えぇ』

バーラムが黒煙を噴きながら後方に下がる。

「では行くとするかッ！！」

モントゴメリーは叫んだ。

――――旗艦長門――――

「……後少しやのに……」

俺は拳を握り締める。

「……全艦後退や。殿は長門が引き受けるッ！！」

「長官ッ！！本当に後退をするんですかッ！？」

「当たり前や宇垣。この作戦はモントゴメリーの三十個艦隊がいない場合を考えた作戦や。三十個艦隊が現れた時点で作戦は失敗や……」

まさか隠れてたとはな……。流石は歴戦の将か……。

「全艦ボサッとすんな。さっさと帰る「ま、待って下さいッ！！」
……何や？」

オペレーターが俺の命令を遮った。

「……モントゴメリー艦隊上空にワープアウト反応ッ！！超大型ですッ！！」

モントゴメリー艦隊上空の空間が歪み出し、そして全世界を回遊している最も有名な大怪獣が出現した。

「……エアザウナッ！！」

それは飛来する厄災として恐れられている大怪獣エアザウナやった。

TURN65（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN66（前書き）

オリジナルマリーイベントです。多分、セーラの乳分はマリーに流れたんやろな（意味分からん）

H機関はやっぱあれかなぁ……。

TURN66

――旗艦レパルス――

「わ、我が艦隊上空にエアザウナがワープアウトしましたッ！！」

オペレーターが叫んだ。

「……馬鹿な……」

モントゴメリーはあまりの事に暫し呆然としてしまった。

それが自らの命を絶つきっかけになってしまった。

ゴゴゴゴゴッ！！

「エ、エアザウナが降下してきますッ！！」

「回避だッ！！急げェッ！！」

三十個艦隊が慌てて回避行動に移るが、相手は大怪獣である。

瞬く間に三十個艦隊がエアザウナの攻撃に一隻、また一隻と爆沈していく。

それは旗艦レパルスもだった。

「第四砲搭被弾ッ！！後部艦橋破壊されましたッ！！」

「……エリザ様。申し訳ございません」

艦橋内で火花が散る中、モントゴメリーは炎上しているバーラムにそう告げる。

「全艦突撃ッ！！エイリス帝国の意地を見せろッ！！」

モントゴメリーの言葉に、生き残っていた艦隊が次々とエアザウナに突撃していく。

無論、旗艦レパルスも突撃する。

「エリザ様。ご武運を祈ります」

そして、戦艦レパルスは爆沈した。

――旗艦長門――

「……長官……」

「……分かっている」

モントゴメリーの艦隊は損傷した数個艦隊を除いて壊滅した。

「エアザウナは？」

「エアザウナ、スエズ星域から離脱していきます」

「……もう満足したんか」

エアザウナが通った後は黒煙を噴き上げるエイリス艦艇がいた。

「全周囲に電波を発しろ。平文でええ。内容はただ一つ『降伏セヨ』や」

「……救助活動ではないのですか？」

宇垣が非難するように言う。

「宇垣、今は戦争中や。食うか食われるかの戦いや。勿論、降伏を受諾するんやったら直ぐに救助活動をする」

「長官。エイリス艦艇から入電です。『我、降伏ス』です」

オペレーターからの報告に俺は頷く。

「分かった。全艦隊は直ちに救助活動を開始や。長門もや」

艦隊が一斉に動き出し、エイリス艦艇に近づいて救助活動を開始した。

――5時間後――

「エイリス帝国前女王のエリザ・ブリテンです。救助活動、誠にありがとうございました」

「日本皇国海軍長官の山口三笠大将です。まず最初に謝らせて下さい」

「あら？どうしてですか？貴方は私を捕虜にしたのよ？」

「本来なら先に救助活動をするのが普通ですが、我々は互いに戦っています。なので、降伏要求を先にしてしまいました。申し訳ありません」

俺はエリザ・ブリテンに頭を下げた。

「いいえ。貴方は正しいわ。私達は戦っていたもの。だから降伏要求をしたのが正しいわ」

エリザ・ブリテンはやんわりと否定する。

「ありがとうございます。一応、捕虜待遇はちゃんとしますので。それと、南アフリカ星域も我が軍に占領されました。娘さんのマリー・ブリテンが捕虜になっているとの事です」

「まぁマリーが？」

「はい。いずれ会わせますのでもうしばらくお待ち下さい」

エリザ・ブリテンにそう言って、捕虜室を出た。

数日後、南アフリカ星域からマリー・ブリテンが送られてきた。

――――長官室――――

「君がマリー・ブリテンやな？」

「そう。ボクがマリー・ブリテンだよ」

マリー・ブリテンが頷く。

「後で母親に会わせるわ」

「本当にッ！？」

「あぁ嘘は言わん。でさ、日本軍の提督にならへん？提督の人数少なくてさ」

「（……母様に会わせる条件かな？）いいよ。でも、エイリスとは戦わないよ。姉様がいるんだしね」

プチッ

ボクは何かがキレる音を聞いた気がした。

……このおっぱいでか女め。姉様がいるからエイリスを攻めないやと？

「……いやもうええわ。提督の件は無しでええわ。気が失せた。五藤、母親に会わしたって」

「あ、はい」

五藤は俺がキレてるのに気づいたんか、早足でおっぱいでか女を連れ出した。

――――迎賓館――――

「母様ッ！！」

「あらあら」

マリーがエリザに抱き着く。

「無事だったようね」

「うん」

「さぁお茶でもしましょうか。最近、私も紅茶より日本のお茶にハマッているの」

エリザはお茶の葉が入った急須にお湯を入れて、二人分のコップに注ぐ。

「日本人は違うコップに入れるけどエイリス人の私達にはこっちのコップがいいかもね」

エリザが笑い、お茶を飲む。

「うぇ～苦ぃ～」

「フフ、マリーちゃんにはまだ早かったかしら」

二人は他愛もない話しをしていた。

「あ、そうだ。さっき、山口長官に会ったんだよ」

「あらそうなの」

「それでね、提督にならないかって言われたんだ」

「長官も物好きね。それでマリーはＯＫしたの？」

「エイリスは戦わないって条件を出したらもういいって言われたんだよ」

「……」

マリーの言葉にエリザは唖然とした。

「母様？」

「……マリーちゃん。それは駄目だわ」

「え？」

エリザの言葉にマリーが驚く。

「マリーちゃん。私達の状況を分かっているの？」

「え？捕虜でしょ？」

「そう、捕虜よ。捕虜でも私達――日本はかなり捕虜を優遇しているのよ。何故だか分かるかしら？」

「……」

マリーは無言で首を横に振る。

「日本は昔、エイリスと戦争をした事があるの。今から二百年くらい前かしらね。マレーの虎で起きた会戦よ」

「（確か教科書に書いてたような……）」

マリーが思い出す。

「その時、日エイは多数の捕虜が出たわ。エイリスは「東洋の猿」と言って大半の日本人捕虜を処刑してそれを公開したのよ」

「ッ！？」

マリーが驚く。

「勿論、日本もそれを知ってエイリスの捕虜を処刑しようとしたわ。でもね、その時の帝が「私達は野蛮ではない。処刑してしまえばエイリスと同じになってしまう」と言って処刑せずに優遇をしたの」

「……」

マリーは何も言えなかった。

「当時、捕虜になったエイリス軍人は処刑されると思っていたから逆に感激して捕虜の九割が日本に永住して日本に力を尽くしたのよ」

「……それじゃあボクは間違った事を言ったの？」

「エイリスと戦わないと言ったからねぇ。それに植民地貴族の汚職も酷いけど見る？」

「……見るよ」

マリーは頷いた。

「……こんなに税収をしてたのッ!?」

マリーはあまりの酷さに書類をテーブルに叩きつけた。

「……そうよ。それが今のエイリスの状況なの。山口長官がもういいと言ったのは貴族と同じと思ったからじゃないの」

「……」

マリーはエリザの言葉に何も言えなかった。

「マリーちゃん、謝るべきじゃないかしら?」

「……そうだね。ボク、山口に謝って提督してもらえるように言ってくるよ」

「セーラちゃんと戦う事になるかもしれないわよ?」

「……ボクはエイリスの王族であると同時に軍人だよ母様」

「……そう」

マリーの言葉にエリザは頷いた。

TURN66（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN67（前書き）

マリーイベント続きとクリオネイベント。

クリオネは可愛いです。

TURN67

――長官室――

「山口、いる？」

ヒョコッとマリー・ブリテンが長官室に入ってきた。

「……何か用か？おっぱいでか女」

俺は書類を処理している最中やった。

「お、おっぱいでか女ッ！？」

「事実やろ……」

マリー・ブリテンが驚いてるが知らん知らん。

ちなみに田中はマリーの大きさに鼻血を噴いて、夜のおかずにしているとかしてないとか……。

「んで何やねん？」

「あ、そうだ。……あのね山口。さっきはごめんなさい」

マリー・ブリテンが頭を下げる。

「ボク、エイリスが相手でも戦うよ。どんな事でもするし言う事聞くから、だからボクを提督にして下さいッ！！」

……成る程な。

「母親に怒られたんか？」

「うぇッ！？Σ（ ゜Д ゜）な、何で知ってるのッ！！」

「かまかけただけやのに……」

「騙したのッ！！」

「騙されるお前が悪い」

「うぅ～、山口は意地悪だよぅ」

……何やろ。コイツスゲー可愛いな。

「姉貴と戦うかもしれんで？」

「いいよ。ボクも軍人だよ。覚悟はしてるよ」

……ならええけどな。……そうや（ニヤリ

「どんな事でもするんやな？」

「そうだよ」

「ならちょっち来い」

俺はマリー・ブリテンを近づけさせて、でかい胸を揉んだ。

ムニュムニュ。

「ん……くぅ……な、何を……」

「いやぁ、何でもするって言うからさ。最近、いずみ達としてないから胸だけでもと……」

ムニュムニュ。

「……く……恥ずかしいよぉ……ぁん……」

「……あんたは一体何をやっているのよッ！！」

バカーンッ！！

「あぶぃすッ！！」

部屋にいたゲッベルスに叩かれた。

「いやつい……」

「ついじゃないでしょッ！！まだ書類は残っているのよッ！！」

「ごもっともですはい」

「だったら仕事をしなさいッ！！」

「イエッサーッ！！」

三笠が仕事をし始める。

「あんた、大丈夫？」

「あ、はい。（……意外と気持ちよかったのは言えないよ……）」

「全く。レーティアに手を出したらただじゃおかないんだからね」

ギク……。

「ん？」

「……（滝汗）」

俺は必死に仕事をする。

「……仲いいんですね」

「何処がよッ！！」

ゲッベルスが吠える。

「アハハ。あ、ボクはマリーでいいよ。勿論長官もだよ」

「分かった。提督の登録はしといたるから。よろしくなマリー」

「うん」

マリーは微笑んだ。

「……そういや今日はアルイメンが言っていた決算日やったな」

……ようやく仕事が終わった時に思い出した。

「そういえばそうね」

ゲッベルスも頷く。

「聞きに行くか。ゲッベルスも来るか？」

「……そうね。レーティアも平賀所長のところにいるし、私も行くわ」

そして二人でアルイメンの部屋に向かった。

――――アルイメンの部屋――――

「……どうして……どうして足らないのよぉ～」

クリオネ・アルイメンは部屋の中をウロウロしていた。

「あ、そうだわ。今日はまだ決算日前なのよ。そうだわ」

と、アルイメンがパソコンを見ると、日付は昨日ではなく今日だった。

「どうして足りないのよぉ～」

「アルイメンおるかぁ？」

アルイメンが唸っていると、部屋の外には三笠とゲッベルスがいた。

「うきょッ！？Σ（ ゜Д ゜）……開いてるわ……」

「よぉ」

三笠達が入ってきた。

「で、どうやった？」

「……ッ！！」

俺が結果を聞いたらブワッと泣き出した。

「うえぇぇぇぇんッ！！どうせ私は駄目な女よーーーッ！！」

「……つまり駄目だったわけね」

「はきゅッ!?Σ（ ゜Д ゜）」

……ゲッベルス、止めを刺すなよ。てか、アルイメンは鳴き声みたいやなおい。

「ぅ～。もういいわッ!!さっさと煮るなり焼くなりしなさいよッ!!」

剥きになるなよ。

「で、どうするの？」

「そうやなぁ……アルイメン。明日は俺もお前も非番やし俺の家にメシを作りに来てや」

たまにはいずみ達も休ませないとな。

「……そんなんでいいの？」

「あぁええよ」

「……何か面白くないわね」

……どうしろと言うねんゲッベルス。

翌日、アルイメンが家にやってきた。

「やってやろうじゃないのッ！！」

「閣下。大丈夫でしょうか？」

いずみが心配して俺に言う。

「まぁ大丈夫やろ」

パリィーンッ！！

ガシャァーンッ！！

ドカァーンッ！！

「うんにゃあぁぁぁーーーッ！！！」

「……俺が行ってくるわ。いずみ達はゆっくりしとき」

「は、はい……（汗）」

「んで何を作ろうとしてたんや？」

「カ、カレーを……」

「分かった。カレーなら俺も作れるからアルイメンも手伝え」

「えぇぇッ！？」

「ほら、早くしろ」

「う、うん」

二人で作ったカレーは中々の好評やった。

TURN67（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN68（前書き）

コルダイベント。

TURN68

――エイリス帝国首都ロンドン――

「何ですってッ!?母様とマリーが捕われたとッ!!」

騎士提督のロレンスからの報告にセーラ・ブリテンは思わず叫んでしまった。

「それに、エリザ様の救出に向かったモントゴメリー提督はエアザウナによって……」

「……そんな……」

一気に三人もの戦力を失ってしまった事にセーラは顔を青くした。

「……如何なされますか?」

「……」

ロレンスの言葉に、セーラは少し考える。

やがて、ゆっくりと口を開いた。

「……ケニア星域とアンドロメダ星域、北アフリカ星域の守備艦隊

は大ローマ星域まで後退をするのです。そこで死守をします」

「……よろしいのですか？そこまで後退しても？」

「各個がバラバラに動いては日本の連合艦隊には敵いません。なら大ローマまで後退して死守をします」

「分かりました」

ロレンスは頭を下げ、部屋を出た。

そして翌日から三星域の守備艦隊は一斉に現星域から撤退を開始して、大ローマ星域まで撤退をした。

「次はどれを乗るんや？」

「あれに乗りましょ。面白そうだわ」

ショートヘアでピンク色の髪をしたコルダに手を引っ張られながら俺達は遊園地で遊んでいた。

実は昨日、スエズ星域で捕虜にしたコルダを提督にしようとしたんやけど、コルダが条件として「私を遊園地に連れてって」と言ったために遊園地に来ていた。

……別にスキーちゃうからな。（ネタ分かる人は凄いかも）

そして次はジェットコースターに乗る。

「キャハハハ。速い速い～」

コルダは余裕やな。まぁ俺もまだ余裕やしな。

ユニバのジェットコースターに比べればまだ軽い軽い。

「キャハハハッ！！」

ちなみにコルダは貴族の三女らしい。

「これは何なの？」

「これはハンバーガーや。手軽に食えるから人気や」

コルダと昼メシはマクド（この世界はマクドナルルッド）でハンバーガーとポテトを食べた。

「ほら、慌てて食べるからケチャップが付いてんぞ」

頬っぺたに付いたケチャップをティッシュで拭き取る。

「あ、ありがと……」

コルダが顔を真っ赤にして礼を言う……多分フラグ立ったか。

「わぁ～。高い」

そして只今、ラストとして観覧車に乗っている。

お化け屋敷とか入ったけど……言うな。何も言うな。

だって俺、幽霊は怖いねんから……。

「……ありがとね山口。無理に付き合ってもらって……」

「いや別に構わんよ。久々に俺もゆっくり出来たしな」

まぁ遊び疲れたけどな。

「私ね。貴族だったから何処にも遊びに行けなかったんだ」

「俗に言う箱入り娘てやつか？」

「まぁ大体合ってるわね。軍に入ったら少しは自由かなぁと思ったけど、貴族だから毎日毎日パーティーでさ。もう疲れちゃうわ」

「ハッハッハ。それは大変やったな」

「まぁね。だから今日は凄く思い出に残ったわ」

コルダが俺に近づく。

「だから、これはお礼だよ」

コルダはそう言って俺にキスをした。

キスと言っても軽く唇と唇が当たる軽いキスやった。

「コルダ……」

「フフ……」

コルダはニコッと笑った。

「あのぅ、もう一周しますか？」

「「結構ですッ！！」」

……いつの間にか地上に降りてたみたいやな。

「ママ～。あの二人、何をしていたの？」

「見ちゃいけませんよ」

そう言いつつ、子どもの目を隠す親がちらほらといた。

「……行くか……」

「……そ、そうだね……」

俺達はそそくさと遊園地を後にした。

――――長官室――――

「何かあったんですか？」

「……いや何も……」

今朝、コルダと会ったらお互いに顔を真っ赤にしたのは秘密やな。

「そういえばコルダ提督の第五機動艦隊は朝から張りきってましたよ」

「そ、そうか……」

……そんなにキスが嬉しかったんやろか……。

「ところで長官。三星域からは……」

宇垣の言葉に俺は真剣な表情をする。

「あぁ。どうやら敵さんはいないみたいやな」

彩雲偵察機からの報告で、北アフリカ、ケニア、アンドロメダの三星域には敵守備艦隊は一隻も見当たらなかった。

「……恐らくは本土決戦か、大ローマでの防衛線をやるんやろな」

あまりにも不気味すぎるけどな。

「それで……アンドロメダには行きますか？」

「……勿論や」

宇垣の言葉に俺は頷いた。

TURN68（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ６９（前書き）

今回はまんまヤマトです。

異大東亜からの続きになりますが、Ｆ―Ｘはタイフーンに決定してＦ―３５は心神開発のために一機だけの試験購入したらええんかなぁと脳内で思ったけど、心神の初飛行は１４年くらいやし、あんま意味ないかな？

TURN69

俺は今、帝の旗艦大和に乗ってアンドロメダ星域の攻略にいた。

「すみません、帝。長門が改装中なんで乗せてもらって……」

「いいですよ山口。山口もいたら楽しいですし」

帝がそう言う。

「長官。アンドロメダ星域、ほぼ攻略しました。残りは惑星イズカンダルだけです」

「分かった」

オペレーターからの報告に俺は頷く。

「全艦隊に告ぐ。これより惑星イズカンダルに急行する」

山口夏、リンファ、ジャカルタの艦隊がイズカンダルに向かった。

「長官、前方に惑星。イズカンダルです」

オペレーターが報告する。

……やばい、やばいわ。今、俺の頭ん中は一隻の宇宙戦艦のＯＰの歌が流れているッ！！！

『ちなみに作者もヤマトの歌を聞きながらこれを執筆中ｂｙ作者』

「全艦隊、惑星イズカンダルに着陸や」

全艦隊は惑星イズカンダルに着陸をした。

――――惑星イズカンダル――――

イズカンダルは殆どが海で覆われていた。

「ふわぁ、一面水ですよ山口」

「そうですね帝」

帝が感激している。

「長官、大陸らしき物が此処から右舷２時の方向に約八十キロの地点にあります」

「分かった。全艦隊右舷２時へ面舵」

全艦隊が舵を右に向けた。

「建物はあったけど、誰一人いないな……」

「やはり悪戯だったのでは？」

俺の言葉に宇垣がそう言う。

「阿呆宇垣。あの通信カプセルはな……男のロマンやねん……」

「……意味が分かりませんよ……」

「へぇ、男のロマンなんですか～」

宇垣が呆れ、帝が感動していた。

『日本の皆さん。よく此処まで来てくれました』

「「「ッ！？」」」

突然の声に俺達は驚く。

『私はこの中央の建物にいます。私はイズカンダルのウーシャ』

それ以降、声は聞こえなかった。

「……とりあえず建物に入るか」

「分かりました」

そして、俺達は一番高い建物に入った。

「日本の皆さん、ようこそイズカンダルへ。私はイズカンダル星人最後の水住民のウーシャです」

中には巨大な金魚鉢があり、その中に一人の女性と二匹のくらげがいた。

「日本帝国の帝です」

「日本帝国海軍長官の山口三笠大将です」

「参謀長の宇垣纏中将です」

俺達はウーシャに挨拶をする。

「皆さんはるばると申し訳ありません。あの、ポンプはありますか？」

「あぁあります」

実は先日、新たにイズカンダルから通信カプセルが来た。

魚用のポンプが壊れているので助けてほしい。

それが、最初に送ってきた通信内容やった。

流石に放っておくのもあれやから助ける事になったんや。

「あぁ……生き返ります」

俺がポンプを代えると、ウーシャの顔色は爽やかになってきた。

「皆さん。本当にありがとうございました」

「あの、ウーシャさん。宇宙と終焉とか通信カプセルに言ってたんですけど……」

帝が恐る恐るウーシャに聞く。

「あ、もしかしてこの宇宙ちゃんと終焉ちゃんかな?通信カプセルに早くしないと宇宙ちゃんと終焉ちゃんが死んじゃうって言ったから」

「「「……」」」

ウーシャの言葉に俺達は無言やった。まぁ悪い方でなくてよかったけどな。

「……まぁ生きててよかったわ」

「そうですね。あ、それでなんですけどウーシャさん。日本に来ま

せんか？」

「日本にですか？」

帝の言葉にウーシャが首を傾げる。

「はい。もし、またポンプが壊れてウーシャさんが助けを求めるといった繰り返しでいたちごっこになると思うんです。ならいっそ、ウーシャさんを日本に引っ越しはどうかなぁと思ったんです」

成る程なぁ。

「そうですね。分かりました。すみませんが、日本でお世話になりますけどよろしいですか？」

案外、即決やったな。

「はい、勿論ですよ」

帝が笑った。

「お住まいは私の皇居にしましょう。ウーシャさんはあまり動けませんし」

「はい。いいですよ」

ウーシャの了承も出て、ウーシャは日本帝国へ引っ越しする事になった。

――旗艦長門――

「ん？ケニアの原住民？」

「はい。木造船で来てるんですが……」

……待て。どうやって宇宙に木造船が航行出来んねんッ！！

「……とりあえず会うか。代表を連れて来て」

「分かりました」

宇垣が部屋を出た。

……何やろかなぁ……。

TURN69（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN70（前書き）

ブラックのコーヒー用意です。
何でこうなった……。

TURN70

「お前がニホンの偉い人か？」

「あぁそうや。海軍を取り仕切る長官や」

「私は暗黒人女王のマウマウだ」

褐色の肌をした女性が自己紹介をする。

「俺は山口三笠や」

俺も挨拶をする。

「エイリスの侵略者を追い払ってくれた事は我々はとても感謝している。だが、貴様らが奴らと同じであれば我々は容赦なく貴様らを倒す」

マウマウが眼光を鋭くして俺を睨む。

「大丈夫や。ウチらはそんなんしないからな」

「……その言葉、嘘はないか？」

「嘘とちゃうねんけどな……。なら、提督になって俺らを見張るの

はどうや？」

「……分かった。提督になって、本当にエイリスと違うのか見極めてやる」

マウマウはそう言った。

「んじゃぁよろしくな」

マウマウが日本軍の提督になった。

「や、山口……」

「何やアドルフ？それに山下まで」

仕事をしていると、急にアドルフと山下が入ってきた。

「い、いやなに。もうすぐで昼だからな。私達が昼食を持ってきた」

「……」

「待て山口。何故扉に行こうとする？」

ガシッと両肩をアドルフと山下に掴まれた。

「い、いやぁ。ちょっと腹痛いからトイレに……」

「ほぅ。なら丁度、正露丸を持ってきたのだ。飲め」

山下が正露丸を見せる。

……退路が無いッ！！

「言っておくが、今回はちゃんと出来たぞ。南雲にも味見をしてもらった」

「……それならええんやけど……」

山下の言葉に、俺は少し安堵をした。

「私も初めてだったが中々上手く出来てたぞ」

「そうか。なら食べるわ」

流石にいらんなんて言ったらゲッベルスにシバかれるしな。

ピンポーン。

「丁度昼になったな。では食べようか」

山下が三つ分の弁当を出した。

「んでは……」

俺は卵焼きを取って食べる。

「……」

「「……」」

……何か二人に見つめられたら困んねんけど……。

まぁ味はというと……。

「……美味いな……」

卵焼きはやっぱ塩やな。砂糖やと甘くて何か嫌やしな。

「ほ、本当か？」

二人が俺に聞く。

「あぁ。美味いで」

「……よかった……」

「……そうだな……」

よく見ると、二人の手は絆創膏をかなり付けていた。

……ほんまに一生懸命やってんなぁ。

「……ありがとうな二人共」

「「……／／／／／／」」

俺の言葉に二人は顔を真っ赤にした。

「あ～美味かったぁ～」

あれから全部食べたけど美味かった。

桜花やいずみのおかげやろな。

特にほうれん草は美味かった……。

「喜んでくれてなによりだ」

「うむ」

俺達は食後のお茶を飲んでいた。

ぁ～あったまる……。

「それとなんだが山口……」

「ん？」

二人が耳かきを取り出した。

「……マジ？」

「「……（コクリ）」」

俺の言葉に二人は頷いた。よーするに美女二人に耳かきをしてもらうんですよ奥さんッ！！（誰やねん奥さんって……）

「まずは私からだ。此処に頭を載せろ」

山下がポンポンと膝を叩く。

……耳かきで膝枕やとッ！？やっぱ今日は俺の命日になるんやろか……。

「ん、んじゃぁ失礼して……」

俺はソファーに座る山下の膝に頭を載せた。

「それではやるぞ」

「お、おぅ」

どうか失敗せんように……。

山下が耳かきを俺の中に入れて、耳垢を取っていく。

「……ふわぁ……」

ぁ～気持ちいい……。

山下も俺が気持ちいいと分かったのか、どんどんと耳の中を掃除していく。

山下め、上手いやないか……。

「うむ。こっちは出来た」

左耳の掃除が終わった。

「結構取れたな」

「まぁ仕事が忙しかったからな」

「山口。次は右だぞ」

アドルフがカモンカモンとジェスチャーをしている。

「はいはい……」

俺は反対側に座って、アドルフの膝に頭を載せた。

「それでは……」

アドルフは若干、緊張しながら右耳に耳かきを入れて耳垢を取りはじめる。

……はぁ～……。

食後のちょっとした休みやなぁ……。

「レーティアいるッ！？」

そこへ、ゲッベルスが長官室に入ってきた。

『あ……』

俺達は思わず、固まってしまった。

しかも、俺はアドルフに膝枕してもらってる。

……詰んだ……（滝汗）

「……フフフ……フッフッフ……」

や、やばい。俺はゆっくりとアドルフの膝から戦略的後退をする（笑）

「……死ねェェェ山口ィィーーーッ！！」

ゲッベルスが俺に襲い掛かってきた。

ガッ！！

「あれ？」

すると、ゲッベルスは躓いてスローモーションで俺に倒れかかる。

そして……。

チュッ。

『……』

……何の奇跡か、俺と倒れてきたゲッベルスはキスをしてしまった。

「……」

ゲッベルスは無言で起き上がるが、顔は真っ赤やった。

「……ごめんなさい……」

「……いや……俺も悪かったしさ……」

ゲッベルスは顔を真っ赤にしながら部屋を出た。

TURN70（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN71（前書き）

今週の土曜にある八尾駐屯地のイベント行こうかなぁ。

TURN71

あれから、ゲッベルスとは気まずい雰囲気が続いている。

『……（キョロキョロ）』

一緒に仕事をしている五藤とクリオネが俺とゲッベルスを何回もチラチラと見ている。

……スマン二人とも……。

ちなみにゲッベルスはというと……。

「……」

黙々と仕事をしている。たまにポキッとシャーシンを割っている。

……これはやばいな……（汗）

「はぁ……ゲッベルス。ちょっとこい」

「え？ちょ、長官？」

俺はゲッベルスの手を取る。

「ちょっと外出るから」

「は、はい」

「ど、どうぞ」

二人の了承を得てから俺とゲッベルスは長官室を出た。

その入れ違いに宇垣が入ってきた。

「あら？長官は？」

「……ちょっと……ね……」

「えぇ……ちょっとね……」

「？？」

二人の言葉に宇垣は首を傾げた。

――――屋上――――

「もう、何処まで連れていく気よッ！！」

「……此処でええな……」

幸いにも他の奴らはおらんかった。

「で？何よ？」

「……スマンかった……」

俺はゲッベルスに頭を下げた。

「え？」

「こないだの膝枕の件で怒ってるんやろ。悪かった」

「……」

「せめてアドルフ達は怒らんでええから。あ、それともアドルフとセックスしたのが原因か？それも悪かった」

「ちょ、ちょっと長官。別に怒ってないわよ」

「……え？」

ゲッベルスの言葉に俺は頭を上げた。

「ちょっと寝違えたから機嫌が悪かったのよ」

「……何や、謝って損したわ」

「何よその言い草は。私が悪いみたいじゃないのよ」

「全面的にゲッベルスが悪い気がするわ」

「何ですってェッ！？」

ゲッベルスが怒号を放つが、俺は自販機に缶コーヒーを二本買う。

「はいよ。奢ったるわ」

俺はゲッベルスに一本渡した。

「……ありがと……」

ゲッベルスが小さく呟いた。

「ぁ～、久しぶりのサボりも中々やな」

「フフ。ベンチでも座りましょ」

「あぁ」

俺達はベンチに座って缶コーヒーを飲む。

「……ミルクコーヒーみたいね……」

「牛乳が二二％あんねや。我慢せぇ」

俺はこれが好きやしな。てか、ミルクティーとかあるけど、牛乳を飲んでその後にお茶を入れたらミルクティーとちゃうか？

『違うからｂｙ作者』

「……」

……あ、あかん。眠たくなってきた。

「……フフ。膝を貸すわ」

ゲッベルスは膝をポンポンと叩く。

「ええんか？」

「缶コーヒーの御礼よ」

まぁゲッベルスが言うなら……。

「お邪魔します」

俺はゲッベルスに膝枕をしてもらう。

……ふむふむ……。

「ゲッベルスの膝はスベスベやな」

「やん。何処触ってるのよ」

「膝です（キリ（、・ω・′））」

「……」

ゲッベルスは溜め息を吐いた。

フワァッ

そこへ風が吹いて、ゲッベルスの長い黒髪がサラサラと流れる。

「……綺麗やな……」

「え？」

おっと、つい口が出たか。

「何もないわ」

「んもう」

ゲッベルスが苦笑する。

……多分聞こえてたな。

「あ……」

「どないしたゲッベルス？」

「……そういえば貴方。レーティアとセックスをしたとか言ってなかったかしら？」

「……」

ガシッ！！

無言でゲッベルスの膝から戦略的後退をしようとしたら肩を掴まれた。

「あの……ゲッベルスさん？」

「……どういう事なのか説明してもらおうかしら？」

ゴゴゴゴゴゴッ！！

……般若や。般若が此処におるッ！！

「ま、待て。話せば分かるッ！！」

「問答無用ッ！！」

「アーーーッ！！！」

海軍省の屋上に俺の叫び声が響いた。

「全くもうッ！！ネットの中なら先に言いなさいよッ！！」

「話す前にお前が殴ってきたんやろが……」

「グ……」

医務室で右頬にガーゼを貼ってもらっていた。

ゲッベルスに左ストレートが決まって倒れた時に右頬を擦って血が出たんやな。

「フフ、仲良しですね」

「何処がよッ！！」

イネスさんの言葉にゲッベルスが反論する。

「だって、慌てて医務室に入り込んで来たんですもの」

「グ……」

まぁゲッベルスは俺が血が出ているのに慌ててたな。

「～～～。もう、先に戻ってるわよッ！！」

ゲッベルスは顔を赤くしながら医務室を出た。

「長官も大丈夫ですよ」

「スマンかったな」

「いえいえ、仕事ですから」

俺は医務室を出た。

まぁ仲直りは出来た……かな？

TURN71（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN72（前書き）

イタリンです。

TURN72

それから数日後、日本連合艦隊は大ローマに侵攻した。

「長官。全艦隊ワープアウトしました」

「ん」

オペレーターからの報告に俺は頷く。

攻略艦隊は俺、いずみ、桜花、古賀、祀梨、田中、リディア、スカーレット、ダグラス、アルイメン……まぁいつもの艦隊やな。

こら、そこ。手抜きと言うな。

「前方からエイリス、イタリン艦隊が接近しますッ！！距離四万宇宙キロッ！！」

「……待ち構えてたな。祀梨は後方へ退避や。全艦砲雷撃戦用意やッ！！」

『了解です。たまには出番が欲しいです』

『すんませんｂｙ作者』

何か電波が聞こえたけど気のせいやな。

「全艦砲雷撃戦用意完了ッ！！」

「敵エイリス、イタリン艦隊が砲撃を始めましたッ！！」

ビーム弾が来るが、別の方向へ行ったりする。

「相手の錬度が低いけどまぁ当然やな……」

エイリスの貴族の内、腐敗していない貴族や優秀な貴族はエイリスに未来が無いと分かるとすぐ日本に降伏をしてきてる。

ロンドン星域でもエイリスを見限った貴族が多くいるらしい。

まぁ俺らにとっては嬉しい事やねんけどな。

ちなみに、帝に謁見した貴族は何故か帝ファンになっているのが多数いるけど何でや？

まさかロリか……。

そういやこないだ会った貴族の嫁さんはかなり年下やったな。

本人達は駆け落ちや言うてるけど……。

「長官。弾種はどうしますか？」

「ん～。三斉射までは拡散モードでええわ。四斉射目から収束モードに変更や」

「了解です」

さぁて、ちゃっちゃと終わらすか。

――エイリス艦隊旗艦レナウン――

「えぇい何故当たらんのだッ！！よく狙えッ！！」

艦隊提督のサマービル中将が叫ぶ。

「で、ですが我が軍の錬度が低下しており……」

「そんな言うてる暇があれば撃てッ！！」

「は、はいッ！！」

エイリス艦隊は射撃を続けるが、中々当たらなかった。

一方、イタリン艦隊の射撃は命中弾を出していた。

――イタリン艦隊旗艦リットリオ――

「主砲二度修正。目標、敵巡洋艦ッ！！」

「照準完了っす」

「撃てェェェーーーッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

リットリオの主砲が火を噴いて、ビーム弾は巡洋艦浅間に直撃した。

「敵巡洋艦に命中したっすよ」

「次は、後方の敵戦艦に照準せよッ！！」

リットリオの艦橋で神聖ローマ帝国王族の末裔であるユーリ・ユリウス元帥が奮闘していた。

旗艦である戦艦リットリオはイタリン共和帝国が滅亡してから竣工した新型戦艦である。

ムッチリーニ・ベニスが推奨した「軍艦は可愛いのにしましょう」を破り捨て、新たに建造したのがリットリオ型戦艦であった。

「日本軍など恐るに足りん。全艦我に続けェーーーッ！！」

イタリン艦隊は先頭にリットリオにして突撃を開始した。

――旗艦長門――

「敵イタリン艦隊が突撃をしてきますッ！！」

「……イタリンにも優秀な提督がおるみたいやな……」

「そのようですね」

俺の言葉に宇垣が頷いた。

事実、先程の戦艦からの砲撃で巡洋艦浅間が大破航行不能になってしまったしな。

ズガァァァーーンッ！！

「駆逐艦沖風沈没ッ！！」

「……エイリスよりイタリンの砲撃が上やな……」

「はい」

「……ならば、徹底的に叩くッ！！全艦、照準を敵先頭艦に合わせるんや。アイツが敵イタリン艦隊の旗艦や」

「了解ッ！！」

長門の前部連装プラズマショックカノンが敵先頭艦に照準する。

「照準完了ッ！！」

「撃ェェェーーーッ！！」

ドシュウウゥゥゥーーンッ！！

全艦隊から一斉にプラズマショックカノンが発射された。

ビーム弾は次々と敵先頭艦に命中した。

ズガァァァーーンッ！！

ズガァァァーーンッ！！

敵先頭艦が猛火に包まれた。

――――旗艦リットリオ――――

「第三区画火災発生っすよ」

「第二通路炎上中っす」

「隔壁閉鎖だッ！！消火活動急げッ！！」

「無理っす。被弾個所が多すぎるっす」

「ぬぐぐ……エイリス艦隊はどうした？」

「え～と、エイリス艦隊は撤退してるっすよ」

「何ィッ！？」

オペレーターからの報告にユリウスは驚いた。

「腰抜けがッ！！」

ユリウスは撤退するエイリス艦隊に罵倒をするが逃げるものは仕方ない。

「敵日本艦隊から降伏の電文が来てるっすよ」

「……」

オペレーターからの報告にユリウスは口を閉ざしてしまう。

「……もうここいらでいいんじゃないすか提督？」

「……分かった。降伏しよう」

オペレーターの言葉に、ユリウスはゆっくりと頷いた。

日本皇国は大ローマを占領する事に成功して、ユリウス提督以下のイタリン艦隊を捕獲した。

TURN72（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN73（前書き）

田中に春が来た。

TURN73

大ローマ星域のとある惑星に田中とユリウスがいた。

「何で私がムッチリーニを迎えに行かないといけないんだ」

「文句を言うなよ。元はお前が幽閉したんだろうが」

山中を二人が歩いている。

何故、山中で歩いているのか？

それは昨日の事であった。

――――回想――――

「んで、あんたがユーリ・ユリウス提督やな？」

「……あぁそうだ」

長門の長官室で三笠と捕虜になったユリウスと挨拶をしていた。

「てかさ……大丈夫か？」

「……三分、時間をくれ」

「ええよ」

ユリウスは黒ビキニを着ていた。

理由を聞けば、エイリスの奴らが着ろと強制したらしい。

「済まなかったな」

「いや、気にしてへんよ。で、日本軍に協力してくれるやろか？」

「……助かったのも何かの縁だ。やらしてくれないか？」

「ありがとな。そういやイタリンの元総帥のムッチリーニはどうなったんや？」

「確かクーデターが勃発してから山荘に幽閉されているはずだが……」

「ふむ……宇垣。田中を呼んでくれや」

「分かりました」

そして数分後に田中が来た。

「何だ長官？」

「あのな田中。この惑星に元イタリン総帥のムッチリーニ・ベニスが幽閉されているらしいから解放してきてな。もし、出来たら仲間にしといて。同行者はユリウスな」

「ちょ、ちょっと待てよ長官ッ！！何で俺が行かないといけないんだよッ！！」

「だって、俺は今からアルイメンのところに行って決算はどうやったか聞きに行かなあかんねん。まぁお使いと思ってくれたらええわ」

「お使いかよッ！！」

田中が喚く。

「んじゃぁ、後は頼んだで」

三笠はそそくさと長官室を出た。

「お、おいッ！！」

バタンッ！！

「「……」」

そして長官室には二人が残った。

「……行くか……」

「そうだな……」

二人は溜め息を吐いて、山荘に向かったのであった。

――――回想終了――――

「……なぁ」

「何だ？」

「何時になったら着くんだ？かれこれ３時間も歩いているぞ」

「知らん。私もこんなに歩くとは思わなかったからな」

ユリウスはタオルで汗を拭く。

「ぁ～畜生ッ！！」

田中がいらついた表情で近くにあった石を投げた。

ビュッ！！カツンッ！！

石はスズメバチの巣に命中した。

「「あ」」

ブーンッ！！ブーンッ！！

「「……逃げろォォォーーーッ！！！」」

ハチが追い掛けてくる中、二人は逃げまくる。

「貴様はなんてことをするんだッ！！」

「うるせぇッ！！巣があるとは思ってなかったんだよッ！！」

二人は走るが、ハチの大群はだんだんと二人に近づいてくる。

「糞ッ！！……こうなったらッ！！」

「なッ！？／／／」

田中はユリウスをお姫様抱っこをした。

「しっかり掴まっとけよッ！！オラアァァァァーーーッ！！！」

田中はスキルの爆走を活かして、何とかハチの大群から振り切る事が出来た。

『まず無理ですｂｙ作者』

「はぁ…はぁ…此処までくれば大丈夫だろ」

二人はいつの間にか開けた平原に出ていた。

「お、おい降ろせッ！！／／／」

「あ、あぁすまねぇな」

ユリウスは顔を真っ赤にしながらお姫様抱っこから降ろされた。

「全く……いきなりするなんて……／／／」

「わ、悪い。急だったからな……／／／」

二人は顔を赤くしてしまう。

「ん？おい、あの小屋は？」

田中が小屋を見つけた。

「……あれのようだな……」

ユリウスが確認をする。

「んじゃぁ行くか。てか、ムッチリーニは俺らの仲間になるか？」

「……どうだろうな。あれの頭は何を考えているか分からん……」

ユリウスは溜め息を吐いた。

「おい。ムッチリーニ・ベニスはいるか？」

ドンドンドンドンッ！！

田中が小屋の扉を開く。

「はいはい何ですかぁ？」

「ぶほォッ！！Σ（ ゜Д ゜）」

田中は小屋から出てきたピンク色の長髪の女性――ムッチリーニ・ベニスを見て鼻血を出した。

……まぁ所謂、ムッチリーニの爆乳を見たのが原因だ。

「た、田中？おいしっかりしろ」

それに気づいていないユリウスが田中を揺らす。

「あらぁ？わぁユーリちゃんだ～」

ムッチリーニはほんわかとした感じで久しぶりの旧友に会ったような表情をしていた。

「日本軍の提督ですか？」

「あぁ。どうだろうか？」

いざこざはあったが何とか二人はムッチリーニと交渉をしていた。

「う～ん……いいわよ。私もそろそろ身体を動かさないと太っちゃうしね」

「……（また胸が膨らんだとか言うんじゃないだろうな……）」

ユリウスはイライラしながら聞いていた。

一方、田中はというと。

「……パフパフ……エヘェ……」

また少し鼻血を垂らしていた。

「あらあらまた鼻血が出てるわよ」

ボインッ。

ムッチリーニが胸を揺らしながら田中の鼻血を拭いていた。

「……エヘヘ……」

「……」

ギュッ！！

田中の表情にユリウスは知らず知らず、田中の脚を踏んだ。

「ハグッ！？」

「ん？」

状況を分かっていないムッチリーニが首を傾げた。

「終わったならさっさと行くぞッ！！（何だ……何故私はイライラしているんだ……）」

ユリウスはそう言いつつ、心の中では自分の変化に戸惑っていたのであった。

TURN73（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN74（前書き）

秘密のワープコードイベント。

これにはゲームではムカついた。

TURN74

「今日の会議はこれで終わります」

セーラの言葉に貴族達は会議室から退席していく。

「……はぁ……」

貴族達が全員退席した後、セーラは深い溜め息を吐いた。

「……残る防衛星域はロンドンとパリのみ。艦隊は錬度不足。どう戦えばいいのかしら……」

セーラはここ数日は眠れない日々を過ごしていた。

「何か……何か逆転する物があれば……」

その時、セーラはある事を思い出した。

「……確か母様が……」

セーラは会議室を走って出た。

行き先は自分の母親であるエリザの部屋だった。

「確かこの箱だったわ……」

セーラはエリザの机の引き出しから一個の箱を取り出した。

「私が小さい時に母様が『エイリスが滅亡しそうな時はこの箱を開けなさい』と言っていたわ」

セーラは箱を開ける。

「……データチップ？」

箱には携帯用端末機で使用するデータチップがあった。

「何かしら？」

セーラは携帯用端末機を取り出してデータチップを装填する。

そして、ある数字が表示されだした。

「こ、これは……」

セーラは思わず携帯用端末機を落としそうになった。

「……これなら日本に勝てるかもしれない……」

セーラは再び貴族達を召集するためにエリザの部屋を出た。

セーラの顔は希望に満ちていた。

――インドカレー星域――

インドカレー星域に、多くの資源を搭載した輸送船団とその輸送船団を護衛する艦隊がいた。

「暇だなぁ……」

戦艦初瀬の艦橋でキャシーがだらけていた。

「ブラッドレイ提督。しゃんとして下さい。これが終われば、山口長官と会えるんでしょ？」

キャシーの副官が溜め息を吐きながらそう言った。

「ッ！？そ、そうだった。山口に会ったら久々に……エヘヘ……」

キャシーは何かを思ったのか目をトロンとして口からも涎を垂らして、時折「イヤンイヤン」と身体をくねらしていた。

「（全くこの人は……）」

副官は深い溜め息を吐いた。

『ヴィィーーーッ！！ヴィィーーーッ！！』

「ッ！！何だッ！？」

キャシーは直ぐさま仕事顔に戻る。

「対空レーダーに反応ありッ！！機種は……えッ！？」

「どうしたッ！！」

オペレーターからの報告が来ない事に不審に思ったキャシーが叫んだ。

「エ……エイリス機ですッ！！エイリスのソードフィッシュ雷撃機ですッ！！」

「何ィッ！？何かの間違いじゃないのかッ！！」

オペレーターからの報告にキャシーが驚きながら再確認をさせる。

「ま、間違いありませんッ！！確かにソードフィッシュ雷撃機ですッ！！数は三十機ッ！！……ら、雷撃機の後方に敵艦隊ですッ！！」

「何ィッ！？数はッ！！」

「小型空母一、戦艦一、巡洋艦三、駆逐艦八隻の艦隊ですッ！！」

「スプルアンスの艦隊は輸送船団を守れッ！！アタイの艦隊は奴ら

に突撃するッ！！」

「了解ッ！！」

初瀬の艦橋はにわかに騒ぎ始めた。

「ブラッドレイ艦隊突撃ィィィーーーッ！！」

キャシーの言葉に、艦隊は増速をしてエイリス艦隊に向かった。

――――旗艦長門――――

「エイリス艦隊が日本の占領星域に現れたやて？」

「はい。これはブラッドレイ提督からの報告です」

宇垣から報告書を渡される。

「そして、別星域に現れたエイリス艦隊の規模です」

「……小型空母一、戦艦一、巡洋艦三、駆逐艦八隻の小規模の艦隊やな」

「はい。ですが、占領星域ではエイリス艦隊の奇襲でかなり動揺をしています。今回は何とか壊滅させましたが、艦隊が配備されていない星域にエイリス艦隊が現れたら……」

「……最悪、再占領されるな……」

俺は溜め息を吐いた。

「……とにかくや。ロンドンを急いで占領するしかないな。とりあえずは監視強化はするけど」

そして、それからロンドン星域が日本に占領されるまで通商破壊が続く事になる。

TURN74（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN75（前書き）

ワープ事故イベント。

TURN75

エイリス艦隊の通商破壊が始まってから二週間が経過した。

――――海軍省食堂――――

「はぁ……」

俺は深い溜め息を吐いた。

原因はエイリス艦隊の通商破壊やな。

「大分悩んでいますね」

「ん？あぁスカーレットか」

スカーレットとコロネアが俺の向かいの席に座る。

ちなみに二人は秋刀魚定食やな。俺は焼肉定食やけど。

名前で呼んでいる理由はキリングだと妹と被るから名前で呼んでとの要望や。

なお、キリング妹はダグラスと付き合っている。

ラブラブ臭がマジパネぇけどな。

「通商破壊のエイリス艦隊は小規模やから占領星域はそれらしい被害は無いけど、動揺してるからな」

「むしろ、エイリスはそれを狙っているんでしょう」

「その間に戦力の増強と錬度不足の訓練か？」

「恐らくは……」

……厄介やなぁ。あ、そうや。

「スカーレット。悪いけど金貸してや」

「は？」

「いやぁ、俺ん家にメシ食う奴が増えてさ。メシ代がマジパネぇやねん。二万でええからさ」

「……他の人は？」

「いずみ達は自分のために使わせてるねん。流石にメシ代に入れろとは言えんしな」

「（よーするに長官は自分の金で皆さんを食べさせていたんですね）」

メイドのコロネアが心の中で頷く。

「……分かりました。給料日は返して下さいね」

「助かるわ。あ、御礼に肉やるわ」

「……太りますから……」

「いや多分胸に行くと思うで」

「長官。それはセクハラです」

「何ッ！？」

コロネアの指摘に思わず驚いた。

――――旗艦長門――――

「長官。ワープコード入力完了しました」

「おぅ。全艦ワープ準備や」

今からワープゲートをくぐって、大ローマ星域に向かうところや。

「へぇ～。これが長門の艦橋なんだね」

「はしゃいでは駄目よマリー」

「御嬢様、紅茶です」

「ありがとうコロネア」

……艦橋にはマリー、エリザ、スカーレット、コロネアがいた。

エイリスの通商破壊のために提督全員が海軍省に集結して会議が終わったんやけど、たまたま帰る方向は四人共一緒やったから便乗させてんな。

「ッ！？ワ、ワープゲートから大型艦が出てきますッ！！」

「何やて？」

長門がワープゲートに入る直前、一隻のエイリス戦艦が出て来た。

『なッ！？』

両方の艦橋で皆が驚いた。

エイリス戦艦はエイリス艦隊旗艦クイーンエリザベスであり、日本星域で通商破壊をしようと、エイリスが代々所有してきた秘密のワープコードを入力してやってきたのだ。

「緊急回避ッ！！」

「ヨーソローッ！！」

長門は回避をするが、左舷が接触した。

ガガガガガガッ！！

「左舷損傷ッ！！ワープゲートが暴走していますッ！！」

「総員何かに掴まれェーーーッ！！！」

俺は真希ちゃんと瑠璃を抱きしめた。

そして、長門とクイーンエリザベスは何処かにワープした。

「……く……」

……ん。

「みーくん。起きて」

「……真希ちゃんか……」

目を覚ますと、真希ちゃんが膝枕をしていた。

「……てか何でマリーが抱き着いてんねん……」

マリーが俺の胸に顔を埋めている。

あぁ～マリーの胸が……。そして、左にはスカーレット、右にはエリザがいるし、俺の脚には宇垣が腕を巻きつけてるし。

「真希ちゃん、起こしてくれてありがとうな」

「どう致しまして」

……とりあえずは……。

「……う……動かれへん……」

それから四人が起きたのは３０分が経ってからやった。

マリーの胸はよかったなぁ……。

「……山口、エロい顔をしている……」

「……」

ダンッ！！

「～～～ッ！！」

マリーに指摘されて、知らん顔をしてたら宇垣に右足を踏まれた。

「……とりあえず、状況を確認しましょう」

溜め息を吐いたスカーレットが言った。

「……何とも言い難いな……」

長門の外の宇宙は灰色の世界やった。

「左舷9時より接近する艦艇あり。パネルに写します」

パネルにはクイーンエリザベスがいた。

「……コンタクトを取るか……」

「よろしいんですか？」

「あぁ。何かこの世界はやばそうやからな」

俺は溜め息を吐いた。

TURN75（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN76

『……貴方が日本海軍の山口長官ですか？』

「あぁ。どうやらあんたらも迷子か？」

『そうですね。気がつけばこの世界にいました』

状況はこっちと一緒か。

「長官ッ！！前方から超巨大反応ありッ！！エアザウナですッ！！」

「ッ！？」

オペレーターからの報告にエリザが顔を歪ませた。

……そういやモントゴメリーがエアザウナで死んでんな。

「エアザウナとは接触しないように航行するんや。クイーンエリザベスもな」

『分かっています』

それから３０分。

エアザウナが付近を回遊していたが、やがて何処に立ち去った。

「……とりあえずの危機は脱したか……」

「これからどうするの？」

マリーが俺に聞いてくる。

「……一時的にエイリスと休戦するか。此処から脱出するまでな」

「……いいんですか？」

スカーレットが聞いてくる。

「流石に俺もそこまで残虐ちゃうからな。クイーンエリザベスに通信を入れてくれ。此処から脱出するまで休戦やとな」

『お話しは伺いました。我々も休戦に賛成します』

セーラも了承して、一時的ながらエイリスと日本は休戦になった。

「マリーとエリザはエイリス女王に会ってきたらどうや？久しぶりなんやろ？」

「いいの？」

「今は休戦中やねんから誰も咎めへんよ。何なら俺は目でもつむっとくで」

俺は目を閉じた。

「……ありがとう山口」

「感謝するわ長官」

二人はそう言ってクイーンエリザベスに向かった。

「……よろしかったんですか？一応、二人は日本軍の提督ですよ？」

スカーレットが俺に聞いてくる。

「久しぶりの家族水入らずに提督はいるか？」

「……いらないですわね」

俺の言葉にスカーレットは苦笑した。

宇垣も隣でやれやれと肩を竦めていた。

――――クイーンエリザベス――――

「母様ッ！？マリーッ！？」

セーラ・ブリテンは二人が生きていた事に感激のあまり泣いてしまう。

「もう、セーラは泣き虫ね」

「姉様泣いちゃ駄目だよ」

セーラが泣いた事に二人は苦笑してしまう。

「でも……よく生きててくれました」

セーラは目を擦る。

「私達は今、日本軍で提督をしているのよ」

「そうだよ」

「えッ!?それじゃあエイリスとの最前線に?」

「私の艦隊は予備的な艦隊よ」

「ボクはエイリスとの最前線にいるよ」

「マリーは……祖国と戦うのですか?」

マリーの言葉にセーラは唖然としてしまう。

「仕方ないよ姉様。今のエイリスは腐りきっているだもの。一度、占領されないと貴族も分からないよ」

マリーは溜め息を吐いた。

「マリー……」

セーラはマリーの言葉に何も言えなかった。

「まぁまぁ。今は久しぶりに会えたんだからお茶にしましょう」

「……母様は相変わらずですね」

エリザの言葉にセーラは苦笑した。

そして三人は久しぶりに三人でのお茶会を楽しんだ。

「……ねぇマリー。山口長官はどんな人ですか？」

「うん？どんな？」

「えぇ。我々が考えた艦隊配置を簡単に掃射していくんですもの。ロンドンでは恐れられているわ」

「……そんなに恐れる程じゃないよ姉様。山口はいつも航空機で先手を打っているから。それから艦隊戦をしているし」

「そうねぇ。彼は航空機の運用を優先しているわね」

「……航空機だけですか？航空機ならエイリスにもあるはず……」

「エイリスのは古いのばかりでしょ？それに対して日本は新型機ば

かりだわ」

「……」

エリザの言葉にセーラは黙っている。

「山口曰く「敵が隊形を崩したら後は勝てる」と言っているよ」

「……確かに航空機で隊形を崩された後から砲雷撃戦をしてやられているわ」

マリーの言葉に何か思い当たるのがあったのかセーラは頷く。

「後は……巨乳が大好きな事かな？」

「なッ！？／／／」

マリーの言葉にセーラは顔を真っ赤にした。

「確かに長官は巨乳が好きね。……誘惑してみようかしら……」

エリザが呟く。

「ボクも揉まれた時は意外と気持ちよかったよ……」

「も、揉まれたですってッ！？／／／」

マリーの言葉にセーラはさらに顔を赤くする。

「まぁ姉様も山口に会ってみたら分かるよ？山口は面白いし」

「それは長官の前では言ったら駄目よマリー」

「分かってるよ母様」

「……（……山口長官は何者かしら？）」

二人の言葉を尻目にセーラはそう思った。

TURN76（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN77（前書き）

最近、ユーチューブでポケスペのＭＡＤ「英雄」にハマってずっと英雄を聞いてるし、ポケスペも読んでるし……。

今回はブラックのコーヒーを用意かも。後、あくしずのネタが出ます。アルモ姉さんマジパネぇ。

TURN77

長門とクイーンエリザベスが別の宇宙に来て一ヶ月が経った。

「……相変わらず何もない世界やな……」

何処に行っても灰色、灰色灰色灰色灰色灰色灰色の世界やった。

たまに大怪獣が回遊してくるけどな。

「長官、左舷８時の方向から富嶽に似た大怪獣が接近してきますッ！！」

「急いでクイーンエリザベスに伝えるんやッ！！緊急回避ッ！！」

「ヨーソローッ！！」

言ってるそばから来るか普通？

大怪獣は俺達の宇宙にいる大怪獣、エアザウナや富嶽、ニガヨモギ等よく似た大怪獣やった。

なして？

「富嶽似が遠ざかります」

「……発見されたわけではないですね」
「まぁ俺らにとっては有り難いけどな」
……それにしても……。
「此処は大怪獣の家か？」
「……否定は出来ませんね」
俺の言葉に宇垣は冷や汗をかいた。
「ま、頑張って出口探すか」
二隻は灰色の世界をさ迷っていく。

二ヶ月が過ぎると、乗組員達に不安と食料の残りが気になり始めた。
「どうしましょうか？」
困ったセーラ・ブリテンがわざわざ長門に出向いてきた。
「……士気向上で立食パーティーでもするか……」
「え？」

「乗組員のストレスのはけ口に丁度ええかもな」

「……分かりました。クイーンエリザベスの乗組員を説得してみましょう」

案外、了承が早めにきた。

聞けば向こうもストレスが溜まりまくってたらしい。

――――長門展望室――――

「あ～、今日はエイリス軍人の皆はわざわざ長門に来てくれてありがとうな。ゆっくりと楽しんでくれな」

『オオォォォッ！！』

皆張りきってるなぁ。

「山口ぃ～。これ美味しいよ～」

開始して３０分で早くもマリーが泥酔状態になった。

そらあんだけガバガバと飲んでたらそうなるわな。

「あらあら、セーラちゃんと長官。悪いけど、マリーちゃんを何処か休める場所に運んでくれないかしら？」

「分かりました母様」

「あいよ」

俺はマリーをおんぶする。

「ムフゥ～。山口の背中ぁ～」

「……大分酔っとるな……」

俺達は展望室を出た。

「さて、スカーレットちゃんに纏ちゃんも見に行くわよ」

「……まさかエリザさん。マリーさんにわざとお酒を進めたんじゃぁ……」

「勝手に潰れたのはマリーちゃんよ」

『（犯人はコイツだッ！！）』

宇垣、スカーレット、コロネアの心が一つになった瞬間だった。

「よいっしょ」

俺はマリーの部屋までおんぶして、ベッドにマリーを投下する。

「ムフゥ～♪」

何かマリーが嬉しそうなんは知らん知らん。

「ありがとうございました山口長官」

「なぁに、これでも可愛い部下やねんからな」

俺は御礼を言ってくるセーラ・ブリテンにそう言う。

「……エイリスは日本と戦うのは失敗だと思います」

マリーの寝顔を見ていたセーラが急に言う。

「マリーと母様に腐敗貴族の資料を見せてもらいました。此処までエイリスは腐りきっていたんですね……」

セーラは悲しそうに言う。

「私も最初は日本はすぐに降参するだろうと思っていましたが、私の予想を遥かに上回る戦力で中心は貴方でした」

「……」

俺は何も言わない。

「何故、日本が強いのか分かりませんでしたけど、この世界で貴方と出会って、貴方と話しをしているうちに思いました。この人は日本を滅ぼさない強い信念を持つ人だと……」

「……」

「マリーや母様が貴方に味方するのがやっと分かりましたよ」

「セーラ……」

「この世界を無事に脱出をしたらエイリスは日本に和平を結ぼうと思います」

「そうか……」

「貴方に会えたおかげです」

セーラ・ブリテンは笑う。

……やばい。むっちゃ可愛いす。

胸は美乳やのに笑顔は可愛いやと……。

これが孔明の罠やと……。

「ん？」

ふと、部屋の扉を見ると、エリザさんや宇垣、スカーレット、コロネアが覗いていた。

てかエリザさん、「押し倒せ♪」の紙を見せてますけどあんたの娘ですよッ！？

グラッ！！

その時、艦が揺れた。多分宇宙気流やろな。

「キャッ！！」

そんなの予期していなかったセーラは俺に向かって倒れた。

「「……」」

異様に顔が近いすよセーラさん。

そしてエリザさんは「キース♪キース♪」と口パクするな。

「山口……」

セーラさんが目を閉じて唇をクイッと俺に向ける。

……セーラさぁんッ！！（何故かアムロ風）

もう知らんからな。

俺はセーラにキスをした。

「……ん……ふ……」

ただの唇と唇を当てているだけ。

「……ムゥ～」

「「あ」」

何故かマリーが起きていた。

「姉様ずるぅい。ボクも山口とキスをするぅ～」

「ムグッ！？」

そしてマリーにキスをされる。

「あらあら。マリーちゃんたらお盛んね」

「か、母様ッ！？」

あ、エリザが入ってきた。

「さて、私もしてもらいますか」

「何でそうなんのッ！！」

「あら。私は巨乳よ？」

「……よろしくお願いしますッ！！」

「「「即答ッ！？」」」

五月蝿い後ろ三人。

「駄目ですよ長官ッ！！するなら私とッ！！」

「はいッ！？」

宇垣が壊れたッ！？

「なら私達もしてもらうわ。コロネア」

「はい、お供します御嬢様」

スカーレットとコロネアも壊れたッ！？

……よく見ると、三人の足元に一本の酒瓶があった。

――――『ＭＡＸ・ドーダイ』――――

純度９９％。心を解放する大人の飲み物で、よっぽどの酒好きじゃないと飲めない代物。

元ネタはＭＣ☆あくしずの『戦術入門タクティクス！』から。

アルモはマジパネぇくらい好きｂｙ作者。

「……作者ァァァーーーッ！！！」

『知らん知らんｂｙ作者』

「もう長官はこっちに集中しなさい」

「ちょ、エリザさん待ち……アーーーッ！！！」

マリーの部屋に俺の悲鳴が響いた。

翌日、俺は起きると全員裸で皆さんの肌はツヤツヤで俺はかなり疲労しているのはお約束やと思ってくれ。

TURN77（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN78

「長官。偵察機から報告です。前方約二百キロの宙域にブラックホールを確認したとの事です」

宇垣が意気揚々と報告してくる。

あれからは大変やった……。

朝起きたら全裸のブリテン家族にスカーレット、コロネア、宇垣がいたからな。

あの時は死ぬかと思ったわ。だってコロネアが暗器を出してたからな。

まぁ何とかスカーレットの説得もあってコロネアの怒りは収まったけどな。

んで、結果的にブリテン家族と宇垣と付き合う事になった。

いつの間にフラグを立てたか知らんねんけどな。

『作者の都合ですｂｙ作者』

宇垣は南京モンの攻略の時に、俺に胸に触られて以来、少しずつ

意識をしてたらしい。

最初はそんな気はしてなかったらしいが、俺の参謀長をしているうちに好きになったとか。

……スマン桜花。かなりの人数と付き合う事になるわ。

スカーレットとコロネアはしばらく考えさせてほしいとのあれで保留になっている。

まぁ、ああなった原因はエリザが悪いからな（さん付けは止めてと言われたので普通に呼んでいる）

そして極めつけなんが……。

「……なぁマリー。ちょっと離れてぇや」

「えぇ～何でだよ？」

マリーが何時も俺の腕を掴んでいるんやね～。

『リア充め。死ねよｂｙ作者』

いやそうさせたんは作者やからな。

「こらマリー。山口が困っているでしょ」

マリーの姉であるセーラは何故か長門にいた。

クイーン・エリザベスはどうした？

「母様に呼ばれたと言って来ましたよ」

……それでええんかクイーン・エリザベスの乗組員達……。

「……」

無言で睨まないで下さい宇垣さん（滝汗）

宇垣はそのうちヤンデレ化しそうで怖いなおい。

「長官。ブラックホールの宙域に到達しました」

「もう来たんやな……」

「……長官がイチャイチャしてる間に到達しましたよ」

……胃が痛くなりそうやから睨まんといてや宇垣。

「ま、まぁええわ。無人観測機の用意をしてな」

「了解」

オペレーターが準備をする。

「準備完了しました」

「よし、無人観測機射出や」

長門から無人観測機が射出される。

「映像は完璧か？」

「はい。バッチリです」

ブラックホールの内部は宇宙気流と大量の隕石だらけやった。

「他は何もないんか？」

「駄目です。何もありません」

すると、だんだんと無人観測機の映像が悪くなっていく。

「どないしたんや？」

「ブラックホール内の圧縮力が強まっています。このままでは数分で観測機はぺしゃんこになります」

そして5分後、観測機の映像が途絶えた。

「……観測機、圧縮されて破壊されました」

「分かった……」

俺は考えるけどある手を思いついた。

「真希「ブラックホールが増大ッ！！クイーン・エリザベスがブラックホールに流されますッ！！」何やてッ！！」

数百メートル程、長門よりブラックホールから近かったクイーン・

エリザベスがブラックホールに流されていく。

「皆さん脱出をして下さいッ！！」

セーラがクイーン・エリザベスに通信を入れる。

『陛下、申し訳ありません』

「いいのです。艦はまた作れます。ですが、優秀な人材は簡単には育ちませんッ！！」

『ありがとうございます陛下。ですが、クイーン・エリザベスが流される引力に救助艇は耐えられません』

「ッ！？」

セーラが震える。

『山口長官。敵に言うのはあれなんですが陛下を頼みます』

クイーン・エリザベスの艦長が俺に頭を下げる。

「あぁ分かった。セーラの事は任しとけ」

『ありがとうございます。では陛下、お別れです』

「……貴方達の事は決して忘れません……」

『ありがとうございます陛下……』

そして、クイーン・エリザベスはブラックホールに入り、圧縮されて撃沈した。

「……山口。私は……」

セーラが泣いている。

「セーラ……」

その時、長門が動いた。

「ブラックホールがさらに増大ッ!!引き寄せられますッ!!」

「ちいぃッ!!回頭百八十度ッ!!最大戦速やッ!!」

長門が回頭して最大戦速になる。

「だ、駄目です。引き寄せられていきますッ!!」

オペレーターが叫んだ。

「総員何かに掴まれェーーーッ!!!」

俺がそう言った時、ブリテン家族、スカーレットにコロネア、宇垣、真希ちゃん、瑠璃が俺に抱き着いた。

「お前ら……」

「みーちゃん怖いよぅ」

「真希ちゃん……」

俺は真希ちゃんを抱きしめた。

「嫌ァァァーーーッ！！」

『ッ！？』

その時、真希ちゃんの周りに薄い緑色の粒子が漂いだした。

薄い緑色の粒子は長門全体に纏わりついた。

そして、長門はブラックホールに飲み込まれた。

TURN78（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN79（前書き）

無事に元の世界に帰還しました。

TURN79

「……ぅ……」

俺が起きると、真希ちゃん達は俺の周りで寝ていた。

「……此処は……」

俺はヨロヨロと座標を見た。

「……ソビエトのチェリノブ星域か。そういやチェリノブ星域には大型のホワイトホールがあったはずや。まさか俺らはそれで帰ってこれたんか……」

……信じられへんな。

「まぁ今は此処を離れるのが先決やな。回頭百八十度、最大戦速でチェリノブ星域を離脱や」

『リョウカイシマシタ』

俺は長門を自動航行に切り替える。

「……後はコイツらを起こすか……」

俺は溜め息を吐いた。

――三日後、皇居――

「山口ィッ!!心配しましたよッ!!」

「み、帝……」

三日後にチェリノブ星域から帰還して、セーラと共に帝と謁見を望んだら、帝が泣きながら俺に抱き着いてきた。

「よかったです山口……」

「あの……帝。セーラ女王もいますので」

「あ……これは失礼しました。私が日本皇国の帝です」

帝は取り乱したのを直して、セーラに挨拶をする。

「エイリス帝国女王のセーラ・ブリテンです。この度は帝にお会い出来て光栄です」

「そんな……。ですが、日本皇国に降伏をするのは本当ですか？」

セーラは長門が日本星域に帰還すると、「エイリス帝国は日本皇国に降伏する」と俺に言ってきた。

日本の影響下に入って腐敗貴族を大粛清するらしい。

「はい。これからロンドンに帰って貴族達を説得してきます」

まぁ腐敗貴族が降伏を受諾する可能性は無いな。

降伏したら自分らの命も危なくなるからな。

その後、セーラは帝と短い言葉を交わして貴族達の説得のためにロンドン星域に戻った。

――――海軍省――――

『三笠ッ！！！』

長官室にキャシー、ララー、ラスシャラが飛び込んできた。

「うぉッ！？Σ（ ゜Д ゜）い、いきなり抱き着くなよ……」

「だってやっと会えたんだよ？」

「そうだぜ。アタイなんか夜も中々眠れなかったんだぜ」

「嘘つけ。爆睡してただろ」

「い、言うなラスシャラッ！！」

上からララー、キャシー、ラスシャラ、もう一回キャシーな。

「お、帰ってきたね三笠」

そこへ桜花が入ってきた。

「さっきマリーから聞いたよ。ブリテン家族、スカーレット、コロネア、宇垣とヤったらしいね？」

「……マリーのやつめ、おしゃべりやな……」

マリーめ、覚えとけよ。

「まぁ、三笠だからいずれはそうなるとは思ってたけどね」

そこで皆頷くなよ……。

「だって三笠だからな」

五月蝿いわラスシャラ。

「いずみは家で準備をしているからね」

「準備？」

「三笠が無事に帰ってきた事を祝ってパーティするんだよ」

桜花の言葉に皆が頷く。

「マジっすか？」
「本気と書いてマジだよ。迷惑かい？」
「うんにゃ。嬉しいな」
「そうかい……」
俺の言葉に桜花が笑う。
それから仕事は早めに終わらして、家で生還パーティが開かれた。
「はい、イーグルあーん」
「ＯＫキャロル。あーん」
「……リア充死ねよ……」
ダグラスとキャロルのイチャイチャに田中からどす黒いオーラが溢れている。
「た、田中。ジュースが一本余ったから飲まないか？」
そこへユリウスがやってきた。
「す、すまねぇなユリウス」

「いやいいさ……」

二人の周りが微妙な空気が溢れるが一人、それを知らない女性が突入してきた。

「あぁ～ん。雷ちゃんも食べようよ～」

「ム、ムッチリーニッ！！」

ムッチリーニがベーコンレタスパン（イタリン特産品）を持ってきた。

「……」

田中とムッチリーニを後ろでユリウスが睨んでいた。

「……昼ドラ化しそうやなぁ……」

俺は冷や汗をかきながらそれを見ていた。

「どうした山口？」

「ん、いや何もないわ」

不審に思った山下が声をかけてきた。

「ま、今はパーティを楽しむか……」

俺は山下のコップにビールを注いであげた。

TURN79（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN80

数週間後、ロンドン星域に帰ったはずのセーラが日本星域にやってきた。

――旗艦長門――

「どないしたんやセーラ？」

いきなりのセーラの来訪に俺はちょっと驚く。

対するセーラは俺に申し訳なさそうな表情をしていた。

「……山口。申し訳ありません。貴族達の説得は無理でした。彼等はあまつさえ私達を追放をしました……」

「そうか……。まぁしゃあないわ。んで、これからどうするんや？」

「……日本軍で働かせて下さい。もうエイリス帝国は墜ちました……」

「……分かった。提督の登録はしとくわ。これからよろしくな」

「はい」

俺とセーラは握手をした。

「長官、シベリア星域のランファ提督から通信が来ています」

「ん？シベリア星域から？」

書類業務をしていると、宇垣が報告してきた。

「何やろ……繋いで」

「分かりました」

机から小型の通信パネルが出て、ランファが映像に出る。

『山口、お願いがあるんだよ』

「お願いやて？」

『うん。シベリア星域に艦隊を派遣してほしいんだ。最近、ソ連の反攻が激しくて損傷艦が増えるばかりなんだ』

ランファは困ったように、俺に報告してくる。

「分かった。ちょっと待てよ……」

俺は暇そうな提督を探していく。

「……項と、先日に捕虜にしたカザフスタン、高須、新任の城島の四個艦隊を送るけど頑張れるか？」

ちなみに城島貴里は新艦隊の第五機動艦隊提督な。（史実の城島高次中将です）

『……分かった。何とか頑張ってみるよ』

「スマンな。エイリス攻略も後少しやねん」

『うん。それは仕方ないよ。そっちも頑張ってね』

「あぁ」

俺はランファとの通信を切る。

「ほんまやったらリンファとシャルロットの艦隊も送ろうかと思ってんけどなぁ……」

リンファは元赤本持ちやから土壇場で戸惑うかもしれんし、シャルロットはまだ提督の研修中やしな。

「エイリスとの決着を早めにつけるべきですね」

「あぁ。ところでパリ星域のマジノ要塞はどうなっているんや？」

「あらかた解読完了しているみたいです」

「……瑠璃には迷惑をかけるな。もう瑠璃には戦わさせないと決めてたのにな……」

エイリスとの決着をつけるためにはパリ星域を通過しないとあかんねんけど、パリ星域にはマジノ要塞があるからな。

多分、犠牲が多くなると思うから……やむを得ず、瑠璃の力を借りる事にしたんや。

瑠璃は「三笠の役に立てるなら何でもします」とは言ってるけど仮にも俺は瑠璃の親やからな。

あんましそういうのはさせたくないのが本音やね。

ピンポーンッ！！

あ、昼やな。

「さて、昼メシでも食うか。宇垣、後は頼むで」

「……」

「？どないしたんや？」

返事をせぇへん宇垣に俺が問い掛ける。

「……これ」

宇垣は怖ず怖ずとしながら弁当を俺の前に出した。

「……作ってきてくれたんか？」

「……はい」

宇垣が顔を真っ赤にしながら頷く。

……正直に言うと可愛いです。

「……分かった。此処で食べるわ。それでええやろ？」

「は、はい……」

宇垣は嬉しそうにして、昼メシの用意をした。

まぁ結果的にあ～んもさせられたけど、弁当はスゲー美味かったと報告しとくわ。

プロみたいな味付けやでほんま……。

「お～い。アルイメンはいるか～？」

俺は今、アルイメンの部屋の前に来ていた。

「今回は大丈夫なのかしら？」

「私は初めて会うが中々の会社だと思うぞ」

「わ、私はよく分かりませんけど総統がいいのならいい会社だと思います……」

今回もゲッベルスと来たけど、更にアドルフとデーニッツも加わっていた。

「……何か応答が無いな……。邪魔するで～」

「邪魔するなら帰って～」

「はい～ってやらすなゲッベルスッ！！」

「わ、私も乗るとは思わなかったわよ……」

俺のツッコミにゲッベルスが弱々しく反論する。

「ん？お、おいッ！！やめろッ！！」

開いたドアの先を見たアドルフが思わず叫んでいた。

部屋を見ると、アルイメンがカッターナイフで自分の左手首を切ろうとしていた。

「アルイメンやめんかいッ！！」

俺は一目散に彼女のところに走ってカッターナイフを取り上げる。

ちょっと刃に当たって、右手の中指から血が出てるけどまぁいいや。

「何をしてんねんッ！！」

「……だって……だって……」

アルイメンが涙を零す。

「……また目標値に届かなかったのかしら？」

「……うん……」

アルイメンが弱々しく頷いた。

「んな事で死のうとすんなよ……」

「だって……エイリスの時は上手く出来てたのに、日本に来てから成功してないのよ。アタシってやっぱり商業に才能は無かったのよぅ……」

アルイメンが泣き出す。

「……でもこれは良く出来てるぞ」

「……へ？」

アドルフがいつの間にかアルイメンのパソコンを見ていた。

「この日とこの日の株がもう少しあれば目標値に達成出来てるぞ」

「……嘘……」

アルイメンはパソコンを見る。

「此処と此処、此処の日に株を売れば次回の決算日までに目標値に達成出来るぞ。それにアルイメンのやり方は中々効率的だ。多分、日本のやり方に慣れていなかったんじゃないか？」

「……」

アルイメンは唖然としていた。

「まぁアドルフは超が付く天才やからな」

俺はアドルフの頭を撫でる。

「……いやったーーーッ！！」

アルイメンが歓喜をあげて俺に抱き着く。

「やっぱりアタシは商業の才能はあったんだわーーーッ！！」

「……とりあえず、分かったから離れぇや」

「あ……ごめんなさい」

アルイメンが顔を真っ赤にして離れる。

「まぁよかったやん。なら次の決算日を楽しみにしているで」

「う、うん……」

俺達はアルイメンの部屋を出た。

TURN80（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN81

――海軍省、長官室――

「邪魔するぞ山口君」

「ん？都奈海か。どないしたんや？」

いつもの日課である書類業務をしてると、都奈海が長官室に入ってきた。

「シベリア星域の防衛戦の秘策が出来たぞ」

「ほんまか？」

「あぁ。これを見てくれ」

都奈海がデータを出した。

「……これは？」

データの中身はコントロール艦とか記入されていた。

「無人艦隊を作ってみてはどうかと思うんだ」

「無人艦隊やて？」

無人艦隊といやぁ、『ヤマトよ永遠に』くらいしか無人艦隊の知識しかないけどな。

「艦名としてはナデシコ型大型無人戦艦、アマリリス型無人巡洋艦、あさがお型無人駆逐艦だが……」

艦名はナデシコですね。分かります。

「無人艦隊をコントロール出来るコントロール艦が必要だが、新造しなくても旧式巡洋艦を改装したら編成は出来るぞ。それに人員もコントロール艦だけだからそんなに人員の費用はかからない」

「成る程な……」

金が掛かるのは建造費用だけか……。

「分かった。それを採用するわ。今すぐ取り掛かれるか？」

「フ、私を誰だと思っているんだ？既に生産ラインに入っている」

「分かった。艦隊編成はこっちでするわ」

「あぁ。ところで技研の研究費をもう少し増やしてほしいのだが……」

「……来月から研究費は一・五倍にしとくわ」

「……ありがとう……」

都奈海がニヤリと笑って部屋を出た。

その後、宇垣とランファ達と協議して無人艦隊は四個艦隊をシベリア星域に派遣した。

ちなみに無人艦隊は一個艦隊に戦艦六、巡洋艦八、駆逐艦十六、コントロール艦一隻となっている。

無人艦隊やからビーム弾避けの楯にも使えるわな。

後に、シベリア星域は無人艦隊の投入によって、エイリス帝国が滅亡するまで防衛する事が出来た。

――――パリ星域――――

「長官、パリ星域に到着しました」

「ん」

オペレーターからの報告に俺を頷く。

あれから一週間が経ち、今はパリ星域攻略のためにパリ星域まで来ていた。

攻略艦隊は俺、祀梨、桜花、古賀、いずみ、ダグラス、マリー、セーラでそしてシャルロットがいた。

シャルロットには出撃をさせてほしいと直談判されて、俺が折れたんやな。

――シャルロット艦隊旗艦越前――

「……ようやくパリ星域ですわね……」

長官席に座るシャルロットが呟く。

「ですが、私は今や日本軍の提督。誰であろうと、私はパリを攻略します」

「……やれやれ、すっかり一人前だね」

シャルロットの後ろでビルメ・ミャーが嬉しそうに言う。

「ビルメ様。私はまだまだ半人前ですわ」

「……」

シャルロットの言葉にビルメはやれやれと肩を竦めた。

「長門より入電です。これより作戦を開始するとの事です」

「分かりましたわ」

オペレーターの言葉にシャルロットは頷いて、前を見た。

正面にはマジノ要塞が立ち塞がっていた。

――旗艦長門――

「……瑠璃。やってくれ」

「分かった」

俺の言葉に瑠璃が頷いてパソコンを起動させる。

「……ゴメンな瑠璃……」

「大丈夫だよ三笠。三笠の役に立てるなら私は何だってやるよ」

俺の言葉に瑠璃は笑った。

「……第一ライン突破……第二ライン突破……」

瑠璃の銀色の髪が上に上がり、瑠璃の目が右から左へと幾つもの小さい光が次から次へと現れては消えていく。

――――マジノ要塞――――

「フハハハハッ！！東洋の猿め、難攻不落のマジノ要塞を前にして攻撃をしないでいるッ！！」

マジノ要塞司令官の貴族が笑う。

「猿の奴らに止めを刺してやるッ！！レーザー砲発射用意ッ！！」

「レーザー砲発射よう……」

その時、画面が一斉にフリーズした。

「何事だッ！！」

「何者かによるハッキングをされていますッ！！」

「追い返せッ！！」

「駄目ですッ！！侵入者の速度が早過ぎるッ！！」

「……まさか奴らかッ！！」

貴族の司令官は日本艦隊を睨みつける。

「このままでは後5分で全システムが乗っ取られますッ！！」

「ぬぬ……東洋の猿めェェーーーッ！！」

それから5分後、マジノ要塞は全機能を停止。

マジノ要塞にいたエイリス軍は降伏をした。

TURN81（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN82（前書き）

帝イベント

TURN82

――皇居――

「ですから、自分が体験した世界はかなりの大怪獣が存在していたんですよ」

「ふぇ～。山口はよく生きて帰れましたね」

「まぁ普通に言えば奇跡ですね」

俺は皇居で帝と先日体験した異世界の話をしていた。

これは帝から話を聞きたいとの要望やったから臣下としてはこれに応えなあかんしな。

話もいつの間にか2時間も話していた。

「……そんなに大怪獣がいたら私達の世界は今頃滅んでますね」

全てを聞き終えた帝はそう感想を述べた。

「まぁ自分でも、あれは夢やったんやないかと思いますからね」

「そうですね。柴神様はどうでしたか？」

帝が柴神様に問い掛けるが、柴神様は顔を青ざめていた。

「柴神様？」

「む？どうしたのかね？」

「もうお話は終わっちゃいましたよ？それに顔色も悪そうにしていますよ」

「い、いや。話を聞いていたら気持ち悪くなってきてな。少し席を外す」

柴神様はそう言って席を立った。

「どうしたんでしょうか？」

「不老不死の柴神様にも大怪獣は苦手やったんやないですか？」

「フフ。そうですね」

俺と帝は苦笑した。

「……まさか。山口のあれは……」

少し離れたところで柴神様は何かを呟いていたが、俺達は知らなかった。

「ハルさん。3時間程、外に出ますね」

「……分かりました……」

……スゲーハルさん耐えてるな。

「（いいですか山口長官。帝に何かあれば、貴方がどうなるか分かっているでしょうね？）」

「（分かってますから。だからナイフを突きつけないで下さいよ）」

「（貴方はハーレムを築いてますから油断は出来ませんからね）」

「（……それに関しては言い訳はしませんが、帝の胸はちっちゃいと思うのでええですよ。てか俺はそこまで鬼畜とちゃうし）」

「（なら、ハーレムな状況をどうやって説明するんですか。というより帝の胸がちっちゃいと何で知ってるんですかッ！？）」

「（帝が真希ちゃんに、胸はどうやって大きくなるのか聞いてたんですよ。これでも親なんでね）」

「（やはり貴方は鬼畜ですね）」

「（あんた、大阪湾沈めるで）」

「ハルさんと山口は何を話しているんですか？」

「い、いえ何でもありませんよ帝」

「そ、そう。何でもないです帝」

「？？」

危な……話に夢中になってたな。

「では、行ってきますね」

「帝、お気をつけて……」

ハルさん達は皇居の門まで見送りに来た。

「さて帝。何処に行きたいんですか？」

「女官の人達がアキバとやらの話をしていたのでアキバに行ってみたいんですよ」

「……帝。帝にはアキバはまだ早過ぎますよ」

「え？そうなんですか？」

「そうなんです」

そうしないと帝の命が危ないからな。

絶対にアキバのオタク達が帝を見て暴走するわ。

「それは残念ですね……。じゃあ本屋に行きたいです。少女コミックの最新刊が欲しいので」

「分かりました」

俺達は何故か、この時代にもある紀伊国屋書店で本などを買った。

「欲しい本はありましたか帝？」

「はい。欲しい本が六つもあって嬉しいです」

帝が嬉しそうに笑う。

「あ、そうだ。山口、私とプリクラとやらを一緒に取ってほしいんですよ」

「プリクラですか？」

「はい」

……まぁそれくらいはええやろ。

「分かりました。近くにゲーセンがあったのでそこに行きましょう」

――――とあるゲーセン――――

「ふわぁ～。色んなゲームがありますね」

「まぁゲーセンですからね。プリクラは此処ですよ」

俺と帝はプリクラの中に入る。

「山口、どうやるんですか？」

「えっと、これはこうで、あれは……」

『写真を撮ります。五秒前』

「帝、ピースサインをしてカメラに向かって笑って下さい」

「こうですか？」

「はい」

パシャッ！！

シャッター音がして、プリントされたプリクラが出てきた。

「これがプリクラなんですね」

「よく撮れてますよ帝」

「エヘヘ……」

帝が照れる。

「（山口、ありがとうございます）」

帝は心の中で山口に感謝をした。

ザアァァッ！！

「雨が降ってますねぇ」

「そうですね～」

俺と帝は何でか知らんけど、ラブホで雨宿りをしていた。

他にも喫茶店とかあったのに、帝が此処がいいと言ってきたから入ったんやな。

「……山口、私の胸はちっちゃいんでしょうか？」

ベッドに座った帝がいきなり言ってきた。

「……どういう事ですか？」

「山口の周りにいる女性は皆、胸が大きいのに私はちっちゃいんですよ」

「大丈夫ですよ帝。帝もちゃんと大きくなりますよ」

多分、こう言っておけば大丈夫やろ。

「……なら……」

帝がいきなり俺に胸を見した。

「み、帝ッ！？」

「わ、私の胸を揉んで大きくさせて下さいッ！！大きくなるんでしょ？なら山口が揉んでも大丈夫ですよッ！！」

何か矛盾点あるよな？

「だから……だから……くぅ……」

帝がコテンとベッドに転がって、そのまま寝てしまった。

よく見ると、テーブルには日本酒があった。

「……ジュースと間違えたんか？」

いやでも、間違えるか？

「まぁ、ハルさんに言って帝を回収してもらうか」

その後、引き取りに来たハルさんがラブホにいた俺らに疑いの目を向けてきたが、何とか誤解を解いた。

TURN82（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN83（前書き）

ラムダスイベントの前触れです。

TURN83

「失礼するぞ山口」

「ん？マウマウやんか。どないしたんや？」

エイリス帝国、最後の砦であるロンドン星域をどう攻めようかとしていた時、マウマウが長官室に入ってきた。

「うむ。山口に御礼を言いたくてな」

「御礼？」

「うむ。私の故郷であるケニア星域も最近になってようやく治安が改善されて平穏が戻った。その事を言いたかったのだ。山口、ありがとう」

マウマウはそう言って頭を下げた。

「マウマウ。別に頭を下げんでええよ。俺達がお前らを助けたかったんやからな」

「いや、それでもだ。山口は私達に技術の提供もしてくれた」

流石に宇宙空間を木造船で航行をすんのは色んな意味でチートや

からな。

旧式化した駆逐艦や巡洋艦をマウマウ達に払い下げたんやな。

勿論、マウマウ達には充分な勉強をさせてな。

「それで御礼はまだあるんだ」

「何や？」

「山口達に我々の神を見せようと思う。本来はそんなのは駄目なんだが、山口や日本は恩人だからな」

へぇ。マウマウ達の神ね……。

「分かった。是非見たいわ。けど、二日間待ってな。やらなあかん書類業務があるからな」

「うん。終わったらマウマウに連絡してくれ」

マウマウは長官室を出た。

それから二日後、俺ら提督達を乗せた長門はケニア星域にいた。

「こっからがマウマウ達の故郷やけど、暗黒エリアやな……」

長門の前方はただ黒い空間やった。

「マウマウに操縦をやらしてほしい。このエリアは我々暗黒人しか通れないと思う」

「分かった。マウマウに舵をやらして」

「分かりました」

マウマウに舵が渡り、マウマウはスイスイと長門を走らせた。

「あの惑星がマウマウの故郷だ」

３０分航行していると暗黒エリアは無くなっていて、前方には惑星が現れた。

「よし、着陸態勢や」

「了解です」

長門はマウマウの故郷である惑星に着陸した。

「……何処まで行くんやマウマウ？」

「後少しだ。もうちょっと頑張ってくれ」

俺達は長門から降りた後、山を登っていた。

「ダグラスぅ。おんぶしてぇ」

「任せろキャロルッ！！」

……スゲーイチャイチャ臭やな。

「三笠、全員来たよ」

桜花が知らせてくれた。

「次はこの洞窟の中に入るぞ」

「……まだ歩くのかよ……」

「ここら一帯はマウマウ達にとっては聖地だからな」

田中の言葉にマウマウが答える。

「此処まで来たら後十分だ。頑張れ」

マウマウを先頭にして洞窟の中に入った。

「此処だ」

マウマウが止まった。マウマウの前には大きな石があった。

「明かりを消すぞ」

マウマウが火を消した。

……え？

「な……何だこれは……？」

明かりを消したら、石が輝きはじめて、何かを写しだした。

……それは芋虫みたいな幼虫、カブトムシの幼虫みたいやな。

その幼虫が、まともに服を着てない人間を食べていた。

「……うぇ……」

田中が気持ち悪くなって戻した。

桜花達女性陣は見ていられず、目を逸らしていた。

「今日は食事をしていたか」

「マウマウ。これは一体……」

「マウマウ達が神としている物だ。勿論、他にも神はいるが今日はこの物しかいないみたいだ」

マウマウが明かりを付けると、石の映像は消えた。

「マウマウ達はこれを神と崇めていた。しかし、山口達と接しているうちにこれは神ではないのではないかと思ってきたんだ」

「……少女よ」

そこへ、柴神様が口を開いた。

「これは何人足りとも見せてはならない。皆も今日見たのは箝口令として公表はしない事。分かったかね？」

「は、はい……」

あまりの柴神様の憤慨な顔に俺達は驚きながら頷いた。

「……柴神様はあれが何なのか分かるんですか？」

「……いや、何も……知らない……」

柴神様はそう言った。

マウマウは済まなそうな顔をしていたけど、マウマウのせいやないからな。

皆も分かっていて、マウマウのせいではないと頷いた。

こうして、何か釈然としないままケニア星域を後にした。

TURN83（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN84（前書き）

山下オリイベント。

TURN84

――海軍省、会議室――

「んじゃぁ、今から作戦会議を始めるわ」

海軍省の会議室で皆を集まらせる。

「エイリス帝国、最後の抵抗星域がこのロンドン星域や。偵察機の彩雲からの報告によれば、ロンドン星域には約二十個艦隊が駐留しているわ」

「……二十個艦隊か……」

俺の言葉にダグラスが呟く。

「まぁ二十個艦隊やというても、大半が新米乗組員らしい。やから艦隊戦も向こうが勝手に自滅すると思う。けどな」

俺はロンドン星域の惑星ロンドンの写真を出す。

「ロンドン星域の惑星ロンドンを攻略すんのやけど、かなりの陸軍部隊がいるみたいや」

「……だから私は呼んだのか？」

陸軍の中でただ一人、作戦会議に参加している山下が言う。

「そうや。とある情報によると、海岸にはドクツから押収したＭＧ４２レーザー機関銃も配置しているらしい」

「……おのれ、私の国のレーザー機関銃まで使うとは……」

提督が座る席でアドルフが悔しがる。

「まぁそれはしゃあないわ。今回は会戦を素早く終わらせて、陸軍の支援をすんのが海軍の仕事や」

「分かった。我々陸軍も全力を尽くす。上空支援は頼むぞ」

「あぁ。それは分かってるわ」

そして攻略艦隊が決定した。

攻略艦隊は俺、祀梨、桜花、いずみ、帝、夏ちゃん、城島、ダグラス、スカーレット、コルダ、セーラ、マリー、エリザ、リンファ、キャシー、ラスシャラ、リディアの十七個艦隊や。

空母艦隊（祀梨、夏ちゃん、城島、コルダ）が多いのは航空攻撃で出来るだけ叩いてからの砲雷撃戦を展開するからや。

「んじゃぁ解散や」

俺の言葉に皆は俺に敬礼をして会議室を出ていく。

さて、俺も出るか……。

「山口……」

「ん？どうしたんや山下？」

「少しいいか？」

「そりゃあ構わんけど……」

「なら、ついてきてくれ」

「あぁ」

何や何や？まぁ山下について行けばええか。

「……何……やて？」

山下について行くと、何でか目の前にはラブホが……。

「……や……山下……さん？」

「い、いいから来いッ！！」

「お、おい」

俺は山下に引っ張られながらラブホに突入した。

「いきなりどないしたんや？」

「……す、済まない……」

「やから、何でラブホに来たかをな「今度の作戦は、もしかしたら私は帰ってこれないかもしれない」……」

山下の言葉に俺は黙った。

「陸軍でも独自に調査をしたが、かなり強固な陣営だ。もしかしたら……」

「……それで、俺に抱いてほしいと？言っとくけど、俺はそんな理由では抱かんからな」

「ち、違うッ！！」

俺の言葉に山下は首を左右に振った。

「私……お前が……好きなんだ……」

「山下……」

「最初はそんな事は思っていなかった。だらし無い奴が来たと思っていた。でも、アメリアの妨害衛星でお前に助けてもらった以来、少しずつ意識をしていた」

あ、あれはやっぱフラグやったんやな。

「……そ、それに男に初めておんぶをされてドキドキもした……」

山下が顔を赤くする。

「もしかしたら、私はロンドンで死ぬかもしれない。でも、その前にお前との絆がほしいんだ。お前に私の初めてを奪ってほしいんだ」

「……一つ約束しろよ」

「何だ？」

「……必ず帰ってこい。それが出来るならいくらでも抱いてやるわ」

「……山口……」

山下が俺の言葉に泣いた。……そんなに臭い台詞やったんやろか……。

「いや違う。嬉しいんだ」

山下はそう言って俺に抱き着いた。

「……寝させへんからな？」

「それはこちらの台詞だ」

俺達はベッドに倒れた。

「さて、これよりエイリス帝国最後の砦であるロンドン星域を攻略するッ！！全軍一層奮励努力やッ！！」

『了解ッ！！』

俺の言葉に皆が敬礼をした。

「空母艦隊は全機発艦させるんやッ！！」

『了解ですよ』

祀梨が俺に敬礼をした。

空母艦隊から次々と烈風と天山が発艦していく。

攻撃隊は編隊を組んでエイリス艦隊を目指した。

そしてエイリス帝国との最後の戦いが始まった。

TURN84（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN85

「攻撃隊から入電ですッ！！攻撃隊は敵エイリス艦隊の半数近くを撃沈又は撃破しましたッ！！」

通信員が報告をしくてる。

「ん。全艦、全速前進や。これより、エイリス艦隊に止めを刺すッ！！」

俺の命令は各艦隊に伝わり、全艦隊は最大全速にする。

「敵エイリス艦隊が接近してきますッ！！距離は八万六千宇宙キロッ！！」

「……向こうもこれが最後やと分かってるみたいやな……」

「そのようですね」

俺の呟きに宇垣が答える。

「おてなみ拝見といくか……」

――――セーラ艦隊旗艦クイーン・エリザベス――――

「陛下。間もなく決戦です」

「えぇ。ですが、今の私は女王陛下ではありませんよ」

「ハハ。これは失礼」

クイーン・エリザベスの艦橋は朗らかな雰囲気だった。

「しかし、あまりいい気分ではありませんな。堕ちたとはいえ、同胞を討たないといけないですからな」

「……そうですね」

副官の言葉にセーラは顔を歪ませる。

「ですが……エイリス帝国の腐敗の膿を取り出すためです。やむを得ません」

「……そうですな。全力を尽くします」

「はい……」

「敵エイリス艦隊との距離四万五千宇宙キロに縮まりますッ！！」

オペレーターがそう報告した。

――旗艦長門――

「撃ちますか？長門の最大射程距離です」

「……いや、まだやな」

宇垣の問い掛けにそう答える。

「距離四万宇宙キロになります」

「全戦艦の最大射程距離です」

「……全艦、砲撃用意や。右砲戦にする。取舵一杯」

「了解。全艦砲撃用意ッ！！右砲戦、取舵一杯ッ！！」

「とぉーりかぁーじッ！！」

艦体が右に曲がる。

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

「敵エイリス艦隊が砲撃を始めましたッ！！」

「……それでも当たってないな……」

「錬度不足ですね」

「全艦砲撃準備完了ッ！！」

オペレーターが報告する。

「全艦撃ちぃ方始めッ！！」

「全艦撃ちぃ方始めッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

全戦艦が一斉にプラズマショックカノンを発射した。

弾道は、エイリス艦隊に直撃した。

「命中ッ！！命中ッ！！」

「砲撃の手を緩めるなよ。リディア、突撃用意やッ！！」

『オッケーだよ三笠さん』

リディアがそう報告してくる。

「敵エイリス艦隊の隊列が乱れましたッ！！」

「今やッ！！突撃やリディアッ！！」

『うんッ！！リディア艦隊とっつげきぃぃぃーーーッ！！』

リディア艦隊が一斉に突撃を始めた。

「魚雷用意ッ！！」

「用意完了ッ！！」

「取舵一杯ッ！！」

「とぉーりかぁーじッ！！」

艦体が右に曲がる。

「魚雷撃ぇッ！！」

「発射ァッ！！」

リディア艦隊から一斉に光子魚雷が発射された。

光子魚雷は真っすぐにエイリス艦隊に突き刺さった。

ズガアァァーーンッ！！

ズガアァァーーンッ！！

「魚雷命中ですッ！！」

「よしッ！！このまま急速離脱ッ！！」

リディア艦隊が最大全速で引き上げてくる。

「リディア艦隊が離脱。こちらに引き上げてきますッ！！」

「このチャンスを逃すなッ！！全艦、砲撃をしながら突撃やッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

巡洋艦や駆逐艦もプラズマショックカノンを撃ちはじめた。

「撃って撃って撃ちまくれェェェーーーッ！！」

それから３０分後、生き残っていたエイリス残存艦艇が降伏の電文を打ってきた。

「どうしますか？」

「……降伏を受け入れるしかないやろな」

エイリス残存艦艇に近づいて武装解除をしていく。

「これで残りは惑星ロンドンだけやな」

「はい」

俺の言葉に宇垣が頷く。

「山下に通信を入れてくれ」

「分かりました」

程なくして山下が通信パネルに出た。

『どうした山口？』

「いや……気をつけてな」

『フ、大丈夫だ』

山下はそう言った。

……心配無用やったかな？

そして、上陸部隊を乗せた揚陸艇チハが輸送船から一斉に発進した。

TURN85（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN86（前書き）

そう簡単にロンドンは落ちないです。

モチーフはプライベートライアンです。

今日はレイテ沖海戦……。

栗田艦隊が突入していたら少しは歴史も変わったのか……。

多分、レイテ沖で壊滅して降伏が早くなっただけかも……。

TURN86

輸送船団から発進し、第一次上陸部隊を乗せた揚陸艇チハ約百五十隻は惑星ロンドンに大気圏突入をして無事に海へ着水をした。

「山下長官。上陸地点はあの海岸ですか？」

チハの操縦士が山下に聞く。

「あぁ、あそこだ。気をつけて進め」

着水したチハの大群は一斉に海岸に向かって進んだ。

「……静かだな」

「もう逃げたのでは？」

「何処に逃げるのだ？此処は奴らの本拠地だぞ？」

「そうでしたね」

そして、チハは停止した。

「よし、扉を開けッ！！開いたと同時に歩兵は突撃だッ！！」

ガコンッ！！

ビシュシュシュシュシュッ！！！

「ッ！？」

「ボガッ！！」

「ボブッ！！」

扉が開いた瞬間、エイリス軍が一斉攻撃を開始して、扉付近で突撃準備をしていた兵士がレーザー機関銃の餌食になっていく。

「早く降りろッ！！早く降りないと死ぬぞッ！！」

左右からも扉が開いて兵士達が海に飛び込む。

ズガァァァーンッ！！

「砲撃ですッ！！急いで出て下さいッ！！」

「ちぃッ！！」

操縦士の言葉に山下はビニール袋に入った一式レーザー小銃を抱えて海に飛び込んだ。

ザパァァンッ！！

脚が地面につく。浅瀬である。

山下は平泳ぎをしながら、揚陸艇の航行を妨害する遮蔽物に隠れる。

ビシュシュシュシュシュッ！！

エイリス軍の防御陣地からは相変わらずレーザー機関銃が射撃をしている。

「何をしているッ！！前に進めッ！！」

遮蔽物に隠れたまま、砂浜に行こうとしない兵士を叱咤する。

「駄目です長官ッ！！此処より先は遮蔽物がありませんッ！！」

「ッ！？」

兵士の言葉に山下は言葉は失った。

確かに、砂浜には今、自分達が隠れている遮蔽物は無かった。

「……それでも行くんだッ！！此処にいればやがて死ぬッ！！春日少佐ッ！！」

「何すか長官ッ！！」

山下は同じく遮蔽物に隠れている女性左官の春日真琴少佐を呼んだ。

「部下を砂浜に向かわせろッ！！行けェェェッ！！」

「了解ッ！！よぉし野郎どもッ！！俺についてこいよッ！！」

男っぽいのが人気の春日少佐は叫んだ。

『オオォォォッ！！』

そして、春日を先頭にして砂浜にあがった。

エイリス軍は追い返そうと、レーザー機関銃や小銃を乱射し、迫撃砲や海岸砲台を撃つ。

ズガァァァーーンッ！！

砲弾が命中して兵士を吹き飛ばす。

そして、肉片となって生き残っている兵士に降り注ぐ。

「糞ッ！！上空支援はどうなっているんだッ！！」

山下は一向に来ない上空支援機に罵倒する。

「長官ッ！！長門から入電ですッ！！死んだふりをした航空基地が多く、艦隊に襲撃をしてきてこちらも手一杯との事ですッ！！」

「ちぃッ！！流石本土決戦になると手強いなッ！！」

通信兵からの報告を聞きながら兵士の進路を妨害している鉄条網まで走ってきて身体を仰向ける。

「長官ッ！！戦車は来ないんですかッ！？」

春日少佐が山下に尋ねる。

「通信兵、連絡だッ！！戦車の揚陸は、チトはどうしたんだッ！！」

山下は隣にいた通信兵に言う。

「長官ッ！！四式中戦車チトを乗せた揚陸艇が潜水艦の攻撃を受けているとの事ですッ！！」

沖合には、百五ミリビームライフル砲を搭載した四式中戦車『チト』を乗せた揚陸艇が多数いたが、海中に潜んでいたエイリス潜水艦隊の魚雷攻撃に、大混乱をしていた。

宇宙艦隊は全滅しようとも、まだ海上艦隊は健在していたのだ。

「通信兵ッ！！本間参謀長に伝えろッ！！第一次上陸隊は壊滅寸前だと伝えろッ！！」

ビシュシュシュシュシュッ！！

その時、レーザー機関銃が山下達を襲う。

幸いにも山下達には当たらなかったが、山下の言葉を伝えようとした通信兵は顔にレーザーを食らって即死した。

「くッ！！」

山下は顔に大きな風穴が開いた通信兵が持っていた通信機を取る。

「作戦本部ッ！！本間参謀長ッ！！」

しかし、通信機も被弾していて白い煙を噴いていた。

「長官ッ！！このままだとなぶり殺しですッ！！」

春日少佐が叫んだ。

「春日少佐ッ！！武器弾薬を集めるんだッ！！」

「野郎どもッ！！武器弾薬を集めろッ！！」

兵士達は武器弾薬を探しに行く。

「爆薬筒を持ってこいッ！！」

山下達、第一次上陸部隊はエイリス軍の抵抗に苦戦していた。

TURN86（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN87

「……ぅぁ……」

兵士達が使えそうな小銃やレーザー機関銃、レーザーエネルギーの弾倉を持ってくる。

時折、まだ息があった兵士から小さい呻き声が出る。

「長官ッ！！工兵が来ますッ！！」

山下の隣にいた板垣二等兵が叫ぶ。

工兵が爆薬筒を持ってきたのだ。

「出来るだけ伸ばすんだッ！！」

「はいッ！！」

工兵達が爆薬筒を繋げていく。

「今度はコイツだ。モルヒネを打て」

「はい」

山下の近くにいた衛生兵が負傷した兵士にモルヒネを打っていく。

その衛生兵の隣では別の衛生兵が左肩まで無くなった兵士の止血をしていた。

「痛ぇよぅ。死ぬぅ……」

「大丈夫だ。片腕が無いくらいで死にゃあしないさ」

「……あんまり効果はないと思うぞ……」

衛生兵の言葉に山下が呟く。

「長官ッ！！爆薬筒が出来ましたッ！！」

「よし、爆薬点火ァァァッ！！」

「爆薬点火ァッ！！」

「爆薬点火ァッ！！皆伏せろォッ！！」

上から山下、春日、工兵と叫び、兵士達が伏せる。

工兵は爆薬を点火させた。

ドガアァァァァーーンッ！！

一際激しい爆発音と衝撃がだった。

爆風で砂が山下達に降り懸かる。

春日は砂埃が少し晴れると、エイリス軍陣地を見た。

「全員行くぞッ！！俺に続けェェェッ！！」

『オオォォォッ！！』

春日が最初に駆け出し、次に山下が、最後に兵士達が破壊された鉄条網を乗り越えてエイリス軍陣地に迫った。

ビシュシュシュシュシュッ！！

「ちぃッ！！」

山下が爆薬筒の衝撃でコンクリート陣地が破壊されたところから顔を出すが、エイリス軍のレーザー機関銃が撃ってきた。

「……ん……」

山下はゴソゴソと手鏡を出した。

「原田、銃剣を貸せ」

「はい……どうぞ長官」

原田一等兵が山下に銃剣を貸す。

「春日、ガムあるか？」

「ありますよ」

春日はガムを山下に差し出して、山下はガムを口に入れて噛む。

味はグレープミントだった。

「……ん……」

山下は噛んだガムを出して、それを銃剣につけて、その上から手鏡を貼りつける。

そして、山下は手鏡を使って敵レーザー機関銃座を見た。

「……ＭＧ４２レーザー機関銃三丁に迫撃砲二門だ」

山下は手鏡を春日に渡して、春日も隠れながらレーザー機関銃座を見る。

「……ルートはありますが、機関銃座から丸見えですね」

「しかもドクツ陸軍の傑作レーザー機関銃だ」

「……自分らに使われるのは嫌ですね……」

ドクツ人のホルス・リシュタイン軍曹が悔しそうに言う。

「それは仕方ない。敗者は勝者に従わないといけない」

レーザー機関銃は絶え間無く射撃を続けている。

「ホルス、原田、宮本、田中ッ！！今から援護射撃をする。あの窪みに向かって走れ」

「了解です」

山下に呼ばれた兵士達は頷いた。

「援護射撃ッ！！」

ビシュシュシュシュシュシュッ！！

ビシュシュシュシュシュシュッ！！

山下達が一斉にレーザー機関銃座に向けて小銃を撃ちまくる。

「今だッ！！行けッ！！」

山下の言葉に四人が走った。

「よし。木村、三浦、深山、常田ッ！！準備をしろッ！！」

「はいッ！！」

木村軍曹が頷く。

「援護射撃ッ！！」

山下達は再びレーザー機関銃座に射撃を始める。

「行けッ！！」

四人が窪みに走る。

「チトが上陸していたらこんな事しなくてよかったんですけどね…」

「無い物ねだりしても仕方ない。春日、小銃にてき弾を装備しているか？」

「装備してますよ」

春日が山下に二式てき弾発射器（Ｍ２０３）を装備した一式レーザー小銃を渡す。

「当たれェッ！！」

ボシュゥッ！！

レーザー機関銃の合間に山下は飛び出して二式てき弾を撃った。

ズガァァァーーンッ！！

てき弾はレーザー機関銃座に命中してエイリス兵が吹き飛んだ。

「撃て撃てッ！！」

ビシュシュンッ！！

ビシュシュンッ！！

はい上がろうとしたエイリス兵に窪みに隠れていたホルス達が銃撃をする。

撃たれたエイリス兵はそのまま絶命した。

「ルートが開いたッ！！全員突撃ィィィーーーッ！！」

『ウワアァァァーーーッ！！！』

待機をしていた兵士達は小銃に銃剣を付けて、一斉に雄叫びを上げて銃剣突撃を開始した。

TURN87（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN88（前書き）

まだまだ山下の戦いは続きます。

TURN88

「……第一次上陸部隊の死傷者は約六千人か……」

長門以下、日本海軍連合艦隊は死んだふりをしていた惑星ロンドンの各所にある航空基地を全て叩いて、第一次上陸部隊が上陸した海岸の沖合に錨を降ろしていた。

「……これは酷いな……」

俺は今、宇垣達と共に海岸に上陸していた。

砂浜の至る所に多数の日本陸軍の兵士の遺体があった。

それに紛れてエイリス兵の遺体もある。

「かなりの激戦だったようです」

「……そらぁ、こんな状況を見せたら激戦だったのも頷けるで」

宇垣が報告してくるのを俺は頷く。

「戦闘はどうなってるんや？」

「現在は惑星ロンドンの首都であるロンドンで日エイ軍が戦闘をし

ています」

……首都もロンドンかよ……。

「まぁそれより、山下の無事を祈るしかないか……」

俺は黒い煙が上がっている方角を見た。

「長官、偵察隊から報告です。歩兵は約九百、戦車はチャレンジャーが十六両、自走機関砲が七両です」

「分かった」

春日からの報告に山下が頷く。

「直ぐに隼の支援を要請するんだ」

山下は対地攻撃ヘリの隼（アパッチ）に対地攻撃支援を要請した。

「後少しだ。王宮を占領したら片がつく」

山下は水筒の水を飲む。

「長官、大変ですッ！！」

その時、山下のところに伝令が来た。

「どうした？」

「エイリス軍が戦車を先頭にしてこちらに進軍してきますッ！！」

「何だとッ！？」

この時、山下の部隊は歩兵五百、四式中戦車『チト』三両、七五ミリビームライフル野砲五門しかなかった。

「どうしますか長官？」

春日が山下に尋ねる。

「……どうもこうもない。隼と増援が来るまで粘るしかない。全員戦闘配置だッ！！敵は待ってくれんぞッ！！」

兵士達が慌ただしく動き、倒壊した家屋などに入ってレーザー機関銃などを設置する。

「エイリス軍はどの方向から来るんだ？」

「報告によれば、あの道路から来ているようです」

春日が道を教える。

その道路は両側に半壊している家屋が多くて、さほど道路は通れるようになっていた。

「……Ｃ４はあるか？」

「奴らごと葬れる量はありますよ？」

山下の質問に春日は笑った。

「直ちにエイリス軍が通る道路の両側にある家屋にＣ４を仕掛けろッ！！」

「了解ですッ！！野郎ども、急いでＣ４を仕掛けろッ！！」

『オオォォォッ！！』

兵士達は次々とＣ４を受けとって半壊した家屋にＣ４を仕掛けていく。

「時間で爆破しますか？」

「いや、無線で爆破させる。時間だと通った後に爆破するかもしれないからな」

「設置完了しましたッ！！」

「よし、全員隠れろッ！！」

山下と春日はエイリス軍と正面に向き合う形になる爆撃で出来た窪みに入る。

「戦車と野砲は指示が入るまで隠れろッ！！」

「了解ッ！！」

戦車と野砲はエイリス軍に見つからないように建物の影に隠れる。

そして十分後、エイリス軍が来た。

「……来たか……」

山下は爆破スイッチを手に取る。

ゴゴゴゴゴゴゴッ！！

戦車の地響きで山下達が隠れている窪みの斜面から砂がパラパラと崩れてきていた。

「……長官。奴らの先頭が家屋を越えました」

春日が山下に言う。

「分かった。……行くぞッ！！」

カチッ

山下が爆破スイッチを押した。

ドカアァァァァーーンッ！！

Ｃ４……プラスチック爆弾が一斉に爆発をして、コンクリートの

破片等が爆風によってエイリス軍兵士達に当たったり、粉塵が出る。

「攻撃開始だッ！！撃ェェェーーーッ！！」

ビシュシュシュシュシュシュッ！！

ビシュシュンッ！！ビシュシュンッ！！

兵士達が持つ十二・七ミリレーザー重機関銃や七・六二ミリレーザー機関銃、一式レーザー小銃が一斉に射撃を始める。

更に、物陰に隠れていた戦車と野砲も砲撃を始めた。

ドシュウゥゥーンッ！！

ドシュウゥゥーンッ！！

ビーム弾は粉塵の中や粉塵から逃れていた戦車に命中して、エイリス軍の数を減らしていく。

しかし、エイリス軍も負けじと撃ち返してくる。

「撃てッ！！撃ちまくれッ！！」

山下が兵士達を鼓舞する。

ビシュシュンッ！！

「がぁァァッ！？」

しかし、レーザーが山下の左肩を掠った。

「ぐうぅぅぅ……」

山下は後ろ向きに倒れて、左肩を押さえる。

「長官ッ!?グウゥッ!!」

山下に駆け寄ろうとした春日も右腕をレーザーで掠って倒れた。

「……ハァ……ハァ……（此処で……私は……死ぬのか……）」

山下はそう思った。

『山下、死ぬなよ?』

「ッ!?」

その時、三笠の言葉が頭の中を過ぎった。

「……そうだ……」

山下は一式レーザー小銃を取る。

「私はまだ……死ぬわけにはいかないんだッ!!」

バラバラバラバラッ!!

その時、飛行機音が聞こえてきた。

「隼だッ！！隼が来たぞッ！！」

兵士の誰かが言った。

飛来してきた隼は十二機であり、輸送ヘリ八機も来ていた。

ビシュシュシュシュシュッ！！

十二機の隼は一斉にエイリス軍のところに三十ミリバルカンレーザー機関砲を浴びせていく。

「……助かったのか……」

山下はその光景を茫然と見ていた。

「山下ッ！！」

その時、三笠の声が山下の耳に入った。

後ろを振り向くと、輸送ヘリから三笠が降りてきていて、山下のところに走ってきた。

「……三笠ッ！！」

山下は左肩の痛みに耐えながら、三笠に抱き着いた。

「……長官もやっぱり女の子ですねぇ……」

衛生兵から手当てを受けている春日はそう呟いたのであった。

TURN88（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN89（前書き）

『とある飛空士の追憶』を見に行きたいなぁ。真電が流星改と同じ逆ガル型になってるし。

普通に震電と同じようにしたらええのに……。漫画はほぼ震電やしな。

今回は久々に桜花といずみに。

キングコア編でＨＣＧを頑張って取っている俺は阿呆なんやろか……。

三笠「百パー阿呆やろ」

TURN89

エイリス帝国の最後の砦であった惑星ロンドンが占領されてから一週間が経った。

俺は今、皇居でエイリス帝国の降伏調印式が行われているのに参加していた。

「……によって、我がエイリス帝国は日本皇国の傘下に入る事をこの降伏文書に記入いたします」

エイリス帝国代表は勿論、現女王のセーラやな。

「はい。確かに確認しました。セーラさん、これからもよろしくお願いしますね」

「えぇ」

帝の言葉にセーラは笑顔で頷いた。

「……これでエイリスとの戦いは終わったな……」

俺の隣にいる利古里がそう呟く。

利古里は左肩を負傷して包帯を巻いているので、軍服の左肩部分

が少し盛り上がっている。

「傷は大丈夫なんか？」

「フン、私は軍人だ。痛みなど耐えられる」

パチン。

俺は軽く利古里の左肩を叩いた。

「～～～～ッ！？」

……すっげー耐えてるよ。あ、涙目やし。

「……覚えておけ……」

……涙目で言われても恐怖感は全く無いんやけど……。

むしろかなり可愛いです。（キリ（、・ω・、）

「それでは調印式を終わりますよ～」

帝の言葉により降伏調印式は終了した。

――――三笠の家――――

「え～、まぁエイリスを占領して一段落したけどまだソ連がいるから油断しないようにな」

只今俺の家で『エイリス占領おめでとう』パーティーを開いていた。

ちなみに言い出しっぺは桜花達やな。

「ほんじゃあまぁ、乾杯ッ！！」

『乾杯ッ！！』

そして一応、パーティーが始まった。

「ンフフフ～みぃかぁさぁ～～／／／」

「……クリオネ、飲み過ぎや……」

完全に酔っ払ったクリオネが俺の背中に抱き着く。

「ぁ～クリオネずるいよぉ～」

「……お前もかマリー」

今度はマリーが前から抱き着いてきた。

あ、ちなみにクリオネは田中がムッチリーニのところに行ってる時にゲッベルス――グレシアと一緒に食べました（核爆）

いやぁ、クリオネが御礼とか言って突撃してきた時はグレシアとびっくりしたからな。

「「……くぅ……」」

……俺を枕にして寝るなよ……。

俺は二人をソファーに寝かせる。

宴会場となったリビングではダグラスと田中の一気飲み対決で盛り上がってるけど、戦略的後退しよ。

「……夜風が気持ちいいなぁ……」

俺はベランダに出ていた。

「何をしているんだい三笠？」

「ん？桜花か」

桜花が金麦の缶ビール二本を持って来た。

「持ってきたよ」

「お、悪いな」

俺は桜花から金麦を受け取り、開ける。

「「乾杯」」

二人で乾杯をした。

「……やっとエイリスが終わったな……」

「長かったねぇ……」

「アメリアは日本から近かったけど、エイリスは遠かったからな」

俺はそう言ってビールを飲む。

「ところで三笠？」

「何や？」

「あんたは何人嫁にする気だい？」

「……言わんといて……」

ジト目で見るな桜花。

「まぁ大丈夫やって桜花」

「何が大丈夫なんだい？」

「嫁さん第一号は桜花と決めてくるからな……」

「……ありがとう……／／／」

桜花が顔を真っ赤にしている。

そのうち湯気が出るんとちゃうか？

「まぁ、今日くらいは騒いでてもええやろな……」

部屋ん中では相変わらず騒いでる。

グレシアがレーティアの着せ替えショーをしてるな。

あ、田中が鼻血出した。

「じゃあさ……」

「ん？」

桜花が俺に抱き着いてきた。

「今日ぐらいはこうしててもいいだろ？」

「……俺的には毎日でもええんやけど……」

「多分、血の雨が降るよ？」

「……善処します……」

まだ死にたくないし……。

「閣下、私も宜しいですか？」

そこへ、いずみが来た。

「ん？そらええよ」

てなわけで、俺は今、二人に左右から抱き着かれている状態やった。

「この後の片付けが地獄だと思うので、今のうちに閣下に甘えとこうと思います」

「あ～、成る程な……」

確かに部屋ん中はかなり酷い汚れていた。

結局、皆が酔い潰れるのはそれから一時間半もかかり、その間は桜花といずみの三人でずっと寄り添いながらビールを飲んでいた。

それから、エイリス帝国攻略に参加した艦隊は三日間の休暇が与えられ、皆は疲れを癒した。

四日目、ソ連星域攻略のために俺達はシベリア星域に向けて日本星域から出撃した。

――シベリア星域、旗艦長門――

「ランファ、今までよく頑張ったな」

「本当に大変だったよ……」

シベリア星域防衛艦隊提督のランファが溜め息を吐いた。

まぁ、宇垣長官もおったけどランファが上やからな。

「シベリア星域防衛艦隊は日本星域に帰還して、今までの疲れを癒してくれ」

「ありがとうね長官」

ランファはそう言って、俺に敬礼をして長官室を出た。

「……さて、ソ連攻略か……」

報告によれば、ソ連は数で押してくるみたいやな。

「……人海戦術は嫌いやねんけどなぁ……」

俺は報告書を見ながらそう呟いた。

TURN89（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN90

「長官、ラーゲリ星域まで後十分で到着します」

「おぅ」

宇垣からの報告に俺は頷く。

只今俺達、日本海軍連合艦隊はラーゲリ星域攻略のために進撃していた。

「しかし……寒いですね……」

「……あぁ……」

何故か、艦内は非常に寒いねん。

暖房をガンガンにしているけど、それでも寒いし。

あ、気温が三度になった。

「乗組員に暖かい飲み物でも配布しとくか……」

「それがいいと思います」

宇垣が頷き、全艦の乗組員にお茶やコーヒーが特別に配布され、後に極寒星域での戦いは必須となった。

「前方と右舷2時の方向から敵ソ連艦隊が接近ッ！！」

レーダーを見ていたレーダー員が叫んだ。

「全艦、砲雷撃戦用意や。やけに早い接触やな？」

「もしかしたら、ラーゲリ星域を脱出するための時間稼ぎではないですか？」

「それがほんまやったら嬉しいけどな」

実際、その通りだったらしく、艦隊の足並みはばらばらに動いていた。

「……これやったら無人艦隊に任すか」

今回の攻略作戦には四個無人艦隊を連れて来ていた。

そして無人艦隊を管理するのが……。

「三笠。無人艦隊に異常は無いよ」

「分かった。ありがとうな瑠璃」

無人艦隊のデータを見ていた瑠璃が報告してくる。

そうやねんな。

瑠璃が無人艦隊提督として就任していたんや。

瑠璃の身体にはナノマシンがあったから、ナ〇シコのルリちゃんのように一人で艦隊運用が出来ていた。

流石に俺も最初は瑠璃の提督には反対していた。

けど、瑠璃に「三笠の役に立ちたい」と何度も懇願されて、この大戦中までと約束して無人艦隊提督に就任させた。

根負けですはい。

ちなみに瑠璃は中二で大戦中は通信教育で勉強させている。

「瑠璃、攻撃開始や。俺達の艦隊は補佐に回るから存分に暴れてええよ」

「分かった。思いっきり暴れるね」

瑠璃はナノマシンシステムを開いて、無人艦隊に指示を送る。

指示を受けた無人艦隊はまるで熟練の乗組員がいるように動き出してソ連艦隊に向かう。

「武器システム、オールグリーン。敵ソ連艦隊の距離約八万宇宙キロ。全艦最大戦速」

瑠璃はカタカタとパソコンを鳴らして呟いている。

「全艦隊は無人艦隊の援護に回れ」

俺も指示を出す。

命令を受けた桜花、いずみ、ラスシャラ、セーラ、マリー、ダグラス、田中、ユリウスの艦隊が無人艦隊の後方に回って援護が出来るようにする。

「無人艦隊、攻撃開始」

最大射程距離まで近づいた無人艦隊は一斉に砲撃を開始した。

対するソ連艦隊も砲撃を開始するが、錬度が低いのか無人艦隊には当たらず、適当な方向にビーム弾を飛ばしている。

無人艦隊は初弾から命中弾を出していた。

「……凄い命中率やな……」

モニターを見ていた俺は思わず呟いた。

無人艦隊は命中率が上がるように、ビームを対航空機用の拡散モードで砲撃をしていた。

「混乱させて、接近戦で片付けるみたいやな……」

「そうですね、無人艦隊にもバリア艦を配備してますし」

そう話しているうちに残存のソ連艦艇が次々と撤退をしてラーゲリ星域から離れていく。

「……勝負あったな。瑠璃、戦闘終了や」

「分かった」

無人艦隊は砲撃を停止した。

「……流石は日本軍ね……」

ソ連艦隊旗艦ゴーリキーの艦橋で艦隊の指揮をしていたソビエト秘密警察長官ミール・ゲーペは悔しそうに呟く。

「全艦、チェリノブ星域まで後退よ」

残存ソ連艦艇はボロボロになりがらもチェリノブ星域に帰還した。

「戦果は戦艦三、巡洋艦三、駆逐艦十一隻か。よく頑張ったな瑠璃」

「うん」

瑠璃は笑みを浮かべるけど、俺としては瑠璃に人殺しはさせたく

なかってんけどなぁ。

「長官。ラーゲリ星の着陸しました」

宇垣が報告してくる。

「分かった。瑠璃、ちょっと待っててな」

「うん、行ってらっしゃい」

瑠璃に見送られながらラーゲリ星の土を踏んだ。

ラーゲリ星が強制収容所は知らずに……。

TURN90（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ９１（前書き）

とある飛空士の追憶の漫画を見てたらこうなった……。

TURN91

「……これは酷いな……」

俺は今、ラーゲリ星域のとある強制収容惑星にいた。

「年齢は大体四十以上の人々です」

報告をしてきた宇垣も顔を青ざめている。

俺と宇垣がいる部屋の中には至る所に死体、死体、死体、死体、死体が折り重なって、捨てられているような感じで死体の山となっていた。

「……すみません……」

遂に宇垣は耐え切れずに部屋を出た。

「……おい……」

「は……」

宇垣の代わりに入ってきた兵に声をかける。

「一個中隊くらい呼んできて丁重に埋葬してあげてな」

「分かりました」

兵が部屋を出る。

俺もそれに続いて部屋を出ようとするけど、もう一回、死体を見て頭を下げて部屋を出た。

――――旗艦長門、長官室――――

「長官。これを見て下さい」

「ん？」」

強制収容所惑星から戻ってきた俺にグレシアが一枚の報告書を渡してきた。

「……グレシア、これはマジか？」

「……残念だけど……マジよ」

仕事では敬語を使っているグレシアやけど、この時は敬語を使わなかった。

「……ウチの提督の中でこれを救出出来るのはアイツしかいないな……」

俺は椅子に深く座り込んだ。

「グレシア、呼んできて」

「分かったわ」

グレシアが長官室を出た。

「何だよ長官？」

グレシアが連れて来たのは田中やった。

「急にスマンな田中」

俺は田中を出迎えた。

「何か用でもあんのか？」

「あぁ。貴様に一つ、重大な任務をやってもらいたいんや」

「……重大な任務だと？」

「あぁ。これを見てくれ」

俺はチェリノブ星域周辺の惑星群の写真を田中に見せた。

「これは……？」

「チェリノブ星域の周辺惑星群や。その中で一つの惑星がラーゲリ星域へ向かうワープゲートに近い」

今度は一人の女性の写真を田中に渡す。

「うはッ！？オッパイ子ちゃんじゃねぇか……コホン。で、コイツは？」

田中のスケベ心がまる見えになってきてるな。

「……元ロシアン王国皇帝の一人娘のアナスタシア皇女や。この皇女がこの惑星に幽閉……娼婦としてやらされているんや」

「……そいつを救出しろと？でも何でだ？」

「一応軍機やから話す事は無理や」

「んじゃぁ俺の艦隊で救出するのか？」

「いや違う」

「え？」

俺は真剣な表情で田中に告げた。

「『単艦でチェリノブ星域に侵入し元ロシアン王国皇女を救出後、単艦敵星域から帰還せよ』」

「なッ！？」

田中は驚く。

「参加艦艇は田中艦隊旗艦『田中丸』だけや」

「ま、待てよ長官ッ！！単艦でチェリノブ星域に侵入するのかよッ！？」

「その通りや。単艦でチェリノブ星域に侵入して強制収容惑星で皇女を救出、単艦で帰還するんや。悪いけど拒否権は無いからな。連合艦隊で一番早い艦艇は『田中丸』一隻や。お前しか出来ひんのや」

「ッ！？……分かった。やってやろうじゃねぇか」

半分おだてたら乗ってくれたし。

「では健闘を祈る」

「あぁ」

田中は俺に敬礼をして長官室を出た。

「……ほんまやったら直で乗り込みたいねんけどなぁ……」

田中が出た後で俺はポツリと呟く。

皇女救出はソ連戦後の事を考えて、御前会議で決定された命令や。

今まで占領したアメリアやエイリスは民主主義と帝国主義だったおかげで治安維持や占領政策はやりやすかったけど、ソ連は共産主義や。

今までとは違うからな。

日本皇国もロシアン王国とは戦争や貿易などの交遊はあったけど、ソ連になってからは全く無いからな。

んで、王朝を復活させて（実際は裏で操る）徐々に民主化にさせていく事に決定したんや。（後日、ソ連星域が全て占領されたら民主化の運動が起こったのでロシアン王朝の復活は幻となる）

「ま、田中にはしっかりとやってもらわんとな……」

俺はそう言って、冷たくなったコーヒーを飲んだ。

――――旗艦田中丸――――

「おい。お前らまで乗らなくてよかったんだぞ？」

田中は田中丸に乗り込んできたユリウスとムッチリーニに言う。

「何を言うんだ。お前だと突入しか無いから私がフォローするんだ」

「私は～面白そうだったからよ」

「……分かったよ。死んでも知らねぇぞ」

「それは軍人になった時から分かっているさ」

「私はぁ雷ちゃんに守ってもらうからね♪」

「ボフゥッ！！」

ムッチリーニが田中の頭を胸に押しつける。

「……エヘヘ……」

「……フンッ！！」

ガンッ！！

「～～～～ッ！！」

ユリウスが田中を殴る。

「さっさとするぞッ！！（……何なんだこの気持ちは……）」

「わ……分かった……」

田中は痛そうに頭を押さえる。

そして、田中丸は誰にも気づかれずにラーゲリ星域を出発した。

TURN91（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN92

「三笠。今日は田中を見てないんだけど、どうしたんだい？」

長門で作戦会議が終了して、ぞろぞろと皆さんが帰ってる時に桜花が俺に聞いてきた。

「ん？あぁ、デートやてさ」

「はぁ？作戦会議まで休んでデートすんのかい？」

そこへキャシーが来た。

「まぁアイツの人生初めてのデートやからな。俺が休みにしといたんや」

「……あのヘタレが……」

ん？何か祀梨が驚いとるな。

「相手は誰なんだ？」

ラスシャラが聞いてくるって……。

「お前ら、先に帰ったんとちゃうんかい」

何故か、会議室にはブリテン家族、コルダ、ダグラスやキャロルとかいた。（コイツらは先に出たはずやねんけど……）

「ウフフフ。何やら面白い話が聞こえてたからね」

エリザさんは地獄耳すか？

「それより田中の相手は誰なの？」

マリーが聞いてくる。

「あ、あぁ。相手はな……」

スマン田中。

帰ってきたら多分、しばらくはイジメられるわ。

俺はそう思いながら相手を告げた。

まぁアイツのアイツをしそうなんはユリウスとムッチリーニしかおらんねんけどね。

日本軍で一番に二人と接触してるのは田中やしな。

「ブェックシュンッ！！」

「何だ風邪か？」

「ぁ～、多分誰かが噂をしてんだろ……」

田中がくしゃみをしている。

「雷ちゃん。そのアナスタシアちゃんがいる惑星は分かるの？」

ムッチリーニがポニョンと胸を揺らす。

「あぁ。後十分も航行していたら視認出来るはずだぜ」

田中丸の乗組員は田中とユリウス、ムッチリーニしかいなかった。

秘匿のため、どうしても乗組員を降ろさないといけないので乗組員には休暇を出しておいたのだ。

そして十分後、アナスタシア皇女が幽閉されている惑星オムスクに到着した。

「……惑星の宙域に敵艦艇は見当たらない。惑星の海上に艦船はいるが、非武装船みたいだな」

レーダー等を見ているユリウスが田中に報告する。

「警戒衛星も無いのか？」

「あぁ」

「敵さんは来ないと安心しているのねぇ」

ムッチリーニが呟く。

「なら、ソ連軍に気づかれないように降下をして強制収容所を攻撃して皇女を救出するか」

「それが妥当だな」

「んじゃぁレッツゴー♪」

ムッチリーニの言葉と共に田中丸は降下した。

「……此処だな……」

「あぁ。収容所にしては規模が小さすぎるな」

「……寒いよぉ……」

上から田中、ユリウス、ムッチリーニである。

田中達が発見した強制収容所はラーゲリ星域などの強制収容所に比べてはかなり建物の規模が小さく、交番くらいの建物だった。

「恐らく施設は地下だな」

「あぁ。確か、救出予定の皇女は娼婦だったな。なら、此処の施設はそれ専用の施設だろう」

「それなら建物が小さすぎるのも頷けるわねぇ」

ユリウスの言葉にムッチリーニが頷く。

「なら……さっさと救出するか」

田中の言葉に二人は頷いて、一式レーザー小銃にエネルギー弾倉を装填する。

「見張りは一人か……」

ビシュンッ！！

「グッ！？」

ユリウスが建物の前で見張りをしていたソ連兵を狙撃する。

「行くぞ」

田中がドアを開ける。

部屋の中は武器などが置いていたが、下へ行く階段を降りる。

そして廊下を進んで行くと、右側に牢屋らしき鉄扉がある。

田中が中を覗くと、数名のソ連人らしい女性が裸で首に犬の鎖を付けられていた。

「……早く助けてやらねぇとな……」

「……鼻血を出していたら説得力が無いぞ……」

ユリウスが溜め息を吐いた。

「二人共、此処が管理室みたいだよ」

ムッチリーニが言う。

「違う部屋を覗くと、ソ連兵が高鼾をかいて寝ていた。

さらには監視カメラのモニターもある。

三人は寝ているソ連兵を殺して、他に兵がいないか監視カメラを使って調べる。

「……どうやらいないみたいだな……」

「あぁ。牢屋の鍵も見つけたから助けるか」

「それじゃぁ助けてくるわ」

田中がムッチリーニに鍵を渡して、ムッチリーニが牢屋に向かう。

「雷ちゃん、助けたわ」

ムッチリーニが三人の女性と来た。三人共一応、服は着ている。

「貴方達は日本軍かしら？」

「あぁ。あんたは？」

女性は腰まで髪がある金髪で、男達に犯されながらも気品があった。

「私は元ロシアン王国の皇女であるアナスタシアですわ」

女性――アナスタシアはそう答えた。

「なら話しが早いぜ。もう収容者はいないな？」

「うん。いなかったよ」

田中の問い掛けにムッチリーニが頷く。

「ならさっさと脱出するか」

田中達は装備を整えて、施設を脱出した。

TURN92（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN93（前書き）

ムッチリーニの性格が少し違う……。

TURN93

ビィーーーッ!!ビィーーーッ!!

「ん?ッ!?田中、敵艦隊だッ!!」

「数はッ!?」

全員が乗り込んだ時に警報が鳴り、ユリウスが知らせる。

「数は戦艦二、巡洋艦五、駆逐艦十二隻だッ!!」

「ちぃ、気づかれたか。ムッチリーニッ!!エンジンは行けるのかッ!!」

「いつでも行けるわよ～」

エンジンを見ていたムッチリーニが田中に言う。

「よし、緊急離脱だッ!!全員、何かに掴まっとけよッ!!」

田中はそう言って、着陸していた田中丸は緊急浮上。

一気に大気圏を突破する。

「キャアァァッ！！も、もっと丁寧に動かしなさいなッ！！」

何かに掴まってなく、緊急浮上で床に叩きつけられたアナスタシアが田中に怒る。

「うるせェェェッ！！また捕まって娼婦をされたいのかッ！！」

「ッ！？」

田中の怒号にアナスタシアは驚く。

「……皇女の私に向かって何て言葉を……」

「そうだッ！！アナスタシア様に何て言葉を言うんだッ！！」

アナスタシアの傍らにいた女性が叫んだ。

「今は皇女じゃねぇだろッ！！黙っとけッ！！」

「ッ！？」

喧嘩っ早い田中の言葉にアナスタシアは身体を震えさせる。

「グダグダ言う暇があれば掴まれッ！！」

「敵艦隊がビームを撃ってきたぞッ！！」

「ちぃぃッ！！」

田中は回避航行を取り、ビーム弾をかわしていく。

「キャアァァッ！！」

ボフゥッ！！

「なぁッ！？／／／／」

まだ掴まっていなかったアナスタシアが田中のところまで転がり、田中をこかす。

田中はそのままアナスタシアの胸へ突撃した（笑）

「キャアァァッ！？／／／／」

アナスタシアは事態に気づき、顔を赤くしながら離れる。

「……ボイン……」

そして田中はアナスタシアの充分過ぎる胸に撃沈した。

「……貴様はそんなに巨乳がいいのかァッ！！」

ユリウスが叫んだ。

「それを言っている暇はないよユーリちゃん」

田中の代わりにムッチリーニが操縦をする。

「行っくわよぉ～」

ムッチリーニは最大戦速を出して、ソ連の追撃艦隊を突き放していく。

「どんなもんだよ♪」

「喜ぶのはまだ早いぞムッチリーニッ！！前方からも来ているッ！！敵艦隊の数は戦艦二、巡洋艦七、駆逐艦十二隻だッ！！」

前方からも追撃艦隊が来ていた。

「えぇ～。まだいるのぉ？」

「ビーム弾が発射されたッ！！命中まで後三秒ッ！！」

「えぇいッ！！」

ズガアァァーンッ！！

ムッチリーニはビーム弾を避けるが、一発が命中した。

「右舷中央部分に被弾ッ！！被弾付近の隔壁閉鎖ッ！！」

オートに切り替えているため、通常よりは動きが遅いが隔壁が閉鎖されていく。

「ユーリちゃんはワープコードを入力していて。私が撃つわ」

ムッチリーニは操縦をオートに切り替えて主砲の操作をする。

「主砲発射ッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

田中丸の後部主砲である十五．五センチ連装プラズマショックカノンが火を噴き、直撃をした駆逐艦は機関を停止した。

「ムッチリーニ、砲撃は任す。俺は操縦をする」

漸く復活した田中がムッチリーニに言う。

「うん、分かったよ」

ムッチリーニはそう言ってプラズマショックカノンを敵追撃艦隊に叩き込んでいく。

「コードの入力は完了したぞッ！！」

「よし、ワープゲートに突っ込むぞッ！！」

田中丸はソ連追撃艦隊の砲撃を避けつつ、ワープゲートに突入した。

流石のソ連追撃艦隊もラーゲリ星域へ繋がるワープゲートへの突入は躊躇し、追撃は中止となった。

――二日後、旗艦長門長官室――

「日本皇国海軍長官の山口三笠大将です」

「元ロシアン王国皇女アナスタシア・ロマノヴですわ」

俺はアナスタシア皇女と面会をしていた。

「山口長官。何なんですかあれは？」

「あれはと申しますと？」

「田中とか言う提督ですわッ！！皇女の私に文句を言ってきて……」

アナスタシア皇女は文句を言っていたけど、目は怒っているようではなかった。

その後、アナスタシア皇女は提督に参加したいとの事で、俺は田中艦隊に入れてあげたけど田中とアナスタシアは会う度に喧嘩をしていたのは言うまでもないわな。

TURN93（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN94（前書き）

最後の文の批判は受付ません。

あの生物を倒すならあれが有効です。

ゲームでもそれらしい描写がありましたし。

TURN94

「対艦レーダーに反応ありッ！！敵艦隊接近中ッ！！数は七個艦隊でうち二個艦隊は空母を主力にした空母艦隊ですッ！！」

「ん。祀梨とコルダの艦隊に打電や。攻撃隊は全機発艦や」

「了解ッ！！」

オペレーターからの報告に俺は祀梨とコルダの空母艦隊に攻撃隊発艦の指示を出す。

命令を受けた二艦隊は直ちに攻撃隊を発艦させていく。

「リンファの旗艦に打電や。『貴艦隊はホワイトホールを監視せよ』や」

「了解です」

リンファの艦隊はホワイトホールがある宙域へ向かう。

ん？今何処にいるかやて？

只今チェリノブ星域を攻略中やねんな。

アナスタシア皇女を救出後、アナスタシア皇女は日本皇国の支援

を受けて亡命ロシアン王国をシベリア星域で建国した。

しかし、シベリア星域やラーゲリ星域の人々は亡命ロシアン王国の建国に反対を表明した。

「ロシアン王国が我々を苦しめたのにまた建国するつもりなのか」

それがシベリア、ラーゲリ星域の人々の意思であったからアナスタシア皇女は亡命ロシアン国と変更をして皇女自身は政治の舞台に立つ事はせず、アメリア同様の市民が決めた大統領で政治する事を表明して人々の不信感を取り除いた。

後に、トロッキーという女性大統領が亡命ロシアン国初代大統領に就任する事になる。

そしてチェリノブ星域を攻略中という事やねんな。

「小沢、ケント艦隊から攻撃隊が全機発艦しました」

「なら両艦隊は後方へ退避や。桜花、いずみ、田中、リディア、ダグラス、スカーレット艦隊は速度を上げるんや。全艦砲雷撃戦用意やッ！！」

「了解です」

宇垣が俺に敬礼をした。

――田中艦隊旗艦田中丸――

「野郎共、準備はいいかッ！！」

『オオォースッ！！』

田中の言葉に艦橋要員が叫ぶ。

「……暑苦しいですわね」

「まぁまぁ皇女様」

「これが日本らしきところですよ。ふむ、指揮を高めるには中々の手段だな……」

何故か、田中丸にいるアナスタシアとアナスタシアの護衛であるサーラ・ユグリトリスとエイラ・キエフがいた。（アナスタシア皇女救出時にアナスタシアと同じく娼婦として働かされていた）

「他の日本艦は上品ですのに、此処は男子校みたいですわ」

フンとアナスタシアが文句を言う。

「何だとてめぇ。やんのか？」

アナスタシア皇女の言葉を聞いた田中がアナスタシア皇女を睨む。

「あ～ら。私は正しい事を言ったまでですわ」

「何だとォッ！？」

『……』

田中とアナスタシアの口論が始まり、艦橋要員は「提督、リア充氏ね」と呟いていたり、「またか……」と溜め息を吐いたりしている。

アナスタシアの護衛であるサーラとエイラも苦笑している。

これは田中丸の中ではいつもの事と認識されていたりする。

――スカーレット艦隊旗艦肥前――

「祀梨ちゃんとコルダさんの攻撃隊はどうなっているの？」

「はい。只今敵ソ連空母艦隊を攻撃中です。映像出します」

スカーレットの問い掛けにオペレーターが答えて、映像を出す。

「……今のところはこちらが優勢ね」

「提督。旗艦長門より電文です。砲戦距離は三万宇宙キロとの事です」

「分かったわ」

「御嬢様、コーヒーは如何ですか？」

「貰うわコロネア」

これも旗艦肥前ではいつもの事であった。

――――旗艦長門――――

「第十一斉射目命中しました」

「ソ連艦隊の足並みは乱れています」

オペレーターが報告し、宇垣も報告してくる。

「もうちょいでソ連艦隊も撤退するな」

そして十分後、ソ連残存艦艇は撤退を始めた。

「利古里に伝えろ。上陸船団をチェリノブ星域に向かわせるんや」

「分かりました」

宇垣が頷いた。

そして上陸船団がチェリノブ星域の惑星群の上陸を開始した。

――六日後、チェリノブ星域――

チェリノブ星域は日本軍に占領された。

「今のところは異常は無いね」

治安維持のために定期的に航行している。

今日は桜花、いずみ、キャシー、マリーの艦隊が定期航行をしていた。

「ん？南雲提督。左舷１０時に空間歪曲反応です」

「空間歪曲反応？」

オペレーターからの言葉に桜花は思わず聞き返した。

「はい。戦艦と同じくらいの対艦反応が出ています」

「……確認するか。全艦戦闘配置で様子を見るよ。偵察機を発艦させるんだよ」

榛名から瑞雲偵察機が発艦していく。

後にこれが、とある生物を倒す艦船とは今は誰も知らなかった。

TURN94（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN95（前書き）

大帝国の攻略本は買うべきなんやろか……。

三笠「作者はネットの攻略サイトを見てたからな」

悩みます。

TURN95

「南雲提督。不明戦艦の曳航を始めます」

「あぁ。消火班は消火活動をしながら生存者がいないか探索するんだよ」

「了解しました」

あれから一時間後、偵察機で判明したのは黒煙を噴いて漂流をしていた一隻の国籍不明戦艦であった。

桜花はとりあえず捕獲をして持って帰ろうと決めて曳航を始めた。

桜花艦隊の周囲にはいずみ、キャシー、マリーの艦隊が護衛をして惑星チェリノブを目指した。

――――旗艦長門――――

「ん？国籍不明戦艦やて？」

占領星域の書類を終わらせた俺は手伝ってくれたリンファ、リデ

ィア、グレシアと共にコーヒーを飲んで休憩をしていた。

その時、桜花からの国籍不明戦艦を拿捕した報告が宇垣を通してきたんやな。

「はい。その通りです」

「んでその国籍不明戦艦の映像とかあるんか？」

「はい。これです」

宇垣が映像に出した……え？

「……これって日本の戦艦じゃないの？」

「水上艦を似た宇宙艦は日本しか持ってないですから」

「そうよね。日本艦じゃないの？」

「いえ。今の日本戦艦にはこれはありませんよ。一応、旧式戦艦かと考えて調べましたが該当する戦艦はありませんでした」

ガシャンッ！！

「わ、もう長官落としたら駄目だよ。カップが割れちゃったよ」

「これはシミになりますね」

「……長官？」

リディア、リンファ、グレシア、宇垣が何か言ってくるが今は無視や。

……そんな阿呆な……。

「……何でこの戦艦が……」

「長官はこれを知っているんですか？」

宇垣が聞いてくるけど無視や無視。

「宇垣」

「は、はい」

俺の声はいつもよりトーンが低かった。

「これを曳航してきている桜花達は後何分で来るんや？」

「も、もう間もなくだと思います」

「宇垣。急いで海軍省にいる都奈海とレーティア、日本星域にいる工作艦明石と桃谷をチェリノブ星域に呼び寄せろ」

「……長官？」

「急げッ！！」

「は、はいッ！！」

宇垣は慌てて敬礼をして部屋を出た。

「……長官。何か知っているのかしら？」

俺を不審に思ったらしいグレシアが聞いてきた。

「グレシア、リディア、リンファ。今の戦艦に対しては箝口令をひく。絶対に誰にも言うなよ？これは俺個人からの願いからでもある」

「……分かったわ。聞きたいけど我慢するわ。でも、いずれ聞かしてくれるんでしょ？」

「あぁ。それは約束するわ。必ず言うわ」

俺は長官室を出て軍港に向かった。

――――軍港――――

俺は走って軍港に来ると、桜花達の艦隊は既に到着していた。

「三笠じゃないか？これを見に来たのかい？」

桜花が声をかけてくるけど、俺はそれを無視して艦体を触る。

「……本物や……」

「……三笠？」

「桜花。中を案内してくれるか？」

「あ、あぁいいよ。艦橋に連れて行くよ」

俺は桜花の案内の元、国籍不明戦艦の艦橋に向かった。

「此処が艦橋だよ」

俺と桜花は艦橋に入った。

……間違いない……。

「一場面くらいしか俺は見てなかったけど……これは本物やな……」

「三笠。さっきから何をブツブツと言っているんだい？」

「桜花。この戦艦を見た乗組員は全てに箝口令をひく」

「なッ！？ど、どういう事だよッ！！」

「そのままの意味や桜花。この戦艦の調査は都奈海とレーティア達に任せる。戦艦の周りには警備隊を敷いて都奈海達が来るまで誰も入らせないようにするんや」

「……何か知っているんかい？」

「……あぁ。詳しい事は今度話す。今は何も聞かないでくれ」

「……分かったよ。三笠の頼みだからね」

「……ありがとうな桜花」

それから三日後、都奈海とレーティアの研究部隊が早速国籍不明戦艦の調査が始まった。

「山口君ッ！！何なんだこの戦艦はッ！？しかもエンジンはかなりのオーバーテクノロジーだぞッ！！」

「凄いぞ山口ッ！！私が計画していた新型エンジンと同等の性能を持っているぞッ！！」

連日、都奈海とレーティアが喜びながら俺に報告をしている。

後にドロシー・ノイマンも調査に参加する事になった。

TURN95（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN96（前書き）

ちょっと簡潔になった……。

TURN96

――旗艦長門会議室――

「……てなわけで、モスクワ星域を攻略するけどもや。モスクワ星域の守備艦隊の半数は素人やけど、敵将は日本海軍をノモンハンで壊滅に追いやったジュザン・ジューコフや」

俺達は長門の会議室でモスクワ星域攻略の作戦会議をしていた。

「まぁ毎度の事ながら、航空戦でジューコフの周りを片付けてから砲雷撃戦でトドメを刺す。……何か質問ある？」

「毎度の事ですから……」

何故か祀梨が呟く。

……誰も質問は無いな。

「んじゃぁ会議は終わる「少しいいかな山口？」……何ですか柴神様？」

珍しく柴神様が手を挙げた。

「何か作戦に疑問でもあるんですか？」

「いやいや。作戦の事はいつもの事だから気にしてはない」

……そんなにハッキリと言わないで下さいよ。

「じゃあ何すか？」

「……先日の国籍不明戦艦だ」

『……』

柴神様の言葉に皆が俺を見た。

「……照れるやんか……」

『いや阿呆か』

……そんな即答しなくても……ただの遊びやのに……。

「山口。お主は一体何を知っているんだ？私にも言えない事なのか？」

「……実は先日、真希ちゃんに隠していたエロ本を見つけられて……」

『……』

そんな目で俺を見るなお前ら……。

「とまぁ冗談は置いて。……そうですね、あの戦艦はある程度の事

は知っていますよ」

「ならば何故皆に言わない？」

「……柴神様が隠しておきたい何かと一緒ですよ」

「ッ！？」

柴神様が俺の言葉に驚く。

「都奈海から聞きましたよ。ホワイトホールから数十分の一までに圧縮されて死んでいた富嶽が見つかった時、貴方はかなり慌てて箝口令を引きましたね？」

「……今の人間には知らなくてはよい事だ……」

柴神様は苦しそうに言う。

「でしょ？だから柴神様と一緒ですよ。あの戦艦はまだ皆に公表すべきじゃないんです」

そう。何でこの世界に現れたのかも分かっていないんやからな。

「ですが、あの戦艦はソ連戦が終われば自分から言いますんで。これは約束します」

「……ならばそれで良い……」

……そして会議は終了したんやけども、俺と皆の間に多分溝が出来たと思うな。

全く柴神様もいらん事を言うから……。

「みーちゃんどうしたの？」

「いんや。何でもないよ真希ちゃん」

長官室に遊びに来ていた真希ちゃんにそう言った。

――――モスクワ星域――――

てなわけで、只今モスクワ星域を航行をしている。

「彩雲偵察機より入電です。敵艦隊は約十五個艦隊で内、三個艦隊は空母艦隊のようです」

「……殆どの艦隊を注ぎ込んだみたいやな」

「恐らくそうだと思います」

「まぁええか。祀梨とコルダ、ロックの艦隊に通信や。攻撃隊全機発艦や」

「了解です」

そして、三艦隊の空母から烈風と天山が発艦していく。

「三艦隊は攻撃隊を発艦後は後方へ退避や」

俺は三艦隊への指示を出す。

「長官ッ！！対潜レーダーに反応ッ！！ソ連軍の潜水艦が接近中ですッ！！数は八隻ッ！！」

「対潜魚雷を発射して沈めろ。今は発艦中やから東海がおらんしな」

八発の対潜亜空間魚雷を対潜駆逐艦が発射して魚雷は亜空間に入る。

「……撃沈ッ！！三、四、五……ソ連潜水艦は全て撃沈しましたッ！！」

「よし。引き続き対潜部隊は亜空間を警戒や」

「攻撃隊から入電です。攻撃隊は被害を受けるも空母艦隊を撃滅した模様です。また、他艦隊にも被害を与えたようです」

「ん。全艦砲雷撃戦用意や」

「全艦砲雷撃戦用意ッ！！」

宇垣が叫んで、全艦の主砲がソ連艦隊に照準する。

「ソ連艦隊が射程距離に入りましたッ！！」

「全艦撃ちぃ方始めェッ！！」

「全艦砲撃開始ッ！！」

俺の命令に宇垣が叫び、全艦が一斉に砲撃を始めた。

ドシュウゥゥゥーーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーーンッ！！

ビーム弾は次々とソ連艦隊に命中した。

――ソ連艦隊旗艦スワロフ――

「……残存艦艇は？」

炎上をしている艦橋でソ連軍の名将であるジュザン・ジューコフ元帥がオペレーターに聞く。

「は、戦艦三、巡洋艦八、駆逐艦十三隻のみです。他は全て撃沈されました」

オペレーターが悔しそうに報告をする。

「ニガヨモギの部隊はどうなっているんだ？」

「コンドラチェンコ提督の部隊が護衛しながら後退をしています」

「そうか。……我々は此処までだな」

「元帥……」

「……気にするな。君達は充分に戦ってくれた。私の誇りだ」

そして、ジューコフの残存艦艇は次々と白旗を掲げて降伏の意思を表したのであった。

TURN96（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN97（前書き）

強引に祀梨イベントをしてしまった……。祀梨も好きなんです。

桜花「巨乳じゃないのに？」

まぁええやないの。

TURN97

――海軍省、長官室――

「え？それはほんまか？」

「はい。明石大佐に頼んで確認しましたら本当でした」

宇垣がそう報告する。

「……北欧星域とジャイアン星域で民衆のソ連への大規模反乱か……」

ソ連に占領されていた北欧星域とジャイアン星域の民衆が、ソ連の政治体制に不満が大爆発をして大規模反乱が勃発した。

「明石大佐を呼んで反乱軍と接触して旧式艦を譲渡するか」

五十式と六十式艦艇は退役しているからまず無理やし、八十式と七十式は訓練艦と輸送船団の護衛についているから八十式と七十式を売るか。

ブオォォォーーーッ！！

「……」

明石大佐が来た。

「明石大佐、悪いねんけど反乱軍と接触してウチの旧式艦艇を提供するからと反乱軍に言ってくれへんか？」

「……了解した」

明石大佐はそう言って消えた。

「……いつもながらどうやって消えてるんでしょうね……」

「忍術や忍術」

ＮＡ〇〇ＴＯのミ〇トみたいな瞬身の術やろか……。

「あ、ジューコフ元帥呼んできたか？」

「あ、はい。ジューコフ元帥、どうぞ」

「……失礼する……」

ジューコフ元帥が入ってきた。

「初めまして元帥。日本海軍長官を勤めている山口三笠です」

「ジュザン・ジューコフです」

俺と元帥は握手をする。

「いやぁ、ノモンハンではこてんぱんにやられましたよ」

「いえいえ。あれはたまたまですよ」

「そんな御謙遜をしなくても……」

「いや。私は何もしていませんよ。部下が優秀だったからです」

「そうですか……。ところで元帥、亡命ロシアン国の軍に入りませんか？」

「……私に母国と戦えと？」

「まぁぶっちゃけそうなんですけど、退役をして殺されるより亡命ロシアン国にいる方がええと思いますよ？亡命ロシアン軍の大半はロシアン人ですし、ジューコフ元帥に来てほしいと嘆願書もあるんです」

俺は嘆願書を出す。

かなりの数やねんなこれが……。

「……分かりました。亡命ロシアン国の軍に入りましょう。ただし、私自らが入ったのではなく、部下が来てほしいと言う事です」

「それは分かっていますよ元帥」

部下のためか……軍人の鏡ってやつかな……。

「それではよろしくお願いします元帥」

「あぁ」

俺と元帥はもう一回握手をした。

「ところで何で普通におんの？」

ソファーに座っている祀梨に言う。

「実はお願いがあるのですよ長官」

「お願い？」

「明日、私と一緒にアキバに行ってほしいんです」

「何でアキバや？」

「久しぶりに買いあさりたいので荷物持……いえいえ付き添いです」

「思いっきり荷物持ちやな」

まぁええか。久しぶりにアキバにも行きたかったしな。

「まぁええよ。何時集合や？」

「１０時にアキバの駅で」

「了解」

祀梨は長官室を出た。

――――翌日――――

「まだ来てへんみたいやな……」

まぁ約束の時間まで１０分前やからな。

「お待たせしましたよ」

「おぅ」

祀梨は水色のワンピースで来た。

「……自分の体型を分かっているな……」

「巨乳と戦うなら胸ではなく他のでやりませんとね……」

まぁ似合ってるしな。

「んで、何処から行くんや？」

「メロンブックスから行きましょう」

祀梨の目がウキウキしているのは当たり前やろな。

無論、オタクの俺も何処から回ろうか考えてたしな。

「はいはい」

「長官は何処かに行きたいところはありますか？」

ホクホク顔の祀梨が聞いてくる。

両手にはかなりの薄い本を入れた袋を持っている。

「んじゃぁプラモ屋寄ってええか？」

「いいですよ」

俺は祀梨の袋を取る。（勿論、中身はＢＬ本やけど袋やから分からへん）

「あ……」

「これはついてきてくれる御礼や」

「なら長官。腕を組んでいいですか？」

「そりゃあええよ」

「ではでは……」

祀梨は嬉しそうに俺の左腕に抱き着く。

「胸が当たってるで」

「フフフ、当ててるんですよ」

「フッフッフ。買えた買えた」

いやぁ宇宙戦艦三笠のプラモを買えてよかったわ。

後は何故かF―15JやF―2のプラモあったしな、まぁ勿論買った。

「長官。最後に来てほしいところがあるんです」

「ん？何処や？」

「ついて来たら分かりますよ」

「……何でラブホやねん……」

ラブホの中ですはい。

「長官。いきなりですが大好きです」

「……ほんまにいきなりやな……」

「いえいえ。私は何回もアプローチをしているんですよ。だからさっきも腕に胸を当てたりしてたんですよ」

「……気づかなくてすまんかったな……」

「いいんですよ長官。長官には以前にストーカー事件でも助けてもらいましたし、その御礼だと思って下さい」

たまに二人でアキバに行くんやけど、以前に祀梨がストーカーに追い掛けられたからな。（無論オリイベです）

まぁキャシー、ラスシャラの銃撃にストーカーもションベンちびってたからな。

「それに願わくば長官のハーレム入りも……」

「……何でやねん……」

「長官のハーレムはあっち方面では有名ですけど」

「……はぁ……」

何か疲れてきた……。

「まぁとりあえず長官。優しくして下さい」

「本音は？」

「……無茶苦茶にして下さい／／／」

……そう来るかぁ、意外と可愛いですはい。

そして祀梨と一夜を過ごしましたマル。

TURN97（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ９８（前書き）

ユーチューブで『とある飛空士の追憶』のＰＶとかを見ていたら、主題歌は奥華子の「ｒｅｂｉｒｔｈ」も合うかなぁと思った。

今回は国籍不明艦が少し分かります。

TURN98

「瑠璃、プレゼントや」

「プレゼント？」

長官室に呼ばれていきなりプレゼントやて言われたら？を浮かべるよな。

「瑠璃の無人艦隊の操作を補佐するＡＩや。名前は思兼神でカタカナやとオモイカネや」

俺は瑠璃の携帯を借りてＡＩを転送をする。

『オモイカネです。よろしくね』

ピュンと瑠璃の右肩に十センチくらいの女の子が現れた。

「三笠。これは？」

「オモイカネや。ＡＩなんやけど、都奈海とレーティアが人間型にしたら馴染みやすいと言ったから映像だけやけど人間型にしてるんや」

俺的には八神はやてのあれに見えるな。

それからロックマンエクゼやな。

「……よろしくねオモイカネ」

『うん。よろしくね瑠璃♪』

……完全にナデシコやな。

「ありがとう三笠」

「おぅ」

瑠璃が長官室を出た。

「……さて……と……」

俺は都奈海に電話をかける。

『何だ山口君？』

「いやな、さっき瑠璃にオモイカネをあげたんや」

『そうか。喜んでいただろうな』

「まぁな。ところで例のはどうなってるんや？」

『エネルギー伝導管が何回か溶けてエンジンは停止するが、日本星域の衛星カグヤにある鉱石『ヒヒロイカネ』を使用したら溶けなかったからそれで実験をしている』

「そうか。進展があったらまた知らせてくれ」

『分かった』

俺は都奈海との電話を切る。

「……」

俺は一枚のＤＶＤディスクを取る。

あ、言っとくけどエロＤＶＤちゃうからな？マジで。

とりあえず、再生やな。

『艦長ッ！！正体不明艦隊から攻撃が来ますッ！！』

『回避運動だッ！！主砲発射用意ッ！！』

『正体不明艦隊の数、七百になりますッ！！』

『……まさか第一次移民船団が壊滅したという原因はコイツらかッ！！』

艦長が驚愕している。

『艦長ッ！！シリウス被弾ッ！！航行不能のようですッ！！』

『な、何だとッ！！』

映像には、あのブルーノア級によく似た大型戦艦が黒煙を噴きながら戦線を離脱しようとしている。

『戦闘空母サラトガ爆沈ッ！！巡洋艦アストリア撃沈ッ！！』

『……こうなれば俺が指揮をするッ！！全艦隊は砲撃をして、移民船団を守りながら後退せよッ！！拡散波動砲発射用意ッ！！』

『拡散波動砲発射用意ッ！！ターゲットスコープオープンッ！！』

砲術士官らしい奴が準備をしている。

ズガァァァーーンッ！！

その時、艦が揺れた。

『機関室に被弾ッ！！火災発生ッ！！』

『消火急げッ！！』

『艦長、大変ですッ！！今の被弾で波動エンジン内のエネルギーが膨張を始めていますッ！！』

『何ィッ！？』

機関室からの報告に艦長が驚いてる。

『このままですと大爆発をしてしまいますッ！！』

『解決策はあるのかッ！？』

『エネルギー消費が激しいワープを使えばもしかしたら……』

『ならそれでいくしかない。ワープッ！！』

そして光りに包まれて、映像はそこで途切れた。

「……やっぱり復活篇やな……」

俺は後片付けをする。

「何事もなかったらええねんけどな……」

俺はそう呟いた。

三日後、連合艦隊はロシア高原星域攻略のためにモスクワ星域から出撃した。

――――旗艦長門――――

「ん？反乱部隊が勝手に侵攻してるやて？」

「はい。それにソ連軍の戦線も崩壊しているようです」

「……それやったら攻略も楽やな」

あんまりウチらに被害も出ないからラッキーやな。

「ですが……ニガヨモギの部隊がいます」

「……マジ？」

「マジです」

モスクワ星域会戦は極寒艦を破壊したら後退したらしいから極寒艦を優先して叩くか。

「ニガヨモギ部隊の攻撃には極寒艦を叩いてからニガヨモギを攻撃や」

「了解しました」

宇垣が敬礼をして、桜花、いずみ、セーラ、ラスシャラの艦隊がニガヨモギの部隊に向かう。

「さて、目の前の艦隊を片付けた艦隊はニガヨモギの部隊に加われよ」

あれは中々倒されへんからなぁ。

砲撃をしながら俺はそう思った。

TURN98（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN99

「ニガヨモギの攻撃に向かった艦隊はどうなっているんや？」

ソ連艦隊を倒すのは余裕やったな。

まぁ素人が多かったからな。

「……」

「どないした宇垣？」

「は、はい。ニガヨモギの攻撃に向かった艦隊ですが……壊滅寸前です」

「……マジ？」

「……マジです」

「……小沢、ハンナ、コルダの機動艦隊は攻撃目標をニガヨモギに変更や。航空隊が攻撃中に全艦隊はニガヨモギに向かうッ！！桜花達に打電しとけ、航空隊が攻撃を開始をしたら直ちに後退やッ！！」

「了解ッ！！」

……まさか壊滅寸前とはな。

「宇垣。何で知らせなかったんや？」

「いえ。桜花達から連絡が来なかったので……」

……それならしゃあないか。

「南雲艦隊から通信ですッ！！」

「パネルに切り替えろ」

通信パネルに負傷した桜花が映る。

『す、すまない三笠……』

「何があったんや桜花？」

『ニガヨモギのソ連艦隊が意外と手強かったんだよ。それでモタモタしてたからニガヨモギにね……』

「……分かった。後は俺達に任せろや」

『あぁ。期待してるよ』

桜花はニヤリと笑って通信を切った。

「全艦隊経路変更完了ッ！！」

「全艦隊砲雷撃戦用意やッ！！もう一合戦すんでッ！！」

全艦隊はニガヨモギに向かった。

「……でかいな……」

「でかいです……」

火星に攻め込んできたモノリス（鉄板）みたいやな……。

『→のネタが分かった人はナデシコ好きだと思います。ただ記憶が曖昧なので合ってるかは不明です。リョーコちゃんとミナトさんは大好きですｂｙ作者』

「全艦隊の照準をニガヨモギに定めろ」

「了解しました」

全艦隊の主砲がニガヨモギに照準する。

「全艦撃ちぃ方始めッ！！」

「撃ちぃ方始めッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

全艦隊から一斉にプラズマショックカノンが発射されて、ニガヨモギにビーム弾が命中する。

「ニガヨモギから反撃が来るでッ！！バリア艦を前方に配置させろッ！！」

新型の９７式無人バリア艦が一斉に全艦隊の前方に出てバリアを展開した。

そして、ニガヨモギからビーム弾の反撃が来るけどバリア艦のバリアのおかげで何とか損傷は免れた。

「被害はッ！？」

「今のところありませんッ！！」

オペレーターが報告をする。

「祀梨達の機動艦隊は航空機の波状攻撃をかけろッ！！ニガヨモギに反撃をさせるなッ！！」

『了解ですよ』

祀梨達の機動艦隊から航空機が次々と舞い上がり、ニガヨモギに対宙艦ミサイルや対宙空ミサイル等を叩き込んでいく。

「全艦隊も波状砲撃やッ！！取舵一杯ッ！！右砲戦用意ッ！！」

「取舵一杯ッ！！」

全艦隊が右砲戦に変える。

「全艦隊発射用意完了ッ！！」

「撃ェェェッ！！」

前部だけの砲撃だったのが、今度は全主砲で砲撃する。

「光子魚雷もぶち込めッ！！」

リディア、田中艦隊から光子魚雷が発射された。

そして、ビーム弾と光子魚雷が命中していく。

「ロシア平原星域大演習やァァァーーーッ！！！」

士気を高めるためなら何でも言うからな。

「あッ！？長官ッ！！ニガヨモギに変化が……」

「何？」

ニガヨモギは小規模な爆発を繰り返しながらやがて目を閉じて機能を停止した。

「ニガヨモギが活動を停止しましたッ！！」

「……冬眠か？」

極寒星域やし。

「多分、そうじゃないんですか？」

「……なら俺達の勝ちやな。てかそのまま眠っといてほしいわ」

俺は長官席に座り込んで深い溜め息を吐いた。

「桜花達の艦隊はどうなってるんや？」

「……被害は大きいようですが、旗艦の沈没は出ていないようです」

宇垣がそう報告してくる。

「分かった。利古里に連絡をして陸軍部隊を突入させようか」

そして、旗艦長門からの連絡を受けた陸軍上陸船団はロシア平原星域の惑星群に突入を開始した。

それを横目に、俺はモスクワ星域から工作艦明石と桃谷を桜花達艦隊の修理のために引っ張らせる事を決定してモスクワ星域に打電したんやった。

TURN99（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN100（前書き）

やっと百話まで来た……。

帝の名前は歌の『凛として咲く花の如く』から取りました。

TURN100

それは突然の事やった。

『え～、今日から日本皇国は極東人民共有国に変更します。皆さん、赤本は必ず読みましょう♪』

『ブウゥゥーーーッ！！！Σ（ﾟДﾟ）』

帝のいきなりの発言に、たまたま長官室で休憩をしてコーヒーを飲んでいた俺達は思わずコーヒーを吐いた。

「な……何でやねんッ！！」

俺はテレビにツッコミを入れる。

「今日は4月バカじゃないですよ」

宇垣が口の周りを拭きながら言う。

「……まさか。ソ連のスパイ活動かッ！？」

レーティアがそう判断をする。

「……多分それやろな……」

そこへ明石大佐が来た。

「……あの帝はクローン。帝は我が保護した」

「でかしたで大佐。俺は今から皇居に乗り込む。大佐は陰ながらで護衛してくれ」

「……了解……」

大佐が消えた。

「皇居に行ってくるわ」

「うむ。頼んだぞ」

「海軍長官は辛いわ……」

俺は九ミリ拳銃と予備の弾倉五個を装備して皇居に向かった。

――皇居――

「あ、山口も来ましたね。これにサインをして下さい」

クローン帝から紙を渡される。

それは極東人民共有国に変更を決定する同意書やった。

既に宇垣長官と利古里がサインさせられていた。

「……帝。これは却下ですね」

ビリビリと俺は紙を破いた。

「あーーーッ!!何をするんですか山口ッ!!」

「少し黙れや」

文句を言うクローン帝に俺は九ミリ拳銃を突きつけた。

「え?え?や、山口?」

「や、山口ッ!?何をしているんだッ!!」

「恐れ多くも帝に銃を突きつけるなんてッ!?」

「宇垣長官、利古里。落ち着け。この帝は偽者や」

「に、偽者?」

「そうや。ソ連がクローン技術で日本を内側から崩壊させようとしているんや」

その時、俺の目の前にナイフが突きつけられた。

「……スパイのゾルゲやな?」

「……」

「無言は肯定と判断するでッ！？」

ゾルゲが無言のまま俺を刺そうとするが、明石大佐が間に入った。

「つッ！！……助かったわ大佐」

「「……」」

大佐とゾルゲは武器を出して睨み合う。

勝負は一瞬やな。

「「ッ！？」」

ガキィンッ！！

二人が瞬間的に消えて、気づけばゾルゲは倒れていた。

「……これで終わったな……」

俺は溜め息を吐いた。

「山口、本物の帝は？」

「此処ですよ宇垣」

帝がハルさんや明石大佐に鍛えられた女官達に護衛されながら入ってきた。

「わぁ～。本当に私とそっくりですね」

「……驚いている場合とちゃうと思いますよ帝」

「……私をどうするつもりですか？」

クローン帝が言う。

「本来なら禁固刑だが……うむ……」

利古里が言葉を汚しながら言う。

「それは駄目ですよ山下長官」

帝がキッパリと言う。

「ではどうするんですか帝？まさか帝の姉妹にするとか……」

「ピンポーン♪」

「……マジすか？」

帝の神経は太いんやろか……。

「だって可哀相ですよ。それにリディアさんやリンファさんの例がありますから矯正したら普通に過ごせるはずです」

「……本気ですか？」

俺は帝に念を押す。

「エッヘンです」

「……それなら俺は何も言いません」

「山口ッ！？」

「宇垣長官、利古里。無駄ですよ。帝の目は本気や」

「むうぅ……」

利古里が唸るけど、やがて溜め息を吐いて承諾をした。

宇垣長官も折れた。（正確には帝に髭を剃るよと言われたら無条件で折れた）

「よかったですね。そういえば名前は何ですか？」

「……私の名前は帝としか言われてないよ」

「うぅ～ん。それなら私達が名前をつけちゃいましょう」

「それなら凛は？」

俺が提案をする。

「ぁ～、凛は私の名前ですから無理ですね」

帝の名前は凛やってんな。

「なら……時雨はどうですか？」

「いいですね。時雨はどうですか？」

帝がクローン帝に確認を取る。

「……私は貴女からくれるなら何でもいいわ」

「なら時雨ちゃんで決定～♪」

こうして、ソ連のスパイ活動は何とか阻止出来た。

TURN100（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN101（前書き）

何回やっても何回やってもトリエステのＨＣＧが取れない……。何でやろ。

TURN101

「左舷から対宙艦ミサイル八発接近ッ！！更に右舷から亜空間魚雷四発接近しますッ！！」

「左舷パルスレーザー砲はミサイルを迎撃やッ！！上昇角三十度やッ！！」

左舷のパルスレーザー砲が接近してくる対宙艦ミサイルを掃射しつつ、亜空間魚雷を避けるために長門が上昇する。

ズガァァァーーンッ！！

「亜空間魚雷一発が右舷中央部分に命中ッ！！さらに火災発生ッ！！」

「被弾付近の隔壁閉鎖やッ！！ダメコン隊、消火急げッ！！」

……流石に敵の最後の拠点星域は手強いな。

やぁ、山口三笠や。只今、ソ連軍の最後の拠点星域であるカテーリングラード星域を攻略中やけど、最後の拠点星域なのかソ連艦隊の抵抗が非常に激しいねんな……。

「ソ連艦隊には多数のミサイル艦が配備されているみたいですね」

戦況を見ている宇垣が言う。

「あぁ。奴ら、ミサイル巡洋艦はかなり温存してたみたいやな」

通りで占領星域からミサイル巡洋艦の接収が少ないはずやわ。

「宇垣。祀梨、ハンナ、コルダ、夏ちゃんの空母艦隊に連絡や。攻撃目標を重戦艦からミサイル巡洋艦に変更しろと伝えろ」

「了解です」

宇垣が直ぐに指示を出す。

「駆逐艦谷風沈没しましたッ！！」

対宙艦ミサイル七発を受けた駆逐艦谷風は爆沈した。

「全艦踏ん張れよッ！！此処がソ連軍の最後の抵抗星域なんやッ！！勝って笑顔で帰るでッ！！」

『オオォォォーーーッ！！！』

全員が雄叫びをあげて士気があがる。

その時、ソ連艦隊が爆発していく。

『航空隊がミサイル巡洋艦隊の攻撃を開始しましたよ』

祀梨がピースをしながら報告してくる。

「よくやったで航空隊ッ！！全艦、砲撃を展開しつつ突撃やッ！！特に田中とリディアはソ連艦隊の足並みを乱れさせるんやッ！！」

『了解ッ！！』

日本海軍の最強の水雷戦隊を率いる田中とリディアの艦隊が砲撃をしつつ、ソ連艦隊に突撃を開始した。

二艦隊の突撃にソ連艦隊は慌てだして、他艦に衝突をしてしまう艦が続出した。

「撃ェッ！！」

そこへ、俺達の艦隊が主砲を乱射しながら突撃をしてきたのに対してソ連艦隊は完全に戦意を喪失をしていた。

戦意喪失したソ連艦艇が次々と交戦を停止して降伏文を発信してきたんや。

「長官。どうしますか？」

「……そら受け入れるしかないやろな。徹底抗戦をするソ連艦艇には容赦するなよ。降伏艦の上に判別が出来るように航空機をつけろ」

「了解しました」

宇垣が俺に敬礼をする。

そしてカテーリングラード星域は日本軍の手に落ちる事になった。

「おっぱい神社？」

「は、はい」

宇垣が顔を赤くしながら言う。

「友人がその神社の巫女なんです」

「それがどないしたんや？」

「日本軍に協力したいといってその……おっぱい艦を提供してくれました……」

「おっぱい艦？」

「……これです」

宇垣が映像を見せる。

「……石像みたいな艦やな。搭載兵器は？」

「ミサイルだけです」

「ミサイル艦か。でもどっからや？」

「……い……」

「え？」

宇垣がボソボソと喋る。

「お、おっぱいからです。映像はこれです」

……。

「このミサイル艦の名前はアフロダイエースにしようか」

「何ですかそれは？」

アフロダイエースはおっぱいミサイルやからな。

アフロダイエースのおっぱいミサイルでマジンガーZが空を飛んだからな。

「それと長官。護送船団の駆逐艦松がソ連の秘密警察長官のミール・ゲーペを捕虜にしたと報告してきました」

「……普通は先にそれを言わんか？」

「おっぱいの方が長官にとって面白いと思ったので……」

……。

「……とりあえず会うか。今は何処におるんや？」

「医務室にいます」
「ほいほい」

「……長官。これを見て下さい」
医務室へ来ると、イネス少将が俺にゲーペの診察表を見せてきた。
「いきなり何やねん？」
「……黙って診察表を見て下さい」
イネス少将の顔があまりにも真剣やったので、仕方なく診察表に目を移した。

……え？

「……ゲーペ。これはどういう事や？」
「あの、何が？」
事情がよく飲み込めていないゲーペが首を傾げた。
「……お前は瑠璃の母親なんか？」
「……え？」

俺の言葉は医務室に低く響いた。

TURN101（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ１０２（前書き）

ナデシコ劇場版……。

ヤマトの第一期が復活。

ＰＶを見たけど沖田艦長は納谷の人がいいな……。

てかキャラは松本零治の銀河鉄道のキャラみたいやったけど、ユキはよかったと思う。

TURN102

「あの……瑠璃って誰でしょうか？」

「……瑠璃は俺の養女や。昔、とある反乱から保護して俺が育ててるんや」

俺はゲーペに診察表を渡した。

「イネス少将は日本軍一の医学者や。イネス少将には間違いはない。そうやろ？」

「えぇ。念のためにとＤＮＡ検査もしてみたのよ。そしたら貴女と瑠璃ちゃんのＤＮＡが一致したのよ」

「ッ！？そ、そんな馬鹿なッ！？」

ゲーペが驚く。

「た、確かに私は子どもは生んだ事はあります。ですが、子どもは男の子で今は何処にいるのかも分からないんですッ！！」

ゲーペが必死に訴えてくる。

「……ちょっと明石大佐を使って調べるけどええな？」

「は、はい。それは勿論です」

ゲーペが頷く。

俺は直ぐに長官室に戻って、法螺貝で明石大佐を呼んだ。

「……」

「明石大佐。急で済まないけど、ミール・ゲーペの過去を調べてくれ。プリンも出す」

「……了解……」

明石大佐は消えた。

「……長官……」

「……来たか……」

3時間後に明石大佐が来て、俺にゲーペの資料をくれてまた消えた。

「……」

俺は資料を読んでいくと、ふとあるページで目が止まった。

「……日本への短期留学？」

――――医務室――――

「日本への短期留学ですか？えぇ、確かに留学しました。といっても日本教師との交流会みたいなものですよ」

俺は医務室に向かってゲーペから事情を聞いていた。

「そうか……」

「長官。何かあるんですか？」

イネス少将が俺に聞いてくる。

「……その交流会に山崎がいたんや」

「ッ！？」

山崎の言葉にイネス少将が驚く。

「あの……山崎とは？」

「山崎は……平良の反乱の時に平良側についていた科学者で、瑠璃

を生まれさせた奴や」

「ッ！？」

……顔写真はあるけど、ぶっちゃけナデシコ劇場版のヤマサキ博士やねんな。

「コイツやけど、見た事あるか？」

ゲーペに山崎の顔写真を見せる。

「この人……いました。確かに交流会にいました。かなり陰気な人でしたから覚えています」

「……山崎に何かされなかったか？」

「さぁ……遺伝子研究をしているとか言っていました」

「……宴会とかあったか？」

「最後の日に宴会はありました。それで確か山崎さんに送ってもらった記憶があります」

「……多分それやな。その時に卵子でも採取したんやろな。山崎は気に入った女がいればレイプ紛いまでして卵子を採取して、そして自分の精子を人工受精をさせて人体実験をしていたからな」

山崎の研究室を家宅捜索をした時はビックリしたからな。

なんせ、子どもが入ったポットが十数個あったからな。

勿論、生き残っていた子達は孤児院に送られて幸せな日々を過ごしている。

「……て事は瑠璃は……」

「えぇ。ゲーペさんと山崎の子どもでしょうね」

「そんな……」

イネス少将の言葉にゲーペは絶句した。

「通りで瑠璃とゲーペの髪の色が似てるなと思ったわ……」

瑠璃の髪の色はゲーペと同じ紫色やったからな。

「……私はどうしたらいいんでしょうか？」

明らかに顔を青ざめたゲーペが俺に聞く。

「……とりあえず、今は休んどけ。瑠璃と話をするのはそれからや」

「はい……」

「ところで、カテーリンの居場所とか分かるか？」

「……多分、この星域だと思います」

ゲーペがカテーリンがいる星域のワープコードを紙に書いて俺に渡してくれた。

「ありがとな」

「……二人をお願いします……」

ゲーペが俺に頭を下げる。

「ん。任しとけや」

俺は笑って医務室を出た。

「……複雑なもんになってきたなぁ……」

この話をしたら、もしかしたら瑠璃はゲーペを恨むんやろか。

それとも一緒に住むんかなぁ……。

俺はそう思いながら海軍省の廊下を歩いていった。

TURN102（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN103（前書き）

最終星域攻略。

カテーリンお仕置きは次回です。多分12時頃に予約投稿します。

TURN103

「……我、参上……」

いつものように、海軍省の長官室でグレシア達と書類業務をしていると明石大佐が現れた。

「おぅ明石大佐。例のアレは分かったか？」

「……」

明石大佐は無言で俺に資料を渡した。

「分かった。報酬のプリンはいつものところに置いているからな」

「……了解……」

そして明石大佐が消えた。

「明石大佐を使って一体何をしているのよ？」

グレシアが聞いてくる。

「ん？まぁ最後の星域の攻略のために偵察に行ってもらってたんや」

「……成る程ね……」

グレシアが頷く。

「まぁ、ソ連の艦隊もそう多くは残ってないやろな」

俺はそう言って資料をパラパラとめくっていく。

「……マジか？」

「どうしたのよ？」

俺に不審を持ったらしいグレシアが聞いてくる。

「……見てみるか？」

俺はグレシアに資料を渡して、グレシアがパラパラとめくっていく。

「……ねぇ……これはマジ？」

グレシアが俺に聞いてくる。

「……マジみたいや……」

俺は深い溜め息を吐いた。

――会議室――

「え～、いよいよソ連の息の根を止めるためにエカテリンブルグ星域を攻略するんやけども……まぁ資料を見てみぃ」

皆に資料が配られた。

「……なぁ長官。これはジョークか？」

ドゥービルが聞いてくる。

「……ジョークとちゃうよ……」

「……これは凄いですね……」

ドゥービルの隣にいる朽木が呟く。

「私のクローンですか……」

セーラがそう漏らす。

「そうや。エカテリンブルグ星域を守る艦隊には俺、ドゥービル、セーラ、レーティアのクローンが司令官としている事が判明したんや」

いやぁこれにはビックリしたわマジで。

「何かの冗談……ではないよな？」

レーティアが念のためにと聞いてくる。

「あぁ。ちなみに偵察してきたの明石大佐や」

俺が明石大佐の単語を言うと、皆は納得した。

まぁ明石大佐はチートやからな。

「まぁ、これで最後や。皆、最後の瞬間まで気を抜くなよ?」

『了解ッ!!』

皆が俺に敬礼をした。

「山口長官。日本食はやっぱりいいですね」

作戦会議が終わって、昼メシを食べている時に朽木がやってきた。

「あぁ朽木か。今日は何を食べてるんや?」

「鮭定食ですッ!!」

「鮭は美味いからな」

「はいッ!!」

それから朽木と少し喋った。

――エカテリンブルグ星域――

「長官。ソ連艦隊が１０時、１２時、２時の三方向から接近してきます」

三日後に艦隊がエカテリンブルグ星域に到着すると、ソ連艦隊がいた。

「全艦砲雷撃戦用意やッ！！桜花、いずみ、レーティアは１０時へ。ドゥービル、朽木、ダグラス、キャロルは２時へ。１２時は俺、スカーレット、ラスシャラ、セーラが引き受けるッ！！」

『了解ッ！！』

艦隊が三方向に分かれた。

「ソ連艦隊との距離四万二千宇宙キロッ！！」

「全艦撃ちぃ方始めッ！！」

「撃ェッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

日ソ艦隊から一斉にビーム弾が発射されて、ビーム弾が宇宙空間を行き交う。

「初弾、敵重戦艦に命中ッ！！」

「これで最後なんやッ！！全艦思いっきり暴れろッ！！」

『オオォォォッ！！』

ソ連艦隊も頑張ってはいたけど、乗組員の錬度不足で射撃の命中はあまりなかった。

「敵ソ連艦隊から重戦艦四隻が突撃してきますッ！！」

「……恐らく、長官達のクローンが指揮をしている艦でしょう」

「……そうやな。全艦、照準を敵重戦艦に変えて撃てッ！！」

照準を変えた艦艇は次々と四隻にビーム弾を叩き込んでいく。

ズガァァァーーンッ！！

そして遂に四隻は爆沈した。

「……呆気なかったな……」

「まぁ錬度不足でしたから……」

「まぁええか。利古里に連絡させて突入させるか」

陸軍の上陸船団はエカテリンブルグ星域に来て、上陸作戦を開始を始めた。

TURN103（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ１０４（前書き）

というわけでカテーリンお仕置きです。

三笠「カテーリンのお仕置きは需要あるんか？」

ロリの人にはあると思うよ。

TURN104

――旗艦長門――

「……で、カテーリンは捕縛したんか？」

今、連合艦隊はエカテリンブルグ星に着陸をしていた。

「は。山下長官によれば、クレムリンの部屋に閉じこもっているみたいで……」

「閉じこもってる？普通に開けたらええやんか？」

「はい。どうやら当人達は武器を持ってはいないんですが、もしかしたら自爆するつもりかもしれないんで中々近づけないんですよ」

「ふむ……」

成る程なぁ。

「……とりあえず俺もクレムリンに行くわ」

「分かりました。準備をします」

サクサク。

「ぅ～寒いなぁ……」

「そ、そうですね……」

ジャンパーを着ているのに寒いし。

「なぁ宇垣」

「何ですか？」

「雪合戦したいな」

「……このまま裸にさせて外におらしましょか？」

「……すみません……」

ケチやなぁ。

――クレムリン――

「おぅ三笠。わざわざ済まないな」

クレムリンに入ると、利古里が出迎えてくれた。

「気にするな利古里。で、カテーリンはまだ出てこないんか？」

「あぁ。説得を続けているが一向に出てこない」

利古里が溜め息を吐いた。

「そうか。とりあえずその部屋まで案内してくれへんか？」

「あぁいいぞ」

利古里の案内の元、クレムリンの廊下を歩いて行った。

「此処だ」

利古里が案内してくれた部屋の周りには陸軍兵士が多数いた。

「どうするんだ？」

利古里が聞いてくる。

ふむ……。

「……直接説得するか……」

「は？」

俺は『カテーリン&ミーリャの部屋』と掛かれた部屋の扉にノックをした。

コンコンッ。

『……入っていいわよ』

中から応答があった。

「……」

俺は無言で宇垣と利古里にVサインをした。

二人は溜め息を吐いた。

「入るでぇ～」

ガチャッと扉が開き、三人で部屋に入った。

「……よく来たわね……」

机にチョコンとカテーリンが座っていた。

傍らには友達であるミーリャもいる。

「日本海軍長官の山口三笠や。カテーリン、素直に降伏してくれへんか？」

「……断るわ。私はソビエト連合人民共和国の書記長よ。山口三笠、私に降伏しなさい」

パアァッ！！

すると、カテーリンの右手が赤く輝き始めた。

「もう一度言うわ。私に降伏しなさいッ！！」

カテーリンの右手が赤く輝く。

「……阿呆か……」

「え……？」

「何で敵の親玉がいるのに降伏しなあかんねん」

「き、効いてないッ！？そ、そんな……」

カテーリンが何か驚いてるな。

「ならもう一度。私にひざまずきなさいッ！！」

「……お前は何を言うてんねん」

ドカッ！！

「～～～～ッ！！！」

俺はカテーリンの頭を思いっきり叩いた。

「な、何すんのよッ！！」

「ん？お仕置きをしてんのやろが。それともお尻ペンペンでもしたろか？」

多分、読者の何人かは喜ぶやろな。

「黙りなさいッ！！私にひざまずきなさいッ！！」

……。

「宇垣、利古里。少し後ろを向いててくれ」

俺は両腕の服をめくる。

二人はやれやれと後ろを振り向く。

「な、何すんのよ……」

何かに気づいたカテーリンが戦略的後退をしようとするが、生憎後ろは机や。

「フッフッフ……こうするんやッ！！」

「きゃあァァァッ！！」

俺はカテーリンを引き寄せてタイツとパンツをずらす。

「昔から悪い子はお尻ペンペンが常識やねんッ！！」

パシイィィンッ！！

「きゃぅんッ！！」

「悪い事をしたらごめんなさいやろ」

「だ、誰が言うもんですかッ！？」

パシイィィンッ！！

「はぅッ！！」

「ごめんなさいは？」

「フ、フンッ！！」

パシイィィンッ！！

「きゃぅんッ！！」

「……山口長官って案外鬼畜ですね……」

いつの間にかいた朽木が顔を赤くしながら言う。

「ぁ～、鬼畜て言うより俺はロリに興味は無いから（キリ」

「あああああッ！！カテーリンちゃんが悶えているのは萌えるッ！！」

何かわけ分からんオッサンが悶えている。

「カテーリンちゃんをイジメないでッ！！」

女の子が俺にポカポカ叩いてくる。

「君はミーリャちゃんかな？」

「……うん……」

「ミーリャちゃん、これはイジメてはいないねん。これは躾や。子どもが悪い事をしたら親や先生が怒るのは当たり前や」

パシィィィンッ！！

「はぅッ！！」

すると、カテーリンの右手から赤い宝石みたいのが落ちた。

「……ぁ……」

そしてカテーリンは気絶をした。

「……オッサン。これは何や？」

「それはカテーリンちゃんがソビエトを操る事が出来た物だ」

「……成る程な……」

俺は赤い宝石を見つめた。

TURN104（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN105（前書き）

カテーリンの処置と瑠璃とミールの対面です。

TURN105

――旗艦長門――

「……つまり、その赤い宝石の赤い光りを浴びたら何故か赤い宝石を持つ人間の言うことを聞くと言うわけか……」

「そういう事」

あれから俺達は長門に戻って赤い宝石の事をロリコフ・バンラーから聞いていた。

「……けどさ、その宝石は一体何なんのさ？」

桜花がバンラーに聞く。

「私も色々と実験をしたがあまり成果は出なかったが、言える事はただ一つ。この赤い宝石を持てば権力者に成れる事は間違いない」

「……」

バンラーの言葉に桜花は黙るが、柴神様の表情は青ざめていた。

「柴神様？」

「……山口。これは私が秘密裏に重要保管しよう。これは人間が触れてはいい物ではない」

「……でしょうなぁ。柴神様、申し訳ありませんがお願いします」

「うむ……」

柴神様は赤い宝石を大事そうにポケットに入れた。

「それで閣下。カテーリンとミーリャの処罰はどうするんですか？」

いずみが聞いてくる。

「「「……」」」

カテーリン、ミーリャ、ゲーペは黙っている。

「……」

俺は無言でカテーリンとミーリャに近づいて九ミリ拳銃を出した。

『ッ！？』

皆が驚く中、九ミリ拳銃のトリガーを引いた。

ダァンッ！！ダァンッ！！

長門の艦橋に二発の銃声が鳴り響いた。

「……これでええやろ……」

「え……？」

弾はカテーリンとミーリャには貫通していなかった。

「ただの空砲や。ソビエト連合人民共和国の書記長であるカテーリンと友達のミーリャは日本軍の流れ弾で死んだ。これでええな？」

俺は皆に問う。

皆は嬉しそうに頷いた。

「……いいの？私が何か生きて……」

カテーリンがそう聞いてきた。

「お前はこれから死んでいった者のためにも生きなあかんよ。これからはカテーリン・ゲーペ、ミーリャ・ゲーペとしてな」

「「え？」」

二人が驚く。

「ゲーペが二人を引き取ると言うとるからな」

「……先生、いいの？」

「……えぇ。今度こそ貴女達を間違った方向に進ませないためにね」

「「……先生ェッ！！」」

カテーリンとミーリャは泣きながらゲーペに抱き着いた。

「……めでたしめでたしってことかね？」

桜花が聞いてくる。

「……まだやと思うけどな……」

「え？」

その時、瑠璃が艦橋へ来た。

「来たよ三笠」

「ん。ゲーペ、瑠璃。ちょっと長官室に来い」

「……はい……」

「？？」

ゲーペが真剣な表情で頷き、瑠璃はよく分からなそうな顔をしていた。

――――長官室――――

「瑠璃。驚くなよ」

「何が？」

「……お前の母親が見つかった」

「ッ！？」

瑠璃が驚く。

「ほ、本当にッ！？」

「だから落ち着けや」

「あ……ごめんなさい……」

「いや、分かればええねん。んで、母親やねんけどな、母親自身は瑠璃の事を知らんねん。無理矢理母親の卵子を使われてんや」

「……どういう事？」

「……実はな……」

俺は瑠璃に説明した。

「……という事は私の母親はその事実は最近まで知らなかったの

？」

「……そうや」

俺は頷く。

「……それなら仕方ないと思うよ。自分が知らないところで自分の子どもが生まれて、いきなり「私は貴女の子どもです」て言われたら困惑すると思うよ」

「……母親を恨んだりとかは？」

「……それはない。今の私は幸せだから……」

「……ええ子やな瑠璃は。そう思うやろゲーペ？」

「……えぇ……」

ゲーペが頷く。

「……瑠璃ちゃん。私がその……母親なの……」

「……」

「……私も本当に最近まで知らなかったわ。それに気づかずに夫と貴女の弟を生んで、二人とも死なせてしまったわ」

明石大佐にゲーペの夫と子どもを調べてもらったけど、いずれもラーゲリ星域の強制収容所で死亡してたのをゲーペに確認してもらった。

「だから……だから……ごめんなさい……」

ゲーペは泣きながら瑠璃に謝った。

「……頭を上げて下さい……」

不意に瑠璃が言う。

「……いきなり貴女が私の母親と言われても困ります」

「……そう……よね……」

「ですが……貴女の家に遊びに行ってもいいですか？私の妹達と遊びたいですから……お母さん……」

「……うん……」

瑠璃の言葉にゲーペは泣いた。

……俺も泣けてきたな。

「……じゃあ三笠はこれからお父さんかな？」

「「え？」」

瑠璃の言葉に俺達は驚いた。

「馬鹿ばっか♪」

瑠璃はそう言ってクスッと笑った。

翌日、ソ連全星域にカテーリンの死亡が伝えられ、国民は歓喜をあげた。

TURN105（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN106（前書き）

二話程温泉イベントです。

朽木の温泉イベント書いてたらいつの間にか増えた……。

キャラ崩壊中。

TURN106

「温泉やて？」

日本皇国による全星域の攻略は終了して、俺達は日本星域に戻っていた。

「はい。今回は私からのプレゼントです」

帝がエッヘンと無い胸……胸を張る。

「……山口。給料下げますよ？」

「すみませんでしたーーーッ！！！」

帝の言葉に土下座をした。

「まぁ、代理は大原達に任すか」

哀れ凡用キャラ（笑）

「で、帝。いつ温泉に行くんですか？」

「明後日はどうですか？三笠の書類の手続きとかありますし」

まぁ相変わらず多いのよね俺の書類は……。

「じゃあ、主だったメンバーは集めときますので」

「分かりました」

そして二日後。

「てなわけで温泉やッ！！」

「オォ～ッ！！」

俺の言葉に真希ちゃんが声をあげる。

「旅館は少し山に入ったところらしい」

というわけで貸し切りのバスで旅館まで移動をした。

――――旅館――――

「おやおや柴神様。今年もようこそいらっしゃいました」

「うむ。今年もまた世話になる女将」

年老いた女将と柴神様が挨拶をする。

「柴神様はよく利用されるのですか？」

「うむ。ここの温泉は私のお気に入りの温泉だ。それに女将は元帝だ」

『えッ！？』

「まぁ四代前のですけどね」

そういや帝は老化がしないねんな。

「先に温泉に入りますか？」

「うむ。入らせてもらおう」

「では先にお部屋に案内させてもらいます」

俺達は女将の案内の元、部屋に向かった。

「男性はこちらの部屋で。女性はあちらの部屋です」

女将が場所を教える。

「それではお食事の用意が出来ましたらお呼びしますので」

「かたじけない」

「いえいえ」

女将は頭を下げて部屋を出た。

「早速温泉に浸かるか」

「賛成♪」

「ねぇ、先生。温泉てどんなのかな？」

「それは見てのお楽しみね」

女性陣もウキウキしていた。

「柴神様……それは？」

「ん？私専用の温泉だ」

柴神様は用意されたドラム缶の中に入っていた。

「私も入りたいのだが、毛がな……」

「……成る程……」

柴神様の一言に何故か納得してしまった。

「いい湯じゃわい」

宇垣長官が酒を持って入っていた。

「宇垣長官。自分も貰います」

「おぅ山口長官。やはり温泉には酒が一番じゃ」

うん、美味いな……ん?

「イーグルと田中は何をしてんねん?」

イーグルと田中はオケを並べて、壁向こうにある女湯を覗こうと必死になっていた。

「馬鹿野郎。温泉に浸かるキャロルだぞ。これは見なきゃ損するぞ」

「いや知らんがな……」

イーグルはこんなキャラやったやろか……。

「長官は見ないのか?」

「……見るに決まってるやろ（キリ（、・ω・、））」

今見なきゃいつ見るねんッ！！

「もっと足場を作れ」

「分かってるよ」

「しッ。女が入ってきたで」

俺達は耳を澄ませる。

「オォーーーッ！！日本の温泉は凄いですッ！！」

一番手は朽木か。

「アタイが一番に入るぜッ！！」

ザパァァンッ！！

「おい、キャシー止めろッ！！お湯がもったいないだろッ！！」

二番手はキャシーにラスシャラか。

「早速、はしゃいでるねぇ」

「あらあら」

「ボクも入ろ～」

「マリー。はしたないのは止めなさい」

「コロネア、入りましょうか」

「はいお嬢様」

「いい湯ですねぇ」

「そうですねぇ」

「フフフ、レーティアの裸……」

「そ、総統……」

「そ、そんなに見るなゲッベルス」

「ぅ～ん、気持ちいい～」

上から桜花、エリザ、マリー、セーラ、スカーレット、コロネア、いずみ、宇垣、グレシア、エルミー、レーティア、クリオネの順な。

「いい湯だわぁ～」

「……やはり貧乳はここでもきついのか……」

「……アタシも……」

ムッチリーニ、ユーリ、キャロルか。

「先生、早く～」

「カテーリンちゃん待ってよぉ～」

「瑠璃お姉ちゃん入ろ」

「カテーリン。走ったら駄目よ」

「そうだよ真希」

カテーリン、ミーリャ、ゲーペ、真希、瑠璃か。

「景色がいいわね……」

「もうすぐ雪が降りますからね」

最後はコルダと古賀ちゃんか。

「……やべぇよ長官。何だよこのラインナップは？」

「落ち着けブラザー。鼻血を出すのは見てからだぜ」

……お前ら……。

ちなみに、クーとロックは少し散策するとの事。

……多分、クーは食べられるやろな。

まぁそれより……。

「ええか？ばれずにこっそりと見るんやで？」

「分かってるさ長官」

「此処で死にたくないからな」

「「「一斉のぅで……」」」

俺達はゆっくりと女湯を見た。

……そこは桃源郷と言える場所やった。

「グレイトッ！！」

「マジやべぇッ！！」

「ば、馬鹿叫ぶなッ！！見つかるやろッ！！」

『……』

「「「……」」」

……イーグルと田中の叫び声で見つかってしまった……。

バキバキバキッ！！

『ッ！？』

その時、木の板の壁が女湯側に倒れた。

「あたたた……」

「長官？」

俺が見上げると、真っ裸の古賀ちゃん（裏）がいた。

「い、いやぁ……こ、これはそのぉ……」

「……覗きですか？」

近くにいた朽木が近寄る。

「……仮にも親が覗きとは……」

ゲーペも同じく近寄る。

「……覚悟は出来てるわね？」

コルダが笑っていたが目はマジで笑っていない……否。

子どもを除く全員の目が笑っていない……。

「……とりあえず、責任取れや二人ッ！！」

俺はイーグルと田中を女性陣達に蹴飛ばした。

「「ウオォッ！！」」

俺はその間に逃げる。

てか死にたくねぇッ！！！

「イーグルぅ～？何を覗いてたのぅ？」

「あ、いやこれはだな……」

「雷ちゃぁん？」

「田中……」

「……あんたは……」

「あ、あのこれは……」

イーグルはキャロル。

田中はムッチリーニ、ユーリ、アナスタシアに囲まれた。

「「アーーーーーッ！！！」」

旅館内に二人の悲鳴が響いた。

そして俺は今……。

「まぁちなさい長官ッ！！」

「日系軍人精神を叩き込んであげますッ！！」

「何をしているんですか貴方はッ！！」

……皆に追い掛けられていた。

「ホッホッホ。賑やかですねぇ」

女将は楽しそうに微笑んだ。

TURN106（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＴＵＲＮ１０７（前書き）

キャラ崩壊と言うより強引かも……。

法学検定頑張ろ……自信ないけど。

TURN107

「何処だ三笠ァッ！！」

「八つ裂きにしてやるッ！！」

「ついでに食べようッ！！」

上からキャシー、ラスシャラ、ララーの三人が銃を持ちながら廊下を歩いている。

またあるところでは……。

「お嬢様、暗殺の許可を」

「それは駄目よコロネア」

「……長官。酷いです……」

コロネア、スカーレット、リンファが歩いている。

「三笠長官～、素直に出てきて下さい～」

「今ならダグラスや田中みたいに磔にはしませんから」

「そうだよ～」

「正座三時間くらいなら……」

リディア、宇垣、マリー、セーラが歩いている。

「……マジやべぇ……」

糞、これもあの二人のせいや。

『いや、覗き事態があかんと思うねんけど……by作者』

「……とりあえず、押し入れに隠れて見つからんようにするか……」

俺は近くにあった押し入れに隠れた。

「……」

「「「「……」」」」

……押し入れに何故か古賀ちゃん（裏）、朽木、ゲーペ、コルダがいた。

とりあえず、逃げろッ！！

「おっと」

「ぐぇッ！！」

古賀ちゃん（裏）が俺の首を絞める。

「逃げられると思ってるのか？」

「……しぃません……」

……俺、今日死ぬわ……。

「……長官」

「は、はい……」

「何で私を襲わない？」

「「「「……は？」」」」

古賀ちゃん（裏）の言葉に俺達は唖然とした。

「長官のハーレムは巨乳が多い……なら私も襲うはずだ。だが何故来ない？」

「……いや別にハーレムを目指してるわけじゃ……」

「ごちゃごちゃ言わないッ！！」

……よく見たら古賀ちゃん（裏）は酔っていた。

「……古賀ちゃん（裏）は酔ってるやろ？」

「温泉で飲んでたからね」

俺の言葉にコルダが頷く。

「ほら長官脱ぐ。それにコルダ達もだ」

「「「え？」」」

今度は朽木達が驚いた。

「あんた達も長官の事好きなんだろ？分かっているんだよ」

「それは……まぁ……」

「でも……」

「私には……カテーリン達がいますし……」

三人とも顔を真っ赤にしている。（ま、俺もやけども……）

「ごちゃごちゃ五月蝿いッ！！サッサとやるよッ！！」

「ちょッ！！アーーーッ！！！」

……なぁ作者。強引じゃね？

『温泉イベントやから許せｂｙ作者』

「……すみません長官。裏が……」

「いや、もう済んでもうたしな……」

押し入れの中から出た俺は古賀ちゃんに謝られていた。

ちなみにコルダ、朽木、ゲーペは完全にダウンをしていた。

いや……まぁ……美味しく頂いたというか……。

「……とりあえず、もう一度温泉に入るか……」

「入る前にアタイ達の説教を受けてもらおうか」

出ようとしたらキャシーに肩を掴まれた。

「覚悟は出来ているな？」

ラスシャラが銃を構える。

「……さーせん……」

「あの……長官。大丈夫ですか？」

「あ、あぁ大丈夫や」

ボコボコになった俺をゲーペと朽木、コルダが介護している。

「まぁ自業自得よね」

「コルダさん。それは言わない約束ですよ」

コルダと朽木が言う。

「それに……私も長官の事は……」

「……あんた大丈夫？」

「そういうコルダさんだって気持ち良かったでしょ？」

「う……。そりゃあまぁ……」

何かコルダと朽木が話しているが、ゲーペの膝枕は気持ちいいなぁ。

『ぶっ飛ばすでｂｙ作者』

「ゴメンなゲーペ。あんな感じになってしまって……」

「……いいですよ。私も温泉は楽しかったですし」

ゲーペが苦笑する。

「でも……今度はカテーリン達や私と家族水入らずで温泉に来ましょうね」

……ん？

「ゲーペ。それはどういう……」

「……ミールでいいですよ」

ゲーペ……ミールは俺の言葉に答えずにそう言った。

「それでは世話になった女将」

「いえいえ。またいつでも来て下さい柴神様」

一泊二日の温泉なので、翌日には荷物を纏めていた。

ぁ～、頭痛い……。昨日の宴会は酔っ払ったわ。

そして俺達は旅館を後にしたのであった。

TURN107（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿＿）m

TURN108（前書き）

さて、そろそろ最終回です。

それなのに何故か新規でアルティメットルート＋連合艦隊の小説を考えている俺は……。

TURN108

温泉から帰ってきた数日後、いつものように皇居で御前会議が開かれた。

「じゃっじゃじゃーん♪御前会議がはっじまっるよ～♪」

帝が嬉しそうに言う。

まぁ昨日、俺とデートっぽいのしてたからな。

あぁ言うけど、まだ帝とは一線を越えてないからな。

越えてしまったら帝ファンの読者に殺されてしまうわ（汗）

「どうかしましたか山口？」

「あ、いえいえ。何でもありませんよ帝」

「そうですか？ならいいけど。では山下長官。何か報告はありますか？」

「は。相変わらず、日本化に反対するエイリス元貴族がいますが、海軍と合同で鎮圧しています。それと先日、とある星域で鎮圧をした時に反乱兵士が何やら奇妙な写真を持っていました」

「奇妙な写真ですか？」

帝が首を傾げる。

「はぁ、その私も気持ち悪かったんですが……これがその写真です」

利古里が映像に出す。

「……うわぁ……」

「これは……気持ち悪いな……」

映像はモスラ？っぽい芋虫がいた。

帝や宇垣長官は顔を嫌な顔をしている。

「これはワシも気持ち悪いな……」

「二回も言わなくていいよ宇垣。それで山下長官。何かこの芋虫についての手がかりとかは？」

「今のところはまだ入ってません」

「分かりました。何かあれば言って下さいね」

それで御前会議は終わった。

一週間後、再び御前会議があった。

「それで山下長官。何か情報はありましたか？」

「はい。あれから山口長官と調べましたらドーラ教会が関与しているものと思います」

「ドーラ教会だってッ！？」

御前会議に参加しているレーティアが驚いた。

「知ってるんかレーティア？」

「あ、あぁ。ドーラ教会はドクツのカルト宗教なんだよ。私が総統の時は危ない思想だったから弾圧をしていたんだ」

……成る程な。

「……」

「どうしたんですか柴神様？」

芋虫の写真を見て顔を青ざめている柴神様に帝が気遣う。

「……大丈夫だ、心配ないよ。なら、この芋虫はドクツ星域にいるのかな？」

柴神様は利古里に聞く。

「はい。まだドーラ教会の中にあると思います」

……そういやこの芋虫、どっかで見たうよな……あ。

「……あの時の芋虫か……」

「山口。あの時の芋虫とは？」

「以前、マウマウの聖地に見に行った時にこの芋虫と似たような虫を見たはずですよ」

「……言われてみればそうですね。気持ち悪いですけど」

「……山口。即刻、この虫は処分しようと思う」

ズイッと柴神様が言う。

「……それが日本の神の判断ですね？」

「……うむ……」

柴神様は頷いた。

「帝。自分は早急にベルリン星域に急行してみようと思います」

「分かりました。頼みますね」

御前会議はそこで終了して、俺達はベルリン星域に向かった。

――――ベルリン星域――――

「報告によれば、この山の中やな……」

俺達はベルリン星域に着陸をして、そのドーラ教会に向かっていた。

「……それにしても険しい山道だねぇ……」

「……太ったか桜花？」

バキィッ！！

「……シバくよ三笠？」

「……もうシバいてるやん……」

桜花に殴られた……。

「お、見えたぜ」

先行していた田中がドーラ教会を見つけた。

「……陰気臭い教会やな……」

「そうだねぇ～」

俺の言葉に桜花が言う。

「ま、中に入ろうや」

俺達は教会の中に入った。

「……何か奉られてるみたいやな……」

「詳しく調べてみたいな……」

「触手で襲われそうなシチュになりそうやな」

「配役はレーティアか、マリーね」

「「何で私が（ボクが）ッ！？」」

まぁマリーでの触手は美味しそうやな。

「長官。涎が垂れてますよ」

「おっと、サンキュ祀梨」

祀梨に指摘される。

「あ……ぁ……ああ……」

柴神様が芋虫に驚いてる。

「柴神様？」

「や、山口。日本の神として言う。今すぐあの芋虫を殺すんだッ！！」

柴神様が震えている。

「……分かりました。田中」

「おぉ。せぇ―のッ！！」

『☆★⊥“‥∞ッ！！』

田中が殺そうとした時、頭の中に妙な声が響いた。

「な……何やこれは……」

「あ…頭が……」

「うぅ……柴神……ノーブドック…殺す……」

「田中？」

田中が虚ろな目をして柴神様に近寄る。

「チィ、田中ァッ！！！」

ドカァッ！！

俺は田中を蹴った。

「柴神様ッ！！今すぐにコイツを殺しますよッ！！」

「うむッ！！私もやるッ！！」

俺と柴神様は九ミリ拳銃を取り出して、芋虫に狙いを定めてトリガーを引いた。

ダンダンダンダンッ！！

『☆⊥★‥∞ッ！！』

「黙れッ！！」

ダンダンダンダンッ！！

カチッカチッカチッ！！

弾切れになって弾倉を入れ替えて撃つ。

「……死んだな……」

妙な思念みたいなのも途絶えたしな。

「柴神様……これは……」

「焼却しよう。二度と目を覚まさぬようにな」

「……分かりました」

「……その前に細胞の採取を……」

「レーティア……」

「う。つい悪い癖が出た。今のは無しにしてくれ」

そして、芋虫は焼却処分された。

しかし、宇宙に謎の思念波が飛び交った。

『ボボ　ゲガギス　リンバ　ボギ……』

『ゲガギス　ボギ……』

TURN108（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿＿）m

TURN109（前書き）

ラムダスの説明で一万文字行くとは思わなかった（汗）

TURN109

それから数日が経った。

――海軍省長官室――

「長官。チェリノブ星域に怪獣の集団が現れました」

「……珍しいな極寒の星域に出るなんて。まぁ撃破しぃや」

「それが……破れました」

「……何？」

宇垣の言葉に俺は驚いた。

「宇宙怪獣の中に司令塔らしき役割をする宇宙怪獣がいました」

「おい……まさかそれは……」

「……はい、あの芋虫です。只今宇宙イモムシというコードネームが付けられています」

「……それでチェリノブ星域の防衛艦隊は？」

「……防衛艦隊は交戦途中で戦闘を放棄して宇宙イモムシのいる宇宙怪獣に自ら飲み込まれに行ったそうです。まるで何かに操られたかのように……」

「……あの時と一緒か……」

「はい……」

「……宇垣。直ちに提督を集めるんや」

「分かりました」

宇垣が俺に敬礼をする。

「三笠」

宇垣と入れ代わりにレーティアが入ってきた。

「どうしたんやレーティア？」

「あの宇宙イモムシとやらの思念波の解読器が出来たんだ」

「……チートやな……」

「褒め言葉として受け取るよ。解読は簡単だった。ドクツ軍が使用していたエニグマの暗号に比べたら簡単だよ。解読した文がこれだ」

レーティアから紙を渡された。

『ギンデンヂ　ザザベン。ガバボゴボ　ギンデンヂ。ゲガ　ゲガ　ダググボゲガ　ザンボグ。ゲガ　ゲガ　ゲガ　ゲガ。ババラ　ロロド　ゴブセ　ボボ　ゲガ　ルググ＝新天地発見。穴の底、新天地。餌、餌、多数の餌反応。餌、餌、餌、餌。仲間、もっと送れ。ここ餌、無数』

「……奴らが言う餌は人間やろか？」

「だろうな。奴らは人類を捕食する生命体。人類の天敵と言っていいだろうな。それと、奴らの思念波を遮断するのに耳栓がいいみたいだ。実験をしたらそれが一番だ」

「分かった。レーティア、会議室に集まってくれ。もうすぐしたら皆も集まるわ」

「分かった」

レーティアが出るのを確認すると、俺は都奈海に電話をした。

『私だ』

「……俺や都奈海」

『どうした山口君？』

「……『例』の艦艇の建造を始めてくれ」

『ッ！？まさか……』

「あぁ……。大戦争が始まるわ」

俺は都奈海にそう言った。

――――会議室――――

「柴神様。話していただけますか？」

「……長きに我が苦悩……そなた達、人間と共に背負う日が来たようだな」

柴神様の表情は決断しているようやった。

「力を貸して貰うぞ。我が愛しき子達よ」

柴神様はスクリーンを用意した。

「では話すとしよう、宇宙の真実を……」

「ぱちぱち～」

「わ～い、ぱちぱち～」

帝と真希ちゃんが拍手する。

「何故真希ちゃんが此処に？」

「人類の未来を担う子どもの代表ですよ」

「……成る程。確かにそれは必要であるな。それでは『良い子の宇宙の秘密講座』の始まり始まり～であるぞ」

「わ～い」

「ワクワクするわ」

「おいおい、子ども番組かよ……」

「ま、分かりやすくていい」

上から真希ちゃん、カテーリン、イーグル、レーティアが言う。

「この宇宙は広い。途方もなく広い。果てが何処にあるのか今だに不明だ。その広大な宇宙で人類が住む星域のエリアは四一星域ある。この星域間の移動にはワープゲートの存在が必要不可欠なのだ」

「宇宙ってほんと、広いんだね」

「うむ。途方もなくな。これを見てくれ」

「わぁ、怪獣さんの絵だぁ、可愛い」

「ふ、であろう。私も会心の出来だと思っている」

柴神様が（キリ（、・ω・、）をしている。

いや……よく分からん絵やねんけど……。

「なぁ……帰っていいか？」

「おっとすまぬ。本題に戻ろう」

「これは……怪獣の世界ですね」

セーラが呟いた。

「そうだセーラ殿。そなたは過去に一度、山口と一緒にこの場所に行った事があるはずだ」

「はい。では、怪獣の住む星域もこの宇宙の何処かにあるということですか？」

「いや……怪獣の住む世界は我々の住む世界とは根本的に異なる場所にあるのだ。そう……別宇宙に」

「つまり……我々の住む宇宙では全く異なる宇宙がもう一つ存在すると？」

「その通りだ」

セーラの言葉に柴神様は頷く。

「現在、我々の宇宙で五体の大怪獣が確認されているが、それらは元々、別の宇宙に存在する生き物なのだ」

空気が無い宇宙空間で住めるのもどうかと思うな……。

「だが、真に恐るべきは大怪獣ではない。それを使役し、操る存在だ」

「例の宇宙イモムシ……ですね」

「うむ。別の宇宙であれはラムダスと呼ばれていた」

「ラムダス……」

「モスラの幼虫は駄目なんやろか？」

「それは違わねーか？」

……イーグルに否定された。

「オホン。私も別の宇宙ではノーブドックと呼ばれていた」

「では……柴神様も？」

「そうだ。ラムダスと同じ別の宇宙からやってきた」

モニターが切り替わる。

「ラムダスはラムダスクイーンが頂点に君臨する女王制の種族だ。分かりやすく言うと蟻の生態系に似ている」

「女王蟻と働き蟻の関係？確か社会性昆虫……」

カテーリンが呟く。

「よく知っているな。偉いぞ」

「……うん。本、いっぱい読んだから……」

「よしよし」

柴神様はカテーリンの頭を優しく撫でた。

「うにゅー……」

多分、ロリコフ辺りは喜ぶやろな……。

「さて、ラムダスだが……彼らは餌に最も適した人間を食用として飼い、それ以外の知的生命体を怪獣達で駆逐してきた。しかし、その中で我々ノーブドックという種族だけが、ラムダスと戦い続けてきたのだ。勇敢な種族であるのも理由の一つだが、何よりノーブドックはラムダスの思念波に対して強い抵抗力を持っていたからだ。……しかし、怪獣を支配下に置くラムダスの力は圧倒的だ。我々ノーブドックはラムダスに対してゲリラ的な抵抗をするだけで精一杯だった。だがそれも遥か昔の話の事。あの宇宙で今もノーブドックが全滅せずに生き残っているかは不明だ……」

「柴神様……」

「いや……感傷に浸っている場合ではないな。この宇宙に、危機が迫っている今は……」

モニターがまた切り替わる。

「この宇宙とラムダスの宇宙は繋がっていなければ何も問題はないのだが、残念ながら繋がっている」

「我々がラムダスの宇宙から帰還した時に利用したブラックホール……重力の穴が入口として機能しているようですね」

「そしてチェリノブのホワイトホールが出口……」

「うむ。たまにホワイトホールから変わった物が出てくるのはラムダスの宇宙の物がブラックホールに落ちたからだ。殆どの物はブラックホールの高重力に押し潰され、原型を留める事すら出来ないのだが……」

「あの時、我々が無事に帰還出来たのは真希ちゃんのバリア能力のおかげです。あの高重力に耐えられたのは奇跡に近いでしょうね」

「そうだな……まさに奇跡であるな」

柴神様が頷く。

「……数千年前の話だ。ノーブドックの兵士として私は仲間達と共にラムダスと戦っていた。ある日、我々はラムダスの食料運搬怪獣に侵入し、内部にあたラムダスを倒す事に成功した。だが、怪獣のコントロールに失敗して暴走。怪獣は我々を乗せたままブラックホールに落ちてしまった。これは山口と同じルートだ。流石にその時は私も死を覚悟した。だが食料運搬船だった怪獣はブラックホールの高重力に何とか耐えきった。そして我々はこの宇宙の存在を初めて知ったのだ。ラムダスのいない世界、新天地を。食料運搬船だった怪獣も死に、もはや元の宇宙に戻る手段はなかった。そのため、

我々はこの宇宙で生きる事を決意した。ノーブドック十七名とラムダスの食料として運搬されていた人間三千名とでな……。その時の人間達がそなた達、人類の先祖だ」

「……では我々人類もまたラムダスの宇宙の……」

「そうだ」

セーラの言葉に柴神様は頷いた。

「嘘だろおい……」

「いや、ラムダスの宇宙に人間が餌として存在している事実からある程度は推測出来たはずだ」

イーグルの呟きにレーティアが答える。

「だが、これは事実だ……」

柴神様は言う。

「そして何百年の時が過ぎてノーブドックの仲間達は次々と死に、私が生き残った。逆に人間達はこの宇宙で爆発的に数を増やした。そう……たった数千年の間に人間は独自の文化を創り成長し、素晴らしい生き物となったのだ」

「でも……人類はまだ……」

「いや…互いに戦争をして殺し合うがそれは些細な問題だ」

まぁ柴神様やから言える事やからな。

「だが一つ懸念がある。ラムダスがこの宇宙に現れる事だ。そのために私はこの世界を繋ぐ道を全て消去したかったのだ。道とはすなわち宇宙の穴だ。ラムダスの宇宙にブラックホールがあるようにこの宇宙にもブラックホールが存在する。これはこちらの宇宙からラムダスの宇宙に繋がる唯一の入口なのだ。本来ならブラックホールを消したかったがこちらの宇宙に来てしまった以上それは不可能だ。そこでせめてこちらから向こうへ行けぬよう私は入口を消去する事に決めた。偶然にこちらの文明の物が落ちると、ラムダス達にこちらの存在を気づかれてしまうからな」

「だがブラックホールを消す事は可能なのか？」

都奈海が柴神様に聞く。

「無論無理だ。しかし、私は一時的に別の場所へ保管し、あたかも存在しないようにする方法を見つけだした。それは特殊な能力を持つ人間の体内に保管する事。そう帝の体内へだ」

「えぇと、今も入ってるそうです。実感はないですけど」

帝が笑う。

「済まぬ。そなたには大変な重責を押し付けている……」

「いえ、神風の儀式とかやってると、あ、何か凄いの入ってるなーって分かりますし。気にしないで下さい」

「そ、そうか……」

帝の言葉に柴神様は唖然とする。

「前向きですね」

「はい。物事は前向きに考えるのが一番です」

「全く頼もしい子達よな……」

柴神様は苦笑する。

「それ以来、私は帝の能力を持つ人間にブラックホールを封じ、その者の安全を守る為に行動する事にした。日本皇国を建国したのもその為だ。そして帝の力が弱まると、次の帝候補を探し、体内にあるブラックホールを代々移動させてきた。そして長い間、この宇宙のブラックホールは何処にあるか分からぬまま封印されてきたのだ。しかし、奴らはこちらの存在に気づいてしまった」

「チェリノブに現れたラムダスの言葉を解析した結果、彼らはこの宇宙を明らかに餌場として認識しているようです」

宇垣が報告する。

「……奴らには餌となる人間を探索し、仲間と連絡を取り合う習性があるのだ。今思えば、ドーラ教会での行動は迂闊であった……」

「ではあの時のラムダスが他の仲間に連絡を？」

「そうだ。それ故、ブラックホールの高重力に耐えられる怪獣を選び出してまでこの宇宙にやってきたのだ。まだこちらの宇宙に来れ

る数は少ないが……当面はホワイトホールから出てくる奴らを待ち構えて各個撃破すれば対応は可能だ。ラムダスと怪獣はそこからしか来る事が出来ぬからな」

「しかし、いずれは支えきれなくなるでしょう。確実に」

「うむ。奴らは常に進化している。いずれ大怪獣クラスを大量に送り込んでくるに違いない。そうなればこちらに勝機はない……く、私の失敗だ。こちらの人間達だけはラムダスから守りたかったのに……済まぬ……」

「……ならやるべき事は一つですよ柴神様」

「何？」

「こちらから向こうの宇宙に出向いて、ラムダスクイーンとやらを倒せばいいだけです」

「なんとッ！？」

柴神様は驚いてる。

「あれが蟻と同じ生態系なら、女王が種族全体の意識を管理している。違いますか？」

「確かにその通りだ。ラムダスはラムダスクイーンの意思により全体が個として動いている。だから我々ノーブドックも女王を倒す事を最優先してきたのだ。しかし、我々にはクイーンの居場所を掴む事が出来なかった」

「……カテーリンが持っていた赤い宝石はどうですか？」

「……気づいていたのか？」

「まぁ何となくですよ」

「あれはラムダスクイーンの一部だ。言わばクイーンの証」

「そうなの？」

「あぁ。だから人間が持つには危険過ぎるものだったのだ。だが、あれさえあれば確実にクイーンの元へ辿り着ける。しかし、あれは……」

「ちょっと待ったッ！！敵の大将を倒すのはいいがどうやって奴らの宇宙へ行くんだ？ミカサやセーラが向こうに行けたのはただの偶然だろ？」

「それなら大丈夫です。向こうの入口になるブラックホールは私の中にありますから。要はそれをええーいっと、ばばーんと解放してやればいいだけです。出来ますよね柴神様？」

「あぁ。私が傍で補助すれば危険もないだろう」

「ふふ、なら問題は無しですよ。えっへん」

「しかし、入口はいいが普通の船ならブラックホールの高重力でぺちゃんこだろ？」

イーグルが言う。

……フッフッフ。

「フッフッフ……」

「ミカサ、何がおかしいの？」

マリーが俺に聞いてくる。

「いやなに。柴神様がようやく真実を話してくれたから俺も話すとしようやないか」

「長官。何を話すんですか？」

「……国籍不明戦艦や」

『ッ！！』

俺の言葉に皆が驚いた。

TURN109（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿＿）m

TURN110（前書き）

ぶっちゃけ全部話します（笑）

TURN110

「フッフッフ……」

「ミカサ、何がおかしいの？」

マリーが俺に聞いてくる。

「いやなに。柴神様がようやく真実を話してくれたから俺も話すとしようやないか」

「長官。何を話すんですか？」

「……国籍不明戦艦や」

『ッ！！』

俺の言葉に皆が驚いた。

「ようやく話す気になったのかい？」

桜花が聞いてくる。

「まぁな。けど今はちょっと休憩しようや。柴神様の話で真希ちゃんも寝てもうたからな」

俺の言葉に会議室は何かの重圧から逃れたかのような雰囲気になる。

「それでは閣下に皆さん。お茶です」

いずみがお茶を出してくれた。

「さてもうええかな？」

「あぁ構わない」

皆を代表して柴神様が言う。

「さて、あれを説明するのは……俺の秘密から言うか」

「秘密ですか？」

セーラが聞く。

「まさか長官も柴神様と同じ違う宇宙からやってきたとか？」

「あ、ピンポ～ン。大体正解やな」

『え？』

「俺は違う宇宙……所謂平行世界からやって来た日本人やねんな」

『……ハアアァァッ!?』

当然の解答ありがとうございます。

「平行世界……パラレルワールドは色んな世界があんねん。宇宙に進出して戦争している世界や宇宙に進出していない世界とかな。俺がいた惑星「地球」は自分の周りを回る衛星「月」までしか人類は到達してないねん。まぁ無人観測機は他の惑星に行ったりしてるけどな」

俺はお茶を飲む。

「……アンビリーバボー……」

「それは俺もやイーグル」

「じ、じゃあ三笠。あんたはどうやって来たんだい?」

「正確には精神やな。俺は元の世界では日本国の海上自衛隊……所謂海軍の水兵をしてたんやけど、基地へ帰る途中にひき逃げされて死んでんな。そして気が付いたらこの世界の赤ちゃんとしていたわけや」

「……有り得ない話だな」

利古里が言う。

「まぁ利古里が言うのは最もやな。んでまぁ、ＳＦキターーーッと

歓喜して猛勉強して訓練学校に入って、海軍長官になって今に至るわけや」

「……それであの戦艦とどう関連しているのですか？」

「まぁ待てやセーラ。あの戦艦は確かに俺達の世界ではオタク達が知っている戦艦や」

「……長官。まさかなんですが……」

「祀梨はオタクやから気づいたな？」

「まぁ一応は……でも本当ですか？」

「うんマジ」

俺の言葉に祀梨は溜め息を吐いた。

「ＳＦの二次小説を書くやつは喜びそうです」

「何の話をしているんだ？」

イーグルが聞いてきた。

「あぁ悪い悪い。話が逸れたな。まぁ、あの戦艦は俺が生きていた前世でアニメに出ていた戦艦やねんなこれが」

『……ハアァァァァーーーッ！？』

俺と祀梨以外が叫んだ。

「んな馬鹿な……」

「そんな馬鹿なと思うやろ田中？でも俺も存在してるし、柴神様は違う宇宙の人やで」

「そ、そりゃあそうだけどよ……」

「ミカサさん」

そこへスカーレットが手を挙げた。

「何やスカーレット？」

「あの戦艦がアニメの艦船は分かりました。ですが、ミカサさんは何故あの戦艦に箝口令を引いたんですか？」

「……ええとこついたなスカーレット。それは俺が説明するより映像を見した方がええやろ」

俺はスクリーンを出す。

映像にはあの戦艦が宇宙空間を航行している。

「この実験は都奈海やレーティアと共にしていたんや」

そして、戦艦の艦首部分の穴にエネルギーが凝縮されていく。

「戦艦の目標は人も動物もいない無人惑星や」

俺が皆に説明する。

そして戦艦の艦首部分の穴から莫大な量の収束エネルギーが発射されて、惑星を貫いた。

ドガアァァァァァーーンッ！！！

惑星は爆発した。

「……何度見ても冷や汗が出るな……」

「同感だよ」

レーティアと都奈海がポツリと呟いた。

TURN110（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN111（前書き）

ぶっちゃけヤマトの戦艦が出てきますが、ラムダスを倒すのはあれが一番だと思うので。

ゲームでH機関とかあったし。

別にヤマトを否定するとかじゃなくて、ラムダスを倒せるのはあれ以外思いつかなくて……。

ナデシコは惑星艦航行エンジン。

GAは詳しく知らないので必然的にヤマトになりました。

フォルテさんマジパネぇ……。

TURN111

「あ……あれは何なんだよ三笠ッ！？」

桜花が顔を青ざめているけど、それは俺、レーティア、都奈海を除いた提督全員が青ざめている。

「あれが……あの戦艦の最終兵器や。エンジンに圧縮した莫大なエネルギーを集めて一気に放出するんや」

まぁ合ってるよな？

「エンジンの名前は波動エンジンで最終兵器は波動砲や」

俺は遂にその名前を出した。

「今の波動砲は拡散モードがあってこれや」

俺は皆に拡散波動砲を見せた。

先程と同様に戦艦から波動砲が発射されたが、途中で波動エネルギーは拡散して砂を投げた感じで周囲にあった小惑星を破壊した。

「……もうチート過ぎるぜ……」

イーグルが溜め息を吐いた。

「まぁまぁ。この兵器はラムダス攻略を有利に運べる可能性は大でしょうね」

「……確かにこの兵器なら宿敵のラムダスを討ち取れる可能性はある」

「それでは……」

「うむ。人類に未来へ生きる希望が生まれた」

柴神様の言葉に皆は喜んだ。

「山口。直ぐにこのエンジンの量産は出来るだろうか？」

「一応、都奈海には量産体制に入るようには言いましたけど、チェリノブ星域でラムダスの侵攻を阻止するために艦艇の生産もしないといけないので半々ですね」

ラムダスがチェリノブ星域から侵攻するなら全艦艇をチェリノブ星域に配備させないとあかんしな。

「大量生産なら私達に任せてよ」

キャロルが名乗りを挙げる。

「まぁアメリアなら大量生産はたやすいからな」

「それでは艦艇とエンジンの生産はキャロル達に任してイーグルと

田中は臨時にチェリノブ星域防衛艦隊提督に命じる。存分に暴れろや」

「任しとけッ！！」

「派手に宇宙に花火を咲かすか」

「よし、全艦艇チェリノブ星域に集結やッ！！急げッ！！」

『オオォォッ！！』

皆が雄叫びを上げた。

「我が子達がここまで……」

柴神様は感激していた。

「ねぇ三笠……」

「何や桜花？」

長官室に桜花が入ってきた。

今の長官室には桜花と俺の二人だけや。

「やっぱり違う人間だったんだね」

「分かってたんか？」

「いや、何となくだよ。それによく分からない事を言っていたからね」

……まぁそれは否定しないな。

「三笠は……此処に来てよかった？」

「まぁ最初は最悪やったな。軍隊は宇宙やったし、爆発四散したら終わりやったからな。ま……」

俺は後ろから桜花に抱き着いた。

「桜花に出会えたから俺にとってはよかったな」

「関係を持った皆……じゃないのかい？」

「今此処にいるのは桜花だけやろ？」

「……自分でキザっぽいと思ってるかい？」

「……スゲー思ってるから何も言うな……」

……恥ずかしいわ……。

俺は桜花の左肩に顎を載せる。

「……他に聞きたい事とか無いんか？」

「そうだねぇ……前世では彼女はいたのかい？」

「いなかったで。前世の俺はオタクで太ってたからな」

「……今とは考えられないね」

「一番俺がそう思ってるわ」

う～ん、桜花の髪からシャンプーの匂いがする……。

「それに俺には理想の彼女が高かったからな」

「そうなのかい？」

「そうそう。日本人でギャルは嫌いやし金髪も嫌やったな。俺と話が合うとか、オタクを理解してくれる女性がよかったからな」

まぁこれは作者のやけどな。

『ギャルや金髪はどうも無理なんだよねｂｙ作者』

「それは確かに高いね」

「やろ？やから彼女もおらんかったし、童貞やったしな」

「……今とは違うねぇ……」

「いや冗談やなくてマジやからな」

そんなに意外やったんやろか？

『意外やからｂｙ作者』

「さて、チェリノブ星域の再攻略の編成でもするか」

「あ、私も手伝うよ」

「スマンな桜花」

「なに、今は非常時なんだからね」

桜花が笑った。

数日後、田中、イーグル、ドワイト、宇垣長官を主力とした攻略艦隊は見事にチェリノブ星域を再攻略に成功した。

TURN111（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN112（前書き）

最後はマジキュー四コマのネタです。

TURN112

――チェリノブ星域――

「田中提督ッ！！ホワイトホールからラムダスが出現ッ！！更に怪獣もいますッ！！」

「よし、全艦砲雷撃戦用意だッ！！空母部隊は直ちに攻撃隊を発艦させろッ！！」

「ウィッスッ！！」

オペレーターが次々と指示を出していく。

『中々決まっているじゃないかブラザー』

そこへイーグルが通信を入れてきた。

「へ。山口長官が俺を見込んでチェリノブ星域の防衛司令官にしてくれたんだ。張り切るぜッ！！」

「まぁ、田中が暴走しないように紐を携えている私もいるがな」

「私もいるよ～♪」

ユリウスとムッチリーニが言う。

「俺は犬かッ！？」

『……どうでもいいけど、攻撃隊は発艦しましたよ』

『無理よナツ。だって犬だもの』

『ハ、ハンナ。それは犬に対して失礼だよ』

上から山口夏、ハンナ、クーの三人である。

「イジメかよこん畜生ッ！！」

田中がいじけた。

『あの……ラムダスが航空隊の攻撃をかい潜って接近してきますけど……』

「全艦砲撃開始ィィィーーーッ！！！」

『ファイヤーーーッ！！！』

『そこは真面目なんですかッ！？Σ（ ゜Д ゜）』

夏ちゃんは色んな意味でツッコミ役を手に入れた。

チェリノブ星域に集結した艦艇は戦闘力を持たない空母を除いて約８１００隻である。

空母は大中小合わせて６００隻程である。

艦艇は全て各国の最新鋭艦で固めている。

「全艦踏ん張れよッ！！此処で全滅したら誰が守るんだッ！！」

田中が吠えた。

――――海軍省――――

「チェリノブ星域防衛艦隊が、ラムダスと交戦中との事です」

「……何とか粘ってほしいな」

まぁドワイトのドリル艦隊もいるしな。

ドリル艦は艦首部分がドリルであり、回転は可能や。

「一応は補給艦隊は送るけども……」

「資源の殆どは波動エンジン搭載艦に回されますからね」

「あぁ」

宇垣の言葉に俺は頷く。

ラムダスの宇宙に行くのはええけど、一、二隻やと心細いからある程度の艦艇での艦隊で行く事が決定している。

ちなみに、各国の象徴の戦艦は波動エンジン搭載艦として改造をしている。

それらは長門、大和、クイーンエリザベス、モンタナ、サウスダコタ、ソビエツキー・ソユーズの六隻やった。

……大和に関しては何も言うなよ。

正直、俺もビックリしてるからな。

大和は帝か、柴神様かの旗艦に悩んでいるが、俺的には帝でええねんけどな。

流石に犬に大和を任すのはなぁ……。（汗）

「ミカサ～。紅茶が出来たから飲んでみない？」

そこへ長官室にマリーが入ってきた。

「いや、まだやる事あるしな」

「そう言わずにね♪」

「……いつの間にいたんすかエリザさん？」

「フフフ♪」

何故か隣にエリザさんがいるし。

「ほらほら早く行きましょう。勿論、纏ちゃんもね」

「は、はぁ……」

エリザさんとマリーに俺と宇垣が連れていかれた。

「お母様、ミカサも誘ったんですか？」

エリザの部屋に行くと、真希ちゃん、カテーリン、ミーリャ、ミール、桜花、セーラがいた。

「だってミカサは最近寝てないでしょ？ゆっくりしてもらおうと思ってね」

「何で知ってるんすか？」

実を言うと、波動エンジンや艦船の生産とかであまり寝てなかってんな。

「私はこれでも母親なんだから」

「……納得しました」

エリザさんには多分敵わへんやろな。

「んじゃぁ休むか」

俺は椅子に座る。

「フンフフ～ン。美味しいのを入れてあげるよ」

マリーがカップにミルクティーを入れていく。

「こっちのミルクティーは後からミルクを入れるみたいだけど、エイリスではミルクで紅茶を抽出するんだよ？」

「……」

「どうしたんだい三笠？」

「……成る程な。やはり牛乳か……」

『？？』

俺の言葉に皆が首を傾げた。

「まさか……」

何かに気づいた桜花に俺はニヤリと笑った。

「こんの馬鹿ッ！！」

スパァンッ！！

桜花に叩かれた。

ちなみに、意味を理解した大人の女性陣は少し顔を赤くしていた。

まぁミルクティーを入れたマリーはかなり顔が真っ赤やったけどな。

TURN112（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿＿）m

TURN113（前書き）

早めに出来たので投稿（キリ（、・ω・´））

TURN113

――海軍省長官室――

「山口君。長門の改装が終わったぞ」

「ほんまか都奈海？」

長官室に都奈海が入ってきた。

「あぁ。波動エンジンの換装はトラブルも無かった。一時間後に試験航行をするが乗るかね？」

「なら乗らしてもらうわ」

俺と都奈海は急いで一番ドックに向かった。

「……あまり変わっていないな」

俺は長門を見る。

連装主砲四基も健在であり、両舷の対空パルスレーザーもあった。

「まぁそれは試験するから見てからだな」

「そうか」

――――長門艦橋――――

「此処も変わっていないな」

「いや、一つだけ変わっている」

『こんにちわ』

シュンと女性の立体映像が現れた。

「ＡＩのシリウスだ」

『よろしくです』

「あぁ、よろしくな」

まぁ立体映像やから握手は出来んけどな。

「一応、シリウスだけでの航行も可能にしている」

『エッヘンです』

「そうか」

「では発進してくれ」

「了解しました」

オペレーターが頷く。

そして、長門は一番ドックをあっという間に発進した。

「……やっぱりこの波動エンジンはヤマトの世界やねんなぁ」

あっという間の発進に思わず復活篇のアクエリアスから発進するヤマトを思い出したわ。

「ふむ。我々が使っている熱核エンジンより速い航行だな」

「そらそうや。波動エンジンは惑星間航行エンジンやなくて恒星間航行エンジンやからな」

「成る程。ならもう少し改良したら星域間航行エンジンになれるかもしれんな」

「ちなみに、波動エンジンはワープゲートを使わずにワープ出来るからな」

「……いずれ試験をしてみたいが、今は無理だな」

都奈海は悔しそうな表情をする。

「砲撃試験とかはするんか？」

「あぁ。あの無人小型惑星に撃ち込んでも構わない」

都奈海が指定したのは人間もいなく、自然も無い無人小型惑星やった。

昔は鉱石の生産で栄えたらしいけどな。

「分かった。左砲戦用意ッ！！全砲一斉射撃やッ！！」

「了解ッ！！」

長門の四基の主砲が無人惑星に照準する。

「砲撃準備完了ッ！！」

「撃ち方始めェッ！！」

ドシュウゥゥゥーーンッ！！

今までのプラズマショックカノンとは比べ物にはならない高出力の砲撃やった。

無人小型惑星は八本のビーム弾に貫かれて大爆発をした。

「……なんちゅうチートやねん」

「……それは私も思った……」

とまぁこんな感じで長門の試験は終了した。

――――海軍省長官室――――

「宇垣、全員に伝えてくれ。波動エンジン指定艦の試験が終了次第、ラムダスの世界に向かうとな」

「了解です」

宇垣は俺に敬礼をして長官室を出た。

「……いよいよやな……」

俺は俺以外誰もいない長官室でポツリと呟いた。

さて、艦隊を編成するか。

それから三ヶ月後、波動エンジンを搭載した艦船の試験運行は全て終了した。

――――海軍省会議室――――

「これで、漸くラムダスの宇宙へ行く事が出来る」

俺は皆がいる会議室で言う。

「艦隊の編成は俺が直々に考えた。宇垣、説明は頼むで」

「分かりました」

宇垣が立つ。

「まず、戦艦ですが各国の象徴戦艦である長門、大和、クイーンエリザベス、モンタナ、サウスダコタ、ビスマルク、ソビエツキー・ソユーズ。それに金剛、榛名、敷島、肥前も参加します」

金剛はラスシャラ、榛名は桜花、敷島はいずみ、肥前はスカーレットの艦やな。

「空母は飛龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、信濃、ミッドウェー、キティーホーク、ヴィクトリアス、アークロイヤル、イーグルの十隻です」

これは祀梨、夏ちゃん、ロック、コルダ、マリーが指揮をしている。

「巡洋艦は三十隻、駆逐艦は七二隻になります」

巡洋艦などにははキャシー達が乗り込み、駆逐艦は田中が指揮っている。

「以外と多いわね？」

キャロルが聞いてくる。

「まぁ数が多い方がええからな」

「それもそうね」

「作戦は明日ヒトマルマルマル（１０：００）に出撃する。質問は？」

『……』

「無いみたいやな。それじゃあ解散や、全員生きて帰ってくるでッ！！」

『オオォォーーーッ！！！』

皆は高々に拳を上に挙げた。

TURN113（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿＿）m

TURN114（前書き）

ヤマトファンに文句を言われないかドキドキしながらの投稿……（―・―；）

TURN114

日本星域には多数の艦艇が集結していた。

この艦艇群はラムダスの宇宙へ目指す選ばれた艦艇群であった。

「長官。全艦集まりました」

「おぅ」

宇垣の言葉に俺は頷いて通信マイクを握る。

「あ―あ―、こちら海軍長官の山口三笠や。これよりマイクロネシア星域に向かい、ブラックホールへ突入してラムダスの宇宙へ向かう。全員、生きて帰る事を心掛けろよ。これより、選抜艦隊は連合艦隊へと名前を改めるッ！！」

『ウワアァァァァーーーッ！！！』

艦艇の乗組員が歓声をあげる。

「……宇垣ッ！！全艦にこの電文とZ旗を掲げるんやッ！！」

俺は文字が書かれた紙と旗を渡す。

「電文は分かりますが、この旗は？」

事情を知らない宇垣が首を傾げる。

「……この旗はな。前世でいた日本海軍では重要な旗やねん。国の興廃がこの一戦にあるってな」

「……分かりました」

宇垣は頷いてオペレーターに指示を出した。

――――戦艦大和――――

「帝。旗艦長門より電文が来ているぞ」

「本当ですか柴神様？」

帝は柴神様から通信紙を受け取る。

「え～と、『皇国ノ興廃、コノ一戦ニ在リ。各員一層奮励努力セヨ』ですか。確かにこの世界の興廃はこの一戦にありますからね」

帝が苦笑する。

「だが、負けられない戦いではあるがな」

柴神様が言う。

連合艦隊は日本星域の至る所にいた艦船から『武運ヲ祈ル』の電文を受けながらマイクロネシア星域に到着した。

「んで、あれが帝から取り出したブラックホールなんやけどもや」

「フッフッフ。此処は私の出番だよ山口君」

都奈海が笑いながら言う。

「ＨＦ作動ッ！！」

都奈海がボタンを押すと、連合艦隊の艦艇にシールドが張られた。

「私とアドルフが開発した波動エネルギーを使っての防御シールドだ。ブラックホールの圧力なら充分耐えられる」

波動エネルギーマジパネェ……。

「まぁええよ。んじゃぁこれよりラムダスの宇宙へ目指すッ！！全艦突撃ィッ！！」

全艦艇はブラックホールに突入した。

「……ラムダスの宇宙に到着しました」

「あぁ……」

あの時と同じ宇宙が広がっているな……。

「よし、これより作戦を開始する。ラムダス投下用意や」

「了解。ラムダス投下用意」

長門の接舷扉から縄で縛られたラムダスが用意された。

「はい投下」

「了解。投下」

そしてラムダスは乗組員に蹴飛ばされて宇宙に出た。

「……しかし、縄だけがラムダスを縛る有効手段なんて今だに信じられませんね」

宇垣がそう言う。

「まぁしゃあないやろ。実際そうやねんしな」

チェリノブ星域でラムダス一体を捕獲して、カテーリンが使用していた赤い宝石をラムダスにはめ込んでいるねんな。

「まぁ心配するな宇垣。今度宇垣にもしてやるわ」

ゴリッ

「……脳天をぶちまかれたいですか？」

「……しぃましぇん……（涙）」

冗談が通じない奴やな。

「ラムダスの状況は？」

「徐々に動いています」

縄で縛ってあるから逃げるような事はないよな？

「あッ！！近くの惑星からラムダスが接近してきますッ！！数は数万ッ！！」

「対空戦闘用意やッ！！」

「対空戦闘用意ッ！！」

乗組員達が慌ただしく動き出す。

「バリア艦はバリアを展開やッ！！」

無人バリア艦が連合艦隊の前衛に集合してバリアを展開する。

「ラムダスがバリアに突っ込みますッ！！」

ラムダス達がバリアに体当たりをしていく。

「……桜花ッ！！拡散波動砲発射用意やッ！！」

『あいよッ！！拡散波動砲発射用意ッ！！』

拡散波動砲で無人バリア艦ごと消滅させたるしかないな。

その間にもラムダスはバリアに体当たりを続行している。

しかし……。

「バ、バリアが破られますッ！！」

ＢＧＭがあったらバリイィィンッ！！て言う程のバリアがガラスみたいに砕け散った。

「ラムダスが突っ込んできますッ！！」

「桜花ッ！！拡散波動砲発射ァッ！！！」

『拡散波動砲発射ァッ！！！』

桜花が座乗する戦艦榛名の艦首部分から拡散波動砲が発射された。

波動エネルギーは途中で幾つにも分散をして、波動エネルギーの直線上にいたラムダスを焼き払った。

しかし、生き残っているラムダスは連合艦隊に突撃してくる。

「全艦、主砲一斉撃ちぃ方始めぇッ！！！」

ドシュウゥゥゥーーーンッ！！！

全艦艇前部のプラズマショックカノンがラムダスに火を噴いた。

拡散モードにしてあるためにエネルギーは拡散してラムダスを焼き払う。

「ラムダス接近ッ！！」

「対空ミサイル発射ッ！！両舷パルスレーザー掃射始めッ！！」

対空ミサイルが発射されてラムダスを破壊する。

パルスレーザー砲はラムダスを撃ち抜く。

「巡洋艦矢矧の艦橋にラムダス一体が激突しましたッ！！」

「何やてッ！！」

俺は思わず叫んだ。

TURN114（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

TURN115（前書き）

少しグロいかも。

TURN115

――巡洋艦矢矧――

「ウワアァァァァーーーッ！！！」

艦橋に激突したラムダスのせいで装甲が破られて、洩れていく空気に吸い寄せられるように数人の艦橋要員が灰色の宇宙に吸い出された。

「隔壁閉鎖よッ！！急いでッ！！」

矢矧艦長の古村恵子大佐が指示を出す。

「ラ、ラムダスがッ！！」

「ギャアァァァァーーーッ！！！」

艦橋に激突したラムダスは艦橋内に入って、大きな口を開けて触手で捕まえた乗組員を食べた。

バキバキッ！！

グチュグチュッ！！

食べられた乗組員の骨が艦橋内に響く。

「う、撃て撃てッ！！」

ビシュンビシュンッ！！

他の乗組員がレーザー拳銃でラムダスを撃つ。

『☆★⊥∞ッ！！』

ラムダスは触手を使って古村艦長の左肩に巻き付く。

「艦長ッ！！」

「こん……のッ！！」

古村は咄嗟に持っていた手榴弾をラムダスの口の中に入れた。

ドオゥゥンッ！！

ラムダスが爆発で一気に破裂をした。

「やったッ！！」

しかし、最後の意地とばかりに、巻き付いていた左肩を強く握りしめた。

バキバキッ！！

「ギャアァァァァーーーッ！！！」

『古村艦長ッ！！』

古村の左肩は触手の圧力で無理矢理切断をされた。

「ガ……アッ……」

「おのれェッ！！」

ビシュシュシュシュシュンッ！！

一式レーザー小銃を持った陸戦隊員が漸く艦橋に到着してラムダスに総攻撃をする。

レーザーで撃ち抜かれたラムダスは息絶えた。

「しっかりして下さい艦長ッ！！」

「このままでは出血死するぞッ！！」

「衛生兵ェーーーッ！！！」

意識不明の古村はそのまま集中治療室に運ばれた。

――――旗艦長門――――

「矢矧の状況はどうなってるんや？」

「今のところ死者は五名。負傷者は古村艦長以下三名のようです」

宇垣が報告してくる。

「第二波のラムダスが惑星上にいますッ！！」

「ちぃッ！！ラスシャラッ！！スカーレットッ！！波動砲で惑星ごとラムダスを葬れッ！！」

『了解ッ！！』

ラスシャラとスカーレットが乗る金剛と肥前が波動砲の発射体形に入る。

――――戦艦金剛――――

「エネルギー充填百二十％ッ！！」

金剛の機関長がラスシャラに報告する。

「波動砲発射用意ッ！！対ショック、対閃光防御ッ！！」

――戦艦肥前――

「ターゲットスコープオープン。目標、ラムダスがいる惑星ッ！！」

艦長席にいるスカーレットは発射トリガーを握る。

「発射十秒前……三、二、一」

「「波動砲発射ァァァッ！！」」

ラスシャラとスカーレットが同時にトリガーを引いた。

金剛と肥前の艦首波動砲発射口から一気に波動エネルギーが放出された。

――旗艦長門――

「金剛と肥前から波動砲が発射されましたッ！！」

二本の波動エネルギーは、連合艦隊に向かおうとしていたラムダスを焼き払い、そのまま惑星ごと撃ち抜いた。

ドゴオォォォォーーンッ！！

惑星が大爆発をした。

「惑星の消滅を確認ッ！！」

「……よし、一先ずこれで安心やな。矢矧の状況は？」

「矢矧は副長の原中佐が引き継いでいます。古村艦長は意識不明の重体です」

宇垣が報告する。

「……矢矧はなるべく後方にいてもらうか」

「……そうするしかありませんからね」

他の艦艇は被害は無く、連合艦隊はこのまま進む事になった。

しばらく進むとワープゲートが見えてきた。

「長官。大和から通信が来ています」

「ん。パネルに映せ」

パネルに柴神様が出た。

『山口。あのワープゲートは恐らく、ラムダスクイーンへ通じるワープゲートだ』

「なら探す手間は省けましたね」

『うむ』

そして俺達はワープゲートに突入した。

「全艦のワープアウトを確認しました」

「索敵レーダーは感度あげろよ。大怪獣がいつ襲ってくるか分からんのやからな」

「ッ！？大怪獣を発見ッ！！こちらに接近してきますッ！！」

「……早速かいな……」

「まぁラムダスの宇宙ですからね」

「それもそうやな。全艦戦闘準備やッ！！」

俺は全艦に言った。

TURN115（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9798u/

―『大帝国』―日本海軍長官の奮闘記

2011年11月28日09時47分発行